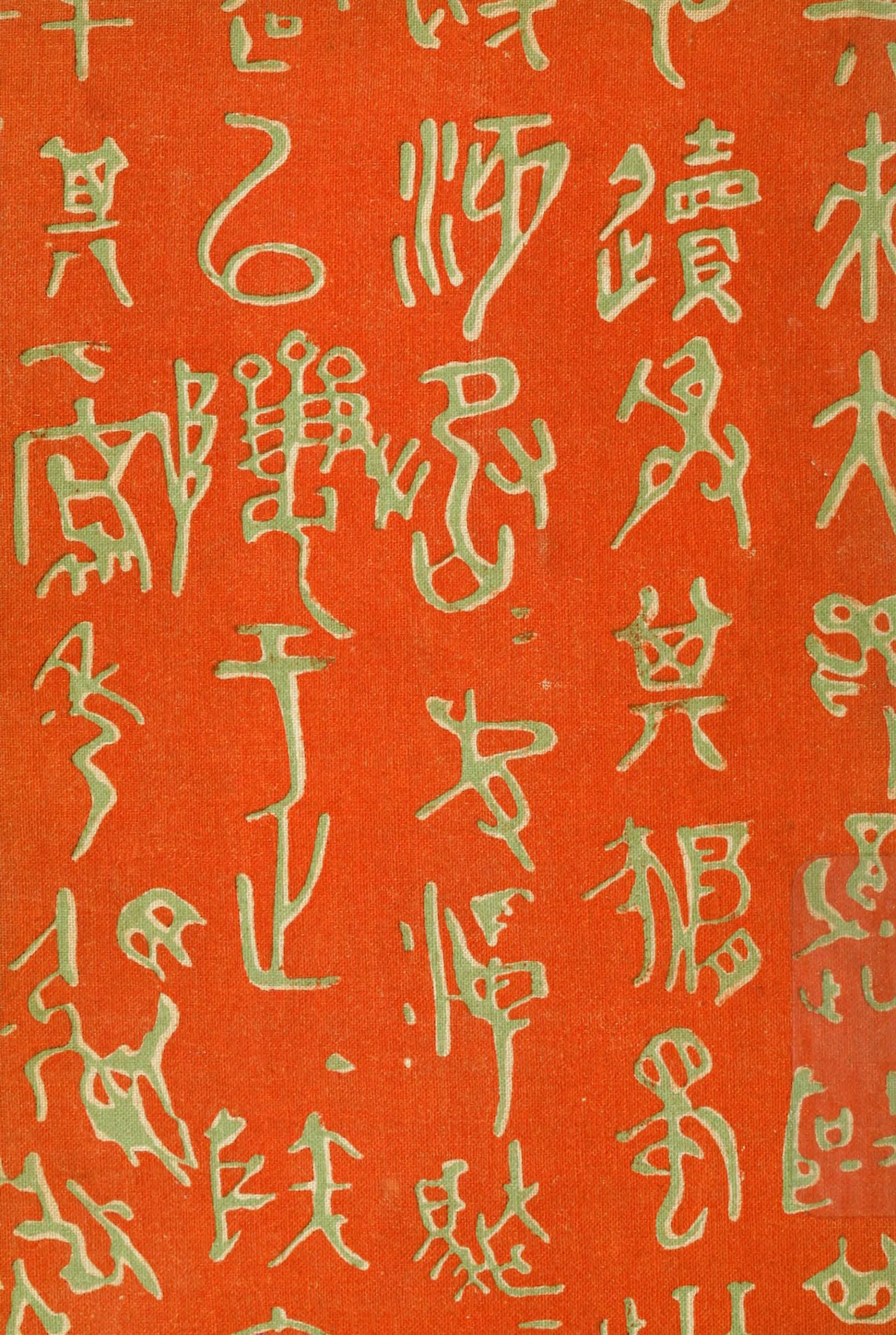


柳藏書

柳井藏書

漱石全集

第十三巻

小品

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

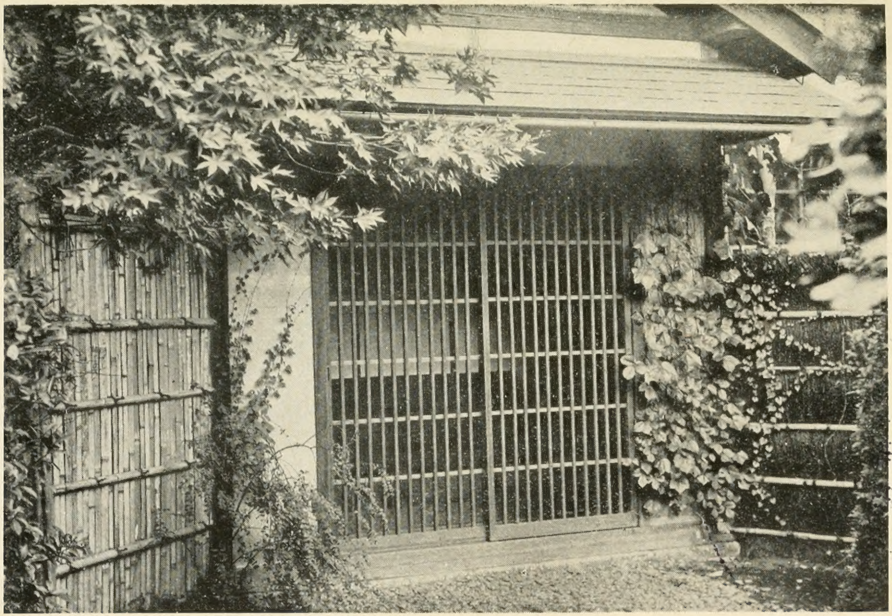
UNIVERSITY OF TORONTO

by

The Library of

Takaichi (T.U.) Umezuki

LIBRARY
Oct 29 1986
UNIVERSITY OF TORONTO



早稻田南町邸の玄關

目次

京に着ける夕　七
文鳥　一三
夢十夜　二八
永日小品　五五
元日　五五
蛇　五七
泥棒　六〇
柿　六五
火鉢　六七
下宿　七〇
過去の匂ひ　七四
猫の墓　七七
暖かい夢　八〇

印象 八三
人間 八五
山鳥 八八
モナリサ 九二
火事 九四
霧 九六
懸物 九九
紀元節 一〇一
儲口 一〇二
行列 一〇四
昔 一〇六
聲 一〇九
金 一一一
心 一一三
變化 一一六

クレイグ先生　二一八
長谷川君と余　二二六
滿韓ところ〴〵　二三三
思ひ出す事など　二三六
子規の畫　三一七
ケーベル先生　三二〇
變な音　三二五
手紙　三三一
三山居士　三四八
初秋の一日　三五一
ケーベル先生の告別　三五四
戰爭から來た行違ひ　三五七
硝子戸の中　三五八

京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラットフォームの上に振り落す。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をぱつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間にある、一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔の儘である。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しからう。此の淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ――町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果迄通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いぜ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乘つて顫へてゐる。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身體から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身に煮浸み出はせぬかと感じた。東京は左程に烈しい所である。此の刺激の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛び下りた余は、恰も三伏の日に照り附けられた燒石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだ樣なものだ。余はしゆつと云ふ音と共に、倏忽とわれを去る熱氣が、靜なる京の夜に震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と云つた人の車と、「遠いぜ」と云つた人の車と、顫へて居る余の車は長き轅を長く連ねて、狹く細い路を北へ北へと行く。靜かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音は狹き路を左右に遮られて、高く空に響く。かんからゝん、かんからゝん、と云ふ。石に逢へばかゝん、かゝらんと云ふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黑い。戸は殘りなく鎖されてゐる。所々の軒下に大きな小田原提燈が見える。赤くぜんざいとかいてある。人氣のない軒下にぜんざいは抑も何を待ちつゝ赤く染まつて居るのかしらん。春寒の夜を深み、加茂川の水さへ死ぬ頃を見計らつて桓武天皇の亡魂でも食ひに來る氣かも知れぬ。

桓武天皇の御宇に、ぜんざいが軒下に赤く染め拔かれてゐたかは、わかり易からぬ歷史上の疑問である。然し赤いぜんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歷史を有する京都に千年の歷史を有するぜんざいが無くてはならぬ。ぜんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史以前から深い因緣で互に結びつけられて居る。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の柊屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此の赤いぜんざいの大提燈である。此の大提燈を見て、余は何故か是れが京都だなと感じたぎり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、ぜんざいを食つた事がない。實はぜんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか煮小豆であるか眼前に髣髴する材

料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稲妻の迅かなる閃きのうちに思ひ出す。同時に――あゝ子規は死んで仕舞つた。糸瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。――提燈は未だに暗い軒下にぶら〳〵してゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんからゝんに桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、しきりに馳ける。前なる居士は默つて乘つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通りを何處迄もかんからゝんと北へ走る。成程遠い。遠い程風に當らねばならぬ。馳ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは余が汽車から振り落されたとき居士が拾つて仕舞つた。洋傘は拾はれても雨が降らねば入らぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。

子規と來たときは斯樣に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行いた事を記憶してゐる。其の時子規はどこからか夏蜜柑を買うて來て、之を一つ食へと云つて余に渡した。余は夏蜜柑の皮を剝いて、一房毎に裂いては噛み、裂いては噛んで、あてどもなくさまようて居ると、いつの間にやら幅一間位の小路に出た。此の小路の左右に並ぶ家には門並方一尺許りの穴を戸にあけてある。さうして其の穴の中から、もし〳〵と云ふ聲がする。始めは偶然だと思うてゐたが行く程に、穴のある程に、申し合せた樣に、左右の穴からもし〳〵と云ふ。知らぬ顔をして行き過ぎると穴から手を出して捕まへさうに烈しい呼び方をする。子規を顧みて何だと聞くと妓樓だと答へた。余は夏蜜柑を食ひながら、目分量で一間幅の道路を中央から等分して、其の等分した線の上を、綱渡りをする氣分で、不偏不黨に練つて行つた。穴から手を出して制服の尻でも捕まへられては容易ならんと思つたからである。

子規は笑つて居た。膝掛をとられて顫へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふであらう。然し死んだものは笑ひたくても、顫へてゐるものは笑はれたくても、相談にはならん。

かんからゝんは長い橋の袂を左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葺とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱か五抱もある大樹の幾本となく提燈の火にうつる鼻先で、ぴたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よく／＼寒い所へ来たのである。遥なる頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元来何處へ寝るのだらうと考へた。

「是れが加茂の森だ」と主人が云ふ。「加茂の森がわれ／＼の庭だ」と居士が云ふ。大樹を繞ぐつて、逆に戻ると玄關に燈が見える。成程家があるなと氣がついた。

玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顫へながら飛び込んだ客は寒がりである。

子規と来て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乗じて、清水の堂を徘徊して、明かならぬ夜の色をゆかしきものゝ様に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈に夢の如く柔かなる空想を縦まゝに酔はしめたるは、制服の釦を眞鍮と知りつゝも、黄金と強ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服を捨てゝ赤裸の儘世の中へ飛び出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる、余は尻を端折つて西國へ出奔する。御互の世は御互に物騒になつた。物騒の極子規

はとう〳〵骨になつた。其の骨も今は腐れつゝある。子規の骨が腐れつゝある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに來たと聞いたら、圓山へ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、糺の森の奥に、哲學者と、禪居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、一所に、ひつそり閑と暮して居ると聞いたら、それはと驚くだらう。矢つ張り氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

若い坊さんが「御湯に御這入り」と云ふ。主人と居士は余が顫へてゐるのを見兼ねて「公、まづ這入れ」と云ふ。加茂の水の透き徹るなかに全身を浸けたときは齒の根が合はぬ位であつた。湯に入つて顫へたものは古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら「公先づ眠れ」と云ふ。若い坊さんが厚い蒲團を十二疊の部屋に擔ぎ込む。「郡内か」と聞いたら「太織だ」と答へた。「公の爲に新調したのだ」と説明がある。上は安心して、わがものと心得て、差支なしと考へた故、御免を蒙つて寢る。

寢心地は頗る嬉しかつたが、上に掛ける二枚も、下へ敷く二枚も、悉く蒲團なので肩のあたりへ糺の森の風がひやり〳〵と吹いて來る。車に寒く、湯に寒く、果は蒲團に迄寒かつたのは心得ぬ。京都では袖のある夜着はつくらぬものゝ由を主人から承つて、京都はよく〳〵人を寒がらせる所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭の違棚に据ゑてある、四角の紫檀製の枠に嵌め込まれた十八世紀の置時計が、チーンと銀椀を象牙の箸で打つ様な音を立てゝ鳴つた。夢のうちに此の響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴り已んだが、頭のなかはまだ鳴つてゐる。しかも其の鳴りかたが、次第に細く、次第に遠く、次第に濃かに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、腦のなかへ、腦のなかから、心の底へ浸み渡つて、心の

底から、心のつながる所で、しかも心の届いて行く事の出來ぬ、遥かなる國へ抜け出して行く樣に思はれた。此涼しき鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透して無限の幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪の朝の如く冷かでなくてはならぬ。太織の夜具のなかなる余は愈寒かつた。

曉は高い欅の梢に鳴く烏で再度の夢を破られた。此の烏はかあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる烏ではない。への字烏、くの字烏である。加茂の明神がかく鳴かしめて、うき我れをいとど寒がらしめ玉ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、顫へつゝ窓を開けば、依稀たる細雨は、濃かに糺の森を罩めて、糺の森はわが家を遶りて、わが家の寂然たる十二畳は、われを封じて、余は幾重ともなく寒いものに取り圍まれてゐた。

春寒く社頭に鶴を夢みけり

――四〇、四、九――

十月早稲田に移る。伽藍の様な書斎に只一人、片附けた顔を頬杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥を御飼ひなさいと云ふ。飼つてもいゝと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て來る位だから奇麗な鳥に違なからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと賴んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ様な事を繰り返してゐる。うむ買ふよ〳〵と矢張り頬杖を突いた儘で、むにや〳〵云つてるうちに三重吉は默つて仕舞つた。大方頬杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。

すると三分ばかりして、今度は籠を御買ひなさいと云ひだした。是れも宜しいと答へると、是非御買ひなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釋を始めた。其の講釋は大分込み入つたものであつたが、氣の毒な事に、みんな忘れて仕舞つた。只好いのは二十圓位すると云ふ段になつて、急にそんな高價のでなくつても善からうと云つて置いた。三重吉はにや〳〵して居る。

夫から全體何所で買ふのかと聞いて見ると、なに何所の鳥屋にでもありますと、實に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なに何所にかあるでせう、と丸で雲を攫む様な寛大な事を云ふ。でも君あてがなくつちや不可なからう、と恰も不可ない様な顔をして見せたら、三重吉は頬ぺ

たへ手を宛てゝ、何でも駒込に籠の名人があるさうですが、年寄ださうですから、もう死んだかも知れませんと、非常に心細くなつて仕舞つた。

何しろ言ひだしたものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云ふ。金は慥に出した。三重吉はどこで買つたか、七子の三つ折の紙入を懐中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五圓札を慥に此紙入の底に押し込んだのを目撃した。

斯様にして金は慥に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。

其のうち秋が小春になつた。三重吉は度々來る。よく女の話などをして歸つて行く。文鳥と籠の講釋は全く出ない。硝子戸を透して五尺の縁側には日が好く當る。どうせ文鳥を飼ふなら、こんな暖かい季節に、此の縁側へ鳥籠を据ゑてやつたら、文鳥も定めし鳴き善からうと思ふ位であつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代々々と鳴くさうである。其の鳴き聲が大分氣に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使つてゐる。或は千代と云ふ女に惚れて居た事があるのかも知れない。然し當人は一向そんな事を云はない。自分も聞いて見ない。只縁側に日が善く當る。さうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片附けて見たり、取亂して見たり、頬杖を突いたり已めたりして暮してゐた。戸は二重に締め切つた。火鉢に炭ばかり繼いでゐる。文鳥は遂に忘れた。

所へ三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとほてらして居たのが、急に陽氣になつた。三重吉は豐隆を從へてゐる。豐隆はいい迷惑である。二人が籠を一つ宛持つてゐる。其の上に三重吉が大きな箱を兄き分に抱へてゐる。五圓札が文鳥と籠と箱になつたのは此の初冬の晩であつた。

三重吉は大得意である。まあ御覽なさいと云ふ。豐隆其の洋燈をもつと此方へ出せ抔と云ふ。其癖寒いので鼻の頭が少し紫色になつてゐる。

成程立派な籠が出來た。臺が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染けてある。それで三圓だと云ふ。安いなあ豐隆と云つてゐる。豐隆はうん安いと云つてゐる。自分は安いか高いか判然と判らないがまあ安いなあと云つてゐる。好いのになると二十圓もするさうですと云ふ。二十圓は是で二返目である。二十圓に比べて安いのは無論である。

此の漆はね、先生、日向へ出して曝して置くうちに黑味が取れて段々朱の色が出て來ますから、――さうして此の竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよ抔と、しきりに說明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覽なさい、奇麗でせうと云つてゐる。

成程奇麗だ。次の間へ籠を据ゑて四尺許り此方から見ると少しも動かない。薄暗い中に眞白に見える。籠の中にうづくまつて居なければ鳥とは思へない程白い。何だか寒さうだ。

寒いだらうねと聞いて見ると、其の爲に箱を作つたんだと云ふ。夜になれば此の箱に入れてやるんだと云ふ。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、此粗末な方へ入れて時々行水を使はせるのだと云ふ。是

は少し手數が掛るなと思つてゐると、夫から糞をして籠を汚しますから、時々掃除をして御遣りなさいとつけ加へた。三重吉は文鳥の爲には中々強硬である。

　それをはい／＼引受けると、今度は三重吉が袂から粟を一袋出した。是を毎朝食はせなくつちや不可ません。もし餌をかへてやらなければ、餌壺を出して殼丈吹て御遣んなさい。さうしないと文鳥が實のある粟を一々拾ひ出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かへて御遣んなさい。先生は寐坊だから丁度好いでせうと大變文鳥に親切を極めてゐる。そこで自分もよろしいと萬事受合つた。所へ豐隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。かう一切萬事を調へて置いて、實行を逼られると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心では餘程覺束なかつたが、まづやつて見ようと迄は決心した。もし出來なければ家のものが、どうかするだらうと思つた。

　やがて三重吉は鳥籠を叮嚀に箱の中へ入れて、椽側へ持ち出して、此所へ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍の樣な書齋の眞中に床を展べて冷やかに寐た。夢に文鳥を背負ひ込んだ心持は、少し寒かつたが眠つて見れば不斷の夜の如く穩かである。

　翌朝眼が覺めると硝子戸に日が射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならないなと思つた。けれども起きるのが退儀であつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とう／＼八時過になつた。仕方がないから顏を洗ふ序を以て、冷たい椽を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明海へ出した。文鳥は眼をぱちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた。

　文鳥の眼は眞黑である。瞼の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫ひ附けた樣な筋が入つてゐる。眼をぱちつか

せる度に絹糸が急に寄つて一本になる。と思ふと又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうしてちゝと鳴いた。

自分は靜かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乘つた。留り木は二本ある。黒味がゝつた青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。其一本を輕く踏まへた足を見ると如何にも華奢に出來てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた樣な爪が着いて、手頃な留り木を旨く抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首を不圖持ち直して、心持前へ伸したかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに具合よく落ちた。ちゝと鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて來て呉れた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、又書齋の椽側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕叮嚀に餌を遣る時の心得を説明して行つた。其の説によると、無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃げ出して仕舞ふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手を其の下へ宛がつて、外から出口を塞ぐ樣にしなくつては危險だ。餌壺を出す時も同じ心得で遣らなければならない。と其手つき迄して見せたが、かう兩方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出來るのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已を得ず餌壺を持つた儘手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口を

すぐ塞いだ。鳥は一寸振り返つた。さうして、ちゝと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の所置に窮した。人の隙を窺つて逃げる様な鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。三重吉は悪い事を教へた。

大きな手をそろ〳〵籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏きを始めた。細く削つた竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や、手を引き込ました。籠の戸ははたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして足の下にある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた

其の頃は日課として小説を書いてゐる時分であつた。飯と飯の間は大抵机に向つて筆を握つて居た。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍の様な書斎へは誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に淋しさと云ふ意味を感じた朝も昼も晩もあつた。然し時々は此の筆の音がぴたりと已む。又已めねばならぬ、折も大分あつた。其の時は指の股に筆を挟んだ儘手の平へ顎を載せて硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。夫れが済むと載せた顎を一應撮んで見る。夫れでも筆と紙が一所にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥が忽ち千代々々と二聲鳴いた。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘、留り木の上から、のめりさうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたら嘸喜ぶだらうと思ふ程な美い聲で千代と云つた。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、屹度鳴きますよ、と受合つて歸つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度竪横に向け直した。やがて一團の白い體がほ

いと宿り木の上を抜け出した。と思ふと奇麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りさうな餌壺は釣鐘の様に静かである。流石に文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精の様な気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。奇麗に平して入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微かな音がする。其の音が面白い。静かに聴いてゐると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。菫程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつゞけ様に敲いて居る様な気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅の様である。其の紅が次第に流れて、粟をつゝく口尖の辺は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振り蒔く粟の珠も非常に軽さうだ。文鳥は身を逆さまにしない許りに尖つた嘴を黄色い粒の中に刺し込んでは、膨くらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺丈は寂然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分程だと思ふ。

自分はそつと書斎へ帰つて淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。縁側では文鳥がちゝと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい嘴に受けた一雫を大事さうに、仰向いて呑み下してゐる。此の分では一杯の水が十日位続くだらうと思つて又書斎へ帰つた。晩には箱へ仕舞つて遣つた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降つて居た。文鳥は箱の中でことりともし

なかつた。

明る日も亦氣の毒な事に遲く起きて、箱から籠を出してやつたのは、矢つ張り八時過ぎであつた。箱の中ではとうから眼が覺めて居たんだらう。それでも文鳥は一向不平らしい顏もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたゝいて、心持首をすくめて、自分の顏を見た。

昔し美しい女を知つて居た。此の女が机に凭れて何か考へてゐる所を、後から、そつと行つて、紫の帶上げの房になつた先を、長く垂らして、首筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう氣に後を向いた。其の時女の眉は心持八の字に寄つて居た。夫で眼尻と口元には笑が萌して居た。同時に恰好の好い頸を肩迄すくめて居た。文鳥が自分を見た時、自分は不圖此の女の事を思ひ出した。此の女は今嫁に行つた。自分が紫の帶上でいたづらをしたのは緣談の極つた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入つてる。然し殼も大分混つてゐた。水入には粟の殼が一面に浮いて、苛く濁つて居た。易へて遣らなければならない。又大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにも拘らず、文鳥は白い翼を亂して騷いだ。小さい羽根が一本拔けても、自分は文鳥に濟まないと思つた。殼は奇麗に吹いた。吹かれた殼は木枯が何處かへ持つて行つた。水も易へてやつた。水道の水だから大變冷たい。

其の日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。其の間には折々千代々々と云ふ聲も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考へた。然し緣側へ出て見ると、二本の留り木の間を、彼方へ飛んだり、此方へ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしてる。少しも不平らしい樣子はなかつた。

夜は箱へ入れた。明る朝眼が覺めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覺めてゐるだらうが、中々起きる氣にならない。枕元にある新聞を手に取るさへ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。此の一本をふかして仕舞つたら、起きて籠から出して遣らうと思ひながら、口から出る煙の行方を見詰めて居た。すると此の煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔が一寸見えた。自分は床の上に起き直つた。寐卷の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。さうして箱の蓋をはづして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら、千代々々と二聲鳴いた。

三重吉の説によると、馴れるに從つて、文鳥が人の顔を見て鳴く樣になるんださうだ。現に三重吉の飼つて居た文鳥は、三重吉が傍にゐさへすれば、しきりに千代々々と鳴きつゞけたさうだ。のみならず三重吉の指の先から餌を食ると云ふ。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝は又怠けた。昔の女の顔もつい思ひ出さなかつた。顔を洗つて、食事を濟まして、始めて、氣が附いた樣に縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乘つてゐる。文鳥はもう留り木の上を面白さうにあちら、こちらと飛び移つてゐる。さうして時々は首を伸して籠の外を下の方から覗いてゐる。其樣子が中々無邪氣である。昔紫の帶上でいたづらをした女は襟の長い、脊のすらりとした、一寸首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は滿足してゐる。自分は粟も水も易へずに書齋へ引込んだ。晝過ぎ又縁側へ出た。食後の運動かた〴〵、五六間の廻り縁を、あるきながら書見する積であつた。所が出て見ると粟がもう七分がた盡きてゐる。水も全く濁つて仕舞つた。書物を縁側へ抛り出して置いて、

急いで餌と水を易へて遣つた。

次の日も亦遅く起きた。しかし顔を洗つて飯を食ふまでは縁側を覗かなかつた。書斎に帰つてから、或は昨日の様に、家人が籠を出して置きはせぬかと、一寸縁へ顔丈出して見たら、果して出してあつた。其の上餌も水も新しくなつて居た。自分はやつと安心して首を書斎に入れた。途端に文鳥は千代々々と鳴いた。それで引込めた首を又出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。けげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めてゐた。自分はとう／＼机の前に帰つた。

書斎の中では相変らずペンの音がさら／＼する。書きかけた小説は大分はかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなつて、薩摩五徳に懸けた鉄瓶が殆ど冷めてゐる。炭取は空だ。手を敲いたが一寸台所迄聞えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上にぢつと留つてゐる。能く見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からこごんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥は此華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片附いてゐる。

自分は不思議に思つた。文鳥に就て万事を説明した三重吉も此の事実は抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰つた時、文鳥の足はまだ一本であつた。しばらく寒い縁側に立つて眺めて居たが、文鳥は動く気色もない。音を立てないで見詰めて居ると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書斎へ這入らうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥は又眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉てゝ火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、

何だか自分の責任が軽くなつた様な心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分は只文鳥の聲を聞く丈が役目の様になつた。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足さうに往復して居た。天氣の好い時は薄い日を硝子越に浴びて、しきりに鳴き立てゝゐた。然し三重吉の云つた様に、自分の顔を見てことさらに鳴く氣色は更になかつた。

自分の指からぢかに餌を食ふ抔と云ふ事は無論なかつた。折々機嫌のいゝ時は麵麭の粉などを人指指の先へつけて竹の間から一寸出して見る事があるが文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼を亂して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後、自分は氣の毒になつて、此の藝丈は永久に斷念して仕舞つた。今の世にこんな事の出來るものが居るかどうだか甚だ疑はしい。恐らく古代の聖徒の仕事だらう。三重吉は嘘を吐いたに違ない。

或日の事、書齋で例の如くペンの音を立てゝ侘びしい事を書き連ねてゐると、不圖妙な音が耳に這入つた。縁側でさら〳〵さら〳〵云ふ。女が長い衣の裾を捌いてゐる様にも受取れるが、只の女のそれとしては、餘りに仰山である。雛段をあるく、内裏雛の袴の襞の擦れる音とでも形容したらよからうと思つた。自分は書きかけた小説を餘所にして、ペンを持つた儘縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つて居た。

水は丁度易へ立てゞあつた。文鳥は輕い足を水入の眞中に胸毛迄浸して時々は白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしやがむ様に腹を壓し附けつゝ、總身の毛を一度に振つて居る。さうして水入の緣に

にひよいと飛び上る。しばらくして又飛び込む。水入の直徑は一寸五分位に過ぎない。飛び込んだ時は尾も餘り、頭も餘り、背は無論餘る。水に浸かるのは脚と胸だけである。夫れでも文鳥は欣然として行水を使つてゐる。

自分は急に易籠を取つて來た。さうして文鳥を此の方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあ/\と掛けてやつた。如露の水が盡る頃には白い羽根から落ちる水が珠になつて轉がつた。文鳥は絶えず眼をぱち/\させてゐた。

昔紫の帶上でいたづらをした女が、座敷で仕事をしてゐた時、裏二階から懷中鏡で女の顏へ春の光線を反射させて樂しんだ事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、繊い手を額の前に翳しながら、不思議さうに瞬をした。此の女と此の文鳥とは恐らく同じ心持だらう。

日數が立つに從つて文鳥は善く囀る。然し能く忘れられる。或る時は餌壺が粟の殼だけになつてゐた事がある。ある時は籠の底が糞で一杯になつてゐた事がある。ある晩宴會があつて遲く歸つたら、冬の月が硝子越に差し込んで、廣い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乘つて居た。其の籠の隅に文鳥の體が薄白く浮いた儘留り木の上に、有るか無きかに思はれた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやつた。

翌日文鳥は例の如く元氣よく囀つてゐた。夫からは時々寒い夜も箱に仕舞つてやるのを忘れることがあつた。ある晩いつもの通り書齋で專念にペンの音を聞いて居ると、突然縁側の方でがたりと物の覆つた音がした。然し自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いてゐた。わざ/\立つて行つて、何でもな

いと忌々しいから、氣にかゝらないではなかつたが、矢張り一寸聞耳を立てた儘知らぬ顔で濟ましてゐた。其の晩寐たのは十二時過ぎであつた。便所に行つた序、氣掛りだから、念の爲一應縁側へ廻つて見ると――

籠は箱の上から落ちて居る。さうして横に倒れてゐる。水入も餌壺も引繰返つてゐる。粟は一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出してゐる。文鳥はしのびやかに鳥籠の棧にかじり附いて居た。自分は明日から誓つて此の縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛入れてやつた。水を溢る程入れてやつた。文鳥は一本足の儘長らく留り木の上を動かなかつた。午飯を食つてから、三重吉に手紙を書かうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちゝと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥が又ちゝと鳴いた。出て見たら粟も水も大分減つてゐた。手紙は夫限にして裂いて捨てた。

翌日文鳥が又鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を壓し附けて居た。胸の所が少し膨らんで、小さい毛が漣の樣に亂れて見えた。自分は此の朝、三重吉から例の件で某所迄來て呉れと云ふ手紙を受取つた。十時迄にと云ふ依頼であるから、文鳥を其の儘にして置いて出た。三重吉に逢つて見ると例の件が色々長くなつて、一所に午飯を食ふ。一所に晩飯を食ふ。其の上明日の會合迄約束して宅へ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事は悉皆忘れて居た。疲れたから、すぐ床へ這入つて寐て仕舞つた。

翌日眼が覺めるや否や、すぐ例の件を思ひだした。いくら當人が承知だつて、そんな所へ嫁に遣るのは行末よくあるまい。まだ子供だから何處へでも行けと云はれる所へ行く氣になるんだらう。一旦行けば無

暗に出られるものぢやない。世の中には滿足しながら不幸に陷つて行く者が澤山ある。抔と考へて楊枝を使つて、朝飯を濟まして又例の件を片附けに出掛けて行つた。歸つたのは午後三時頃である。玄關へ外套を懸けて廊下傳ひに書齋へ這入る積りで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反つ繰り返つて居た。二本の足を硬く揃へて、胴と直線に伸ばしてゐた。自分は籠の傍に立つて、ぢつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠つてゐる。瞼の色は薄蒼く變つた。

餌壺には粟の殼ばかり溜つてゐる。啄むべきは一粒もない。水入は底の光る程涸れてゐる。西へ廻つた日が硝子戸を洩れて斜めに籠に落ちかゝる。臺に塗つた漆は、三重吉の云つた如く、いつの間にか黒味が脱けて、朱の色が出て來た。

自分は冬の日に色づいた朱の臺を眺めた。空になつた餌壺を眺めた。空しく橋を渡してゐる二本の留り木を眺めた。さうして其の下に横はる硬い文鳥を眺めた。

自分はこゞんで兩手に鳥籠を抱へた。さうして、書齋へ持つて這入つた。十疊の眞中へ鳥籠を卸して、其の前へかしこまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握つて見た。柔かい羽根は冷え切つてゐる。

拳を籠から引き出して、握つた手を開けると、文鳥は靜に掌の上にある。自分は手を開けたまゝ、しばらく死んだ鳥を見詰めて居た。それから、そつと座布團の上に卸した。さうして、烈しく手を鳴らした。

十六になる小女が、はいと云つて敷居際に手をつかへる。自分はいきなり布團の上にある文鳥を握つて、

小女の前へ擲り出した。小女は俯向いて疊を眺めた儘默つてゐる。自分は、餌を遣らないから、とう／＼死んで仕舞つたと云ひながら、下女の顏を睥めつけた。下女は夫でも默つてゐる。

自分は机の方へ向き直つた。さうして三重吉へ端書をかいた。「家人が餌を遣らないものだから、文鳥はとう／＼死んで仕舞つた。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌を遣る義務さへ盡さないのは殘酷の至りだ」と云ふ文句であつた。

自分は、之を投函して來い、さうして其の鳥をそつちへ持つて行けと下女に云つた。下女は、どこへ持つて參りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持つて行けと怒鳴りつけたら、驚いて臺所の方へ持つて行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ／＼と騷いでゐる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御孃さん、此處いらが好いでせうと云つてゐる。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしてゐた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になつて漸く起きた。顏を洗ひながら裏庭を見ると、昨日植木屋の聲のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と並んで立つてゐる。高さは木賊よりもずつと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み碎いて、近付いて見ると、公札の表には、此の土手登るべからずとあつた。筆子の手蹟である。

午後三重吉から返事が來た。文鳥は可哀想な事を致しましたとある許りで家人が惡いとも殘酷だとも一向書いてなかつた。

―四一、六、一三―

夢十夜

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐つて居ると、仰向に寢た女が、静かな聲でもう死にますと云ふ。女は長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜實顔を其の中に横たへてゐる。眞白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、脣の色は無論赤い。到底死にさうには見えない。然し女は静かな聲で、もう死にますと判然云つた。自分も確に是れは死ぬなと思つた。そこで、さうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込む様にして聞いて見た。死にますとも、と云ひながら、女はぱつちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、只一面に眞黒であつた。其の眞黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでゐる。

自分は透き徹る程深く見える此の黒眼の色澤を眺めて、是でも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんぢやなからうね、大丈夫だらうね、と又聞き返した。すると女は黒い眼を眠さうに睁た儘、矢張り静かな聲で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云つた。

ぢや、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、寫つてるぢやありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのか

なと思つた。

しばらくして、女が又かう云つた。

「死んだら、埋めて下さい。大きな眞珠貝で穴を掘つて。さうして天から落ちて來る星の破片を墓標に置いて下さい。さうして墓の傍に待つてゐて下さい。又逢ひに來ますから」

自分は、何時逢ひに來るかねと聞いた。

「日が出るでせう。それから日が沈むでせう。それから又出るでせう、さうして又沈むでせう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あなた、待つてゐられますか」

自分は默つて首肯た。女は靜かな調子を一段張り上げて、

「百年待つてゐて下さい」と思ひ切つた聲で云つた。

「百年、私の墓の傍に坐つて待つてゐて下さい。屹度逢ひに來ますから」

自分は只待つてゐると答へた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて來た。靜かな水が動いて寫る影を亂した樣に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱちりと閉ぢた。長い睫の間から涙が頰へ垂れた。――もう死んで居た。

自分は夫れから庭へ下りて、眞珠貝で穴を掘つた。眞珠貝は大きな滑かな縁の鋭どい貝であつた。土をすくふ度に、貝の裏に月の光が差してきら／＼した。濕つた土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女を其の中へ入れた。さうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛ける毎に眞珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾つて來て、かろく土の上へ乘せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちてゐる間に、角が取れて滑かになつたんだらうと思つた。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は苔の上に坐つた。是から百年の間かうして待つてゐるんだなと考へながら、腕組をして、丸い墓石を眺めてゐた。そのうちに、女の云つた通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それが又女の云つた通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて來た。さうして默つて沈んで仕舞つた。二つと又勘定をした。

自分はかう云ふ風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ來ない。仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い莖が伸びて來た。見る間に長くなつて丁度自分の胸のあたりまで來て留まつた。と思ふと、すらりと搖ぐ莖の頂に、心持首を傾けてゐた細長い一輪の蕾が、ふつくらと瓣を開いた。眞白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた。そこへ遙の上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふら〳〵と動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。自分が百合から顏を離す拍子に思はず、遠い空を見たら、曉の星がたつた一つ瞬いてゐた。

「百年はもう來てゐたんだな」と此の時始めて氣が付いた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚の室を退がつて、廊下傳ひに自分の部屋へ歸ると行燈がぼんやり點つてゐる。片膝を座布團の上に突いて、燈心を掻き立てたとき、花の樣な丁子がぱたりと朱塗の臺に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなつた。

襖の畫は蕪村の筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近とかいて、寒むさうな漁夫が笠を傾けて土手の上を通る。床には海中文珠の軸が懸つてゐる。焚き殘した線香が暗い方でいまだに臭つてゐる。廣い寺だから森閑として、人氣がない。黒い天井に差す丸行燈の丸い影が、仰向く途端に生きてる樣に見えた。

立膝をした儘、左の手で座布團を捲つて、右を差し込んで見ると、思つた所にちやんとあつた。あれば安心だから、布團をもとの如く直して、其上にどつかり坐つた。

お前は侍である。侍なら悟れぬ筈はなからうと和尚が云つた。さう何日迄も悟れぬ所を以て見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間の屑ぢやと云つた。はゝあ怒つたなと云つて笑つた。口惜しければ悟つた證據を持つて來いと云つてぷいと向をむいた。怪しからん。

隣の廣間の床に据ゑてある置時計が次の刻を打つ迄には、屹度悟つて見せる。悟つた上で、今夜又入室する。さうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならない。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きて居る譯には行かない。綺麗に死んで仕舞ふ。

かう考へた時、自分の手は又思はず布團の下へ這入つた。さうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握つて、赤い鞘を向へ拂つたら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光つた。凄いものが手元から、すう〳〵と逃げて行く様に思はれる。さうして、悉く切先へ集まつて、殺氣を一點に籠めてゐる。自分は此の鋭い刃が、無念にも針の頭の様に縮められて、九寸五分の先へ來て已を得ず尖つてるのを見て、忽ちぐさりと遣り度なつた。身體の血が右の手首の方へ流れて來て、握つてゐる束がにちや〳〵する。唇が顫へた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけて置いて、それから全伽を組んだ。――趙州云く無と。無とは何だ。糞坊主めと齒噛をした。

奥齒を強く咬み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。米噛が釣つて痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやつた。

懸物が見える。行燈が見える。疊が見える。和尚の薬鑵頭があり〳〵と見える。鰐口を開いて嘲笑つた聲まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬鑵を首にしなくてはならん。悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云ふのに矢つ張り線香の香がした。何だ線香の癖に。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云ふ程擲つた。さうして奥齒をぎり〳〵と噛んだ。兩腋から汗が出る。脊中が棒の様になつた。膝の接目が急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無は中々出て來ない。出て來ると思ふとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろ〳〵出る。一と思に身を巨巌の上に打けて、骨も肉も滅茶々々に碎

いて仕舞ひたくなる。

それでも我慢して凝と坐つてゐた。堪へがたい程切ないものを胸に盛れて忍んでゐた。其切ないものが身體中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出やう／＼と焦るけれども、何處も一面に塞がつて、丸で出口がない樣な殘刻極まる狀態であつた。

其の内に頭が變になつた。行燈も蕪村の畫も、疊も、違棚も有つて無い樣な、無くつて有る樣に見えた。と云つて無はちつとも現前しない。たゞ好加減に坐つてゐた樣である。所へ忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打つた。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてる。慥に自分の子である。只不思議な事には何時の間にか眼が潰れて、青坊主になつてゐる。自分が御前の眼は何時潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答へた。聲は子供の聲に相違ないが、言葉つきは丸で大人である。しかも對等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。

「田圃へ掛つたね」と脊中で云つた。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向ける樣にして聞いたら、

「だつて鷺が鳴くぢやないか」と答へた。

すると鷺が果して二聲程鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなつた。こんなものを脊負つてゐては、此の先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなからうかと向ふを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考へ出す途端に、脊中で、

「ふゝん」と云ふ聲がした。

「何を笑ふんだ」

子供は返事をしなかつた。只

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答へると

「今に重くなるよ」と云つた。

自分は默つて森を目標にあるいて行つた。田の中の路が不規則にうねつて中々思ふ樣に出られない。しばらくすると二股になつた。自分は股の根に立つて、一寸休んだ。

「石が立つてる筈だがな」と小僧が云つた。

成程八寸角の石が腰程の高さに立つてゐる。表には左り日ヶ窪、右堀田原とある。闇だのに赤い字が明かに見えた。赤い字は井守の腹の樣な色であつた。

「左が好いだらう」と小僧が命令した。左を見ると最先の森が闇の影を、高い空から自分等の頭の上へ

抛げかけてゐた。自分は一寸躊躇した。

「遠慮しないでもいゝ」と小僧が又云つた。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目の癖に何でも知つてるなと考へながら一筋道を森へ近づいてくると、脊中で「どうも盲目は不自由で不可いね」と云つた。

「だから負つてやるから可いぢやないか」

「負ぶつて貰つて濟まないが、どうも人に馬鹿にされて不可い。親に迄馬鹿にされるから不可い」

何だか厭になつた。早く森へ行つて捨てゝ仕舞はふと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。――丁度こんな晩だつたな」と脊中で獨言の樣に云つてゐる、

「何が」と際どい聲を出して聞いた。

「何がつて、知つてるぢやないか」と子供は嘲ける樣に答へた。すると何だか知つてる樣な氣がし出した。けれども判然とは分らない。只こんな晩であつた樣に思へる。さうしてもう少し行けば分る樣に思へる。分つては大變だから、分らないうちに早く捨てゝ仕舞つて、安心しなくつてはならない樣に思へる。自分は益足を早めた。

雨は最先から降つてゐる。路はだん／＼暗くなる。殆んど夢中である。只脊中に小さい小僧が食付いてゐて、其の小僧が自分の過去、現在、未來を悉く照して、寸分の事實も洩らさない鏡の樣に光つてゐる。しかもそれが自分の子である。さうして盲目である。自分は堪らなくなつた。

「此處だ、此處だ、丁度其の杉の根の處だ」

雨の中で小僧の聲は判然聞えた。自分は覺えず留つた。何時しか森の中へ這入つてゐた。一間ばかり先にある黒いものは慥に小僧の云ふ通り杉の木と見えた。

「御父さん、其の杉の根の處だつたね」

「うん、さうだ」と思はず答へて仕舞つた。

「文化五年辰年だらう」

成程文化五年辰年らしく思はれた。

「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覺が、忽然として頭の中に起つた。おれは人殺であつたんだなと始めて氣が附いた途端に、背中の子が急に石地藏の樣に重くなつた。

第四夜

廣い土間の眞中に涼み臺の樣なものを据ゑて、其周圍に小さい床几が竝べてある。臺は黒光りに光つてゐる。片隅には四角な膳を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでゐる。肴は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減で中々赤くなつてゐる。其の上顏中澤々して皺と云ふ程のものは何處にも見當らない。只白い髯をありたけ生やしてゐるから年寄と云ふ事丈は分る。自分は子供ながら、此の爺さんの年は幾何なんだらうと思つた。所へ裏の筧から手桶に水を汲んで來た神さんが、前垂で手を拭きながら、

「御爺さんは幾歳かね」と聞いた。爺さんは頬張つた煮〆を呑み込んで、
「幾歳か忘れたよ」と澄ましてゐた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟んで横から爺さんの顔を見て立つてゐた。爺さんは茶碗の様な大きなもので酒をぐいと飲んで、さうして、ふうと長い息を白い髯の間から、吹き出した。すると神さんが、
「御爺さんの家は何處かね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、
「臍の奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間に突込んだ儘、
「どこへ行くかね」と又聞いた。すると爺さんが、又茶碗の様な大きなもので熱い酒をぐいと飲んで、前の様な息をふうと吹いて、
「あつちへ行くよ」と云つた。
「真直かい」と神さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、障子を通り越して柳の下を抜けて、河原の方へ真直に行つた。
爺さんが表へ出た。自分も後から出た。爺さんの腰に小さい瓢箪がぶら下がつてゐる。肩から四角な箱を腋の下へ釣るしてゐる。浅黄の股引を穿いて、浅黄の袖無しを着てゐる。足袋丈が黄色い。何だか皮で作つた足袋の様に見えた。
爺さんが真直に柳の下迄来た。柳の下に子供が三四人居た。爺さんは笑ひながら腰から浅黄の手拭を出した。それを肝心綯の様に細長く綯つた。さうして地面の真中に置いた。それから手拭の周囲に、大きな丸い輪を描いた。しまひに肩にかけた箱の中から真鍮で製らへた飴屋の笛を出した。

「今に其の手拭が蛇になるから、見て居らう。見て居らう」と繰返して云つた。

子供は一生懸命に手拭を見て居た。自分も見て居た。

「見て居らう、見て居らう。好いか」と云ひながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐる／＼廻り出した。自分は手拭許り見て居た。けれども手拭は一向動かなかつた。

爺さんは笛をぴい／＼吹いた。さうして輪の上を何遍も廻つた。草鞋を爪立てる様に、抜足をする様に、手拭に遠慮をする様に、廻つた。怖さうにも見えた。面白さうにもあつた。

やがて爺さんは笛をぴたりと已めた。さうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、ちよいと撮んで、ほつと放り込んだ。

「かうして置くと、箱の中で蛇になる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云ひながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行つた。自分は蛇が見たいから、細い道を何処迄も追いて行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。仕舞には、

「今になる、蛇になる、
屹度なる、笛が鳴る、」

と唄ひながら、とう／＼河の岸へ出た。橋も舟もないから、此処で休んで箱の中の蛇を見せるだらうと思つてゐると、爺さんはざぶ／＼河の中へ這入り出した。始めは膝位の深さであつたが、段々腰から、胸の方迄水に浸つて見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、
眞直になる、」

と唄ひながら、どこ迄も眞直に歩いて行つた。さうして髯も顔も頭も頭巾も丸で見えなくなつて仕舞つた。

自分は爺さんが向岸へ上がつた時に、蛇を見せるだらうと思つて、蘆の鳴る所に立つて、たつた一人何時迄も待つてゐた。けれども爺さんは、とう〳〵上がつて來なかつた。

第五夜

こんな夢を見た。

何でも余程古い事で、神代に近い昔と思はれるが、自分が軍をして運惡く敗北た爲に、生擒になつて、敵の大將の前に引き据ゑられた。

其の頃の人はみんな脊が高かつた。さうして、みんな長い髯を生やしてゐた。革の帶を締めて、それへ棒の樣な劍を釣るしてゐた。弓は藤蔓の太いのを其の儘用ひた樣に見えた。漆も塗つてなければ磨きも掛けてない。極めて素樸なものであつた。

敵の大將は、弓の眞中を右の手で握つて、其弓を草の上へ突いて、酒甕を伏せた樣なものゝ上に腰を掛けてゐた。其顏を見ると、鼻の上で、左右の眉が太く接續つてゐる。其頃髮剃と云ふものは無論なかつた。

自分は虜だから、腰を掛ける譯に行かない。草の上に胡坐をかいてゐた。足には大きな藁沓を穿いてゐた。此の時代の藁沓は深いものであつた。立つと膝頭迄來た。其の端の所は藁を少し編殘して、房の樣に

下げて、歩くとばら／＼動く樣にして、飾りとしてゐた。

大將は篝火で自分の顏を見て、死ぬか生きるかと聞いた。是れは其の頃の習慣で、捕虜にはだれでも一應はかう聞いたものである。生きると答へると降參した意味で、死ぬと云ふと屈服しないと云ふ事になる。自分は一言死ぬと答へた。大將は草の上に突いてゐた弓を向ふへ抛げて、腰に釣るした棒の樣な劍をするりと拔き掛けた。それへ風に靡いた篝火が横から吹きつけた。自分は右の手を楓の樣に開いて、掌を大將の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云ふ相圖である。大將は太い劍をかちやりと鞘に收めた。

其の頃でも戀はあつた。自分は死ぬ前に一目思ふ女に逢ひたいと云つた。大將は夜が開けて鷄が鳴く迄なら待つと云つた。鷄が鳴く迄に女を此處へ呼ばなければならない。鷄が鳴いても女が來なければ、自分は逢はずに殺されて仕舞ふ。

大將は腰を掛けた儘、篝火を眺めてゐる。自分は大きな藁沓を組み合した儘、草の上で女を待つてゐる。夜は段々更ける。

時々篝火が崩れる音がする。崩れる度に狼狽へた樣に焰が大將になだれかゝる。眞黑な眉の下で、大將の眼がぴか／＼と光つてゐる。すると誰やら來て、新しい枝を澤山火の中へ抛げ込んで行く。しばらくすると、火がぱち／＼と鳴る。暗闇を彈き返す樣な勇ましい音であつた。

此の時女は、裏の楢の木に繫いである、白い馬を引き出した。鬣を三度撫でゝ高い脊にひらりと飛び乘つた。鞍もない鐙もない裸馬であつた。長く白い足で、太腹を蹴ると、馬は一散に驅け出した。誰かが篝りを繼ぎ足したので、遠くの空が薄明るく見える。馬は此の明るいものを目懸けて闇の中を飛んで來る。鼻か

ら火の柱の様な息を二本出して飛んで來る。それでも女は細い足でしきりなしに馬の腹を蹴つてゐる。馬は蹄の音が宙で鳴る程早く飛んで來る。女の髪は吹流しの様に闇の中に尾を曳いた。それでもまだ篝のある所迄來られない。

　すると眞闇な道の傍で、忽ちこけこつこうと云ふ鷄の聲がした。女は身を空様に、兩手に握つた手綱をうんと控へた。馬は前足の蹄を堅い岩の上へ發矢と刻み込んだ。

　こけこつこうと鷄がまた一聲鳴いた。

　女はあつと云つて、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は諸膝を折る。乘つた人と共に眞向へ前へのめつた。岩の下は深い淵であつた。

　蹄の跡はいまだに岩の上に殘つて居る。鷄の鳴く眞似をしたものは天探女である。此の蹄の痕の岩に刻みつけられてゐる間、天探女は自分の敵である。

第六夜

　運慶が護國寺の山門で仁王を刻んでゐると云ふ評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりに下馬評をやつてゐた。

　山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、其幹が斜めに山門の甍を隱して、遠い青空迄伸びて居る。松の緑と朱塗の門が互ひに照り合つて美事に見える。其の上松の位地が好い。門の左の端を眼障にならない様に、斜に切つて行つて、上になる程幅を廣く屋根迄突出してゐるのが何となく古風である。鎌倉

時代とも思はれる。所が見て居るものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。其の中でも車夫が一番多い。辻待をして退屈だから立つてゐるに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云つてゐる。

「人間を拵へるよりも餘つ程骨が折れるだらう」とも云つてゐる。

さうかと思ふと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえさうかね。私や又仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「どうも強さうですね。なんだつてえますぜ。昔から誰が強いつて、仁王程強い人あ無いつて云ひますぜ。何でも日本武尊よりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。此の男は尻を端折つて、帽子を被らずにゐた。餘程無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしてゐる。一向振り向きもしない。高い所に乘つて、仁王の顔の邊をしきりに彫り拔いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子の樣なものを乘せて、素袍だか何だか別らない大きな袖を背中で括つてゐる。其の樣子が如何にも古くさい。わい〳〵云つてる見物人とは丸で釣り合が取れない樣である。自分はどうして今時分迄運慶が生きてゐるのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考へながら、矢張り立つて見てゐた。

然し運慶の方では不思議とも奇體とも頓と感じ得ない樣子で一生懸命に彫つてゐる。仰向いて此の態度を

眺めて居た一人の若い男が、自分の方を振り向いて、
「流石に運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はたゞ仁王と我れとあるのみと云ふ態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。
自分は此の言葉を面白いと思つた。それで一寸若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、
「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる」と云つた。
運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を竪に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。堅い木を一と刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面が忽ち浮き上がつて來た。其の刀の入れ方が如何にも無遠慮であつた。さうして少しも疑念を挾んで居らん様に見えた。
「能くあゝ無造作に鑿を使つて、思ふ様な眉や鼻が出來るものだな」と自分はあんまり感心したから獨言の様に言つた。するとさつきの若い男が、
「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋つてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出す迄だ。丸で土の中から石を掘り出す様なものだから決して間違ふ筈はない」と云つた。
自分は此の時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。果してさうなら誰にでも出來る事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つて見たくなつたから見物をやめて早速家へ歸つた。
道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出て見ると、先達ての暴風で倒れた樫を、薪にする積りで、木挽に挽かせた手頃な奴が、澤山積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢ひよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見當らなかつた。其の次のにも運悪く掘り當る事が出來なかつた。三番目のにも仁王は居なかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫つて見たが、どれもこれも仁王を藏してゐるのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つてゐないものだと悟つた。それで運慶が今日迄生きてゐる理由も略解つた。

第七夜

何でも大きな船に乘つてゐる。

此の船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切つて進んで行く。凄じい音である。けれども何處へ行くんだか分らない。只波の底から燒火箸の樣な太陽が出る。それが高い帆柱の眞上迄來てしばらく掛つてゐるかと思ふと、何時の間にか大きな船を追ひ越して、先へ行つて仕舞ふ。さうして、仕舞には燒火箸の樣にぢゆつといつて又波の底に沈んで行く。其の度に蒼い波が遠くの向ふで、蘇枋の色に沸き返る。すると船は凄じい音を立てゝ其の跡を追掛けて行く。けれども決して追附かない。

ある時自分は、船の男を捕まへて聞いて見た。

「此の船は西へ行くんですか」

船の男は怪訝な顔をして、しばらく自分を見て居たが、やがて。

「何故」と問ひ返した。

「落ちて行く日を追懸ける樣だから」

船の男は呵々と笑つた。さうして向ふの方へ行つて仕舞つた。

「西へ行く日の、果は東か。それは本眞か。東出る日の、御里は西か。それも本眞か。身は波の上。楫枕。流せ〳〵」と囃してゐる。舳へ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を手繰つてゐた。

自分は大變心細くなつた。何時陸へ上がれる事か分らない。さうして何處へ行くのだか知れない。只黑い煙を吐いて波を切つて行く事丈は慥かである。其の波は頗る廣いものであつた。際限もなく蒼く見える。時には紫にもなつた。只船の動く周圍丈は何時でも眞白に泡を吹いてゐた。自分は大變心細かつた。こんな船にゐるより一層身を投げて死んで仕舞はうかと思つた。

乘合は澤山居た。大抵は異人の樣であつた。然し色々な顏をしてゐた。空が曇つて船が搖れた時、一人の女が欄に倚りかゝつて、しきりに泣いて居た。眼を拭く手巾の色が白く見えた。然し身體には更紗の樣な洋服を着てゐた。此女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと氣が附いた。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めてゐたら、一人の異人が來て、天文學を知つてるかと尋ねた。自分は詰らないから死なうとさへ思つてゐる。天文學抔を知る必要がない。默つてゐた。すると其の異人が金牛宮の頂にある七星の話をして聞かせた。さうして星も海もみんな神の作つたものだと云つた。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て默つて居た。

或時サローンに這入つたら派手な衣裳を着た若い女が向ふむきになつて、洋琴を彈いてゐた。其の傍に脊の高い立派な男が立つて、唱歌を唄つてゐる。其口が大變大きく見えた。けれども二人は二人以外の事には丸で頓着してゐない樣子であつた。船に乘つてゐる事さへ忘れてゐる樣であつた。

自分は益詰らなくなつた。とう〳〵死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人の居ない時分、思ひ切つて海の中へ飛び込んだ。所が——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れた其の刹那に、急に命が惜くなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遲い。自分は厭でも應でも海の中へ這入らなければならない。只大變高く出來てゐた船と見えて、身體は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。然し捕まへるものがないから、次第々々に水に近附いて來る。いくら足を縮めても近附いて來る。水の色は黑かつた。

そのうち船は例の通り黑い烟を吐いて、通り過ぎて仕舞つた。自分は何處へ行くんだか判らない船でも、矢つ張り乘つて居る方がよかつたと始めて悟りながら、しかも其の悟りを利用する事が出來ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黑い波の方へ靜かに落ちて行つた。

第八夜

床屋の敷居を跨いだら、白い着物を着てかたまつて居た三四人が、一度に入らつしやいと云つた。

眞中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開いて、殘る二方に鏡が懸つてゐる。鏡の數を勘定したら六つあつた。

自分は其一つの前へ來て腰を卸した。すると御尻がぶくりと云つた。餘程坐り心地が好く出來た椅子である。鏡には自分の顏が立派に映つた。顏の後には窓が見えた。それから帳場格子が斜に見えた。格子の中には人がゐなかつた。窓の外を通る往來の人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎は何時の間にかパナマの帽子を買て被つてゐる。女も何時の間に拵らへたものやら。一寸解らない。雙方共得意の樣であつた。よく女の顏を見やうと思ふうちに通り過ぎて仕舞つた。

豆腐屋が喇叭を吹いて通つた。喇叭を口へ宛がつてゐるんで、頰ぺたが蜂に螫された樣に膨れてゐた。膨れたまんまで通り越したものだから、氣掛りで堪らない。生涯蜂に螫されてゐる樣に思ふ。

藝者が出た。まだ御化粧をしてゐない。島田の根が緩んで、何だか頭に締りがない。顏も寢ぼけてゐる。色澤が氣の毒な程惡い。それで御辭儀をして、どうも何とかですと云つたが、相手はどうしても鏡の中へ出て來ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろへ來て、鋏と櫛を持つて自分の頭を眺め出した。自分は薄い髭を捩つて、どうだらう物になるだらうかと尋ねた。白い男は、何にも云はずに、手に持つた琥珀色の櫛で輕く自分の頭を叩いた。

「さあ、頭もだが、どうだらう、物になるだらうか」と自分は白い男に聞いた。白い男は矢張り何も答へずに、ちやき〱と鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ殘らず見る積りで眼を睜つてゐたが、鋏の鳴るたんびに黑い毛が飛んで來るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉ぢた。すると白い男が、かう云つた。

「旦那は表の金魚賣を御覽なすつたか」

自分は見ないと云つた。白い男はそれぎりで、頻と鋏を鳴らしてゐた。すると突然大きな聲で危險と云

ものがある。はつと眼を開けると、白い男の袖の下に自轉車の輪が見えた。人力の梶棒が見えた。と思ふと、白い男が兩手で自分の頭を押へてうん、と横へ向けた。自轉車と人力車は丸で見えなくなつた。鋏の音がちやき／＼する。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所を刈り始めた。毛が前の方へ飛ばなくなつたから、安心して眼を開けた。粟餅や、餅やあ、餅や、と云ふ聲がすぐ、そこでする。小さい杵をわざと臼へ中て、拍子を取つて餅を搗いてゐる。粟餅屋は子供の時に見たばかりだから、一寸樣子が見たい。けれども粟餅屋は決して鏡の中に出て來ない。只餅を搗く音丈する。

自分はあるたけの視力で鏡の角を覗き込む樣にして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐つてゐる。色の淺黒い眉毛の濃い大柄な女で、髮を銀杏返しに結つて、黒繻子の半襟の掛つた素袷で、立膝の儘、札の勘定をしてゐる。札は十圓札らしい。女は長い睫を伏せて薄い唇を結んで一生懸命に、札の數を讀んでゐるが、其の讀み方がいかにも早い。しかも札の數はどこ迄行つても盡きる樣子がない。膝の上に乘つてゐるのは高々百枚位だが、其百枚がいつ迄勘定しても百枚である。

自分は茫然として此女の顔と十圓札を見詰めて居た。すると耳の元で白い男が大きな聲で「洗ひませう」と云つた。丁度うまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子の方を振り返つて見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかつた。

代を拂つて表へ出ると、門口の左側に、小判なりの桶が五つ許り並べてあつて、其の中に赤い金魚や、斑入の金魚や、痩せた金魚や、肥つた金魚が澤山入れてあつた。さうして金魚賣が其の後にゐた。金魚賣

は自分の前に並べた金魚を見詰めた儘、頰杖を突いて、じつとして居る。騷がしい往來の活動には殆ど心を留めてゐない。自分はしばらく立つて此の金魚賣を眺めて居た。けれども自分が眺めてゐる間、金魚賣はちつとも動かなかつた。

第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戰爭が起りさうに見える。燒け出された裸馬が、夜晝となく、屋敷の周圍を暴れ廻ると、それを夜晝となく足輕共が犇きながら追掛けてゐる樣な心持がする。それでゐて家のうちは森として靜かである。

家には若い母と三つになる子供がゐる。父は何處かへ行つた。父が何處かへ行つたのは、月の出てゐない夜中であつた。床の上で草鞋を穿いて、黑い頭巾を被つて、勝手口から出て行つた。其の時母の持つてゐた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣の手前にある古い檜を照した。

父はそれ限歸つて來なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父樣は」と聞いてゐる。子供は何とも云はなかつた。しばらくしてから「あつち」と答へる樣になつた。母が「何日御歸り」と聞いても矢張り「あつち」と答へて笑つてゐた。其時は母も笑つた。さうして「今に御歸り」と云ふ言葉を何遍となく繰返して敎へた。けれども子供は「今に」丈を覺えたのみである。時々は「御父樣は何處」と聞かれて「今に」と答へる事もあつた。

夜になつて、四隣が靜まると、母は帶を締め直して、鮫鞘の短刀を帶の間へ差して、子供を細帶で脊中

へ背負つて、そつと潜りから出て行く。母はいつでも草履を穿いてゐた。子供は此の草履の音を聞きながら母の脊中で寝て仕舞ふ事もあつた。

土塀の續いてゐる屋敷町を西へ下つて、だら／＼坂を降り盡すと、大きな銀杏がある。此の銀杏を目標に右に切れると、一丁許り奥に石の鳥居がある。片側は田圃で、片側は熊笹ばかりの中を鳥居迄來て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間許り敷石傳ひに突き當ると、古い拜殿の階段の下に出る。鼠色に洗ひ出された賽錢箱の上に、大きな鈴の紐がぶら下つて晝間見ると、其の鈴の傍に八幡宮と云ふ額が懸つてゐる。八の字が、鳩が二羽向ひあつた樣な書體に出來てゐるのが面白い。其の外にも色々の額がある。大抵は家中のものゝ射抜いた金的を、射抜いたものゝ名前に添へたのが多い。偶には太刀を納めたのもある。

鳥居を潜ると杉の梢で何時でも梟が鳴いてゐる。さうして、冷飯草履の音がぴちや／＼する。それが拜殿の前で已むと、母は先づ鈴を鳴らして置いて、直にしやがんで柏手を打つ。大抵は此の時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不亂に夫の無事を祈る。母の考へでは、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、かうやつて是非ない願を掛けたら、よもや聽かれぬ道理はなからうと一圖に思ひ詰めて居る。

子供は能く此の鈴の音で眼を覺まして、四邊を見ると眞暗だものだから、急に脊中で泣き出す事がある。其の時母は口の内で何か祈りながら、脊を振つてあやさうとする。すると旨く泣き已む事もある。又益々烈しく泣き立てる事もある。いづれにしても母は容易に立たない。

一通り夫の身の上を祈つて仕舞ふと、今度は細帯を解いて、脊中の子を摺り卸ろすやうに、脊中から前

へ廻して、兩手に抱きながら拜殿を上つて行つて、「好い子だから、少しの間、待つて御出よ」と屹度自分の頰を子供の頰へ擦り附ける。さうして細帶を長くして、子供を縛つて置いて、其の片端を拜殿の欄干に括り附ける。それから段々を下りて來て二十間の敷石を往つたり來たり御百度を踏む。

拜殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帶の丈のゆるす限り、廣縁の上を這ひ廻つてゐる。さう云ふ時は母に取つて、甚だ樂な夜である。けれども縛つた子にひい／＼泣かれると、母は氣が氣でない。御百度の足が非常に早くなる。大變息が切れる。仕方のない時は、中途で拜殿へ上つて來て、色々すかして置いて、又御百度を踏み直す事もある。

かう云ふ風に、幾晩となく母が氣を揉んで、夜の目も寢ずに心配してゐた父は、とくの昔に浪士の爲に殺されてゐたのである。

こんな悲い話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女に攫はれてから七日目の晩にふらりと歸つて來て、急に熱が出てどつと、床に就いてゐると云つて健さんが知らせに來た。

庄太郎は町内一の好男子で、至極善良な正直者である。たゞ一つの道樂がある。パナマの帽子を被つて、夕方になると水菓子屋の店先へ腰をかけて、往來の女の顏を眺めてゐる。さうして頻に感心してゐる。其の外には是と云ふ程の特色もない。

あまり女が通らない時は、往來を見ないで水菓子を見てゐる。水菓子には色々ある。水蜜桃や、林檎や、枇杷や、バナナ、を奇麗に籠に盛つて、すぐ見舞物に持つて行ける樣に二列に並べてある。庄太郎は此の籠を見ては奇麗だと云つてゐる。商賣をするなら水菓子屋に限ると云つてゐる。其の癖自分はパナマの帽子を被つてぶら〳〵遊んでゐる。

此の色がいゝと云つて、夏蜜柑抔を品評する事もある。けれども、曾て錢を出して水菓子を買つた事がない。只では無論食はない。色許り賞めて居る。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立つた。身分のある人と見えて立派な服裝をしてゐる。其の着物の色がひどく庄太郎の氣に入つた。其の上庄太郎は大變女の顏に感心して仕舞つた。そこで大事なパナマの帽子を脫つて丁寧に挨拶をしたら、女は籠詰の一番大きいのを指して、是を下さいと云ふんで、庄太郎はすぐ其の籠を取つて渡した。すると女はそれを一寸提げて見て、大變重い事と云つた。

庄太郎は元來閑人の上に、頗る氣作な男だから、ではお宅迄持つて參りませうと云つて、女と一所に水菓子屋を出た。それぎり歸つて來なかつた。

如何な庄太郎でも、餘まり呑氣過ぎる。只事ぢや無からうと云つて、親類や友達が騷ぎ出して居ると、七日目の晩になつて、ふらりと歸つて來た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さん何處へ行つてゐたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乘つて山へ行つたんだと答へた。

何でも餘程長い電車に違ひない。庄太郎の云ふ所によると、電車を下りるとすぐと原へ出たさうである。非常に廣い原で、何處を見廻しても靑い草ばかり生えてゐた。女と一所に草の上を步いて行くと、急に絕

壁の天邊へ出た。其の時女が庄太郎に、此處から飛び込んで御覽なさいと云つた。底を覗いて見ると、切岸は見えるが底は見えない。庄太郎は又パナマの帽子を脫いで再三辭退した。すると女が、もし思ひ切つて飛び込まなければ、豚に舐められますが好う御座んすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だつた。けれども命には易へられないと思つて、矢つ張り飛び込むのを見合せてゐた。所へ豚が一匹鼻を鳴らして來た。庄太郎は仕方なしに、持つて居た細い檳榔樹の洋杖で、豚の鼻頭を打つた。豚はぐうと云ひながら、ころりと引つ繰り返つて、絶壁の下へ落ちて行つた。庄太郎はほつと一と息接いでゐると又一匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦り附けに來た。庄太郎は已を得ず又洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いて又眞逆樣に穴の底へ轉け込んだ。すると又一匹あらはれた。此の時庄太郎は不圖氣が附いて、向ふを見ると、遙の青草原の盡きる邊から幾萬匹か數へ切れぬ豚が、群をなして一直線に、此絶壁の上に立つてゐる庄太郎を目懸けて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心から恐縮した。けれども仕方がないから、近寄つてくる豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧に檳榔樹の洋杖で打つてゐた。不思議な事に洋杖が鼻へ觸りさへすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗いて見ると底の見えない絶壁を、逆さになつた豚が行列して落ちて行く。自分が此の位多くの豚を谷へ落したかと思ふと、庄太郎は我ながら怖くなつた。けれども豚は續々くる。黑雲に足が生えて、青草を踏み分ける樣な勢ひで無盡藏に鼻を鳴らしてくる。

　庄太郎は必死の勇を振つて、豚の鼻頭を七日六晩叩いた。けれども、とう〳〵精根が盡きて、手が蒟蒻の樣に弱つて、仕舞に豚に舐められてしまつた。さうして絶壁の上へ倒れた。

　健さんは、庄太郎の話を此處迄して、だから餘り女を見るのは善くないよと云つた。自分も尤もだと思

つた。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰ひたいと云つてゐた。庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだらう。

四一、七、二五――四一、八、五

元日

雜煮を食つて、書齋に引き取ると、しばらくして三四人來た。いづれも若い男である。其内の一人がフロックを着てゐる。着なれない所爲か、メルトンに對して妙に遠慮する傾きがある。あとのものは皆和服で、かつ不斷着の儘だから頓と正月らしくない。此連中がフロックを眺めて、やあ――やあと一ツづゝ云つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、やあと云つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顏を拭いた。さうして、頻に屠蘇を飮んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突ついてゐる。所へ虚子が車で來た。是は黒い羽織に黒い紋付を着て、極めて舊式に極つてゐる。あなたは黒紋付を持つてゐますが、矢張能をやるから其必要があるんでせうと聞いたら、虚子が、えゝさうですと答へた。さうして、一つ謠ひませんかと云ひ出した。自分は謠つても宜う御座んすと應じた。

それから二人して東北と云ふものを謠つた。餘程以前に習つた丈で、殆ど復習と云ふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。其上、我ながら覺束ない聲が出た。漸く謠つて仕舞ふと、聞いてゐた若い連中が、申し合せた樣に自分を不味いと云ひ出した。中にもフロックは、あなたの聲はひよろ／＼してゐると云つ

た。此連中は元來謠のうの字も心得ないもの共である。だから虚子と自分の優劣はとても分らないだらうと思つてゐた。然し、批評をされて見ると、素人でも理の當然な所だから已を得ない。馬鹿を云へといふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が近來鼓を習つてゐるといふ話しを始めた。謠のうの字も知らない連中が、一つ打つて御覽なさい、是非御聞かせなさいと所望してゐる。虚子は自分に、ぢや、あなた謠つて下さいと依賴した。是は囃の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味もあつた。謠ひませうと引き受けた。虚子は車夫を走らして鼓を取り寄せた。鼓がくると、臺所から七輪を持つて來さして、かんかんいふ炭火の上で鼓の皮を焙り始めた。みんな驚いて見てゐる。自分も此猛烈な焙りかたには驚いた。大丈夫ですかと尋ねたら、えゝ大丈夫ですと答へながら、指の先で張切つた皮の上をかんと彈いた。一寸好い音がした。もう宜いでせうと、七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が、赤い緒をいぢくつてゐる所が何となく品が好い。今度はみんな感心して見てゐる。

虚子はやがて羽織を脫いだ。さうして鼓を抱い込んだ。自分は少し待つて呉れと賴んだ。第一彼が何處いらで鼓を打つか見當が付かないから一寸打ち合せをしたい。虚子は、こゝで掛聲をいくつ掛けて、こゝで鼓をどう打つから、御遣りなさいと懇に說明して呉れた。自分にはとても呑み込めない。けれども合點の行く迄研究してゐれば、二三時間はかゝる。已を得ず、好い加減に領承した。そこで羽衣の曲を謠ひ出した。春霞たなびきにけりと半行程來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振るひ出しては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循の儘、少し押して行く

と、虚子が矢庭に大きな掛聲をかけて、鼓をかんと一つ打つた。

自分は虚子が斯う猛烈に來やうとは夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な悠長なものと許り考へてゐた掛聲は、丸で眞劍勝負のそれの樣に自分の鼓膜を動かした。自分の謠は此掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虚子が又腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度によろ〳〵する。さうして小さくなる。しばらくすると聞いてゐるものがくす〳〵笑ひ出した。自分も内心から馬鹿馬鹿しくなつた。其時フロックが眞先に立つて、どつと吹き出した。自分も調子につれて、一所に吹き出した。

それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは尤も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に、自分の謠を合せて、目出度謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならない所があるといつて車に乘つて歸つて行つた。あとから又色々若いものに冷かされた。細君迄一所になつて夫を腐した末、高濱さんが鼓を御打ちなさる時、襦袢の袖がぴら〳〵見えたが、大變好い色だつたと賞めてゐる。フロックは忽ち贊成した。自分は虚子の襦袢の袖の色も、袖の色のぴら〳〵する所も決して好いとは思はない。

蛇

木戸を開けて表へ出ると、大きな馬の足迹の中に雨が一杯溜つてゐた。土を踏むと泥の音が踵裏へ飛び附いて來る。踵を上げるのが痛い位に思はれた。手桶を右の手に提げてゐるので、足の拔き差に都合が惡い。際どく踏み應へる時には、腰から上で調子を取る爲に、手に持つたものを放り出したい位である。やがて

手網の尻をどつさと泥の底に据ゑて仕舞つた。危く倒れる所を手網の柄に乗し懸つて向ふを見ると、叔父さんは一間許り前にゐた。蓑を着た背の後から、三角に張つた網の裾がぶら下がつてゐる。此の時被つた笠が少し動いた。笠のなかゝら非常い路だと云つた様に聞えた。蓑の影はやがて雨に吹かれた。

石橋の上に立つて下を見ると、黒い水が草の間から押されて来る。不断は黒節の上を三寸とは超えない底に、長い藻が、うつら〳〵と揺いて、見ても奇麗な流れであるのに、今日は底から濁つた。下から泥を吹き上げる、上から雨が叩く、眞中を渦が重なり合つて通る。しばらく此の渦を見守つて居た叔父さんは、口の内で、

「獲れる」と云つた。

二人は橋を渡つて、すぐ左へ切れた。渦は青い田の中を蜿蜒と延びて行く。どこ迄押して行くか分らない流れの迹を跟けて一町程来た。さうして廣い田の中にたつた二人淋しく立つた。雨許り見える。叔父さんは笠の中から空を仰いだ。空は茶壺の蓋の様に暗く封じられてゐる。その何處からか、隙間なく雨が落ちる。立つてゐると、ざあつと云ふ音がする。是は身に着けた笠と蓑に中る音である。夫れから四方の田に中る音である。向ふに見える貴王の森に中る音も遠くから交つて来るらしい。

森の上には、黒い雲が杉の梢に呼び寄せられて奥深く重なり合つてゐる。夫れが自然の重みでだらりと上の方から下つて来る。雲の足は今杉の頭に絡み附いた。もう少しすると、森の中へ落ちさうだ。

氣が附いて足元を見ると、渦は限なく水上から流れて来る。貴王様の裏の池の水が、あの雲に襲はれたものだらう。渦の形が急に勢ひづいた様に見える。叔父さんは又捲く渦を見守つて、

「獲れる」と左も何物をか取つた様に云つた。やがて蓑を着た儘水の中に下りた。勢ひの凄じい割には、左程深くもない。立つて腰迄浸る位である。叔父さんは河の眞中に腰を据ゑて、貴王の森を正面に、川上に向つて、肩に擔いだ網を卸した。

二人は雨の音の中に凝として、まともに押して來る渦の恰好を眺めてゐた。魚が此の渦の下を、貴王の池から流されて通るに違ひない。うまく懸れば大きなのが獲れると、一心に凄い水の色を見詰めてゐた。水は固より濁つてゐる。上皮の動く具合丈で、どんなものが、水の底を流れるか全く分りかねる。夫でも瞬もせずに、水際迄浸つた叔父さんの手首の動くのを待つてゐた。けれどもそれが中々に動かない。

雨脚は次第に黒くなる。河の色は段々重くなる。渦の紋は劇しく水上から回つて來る。此の時どす黒い波が鋭く眼の前を通り過さうとする中に、ちらりと色の變つた模樣が見えた。瞬を容さぬ咄嗟の光を受けた其の模樣には長さの感じがあつた。是は大きな鰻だなと思つた。

途端に流れに逆らつて、網の柄を握つてゐた叔父さんの右の手首が、蓑の下から肩の上まで弾ね返る様に動いた。續いて長いものが叔父さんの手を離れた。それが暗い雨のふりしきる中に、重たい繩の様な曲線を描いて、向ふの土手の上に落ちた。と思ふと、草の中からむくりと鎌首を一尺許り持上げた。さうして持上げた儘屹と二人を見た。

「覺えてゐろ」

聲は慥かに叔父さんの聲であつた。同時に鎌首は草の中に消えた。叔父さんは蒼い顏をして、蛇を投げた所を見てゐる。

「叔父さん、今、覺えてゐると云つたのは貴方ですか」
叔父さんは漸く此方を向いた。さうして低い聲で、誰だか能く分らないと答へた。今でも叔父に此の話をする度に、誰だか能く分らないと答へては妙な顏をする。

泥棒

寢ようと思つて次の間へ出ると、炬燵の臭がぷんとした。厠の歸りに、火が强過ぎる樣だから、氣を付けなくては不可ないと妻に注意して、自分の部屋へ引取つた。もう十一時を過ぎてゐる。床の中の夢は常の如く安らかであつた。寒い割に風も吹かず、半鐘の音も耳に應へなかつた。熟睡が時の世界を盛り潰した樣に正體を失つた。

すると忽然として、女の泣聲で眼が覺めた。聞けばもよと云ふ下女の聲である。此の下女は驚いて狼狽ると何時でも泣聲を出す。此の間家の赤ん坊を湯に入れた時、赤ん坊が湯氣に上つて、引き付けたといつて五分許泣聲を出した。自分が此下女の異樣な聲を聞いたのは、それが始めてゞある。啜り上げる樣にして早口に物を云ふ。訴へる樣な、口說く樣な、詫を入れる樣な、情人の死を悲しむ樣な――到底普通の驚愕の場合に出る、鋭くつて短い感投詞の調子ではない。

自分は今云ふ通り此の異樣の聲で、眼が覺めた。聲は慥かに妻の寢てゐる、次の部屋から出る。同時に襖を洩れて赤い火が颯と暗い書齋に射した。今開ける瞼の裏に、此の光が屆くや否や自分は火事だと合點して飛び起きた。さうして、突然隔ての唐紙をがらりと開けた。

其の時自分は顚覆返つた炬燵を想像してゐた。焦げた蒲團を想像してゐた。漲ぎる烟と、燃える疊とを想像してゐた。所が開けて見ると、洋燈は例の如く點つてゐる。妻と子供は常の通り寢てゐる。炬燵は宵の位地にちやんとある。凡てが、寢る前に見た時と同じである。平和である。暖かである。たゞ下女丈が泣いて居る。

下女は妻の蒲團の裾を抑へる樣にして早口に物を云ふ。妻は眼を覺まして、ぱち〳〵させる許りで別に起きる樣子もない。自分は何事が起つたのか殆ど判じかねて、敷居際に突立つた儘、ぼんやり部屋の中を見廻した。途端に下女の泣聲のうちに、泥棒といふ二字が出た。それが自分の耳に這入るや否や、凡てが解決された樣に自分は忽ち妻の部屋を大股に横切つて、次の間に飛び出しながら、何だ！と怒鳴りつけた。けれども飛び出した次の部屋は眞暗である。續く臺所の雨戸が一枚外れて、美しい月の光が部屋の入口迄射し込んでゐる。自分は眞夜中に人の住居の奧を照す月影を見て、おのづから寒いと感じた。素足の儘板の間へ出て臺所の流元迄來て見ると、四邊は寂としてゐる。表を覗くと月許りである。自分は、戸口から一歩も外へ出る氣にならなかつた。

引き返して、妻の所へ來て、泥棒は逃げた、安心しろ、何も竊られやしない、と云つた。妻は此の時漸く起き上つてゐた。何も云はずに洋燈を持つて暗い部屋迄出て來て、簞笥の前に翳した。觀音開きが取り外されてゐる。抽斗が明けた儘になつてゐる。妻は自分の顏を見て、矢つ張り竊られたんですと云つた。自分も漸く泥棒が竊つた後で逃げたんだと氣が付いた。何だか急に馬鹿々々しくなつた。片方を見ると、泣いて起しに來た下女の蒲團が取つてある。其の枕元にもう一つ簞笥がある。其の簞笥の上に又用簞笥が

乘つてゐる。暮の事なので醫者の藥禮其の他が此内に這入つてゐるのださうだ。妻に調べさせると此方の方は元の通りだと云ふ。下女が泣いて緣側の方から飛び出したので、泥棒も已を得ず仕事の中途で逃げたのかも知れない。

其の内、外の部屋に寢て居たものもみんな起きて來た。さうしてみんな色々な事を云ふ。もう少し前に小用に起きたのにとか、今夜は寢つかれないで、一時頃迄は眼が冴えてゐたのにとか、悉く殘念さうである。そのなかで、十になる長女は、泥棒が臺所から這入つたのも、泥棒がみし／＼緣側を歩いたのも、すつかり知つてゐると云つた。あらまあとお房さんが驚いてゐる。お房さんは十八で、長女と同じ部屋に寢る親類の娘である。自分は又床へ這入つて寢た。

明くる日は此騷動で、例よりは少し遲く起きた。顏を洗つて、朝食を遣つてゐると、臺所で下女が泥棒の足痕を見付けたとか、見付けないとか騷いでゐる。面倒だから書齋へ引き取つた。引き取つて十分も經つたかと思ふと、玄關で賴むと云ふ聲がした。勇ましい聲である。臺所の方へ通じない樣だから、自分で取次に出て見たら、巡査が格子の前に立つてゐた。泥棒が這入つたさうですねと笑つてゐる。戸締りは好くしてあつたのですかと聞くから、いや、何うも餘り好くありませんと答へた。おや仕方がない、締りが惡いと何處からでも這入りますよ、一枚々々雨戸へ釘を差さなくちや不可ませんと注意する。自分ははあ／＼と返事をして置いた。此の巡査に遇つてから、惡いものは、泥棒ぢやなくつて、不取締な主人である樣な心持になつた。

巡査は臺所へ廻つた。其處で妻を捉まへて、紛失した物を手帳に書き付けて居る。繻珍の丸帶が一本で

すね、――丸帶と云ふのは何ですか、丸帶と書いて置けば解るですか、さう、それでは繻珍の丸帶が一本と、夫から……

下女がにや〳〵笑つてゐる。此の巡査は丸帶も腹合せも一向知らない。頗る單簡な面白い巡査である。やがて紛失の目錄を十點ばかり書き上げて其の下に價格を記入して、すると〆て百五十圓になりますねと念を押して歸つて行つた。

自分は此の時始めて、何を竊られたかを明瞭に知つた。失くなつたものは十點、悉く帶である。昨夜這入つたのは帶泥棒であつた。御正月を眼前に控へた妻は異な顏をしてゐる。子供が三箇日にも着物を着換へる事が出來ないのださうだ。仕方がない。

晝過には刑事が來た。座敷へ上つて色々見てゐる。桶の中に蠟燭でも立てゝ仕事をしやしないかと云つて、臺所の小桶迄檢べてゐた。まあ御茶でも御上がんなさいと云つて、日當りの好い茶の間へ坐らせて話をした。

泥棒は大抵下谷、淺草邊から電車でやつて來て、明くる日の朝又電車で歸るのださうだ。大抵は捉まらないものださうだ。捉まへると刑事の方が損になるものださうだ。泥棒を電車に乘せると電車賃が損になる。裁判に出ると、辨當代が損になる。機密費は警視廳が半分取つて仕舞ふのださうだ。餘りを各警察へ割り振るのださうだ。牛込には刑事がたつた三四人しかゐないのださうだ――警察の力なら大抵の事は出來る者と信じてゐた自分は、甚だ心細い氣がした。話をして聞かせる刑事も心細い顏をしてゐた。

出入のものを呼んで戸締りを直さうと思つたら生憎、暮で用が立て込んでゐて來られない。其うちに夜

元の通りにして置いて寢る。みんな氣味が惡さうである。自分も決して好い心持ではない。泥棒は各自勝手に取締るべきものであると警察から宣告されたと一般だからである。夫でも昨日の今日だから、まあ大丈夫だらうと、氣を寛に持つて枕に就いた。すると又夜中に妻から起された。さつきから、臺所の方ががた／＼云つてゐる。氣味がわるいから起きて見て下さいと云ふ。成程がた／＼いふ。妻はもう泥棒が這入つた樣な顏をしてゐる。

自分はそつと床を出た。忍び足に妻の部屋を橫切つて、隔ての襖の傍迄くると、次の間では下女が鼾をかいてゐる。自分は出來る丈靜かに襖を開けた。さうして、眞暗な部屋の中に一人立つた。ごとり／＼と云ふ音がする。慥かに臺所の入口である。暗いなかを影の動く樣に三步程音のする方へ近づくと、もう部屋の出口である。障子が立つてゐる。そとはすぐ板敷になる。自分は障子に身を寄せて、暗がりで耳を立てた。やがて、ごとりと云つた。しばらくして又ごとりと云つた。自分は此の怪しい音を約四五遍聞いた。さうして、これは板敷の左にある、戶棚の奧から出るに違ないといふ事を慥めた。忽ち普通の步調と、尋常の所作をして、妻の部屋へ歸つて來た。鼠が何か嚙つてゐるんだ、安心しろと云ふと、妻はさうですかと難有さうな返事をした。夫れからは二人とも落付いて寢て仕舞つた。

朝になつて又顏を洗つて、茶の間へ來ると、妻が鼠の嚙つた鰹節を、膳の前へ出して、昨夜のは是れですよと說明した。自分はあゝ成程と、一晚中無慘に遣られた鰹節を眺めて居た。すると妻は、あなた序に鼠を追つて、鰹節を仕舞つて下されば好いのにと少し不平がましく云つた。自分もさうすれば好かつたと此の時始めて氣が付いた。

喜いちやんと云ふ子がゐる。滑らかな皮膚と、鮮かな眸を持つてゐるが、頰の色は發育の好い世間の子供の樣に冴々してゐない。一寸見ると一面に黄色い心持ちがする。御母さんが餘り可愛がり過ぎて表へ遊びに出さない所爲だと、出入りの女髮結が評した事がある。御母さんは束髮の流行る今の世に、昔風の髷を四日目々々に乾度結ふ女で、自分の子を喜いちやん〳〵と、何時でも、ちやん付にして呼んでゐる。此お母さんの上に、又切下の御祖母さんがゐて、其御祖母さんが又喜いちやん〳〵と呼んでゐる。喜いちやん御琴の御稽古に行く時間ですよ。喜いちやん無暗に表へ出て、其處いらの子供と遊んでは不可ません抔と云つてゐる。

喜いちやんは、是が爲に滅多に表へ出て遊んだ事がない。尤も近所はあまり上等でない。前に鹽煎餅屋がある。其隣に瓦師がある。少し先へ行くと下駄の齒入と、鑄かけ錠前直しがゐる。所が喜いちやんの家は銀行の御役人である。塀のなかに松が植ゑてある。冬になると植木屋が來て狹い庭に枯松葉を一面に敷て行く。

喜いちやんは仕方がないから、學校から歸つて、退屈になると、裏へ出て遊んでゐる。裏は御母さんや、御祖母さんが張物をする所である。よしが洗濯をする所である。暮になると向鉢卷の男が臼を擔いで來て、餅を搗く所である。夫から漬菜に鹽を振つて樽へ詰込む所である。

喜いちやんは此處へ出て、御母さんや御祖母さんや、よしを相手にして遊んでゐる。時には相手の居な

いのに、たつた一人で出てくる事がある。其の時は淺い生垣の間から、よく裏の長屋を覗き込む。

長屋は五六軒ある。生垣の下は三四尺崖になつてゐるのだから、喜いちやんが覗き込むと、丁度上から都合よく見下す様に出來てゐる。喜いちやんは子供心に、かうして裏の長屋を見下すのが愉快なのである。造兵へ出る辰さんが肌を拔いで酒を呑んでゐると、御酒を呑んでゝよと御母さんに話す。大工の源坊が手斧を磨いでゐると、何か磨いでゝよと御祖母さんに知らせる。其の外喧嘩をしてゝよ、燒芋を食べてゝよ抔と、見下した通りを報告する。すると、よしが大きな聲を出して笑ふ。御母さんも、御祖母さんも面白さうに笑ふ。喜いちやんは、かうして笑つて貰ふのが一番得意なのである。

喜いちやんが裏を覗いてゐると、時々源坊の倅の與吉と顏を合す事がある。さうして、三度に一度位は話をする。けれども喜いちやんと與吉だから、話の合ふ譯がない。何時でも喧嘩になつて仕舞ふ。與吉が何んだ蒼ん膨れと下から云ふと、喜いちやんは上から、やあい鼻垂らし小僧、貧乏人、と輕蔑やうに丸い顋をしやくつて見せる。一遍は與吉が怒つて下から物干竿を突き出したので、喜いちやんは驚いて家へ逃げ込んで仕舞つた。其の次には、喜いちやんが、毛絲で奇麗に縢つた護謨毬を崖下へ落したのを、與吉が拾つて中々渡さなかつた。御返しよ、放つて御呉れよ、よう、と精一杯に焦付いたが與吉は毬を持つた儘、上を見て威張つて突立つてゐる。詫まれ、詫まつたら返してやると云ふ。喜いちやんは、誰が詫まるものか、泥棒と云つた儘、裁縫をしてゐる御母さんの傍へ來て泣き出した。御母さんは向になつて、表向よしを取りに遣ると、與吉の御袋がどうも御氣の毒さまと云つたぎりで毬はとう〳〵喜いちやんの手に歸らなかつた。

それから三日經つて、喜いちやんは大きな赤い柿を一つ持つて、又裏へ出た。すると與吉が例の通り崖の下へ寄て來た。喜いちやんは生垣の間から赤い柿を出して、これ上げやうかと云つた。與吉は下から柿を睨めながら、なんでえ、なんでえ、其んなもの要らねえやと凝と動かずにゐる。要らないの、要らなきや、御廢しなさいと、喜いちやんは、垣根から手を引つ込めた。すると與吉は、矢つ張りなんでえ、なんでえ、擲ぐるぞと云ひながら猶と崖の下へ寄つて來た。ぢや欲しいのと喜いちやんは又柿を出した。欲しいもんけえ、そんなものと與吉は大きな眼をして、見上げてゐる。

こんな問答を四五遍繰返したあとで、喜いちやんは、ぢや上げやうと云ひ乍ら、手に持つた柿をぽたりと崖の下に落した。與吉は周章て、泥の着いた柿を拾つた。さうして、拾ふや否や、がぶりと横に食付いた。其の時與吉の鼻の穴が震へる樣に動いた。厚い唇が右の方に歪んだ。さうして、食ひかいた柿の一片をぺつと吐いた。さうして懸命の憎惡を眸の裏に萃めて、澁いや、こんなものと言ひながら、手に持つた柿を、喜いちやんに放り付けた。柿は喜いちやんの頭を通り越して裏の物置に當つた。喜いちやんは、やあい食辛抱と云ひながら、走け出して家へ這入つた。しばらくすると喜いちやんの家で大きな笑聲が聞えた。

火鉢

眼が覺めたら、昨夜抱いて寢た懷爐が腹の上で冷たくなつてゐた。硝子戸越に、廂の外を眺めると、重い空が幅三尺程鉛の樣に見えた。胃の痛みは大分除れたらしい。思ひ切つて、床の上に起き上がると、豫想よりも寒い。窓の下には昨日の雪が其の儘である。

風呂場は氷でかち／＼光つてゐる。水道は凍り着いて、栓が利かない。漸くの事で溫水摩擦を濟まして、茶の間で紅茶を茶碗に移してゐると、二つになる男の子が例の通り泣き出した。この子は一昨日も一日泣いてゐた。昨日も泣き續けに泣いた。妻にどうかしたのかと聞くと、どうもしたのぢやない、寒いからだと云ふ。仕方がない。成程泣き方がぐづ／＼で痛くも苦しくもない樣である。けれども泣く位だから、どこか不安な所があるのだらう。聞いてゐると、仕舞には此方が不安になつて來る。時によると小惡らしくなる。大きな聲で叱り付け度い事もあるが、何しろ、叱るには餘り小さ過ぎると思つて、つい我慢をする。一昨日も昨日も左うであつたが、今日も亦一日左うなのかと思ふと、朝から心持が好くない。胃が惡いので此の頃は朝飯を食はぬ事にしてあるから、紅茶茶碗を持つた儘、書齋へ退いた。

火鉢に手を翳して、少し暖たまつてゐると、子供は向うの方でまだ泣いてゐる。其うち掌丈は烟が出る程熱くなつた。けれども、背中から肩へ掛けては無暗に寒い。殊に足の先は冷え切つて痛い位である。だから仕方なしに凝としてゐた。少しでも手を動かすと、手が何處か冷たい所に觸れる。それが刺にでも觸つた程神經に應へる。首をぐるりと回してさへ、頸の付根が着物の襟にひやりと滑るのが堪へ難い感じである。自分は寒さの壓迫を四方から受けて、十疊の書齋の眞中に竦んでゐた。此の書齋は板の間である。椅子を用ひべき所を、絨氈を敷いて、普通の疊の如くに想像して坐つてゐる。所が敷物が狹いので、四方とも二尺がたは、つる／＼した板の間が剝き出しに光つてゐる。凝として此の板の間を眺めて、竦んでゐると、男の子がまだ泣いてゐる。とても仕事をする勇氣が出ない。

所へ妻が一寸時計を拜借と這入つて來て、又雪になりましたと云ふ。見ると、細かいのが何時の間にか、

降り出した。風もない濁つた空の途中から、靜かに、急がずに、冷刻に、落ちて來る。

「おい、去年、子供の病氣で、煖爐を焚いた時には炭代が幾何要つたかな」

「あの時は月末に廿八圓拂ひました」

自分は妻の答を聞いて、座敷煖爐を斷念した。座敷煖爐は裏の物置に轉がつてゐるのである。

「おい、もう少し子供を靜かに出來ないかな」

妻は已を得ないと云ふ樣な顔をした。さうして、云つた。

「お政さんが御腹が痛いつて、大分苦しさうですから、林さんでも頼んで見て貰ひませうか」

お政さんが二三日寢てゐる事は知つてゐたが夫程惡いとは思はなかつた。早く醫者を呼んだら可からうと、此方から促す樣に注意すると、妻は左うしませうと答へて、時計を持つた儘出て行つた。襖を閉てるとき、どうも此の部屋の寒い事と云つた。

まだ、かぢかんで仕事をする氣にならない。實を云ふと仕事は山程ある。自分の原稿を一回分書かなければならない。ある未知の青年から頼まれた短篇小説を二三篇讀んで置く義務がある。ある雜誌へ、ある人の作を手紙を付けて紹介する約束がある。此の二三箇月中に讀む筈で讀めなかつた書籍は机の横に堆かく積んである。此の一週間程は仕事をしようと思つて机に向ふと人が來る。さうして、皆何か相談を持ち込んでくる。その上に胃が痛む。其の點から云ふと今日は幸ひである。けれども、どう考へても、寒くて億劫で、火鉢から手を離す事が出來ない。

すると玄關に車を横付けにしたものがある。下女が來て長澤さんが御出になりましたと云ふ。自分は火

鉢の傍に竦んだ儘、上眼遣をして、這入つて來た長澤を見上げながら、寒くて動けないよと云つた。長澤は懷中から手紙を出して、此の十五日は舊の正月だから、是非都合して呉れとか何とか云ふ手紙を讀んだ。相變らず金の相談である。長澤は十二時過に歸つた。けれども、まだ寒くて仕樣がない。いつそ湯にでも行つて、元氣を付けようと思つて、手拭を提げて玄關へ出掛かると、御免下さいと云ふ吉田に出つ食はした。座敷へ上げて、色々身の上話を聞いてゐると、吉田はほろ／＼涙を流して泣き出した。其の中奥の方では醫者が來て何だかごた／＼してゐる。吉田が漸く歸ると、子供が又泣き出した。とう／＼湯に行つた。

湯から上つたら始めて暖つたかになつた。晴々して、家へ歸つて書齋に這入ると、洋燈が點いて窓掛が下りてゐる。火鉢には新しい切炭が活けてある。自分は座布團の上にどつかりと坐つた。すると、妻が奥から寒いでせうと云つて蕎麥湯を持つて來て呉れた。お政さんの容體を聞くと、ことによると盲腸炎になるかも知れないんださうですよと云ふ。自分は蕎麥湯を手に受けて、もし惡い樣だつたら、病院に入れてやるが可いと答へた。妻はそれが可いでせうと茶の間へ引き取つた。

妻が出て行つたらあとが急に靜かになつた。全くの雪の夜である。泣く子は幸ひに寐たらしい。熱い蕎麥湯を啜りながら、あかるい洋燈の下で、繼ぎ立ての切炭のぱち／＼鳴る音に耳を傾けてゐると、赤い火氣が、圍はれた灰の中で仄かに搖れてゐる。時々薄青い焔が炭の股から出る。自分は此の火の色に、始めて一日の暖味を覺えた。さうして次第に白くなる灰の表を五分程見守つてゐた。

下宿

始めて下宿をしたのは北の高臺である。赤煉瓦の小じんまりした二階建が氣に入つたので、割合に高い一週二磅の宿料を拂つて、裏の部屋を一間借り受けた。其の時表を專領してゐるK氏は目下蘇格蘭巡遊中で暫くは歸らないのだと主婦の說明があつた。

主婦と云ふのは、眼の凹んだ、鼻のしやくれた、顎と頰の尖つた、鋭の顏の女で、一寸見ると、年恰好の判斷が出來ない程、女性を超越して居る。癇、僻み、意地、利かぬ氣、疑惑、あらゆる弱點が、穩かな眼鼻を散々に弄んだ結果、かう拗ねくれた人相になつたのではあるまいかと自分は考へた。

主婦は北の國に似合はしからぬ黑い髮と黑い眸を有つてゐた。けれども言語は普通の英吉利人と少しも違つた所がない。引き移つた當日、階下から茶の案內があつたので、降りて行つて見ると、家族は誰もゐない。北向の小さい食堂に、自分は主婦とたつた二人差向ひに坐つた。日の當つた事のない樣に薄暗い部屋を見廻すと、マントルピースの上に淋しい水仙が活けてあつた。主婦は自分に茶だの燒麵麭を勸めながら、四方山の話をした。其の時何かの拍子で、生れ故鄕は英吉利ではない、佛蘭西であると云ふ事を打ち明けた。さうして黑い眼を動かして、後の硝子壜に插してある水仙を顧りみながら、英吉利は曇つてゐて、寒くて不可ないと云つた。花でも此の通り奇麗でないと敎へた積りなのだらう。

自分は肚の中で此の水仙の乏しく咲いた模樣と、此の女のこすばつた頰の中を流れてゐる、色の褪めた血の瀝とを比較して、遠い佛蘭西で見るべき暖かな夢を想像した。主婦の黑い髮や黑い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歷史があるのだらう。あなたは佛蘭西語を話しますかと聞いた。いゝやと答へようとする舌先を遮つて、二三句續け樣に、滑らかな南の方の言葉を使つた。斯ういふ骨の勝つた咽喉

から、どうして出るだらうと思ふ位美しいアクセントであつた。

其夕、晩餐の時は、頭の禿けた髯の白い老人が卓に着いた。是が私の親父ですと主婦から紹介されたので始めて主人は年寄であつたんだと氣が附いた。此の主人は妙な言葉遣をする。一寸聞いても決して英人ではない。成程親子して、海峽を渡つて、倫敦へ落ち附いたものだなと合點した。すると老人が私は獨逸人であると、尋ねもせぬのに向うから名乘つて出た。自分は少し見當が外れたので、さうですかと云つた限りであつた。

部屋へ歸つて、書物を讀んでゐると、妙に下の親子が氣に懸つて堪らない。あの爺さんは骨張つた娘と較べて何處も似た所がない。顔中は腫れ上つた樣に膨れてゐる眞中に、ずんぐりした肉の多い鼻が寢轉んで、細い眼が二つ着いてゐる。南亞の大統領にクルーガルと云ふのがあつた。あれによく似てゐる。すつきりと心持よく此方の眸に映る顔ではない。其の上娘に對しての物の云ひ方が和氣を缺いてゐる。齒が利かなくつて、もご／＼してゐる癖に何となく調子の荒い所が見える。娘も阿爺に對するときは、險相な顔がいとゞ險相になる樣に見える。どうしても普通の親子ではない。——自分は斯う考へて寢た。

翌日朝飯を食ひに下りると、昨夕の親子の外に、又一人家族が殖えてゐる。新しく食卓に連なつた人は、血色の好い、愛嬌のある、四十恰好の男である。自分は食堂の入口で此の男の顔を見た時、始めて、生氣のある人間社會に住んでゐる樣な心持ちがした。my brother と主婦が其の男を自分に紹介した。矢つ張り亭主では無かつたのである。然し兄弟とはどうしても受取れない位顔立が違つてゐた。

其の日は中食を外でして、三時過ぎに歸つて、自分の部屋へ這入ると間もなく、茶を飲みに來いと云つ

て呼びにきた。今日も曇つてゐる。薄暗い食堂の戸を開けると、主婦がたつた一人煖爐の横に茶器を控へて坐つてゐた。石炭を燃して呉れたので、幾分か陽氣な感じがした。燃えついた許りの焔に照らされた主婦の顔を見ると、うすく火熱つた上に、心持御白粉を塗けてゐる。自分は部屋の入り口で化粧の淋しみと云ふ事を、しみ／＼と悟つた。主婦は自分の印象を見拔いた樣な眼遣ひをした。自分が主婦から一家の事情を聞いたのは此の時である。

主婦の母は、二十五年の昔、ある佛蘭西人に嫁いで、此の娘を擧げた。幾年か連れ添つた後夫は死んだ。母は娘の手を引いて、再び獨逸人の許に嫁いだ。その獨逸人が昨夜の老人である。今では倫敦のウエスト・エンドで仕立屋の店を出して、毎日々々そこへ通勤してゐる。先妻の子も同じ店で働いてゐるが、親子非常に仲が悪い。一つ家にゐても、口を利いた事がない。息子は夜屹度遲く歸る。玄關で靴を脱いで足袋跣足になつて、爺に知れない樣に廊下を通つて、自分の部屋へ這入つて寢て仕舞ふ。母は餘程前に失くなつた。死ぬ時に自分の事を呉々も云ひ置いて死んだのだが、母の財産はみんな阿爺の手に渡つて、一錢も自由にする事が出來ない。仕方がないから、かうして下宿をして小遣を拵へるのである。アグニスは――

主婦は夫れより先を語らなかつた。アグニスと云ふのは此處のうちに使はれてゐる十三四の女の子の名である。自分は其の時今朝見た息子の顔と、アグニスとの間に何處か似た所がある樣な氣がした。恰もアグニスは燒麪麭を抱へて厨から出て來た。

「アグニス、燒麪麭を食べるかい」

アグニスは默つて、一片の燒麪麭を受けて又厨の方へ退いた。

一箇月の後自分は此の下宿を去つた。

過去の匂ひ

自分が此下宿を出る二週間程前に、K君は蘇格蘭から歸つて來た。其時自分は主婦によつてK君に紹介された。二人の日本人が倫敦の山の手の、とある小さな家に偶然落ち合つて、しかも、まだ互に名乘り換した事がないので、身分も、素性も、經歴も分らない外國婦人の力を借りて、どうか何分と頭を下げたのは、考へると今以て妙な氣がする。其の時此の老令孃は黒い服を着て居た。骨張つて脊の脂の拔けた樣な手を前へ出して、Kさん、是れがNさんと云つたが、云ひ切らない先に、又一本の手を相手の方へ寄せて、Nさん、是れがKさんと、公平に雙方を等分に引き合せた。

自分は老令孃の態度が、如何にも、嚴で、一種重要の氣に充ちた儀式を具へてゐるのに、少からず驚かされた。K君は自分の向に立つて、奇麗な二重瞼の尻に皺を寄せながら、微笑を洩らしてゐた。自分は笑ふと云はんよりは寧ろ矛盾の淋しみを感じた。幽靈の媒妁で、結婚の儀式を行つたら、斯んな心持ではあるまいかと、立ちながら考へた。凡て此の老令孃の黒い影の動く所は、生氣を失つて、忽ち古蹟に變化する樣に思はれる。誤つて其の肉に觸れゝば、觸れた人の血が、其所丈冷たくなるとしか想像出來ない。自分は戸の外に消えてゆく女の足音に半ば頭を回らした。

老令孃が出て行つたあとで、自分とK君は忽ち親しくなつて仕舞つた。K君の部屋は美くしい絨氈が敷いてあつて、白絹の窓掛が下がつてゐて、立派な安樂椅子とロッキング・チェアが備へ附けてある上に、

小さな寢室が別に附屬してゐる。何より嬉しいのは斷えず煖爐に火を焚いて、惜氣もなく光つた石炭を崩してゐる事である。

是れから自分はK君の部屋で、K君と二人で茶を飲むことにした。晝はよく近所の料理店へ一所に出掛けた。勘定は必ずK君が拂つて呉れた。K君は何でも築港の調査に來てゐるとか云つて、大分金を持つてゐた。家にゐると、海老茶の繻子に花鳥の刺繍のあるドレッシング・ガウンを着て、甚だ愉快さうであつた。之に反して自分は日本を出た儘の着物が大分汚れて、見共ない始末であつた。K君は餘りだと云つて新調の費用を貸して呉れた。

二週間の間K君と自分とは色々な事を話した。K君が、今に慶應内閣を作るんだと云つた事がある。慶應年間に生れたもの丈で内閣を作るから慶應内閣と云ふんださうである。自分に、君は何時の生れかと聞くから慶應三年だと答へたら、それぢや、閣員の資格があると笑つてゐた。K君は慥か慶應二年か元年生れだと覺えてゐる。自分はもう一年の事で、K君と共に樞機に參する權利を失ふ所であつた。

こんな面白い話をしてゐる間に、時々下の家族が噂に上る事があつた。するとK君は何時でも眉をひそめて、首を振つてゐた。アグニスと云ふ小さい女が一番可哀想だと云つてゐた。アグニスは朝になると石炭をK君の部屋に持つて來る。晝過には茶とバタと麺麭を持つて來る。だまつて持つて來て、だまつて置いて歸る。いつ見ても蒼褪めた顏をして、大きな潤のある眼で一寸挨拶をする丈である。影の樣にあらはれては影の樣に下りて行く。曾て足音のした試しがない。

ある時自分は、不愉快だから、此の家を出ようと思ふとK君に告げた。K君は賛成して、自分はかうし

て調査の爲方々飛び歩いてゐる身體だから、構はないが、君抔は、もつとコンフォタブルな所へ落ち着いて勉強したら可からうと云ふ注意をした。其の時K君は地中海の向側へ渡るんだと云つて、しきりに旅裝をとゝのへてゐた。

自分が下宿を出るとき、老令孃は切に思ひとまる樣にと頼んだ。下宿料は負けるから、K君のゐない間は、あの部屋を使つても構はないと迄云つたが、自分はとう／＼南の方へ移つて仕舞つた。同時にK君も遠くへ行つて仕舞つた。

二三箇月してから、突然K君の手紙に接した。旅から歸つて來た。當分此處にゐるから遊びに來いと書いてあつた。すぐ行きたかつたけれども、色々都合があつて、北の果迄推し掛ける時間がなかつた。一週間程して、イスリントン迄行く用事が出來たのを幸ひに、歸りにK君の所へ回つて見た。

表二階の窓から、例の羽二重の窓掛が引き絞つた儘硝子に映つてゐた。自分は暖かい煖爐と、海老茶の繻子の刺繡と、安樂椅子と、快活なK君の旅行談を豫想して、勇んで、門を入つて、階段を驅け上る樣に敲子をとん／＼と打つた。戸の向側に足音がしないから、通じないのかと思つて、再び敲子に手を掛けようとする途端に、戸が自然と開いた。自分は敷居から一歩なかへ足を踏み込んだ。さうして、詫びる樣に自分をじつと見上げてゐるアグニスと顏を合はした。其の時此の三箇月程忘れてゐた、過去の下宿の匂が、狹い廊下の眞中で、自分の嗅覺を、稻妻の閃めく如く、刺激した。其の匂のうちには、黑い髮と黑い眼と、クルーゲルの樣な顏と、アグニスに似た息子と、息子の影の樣なアグニスと、彼等の間に蟠まる祕密を、一度に一齊に含んでゐた。自分は此の匂を嗅いだ時、彼等の情意、動作、言語、顏色を、あざやかに暗い

地獄の裏に認めた。自分は二階へ上がつてK君に逢ふに堪へなかつた。

猫の墓

早稲田へ移つてから、猫が段々痩せて來た。一向に子供と遊ぶ氣色がない。日が當ると縁側に寝てゐる。前足を揃へた上に、四角な顎を載せて、じつと庭の植込を眺めた儘、いつ迄も動く樣子が見えない。子供がいくら其の傍で騒いでも、知らぬ顔をしてゐる。子供の方でも、初めから相手にしなくなつた。此猫はとても遊び仲間に出來ないと云はん許りに、舊友を他人扱ひにしてゐる。子供のみではない、下女はたゞ三度の食を、臺所の隅に置いてやる丈で其の外には、殆ど構ひ附けなかつた。しかも其の食は大抵近所にゐる大きな三毛猫が來て食つて仕舞つた。猫は別に怒る樣子もなかつた。喧嘩をする所を見た試しもない。たゞ、じつとして寝てゐた。然し其の寝方に何所となく餘裕がない。伸んびり樂々と身を横に、日光を領してゐるのと違つて、動くべきせきがないために――是では、まだ形容し足りない。懶さの度をある所迄通り越して、動かなければ淋しいが、動くと猶淋しいので、我慢して、じつと辛抱してゐる樣に見えた。其の眼附は、何時でも庭の植込を見てゐるが、彼れは恐らく木の葉も、幹の形も意識してゐなかつたのだらう。青味がゝつた黄色い瞳子を、ぼんやり一と所に落ち附けてゐるのみである。彼れが家の子供から存在を認められぬ樣に、自分でも、世の中の存在を判然と認めてゐなかつたらしい。

夫れでも時々は用があると見えて、外へ出て行く事がある。すると何時でも近所の三毛猫から追懸けられる。さうして、怖いものだから、縁側を飛び上がつて、立て切つてある障子を突き破つて、圍爐裏の傍迄

迄溶け込んで來る。家のものが、彼れの存在に氣が附くのは此の時丈である。彼れも此の時に限つて、自分が生きてゐる事實を、滿足に自覺するのだらう。

是れが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が段々拔けて來た。始めは所々がぼく〳〵穴の樣に落ち込んで見えたが、後には赤肌に脫け廣がつて、見るも氣の毒な程にだらりと垂れてゐた。彼れは萬事に疲れ果てた體軀を壓し曲げて、しきりに痛い局部を舐め出した。

おい猫がどうかしたやうだなと云ふと、さうですね、矢つ張り年を取つた所爲でせうと、妻は至極冷淡である。自分も其の儘にして放つて置いた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものを時々吐く樣になつた。咽喉の所に大きな浪を打たして、嚔とも、しやくりとも附かない苦しさうな音をさせる。苦しさうだけれども、已を得ないから、氣が附くと表へ追ひ出す。でなければ疊の上でも、布團の上でも容赦なく汚す。來客の用意に拵へた八反の座布團は、大方彼れの爲に汚されて仕舞つた。

「どうも仕樣がないな。腸胃が惡いんだらう、寶丹でも水に溶いて飮まして遣れ」

妻は何とも云はなかつた。二三日してから、寶丹を飮ましたかと聞いたら、飮ましても駄目です、口を開きませんといふ答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと說明するから、ぢや食はせんが好いぢやないかと、少し險どんに叱りながら書見をしてゐた。

猫は吐氣がなくなりさへすれば、依然として、大人しく寢てゐる。此の頃では、じつと身を竦める樣にして、自分の身を支へる緣側丈が便であるといふ風に、如何にも切り詰めた蹲踞まり方をする。眼附も少し變つて來た。始めは近い視線に、遠くのものが映る如く、悄然たるうちに、どこか落付が有つたが、そ

れが次第に怪しく動いて來た。けれども眼の色は段々沈んで行く。日が落ちて微かな稻妻があらはれる樣な氣がした。けれども放つて置いた。妻も氣にも掛けなかつたらしい。子供は無論猫のゐる事さへ忘れてゐる。

ある晩、彼は子供の寢る夜具の裾に腹這になつてゐたが、やがて、自分の捕つた魚を取り上げられる時に出す樣な唸聲を擧げた。此の時變だなと氣が附いたのは自分丈である。子供はよく寢てゐる。妻は針仕事に餘念がなかつた。しばらくすると猫が又唸つた。妻は漸く針の手を已めた。自分は、どうしたんだ、夜中に子供の頭でも噛られちや大變だと云つた。まさかと妻は又襦袢の袖を縫ひ出した。猫は折々唸つてゐた。

明くる日は圍爐裏の縁に乘つたなり、一日唸つてゐた。茶を注いだり、藥罐を取つたりするのが氣味が惡い樣であつた。が、夜になると猫の事は自分も妻も丸で忘れて仕舞つた。猫の死んだのは實に其の晩である。朝になつて、下女が裏の物置に薪を出しに行つた時は、もう硬くなつて、古い竈の上に倒れて居た。

妻はわざ〳〵其の死態を見に行つた。夫れから今迄の冷淡に引き更へて急に騷ぎ出した。出入の車夫を頼んで、四角な墓標を買つて來て、何か書いて遣つて下さいと云ふ。自分は表に猫の墓と書いて、裏に此の下に稻妻起る宵あらんと認めた。車夫は此の儘、埋めても好いんですかと聞いてゐる。まさか火葬にも出來ないぢやないかと下女が冷かした。

子供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罎を二つ活けて、萩の花を澤山插した。茶碗に水

を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替へられた。三日目の夕方に、四つになる女の子が——自分は此の時書斎の窓から見てゐた。——たつた一人墓の前へ来て、しばらく白木の棒を見てゐたが、やがて手に持つた、おもちやの杓子を卸して、猫に供へた茶碗の水をしやくつて飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤ほした。

猫の命日には、妻が屹度一切れの鮭と、鰹節を掛けた一杯の飯を墓の前に供へる。今でも忘れた事がない。たゞ此の頃では、庭迄持つて出ずに、大抵は茶の間の箪笥の上へ載せて置くやうである。

暖かい夢

風が高い建物に当つて、思ふ如く真直に抜けられないので、急に稲妻に折れて、頭の上から、斜に鋪石迄吹き卸して来る。自分は歩きながら被つてゐた山高帽を右の手で抑へた。前に客待の御者が一人ゐる。御者台から、此有様を眺めて居たと見えて、自分が帽子から手を離して、姿勢を正すや否や、人指指を竪に立てた。乗らないかと云ふ符徴である。自分は乗らなかつた。すると御者は右の手に拳骨を固めて、烈しく胸の邊を打ち出した。二三間離れて聞いてゐても、とん／＼音がする。倫敦の御者はかうして、己れとわが手を暖めるのである。自分は振り返つて一寸此の御者を見た。剝げ懸つた堅い帽子の下から、霜に侵された厚い髪の毛が食み出してゐる。毛布を綴ぎ合せた様な粗い茶の外套の背中の右に其の肱を張つて、肩と平行になる迄怒らしつゝ、とん／＼胸を敲いてゐる。まるで一種の器械の活動する様である。自分は再び歩き出した。

道を行くものは皆追ひ越して行く。女でさへ後れてはゐない。腰の後部でスカートを輕く撮んで、踵の高い靴が曲るかと思ふ位烈しく鋪石を鳴らして急いで行く。よく見ると、何の顏も何の顏も切齒詰つてゐる。男は正面を見たなり、女は傍目も觸らず、ひたすらにわが志す方へと一直線に走る丈である。其の時の口は堅く結んでゐる。眉は深く鎖してゐる。鼻は險しく聳えてゐる。顏は奧行計り延びてゐる。さうして、足は一文字に用のある方へ運んで行く。恰も往來は歩くに堪へん、戸外は居るに忍びん、一刻も早く屋根の下へ身を隱さなければ、生涯の恥辱である、かの如き態度である。

自分はのそ／＼歩きながら、何となく此の都に居づらい感じがした。上を見ると、大きな空は、何時の世からか、仕切られて、切岸の如く聳える左右の棟に餘された細い帶丈が東から西へかけて長く渡つてゐる。其の帶の色は朝から鼠色であるが、次第々々に鳶色に變じて來た。建物は固より灰色である。それが暖かい日の光に倦み果てた樣に、遠慮なく兩側を塞いでゐる。廣い土地を狹苦しい谷底の日影にして、高い太陽が屆く事の出來ない樣に、二階の上に三階を重ねて、三階の上に四階を積んで仕舞つた。小さい人は其の底の一部分を、黑くなつて、寒さうに往來する。自分は其の黑く動くものゝうちで、尤も緩漫なる一分子である。谷へ挾まつて、出端を失つた風が、此の底を掬ふ樣にして通り拔ける。黑いものは網の目を洩れた雜魚の如く四方にぱつと散つて行く。鈍い自分も遂に此の風に吹き散らされて、家のなかへ逃げ込んだ。

長い廻廊をぐる／＼廻つて、二つ三つ階子段を上ると、彈力仕掛の大きな戸がある。身體の重みをちよつと寄せ掛けるや否や、音もなく、自然と身は大きなガレリーの中に滑り込んだ。眼の下は眩い程明かで

ある。後を振り返ると、戸は何時の間にか締つて、居る所は春の樣に暖かい。自分はしばらくの間、瞳を慣らす爲に、眼をぱちぱちさせた。さうして、左右を見た。左右には人が澤山ゐる。けれども、みんな靜かに落ち付いてゐる。さうして顏の筋肉が殘らず緩んで見える。澤山の人がかう肩を并べてゐるのに、いくら澤山ゐても、一向苦にならない。悉く互ひと互ひを和げてゐる。自分は上を見た。上は大穹窿の天井で極彩色の濃く眼に應へる中に、鮮かな金箔が、胸を躍らす程に、燦として輝いた。自分は前を見た。前は手欄で盡きてゐる。手欄の外には何にもない。大きな穴である。自分は手欄の傍迄近寄つて、短い首を伸ばして穴の中を覗いた。すると遙かの下は、繪にかいた樣な小さな人で埋つてゐた。其の數の多い割に鮮に見えた事。人の海とはこの事である。白、黑、黄、靑、紫、赤、あらゆる明かな色が、大海原に起る波紋の如く、簇然として、遠くの底に、五色の鱗を并べた程、小さく且奇麗に、蠢いてゐた。

其の時此の蠢くものが、ぱつと消えて、大きな天井から、遙かの谷底迄一度に暗くなつた。今迄何千となく居ならんでゐたものは闇の中に葬られたぎり、誰あつて聲を立てるものがない。恰も此の大きな闇に、一人殘らず其の存在を打ち消されて、影も形もなくなつたかの如くに寂としてゐる。と、思ふと、遙かの底の、正面の一部分が四角に切り拔かれて、闇の中から浮き出した樣に、ほう〳〵と何時の間にやら薄明るくなつて來た。始めは、たゞ闇の段取が違ふ丈の事と思つてゐると、それが次第々々に暗がりを離れてくる。慥かに柔かな光を受けて居るなと意識出來る位になつた時、自分は霧の樣な光線の奥に、不透明な色を見出す事が出來た。其の色は黄と紫と藍であつた。やがて、そのうちの黄と紫が動き出した。自分は兩眼の視神經を疲れる迄緊張して、此の動くものを瞬きもせず凝視て居た。靄は眼の底から忽ち晴れ渡つた。

遠くの向うに、明かな日光の暖かに照り輝く海を控へて、黄な上衣を着た美しい男と、紫の袖を長く牽いた美しい女が、青草の上に、判然あらはれて來た。女が橄欖の樹の下に据ゑてある大理石の長椅子に腰を掛けた時に、男は椅子の横手に立つて、上から女を見下した。其時南から吹く温かい風に誘はれて、閑和な樂の音が、細く長く、遠くの波の上を渡つて來た。

穴の上も、穴の下も、一度にざわつき出した。彼等は闇の中に消えたのではなかつた。闇の中で暖かな希臘を夢みてゐたのである。

印象

表へ出ると、廣い通りが眞直に家の前を貫いてゐる。試みに其の中央に立つて見廻して見たら、眼に入る家は悉く四階で、又悉く同じ色であつた。隣も向うも區別のつきかねる位似寄つた構造なので、今自分が出て來たのは果してどの家であるか、二三間行過ぎて、後戻りをすると、もう分らない。不思議な町である。

昨夕は汽車の音に包まつて寢た。十時過ぎには、馬の蹄と車の響に送られて、暗いなかを夢の樣に馳けた。其の時美しい燈の影が、點々として何百となく眸の上を往來した。其の外には何も見なかつた。見るのは今が始めてゞある。

二三度此の不思議な町を立ちながら、見上げ、見下した後、遂に左へ向いて、一町程來ると、四ツ角へ出た。能く覺えをして置いて、右へ曲つたら、今度は前よりも廣い往來へ出た。其の往來の中を馬車が幾輛

となく通る。何れも屋根に人を載せてゐる。其の馬車の色が赤であつたり黄であつたり、青や茶や紺であつたり、仕切りなしに自分の横を追ひ越して向うへ行く。遠くの方を透かして見ると、何處迄も色が續いてゐるのか分らない。振り返れば、五色の雲の様に動いて來る。何處から何處へ人を載せて行くものかしらんと立ち止まつて考へてゐると、後から脊の高い人が追ひ被さる様に、肩のあたりを押した。避け様とする隙にも脊の高い人がゐた。左りにもゐた。肩を押した後の人は、其の又後の人から肩を押されてゐる。さうしてみんな默つてゐる。さうして自然のうちに前へ動いて行く。

自分は此の時始めて、人の海に溺れた事を自覺した。此の海は何處迄廣がつてゐるか分らない。然し廣い割には極めて靜かな海である。たゞ出る事が出來ない。右を向いても痞へてゐる。左を見ても塞がつてゐる。後を振り返つても一杯である。それで靜かに前の方へ動いて行く。只一筋の運命より外に、自分を支配するものがないかの如く、幾萬の黒い頭が申し合せた様に歩調を揃へて一歩宛前へ進んで行く。

自分は歩きながら、今出て來た家の事を思ひ浮べた。一様の四階建の、一様の色の、不思議な町は、何でも遠くにあるらしい。何處をどう曲つて、何處をどう歩いたら歸れるか、殆ど覺束ない氣がする。よし歸れても、自分の家は見出せさうもない。その家は昨夕暗い中に暗く立つてゐた。

自分は心細く考へながら、脊の高い群集に押されて、仕方なしに大通を二つ三つ曲がつた。曲るたんびに、昨夕の暗い家とは反對の方角に遠ざかつて行く様な心持がした。さうして眼の疲れる程人間の澤山ゐるなかに、云ふべからざる孤獨を感じた。すると、だら／＼坂へ出た。此處は大きな道路が五つ六つ落ち合ふ廣場の様に思はれた。今迄一筋に動いて來た波は、坂の下で、色々な方角から寄せるのと集まつて、

靜かに廻轉し始めた。

坂の下には、大きな石刻の獅子がある。全身灰色をして居つた。尾の細い割に、鬣に渦を捲いた深い頭は四斗樽程もあつた。前足を揃へて、波を打つ群集の中に眠つてゐた。獅子は二つゐた。下は鋪石で敷き詰めてある。其の眞中に太い銅の柱があつた。自分は、靜かに動く人の海の間に立つて、眼を擧げて、柱の上を見た。柱は眼の屆く限り高く眞直に立つてゐる。其の上には大きな空が一面に見えた。高い柱は此の空を眞中で突き拔いてゐる樣に聳えてゐた。此の柱の先には何があるか分らなかつた。自分は又人の波に押されて廣場から、右の方の通りを何所ともなく下つて行つた。しばらくして、振返つたら、竿の樣な細い柱の上に、小さい人間がたつた一人立つてゐた。

人間

御作さんは起きるが早いか、まだ髮結は來ないか、髮結は來ないかと騷いでゐる。髮結は昨夕慥かに頼んで置いた。外さまで御座いませんから、都合をして、是非九時迄には上りますとの返事を聞いて、漸く安心して寢た位である。柱時計を見ると、もう九時には五分しかない。何うしたんだらうと、如何にも焦れつたさうなので、見兼ねた下女は、一寸見て參りませうと出て行つた。御作さんは及び腰になつて、障子の前に取り出した鏡臺を、立ながら覗き込んで見た。さうして、わざと唇を開けて、上下とも奇麗に揃つた白い齒を殘らず露はした。すると時計が柱の上でボン〳〵と九時を打ち出した。御作さんは、すぐ立ち上つて、間の襖を開けて、どうしたんですよ、貴方もう九時過ぎですよ。起きて下さらなくつちや、晩

くなるぢやありませんかと云つた。御作さんの旦那は九時を聞いて、今床の上に起き直つた所である。御作さんの顔を見るや否や、あいよと云ひながら、氣輕に立ち上がつた。

御作さんは、すぐ臺所の方へ取つて返して、楊枝と齒磨と石鹸と手拭を一と纏めにして、さあ、早く行つて入らつしやい、と旦那に渡した。歸りに一寸髭を剃つて來るよと、銘仙のどてらの下へ浴衣を重ねた旦那は、沓脱へ下りた。ぢや、一寸御待ちなさいと、御作さんは又奥へ驅け込んだ。其の間に旦那は楊枝を使ひ出した。御作さんは用簞笥の抽出から小さい熨斗袋を出して、中へ銀貨を入れて、持つて出た。旦那は口が利けないものだから、默つて、袋を受取つて格子を跨いだ。御作さんは旦那の肩の後へ、手拭の餘りがぶら下がつてゐるのを、少しの間眺めてゐたが、やがて、又奥へ引込んで、一寸鏡臺の前へ坐つて、再び我が姿を映して見た。それから簞笥の抽出を半分開けて、少し首を傾けた。やがて、中から何か二三點取り出して、それを疊の上へ置いて考へた。が、折角取り出したものを、一つ丈殘して、あとは丁寧に仕舞つてしまつた。それから又二番目の抽出を開けた。さうして又考へた。御作さんは、考へたり、出したり、又は仕舞つたりするので約三十分程費やした。其の間も始終心配さうに柱時計を眺めてゐた。漸く衣裳を揃へて、大きな鬱金木綿の風呂敷にくるんで、座敷の隅に押し遣ると、髪結が驚いた様な大きな聲を出して勝手口から這入つて來た。何うも遅くなつて濟みません、と息を彈ませて言譯を云つてゐる。御作さんは、本當に、御忙がしい所を御氣の毒さまでしたねえと、長い煙管を出して髪結に煙草を呑ました。

梳手が來ないので、髪を結ふのに大分暇が取れた。旦那は湯に入つて、髭を剃つて、やがて歸つて來た。其間に、御作さんは、髪結に今日は美いちやんを誘つて、旦那に有樂座へ連れて行つて貰ふんだと話した。

髪結はおや〳〵私も御伴をしたいもんだ抔と、大分冗談交りの御世辭を使つた末、どうぞ御緩りと歸つて行つた。

旦那は鬱金木綿の風呂敷を、ちよつと剝つて見て、是を着て行くいかい、是よりか、此間の方がお前には似合ふよと云つた。でも、あれは、もう暮に、美いちやんの所へ着て行つたんですものと御作さんが答へた。さうか、おや是が好いだらう。己は彼方の綿入羽織を着て行かうか、少し寒い樣だねと、旦那が又云ひ出すと、御廢しなさいよ、見つともない、一つもの許り着てさ、御作さんは絣の綿入羽織を出さなかつた。

やがて、御化粧が出來上つて、流行の鶉縮緬の道行を着て、毛皮の襟卷をして、御作さんは旦那と一所に表へ出た。歩きながら旦那にぶら下がる樣にして話をする。四つ角迄出ると交番の所に人が大勢立つてゐた。御作さんは旦那の廻套の羽根を捕まへて、伸び上がりながら、群集の中を覗き込んだ。

眞中に印袢天を着た男が、立つとも坐るとも片附かずに、のらくらしてゐる。今迄も泥の中へ何度も倒れたと見えて、たゞさへ色の變つた袢天がびた〳〵に濡れて寒く光つてゐる。巡査が御前は何だと云ふと、呂律の囘らない舌で、おい、おれは人間だと威張つてゐる。其のたんびに、みんなが、どつと笑ふ。御作さんも旦那の顏を見て笑つた。すると醉つ拂ひは承知しない。怖い眼をして、あたりを見廻しながら、なに、なにが可笑しい。己が人間なのが、何處が可笑しい。かう見えたつて、と云つて、だらりと涎を垂れて仕舞ふかと思ふと、突然思ひ出した樣に、人間だいと大きな聲を出す。

所へ又印袢天を着た脊の高い黒い顏をした男が荷車を引いて何處からか、遣つて來た。人を押し分けて

遙かに何か小さな聲で云つてゐたが、やがて、醉つ拂ひの方を向いて、さあ、野郎連れて行つて遣るから、此の上へ乘れと云つた。醉拂ひは嬉しさうな顏をして、難有いと云ひながら荷車の上に、どさりと仰向けに寢た。明かるい空を見て、しよぼ〳〵した眼を、二三度ぱちつかせたが、偶棒め、かう見えたつて人間でえと云つた。うん人間だ、人間だから大人しくしてゐろんだよと、背の高い男は藁の繩で醉拂ひを荷車の上へ緊かり縛り附けた。さうして屠られた豚の樣に、がら〳〵と大通りを引いて行つた。御作さんは矢つ張り遣羽根の羽根を摘まへた儘、注連飾りの間を、向うへ押されて行く荷車の影を見送つた。さうして、是から美いちやんの所へ行つて、美いちやんに話す種が一つ殖えたのを喜んだ。

山鳥

五六人寄つて、火鉢を圍みながら話をしてゐると、突然一人の青年が來た。名も聞かず、會つた事もない、全く未知の男である。紹介状も携へずに、取次を通じて、面會を求めるので、座敷へ招じたら、青年は大勢ゐる所へ、一羽の山鳥を提げて這入つて來た。初對面の挨拶が濟むと、其の山鳥を座の眞中に出して、國から屆きましたからといつて、それを當座の贈物にした。

其の日は寒い日であつた。すぐ、みんなで山鳥の羹を拵へて食つた。山鳥を料る時、青年は袴ながら臺所へ立つて、自分で毛を引いて、肉を割いて、骨をこと〳〵と敲いて呉れた。青年は小作りの面長な質で、蒼白い額の下に、度の高さうな眼鏡を光らしてゐた。尤も著るしく見えたのは、彼の近眼よりも、彼の薄黒い口髭よりも、彼の穿いてゐた袴であつた。それは小倉織で、普通の學生には見出し得べからざる

程に太い縞柄の派出な物であつた。彼は此袴の上に兩手を載せて、自分は南部のものだと云つた。

　青年は一週間程經つて又來た。今度は自分の作つた原稿を携へてゐた。餘り佳く出來てゐなかつたから、遠慮なく其旨を話すと、書き直して見ませうと云つて持つて歸つた。歸つてから一週間の後、又原稿を懐にして來た。斯樣にして彼れは來る度毎に、書いたものを何か置いて行かない事はなかつた。中には三冊續きの大作さへあつた。然しそれは尤も不出來なものであつた。自分は彼れの手に成つたもののうちで、尤も傑れたと思はれるのを一二度雜誌へ周旋した事がある。けれども、それはたゞ編輯者の御情で誌上にあらはれた丈で、一錢の稿料にもならなかつたらしい。自分が彼の生活難を耳にしたのは此時である。彼はこれから文を賣つて口を糊する積りだと云つてゐた。

　或時妙なものを持つて來て呉れた。菊の花を乾して、薄い海苔の樣に一枚々々に堅めたものである。精進の疊鰯だと云つて、居合せた甲子が、早速浸しものに湯がいて、箸を下しながら、酒を飲んだ。それから、鈴蘭の造花を一枝持つて來て呉れた事もある。妹が拵へたんだと云つて、指の股で、枝の心になつてゐる針金をぐる／＼廻轉さしてゐた。妹と一所に家を持つてゐる事は此の時始めて知つた。兄妹して薪屋の二階を一間借りて、妹は毎日刺繍の稽古に通つてゐるのださうである。其の次來た時には御納戸の結び目に、白い蝶を刺繍つた襟飾りを、新聞紙にくるんだ儘、もし御掛けなさるなら上げませうと云つて置いて行つた。それを安野が私に下さいと云つて取つて歸つた。

　そのほか彼は時々來た。來る度に自分の國の景色やら、習慣やら、傳説やら、古めかしい祭禮の模樣やら、色々の事を話した。彼の父は漢學者であると云ふ事も話した。篆刻が旨いといふ事も話した。御祖母

さんは去る大名の御屋敷に奉公してゐた。申の年の生れださうだ。大變殿樣の御氣に入りで、猿に縁んだものを時々下さつた。其の中に華山の書いた手長猿の幅がある。今度持つて來て御覽に入れませうと云つた。青年はそれぎり來なくなつた。

すると春が過ぎて、夏になつて、此の青年の事も何時か忘れる樣になつた或日、――其の日は、日に遠い座敷の眞中に、單衣を唯一枚つけて、じつと書見をしてゐてさへ堪へがたい程に暑かつた。――彼れは突然遣つて來た。

相變らず例の派出な袴を穿いて、蒼白い額に滲染んだ汗をこくめいに手拭で拭いてゐる。少し瘠せたやうだ。甚だ申し兼ねたが金を三十圓貸して下さいと云ふ。實は友人が急病に罹つたから、早速病院へ入れたのだが、差し當り困るのは金で、色々奔走もして見たが、まだ出來ないと、已を得ず上がつたと、說明した。

自分は書見をやめて、青年の顏をじつと見た。彼は例の如く兩手を膝の上に正しく置いた儘、どうぞと低い聲で云つた。あなたの友人の家はそれ程貧しいのかと聞き返したら、いや左うではない、たゞ遠方で急の間に合はないから御願をする、二週間經てば、國から屆く筈だから其の時はすぐ御返しするといふ答である。自分は金の調達を引き受けた。其時彼れは風呂敷包の中から一幅の懸物を取り出して、是が先達て御話をした華山の幅ですと云つて、紙表裝の半切ものを展べて見せた。旨いのか不味いのか判然とは解らなかつた。印譜をしらべて見ると、渡邊華山にも横山華山にも似寄つた落款がない。青年は是れを置いて行きますと云ふから、夫れには及ばないと辭退したが、聞かずに預けて行つた。翌日又金を取りに來

た。それつきり音沙汰がない。約束の二週間が來ても影も形も見せなかつた。自分は欺されたのかも知れないと思つた。猿の軸は壁へ懸けた儘秋になつた。

袷を着て氣の緊まる時分に、長塚が例の如く金を貸して呉れと云つて來た。自分はさう度々貸すのが厭であつた。不圖例の青年の事を思ひ出して、かう云ふ金があるが、もし、それを君が取りに行く氣なら取りに行け、取れたら貸してやらうと云ふと、長塚は頭を掻いて、少し逡巡してゐたが、やがて思ひ切つたと見えて、行きませうと答へた。それから、先達ての金を此の者に渡して呉れろといふ手紙を書いて、それに猿の懸物を添へて、長塚に持たせてやつた。

長塚はあくる日又車でやつて來た。來るや否や懷から手紙を出したから、受け取つて見ると昨日自分の書いたものである。まだ封が切らずにある。行かなかつたのかと聞くと、長塚は額に八の字を寄せて、行つたんですけれども、到底駄目です、慘澹たるものです、汚ない所でしてね、妻君が刺繍をしてゐましてね、本人が病氣でしてね、——金の事なんぞ云ひ出せる譯のものぢやないんだから、決して御心配には及びませんと安心させて、掛物丈歸して來ましたと云ふ。自分はへえゝ、さうかと少し驚いた。

翌る日、青年から、どうも嘘言を吐いて濟まなかつた。軸は慥かに受取つたと云ふ端書が來た。自分は其の端書を他の信書と一所に重ねて、亂箱の中に入れた。さうして、又青年の事を忘れる樣になつた。

そのうち冬が來た。例の如く忙しい正月を迎へた。客の來ない隙間を見て、仕事をして居ると、下女が油紙に包んだ小包を持つて來た。どさりと音のする丸い物である。差出人の名前は、忘れてゐたいつぞやの青年である。油紙を解いて新聞紙を剝ぐと、中から一羽の山鳥が來た。手紙が附いてゐる。其の後色々

の事情があつて、今度国へ帰つてゐる。御恩借の金子は来月頃上京の節是非御返しをする積りだとある。手紙は山鳥の血で堅まつて容易に離れなかつた。

其の日は又木曜で、若い人の集まる晩であつた。自分は又五六人と共に、大きな食卓を囲んで、山鳥の羹を食つた。さうして、派出な小倉の袴を着けた蒼白い青年の成功を祈つた。五六人の帰つたあとで、自分は此の青年に礼状を書いた。其のなかに先年の金子の件御介意に及ばずと云ふ一句を添へた。

モナリサ

井深は日曜になると、襟巻に懐手で、其所等の古道具屋を覗き込んで歩るく。そのうちで尤も汚ならしい、前代の廃物許り並んでゐさうな見世を撰つては、あれの、これのと捻くり廻す。固より茶人でないから、好いの悪いのが解る次第ではないが、安くて面白さうなものを、ちよい／＼買つて帰るうちには、一年に一度位掘り出し物に、あたるだらうとひそかに考へてゐる。

井深は一箇月程前に十五銭で鉄瓶の蓋丈を買つて文鎮にした。此の間の日曜には二十五銭で鉄の鍔を買つて、是亦文鎮にした。今日はもう少し大きい物を目懸けてゐる。懸物でも額でもすぐ人の眼に附く様な、書斎の装飾が一つ欲しいと思つて、見廻してゐると、色摺の西洋の女の画が、埃だらけになつて、横に立て懸けてあつた。溝の磨れた井戸車の上に、何とも知れぬ花瓶が載つてゐて、其の中から黄色い尺八の歌口が此の画の邪魔をしてゐる。

西洋の画は此の古道具屋に似合はない。たゞ其の色具合が、とくに現代を超越して、上昔の空気の中に

黒く埋つてゐる。如何にも此の古道具屋にあつて然るべき調子である。井深は乾度安いものだと鑑定した。聞いて見ると一圓と云ふのに、少し首を捻つたが、硝子も割れてゐないし、額縁も慥だから、爺さんに談判して、八十錢迄に負けさせた。

井深が此の半身の畫像を抱いて、家へ歸つたのは、寒い日の暮方であつた。薄暗い部屋へ入つて、早速額を裸にして、壁へ立て懸けて、じつと其の前へ坐り込んでゐると、洋燈を持つて細君が遣つて來た。井深は細君に灯を畫の傍へ翳さして、もう一遍とつくりと八十錢の額を眺めた。總體に渋く黒ずんでゐる中に、顏だけが黄ばんで見える。是れも時代の所爲だらう。井深は坐つた儘妻君を顧みて、どうだと聞いた。細君は洋燈を翳した片手を少し上に上げて、しばらく物も言はずに黄ばんだ女の顏を眺めてゐたが、やがて、氣味の惡い顏です事ねえと云つた。井深は只笑つて、八十錢だよと答へた限りである。

飯を食つてから、踏臺をして欄間に釘を打つて、買つて來た額を頭の上へ掛けた。其の時細君は、此の女は何をするか分らない人相だ。見てゐると變な心持になるから、掛けるのは廢すが好いと云つて頻に止めたけれども、井深はなあに御前の神經だと云つて聞かなかつた。

細君は茶の間へ下る。井深は机に向つて調べものを始めた。十分許すると、不圖首を上げて、額の中が見たくなつた。筆を休めて、眼を轉ずると、黄色い女が、額の中で薄笑ひをしてゐる。井深はじつと其の口元を見詰めた。全く畫工の光線の附け方である。薄い唇が兩方の端で少し反り返つて、其の反り返つた所に一寸凹を見せてゐる。結んだ口を是から開けやうとする樣にも取れる。又は開いた口をわざと、閉ぢた樣にも取れる。但し何故だか分らない。井深は變な心持がしたが、又机に向つた。

調べものとは云ひ條、半分は寫しものである。大して注意を拂ふ必要もないので、少し經つたら、又首を擧げて畫の方を見た。矢張り口元に何か曰くがある。けれども非常に落ち附いてゐる。切れ長の一重瞼の中から靜かな眸が座敷の下に落ちた。井深は又机の方に向き直つた。

其の晩井深は何遍となく此の畫を見た。さうして、何處となく細君の評が當つてゐる樣な氣がし出した。けれども明る日になつたら、左うでもない樣な顏をして役所へ出勤した。四時頃家へ歸つて見ると、昨夕の額は仰向けに机の上に乘せてある。午少し過に、欄間の上から突然落ちたのだと云ふ。道理で硝子が滅茶滅茶に破れてゐる。井深は額の裏を返して見た。昨夕紐を通した環が、どうした具合か拔けてゐる。井深は其の序に額の裏を開けて見た。すると畫と背中合せに、四つ折の西洋紙が出た。開けて見ると、印氣で妙な事が書いてある。

「モナリサの唇には女性の謎がある。原始以降此謎を描き得たものはダ・ギンチ丈である。此の謎を解き得たものは一人もない。」

翌日井深は役所へ行つて、モナリサとは何だと云つて、皆に聞いた。然し誰も分らなかつた。ぢやダ・ギンチとは何だと尋ねたが、矢つ張り誰も分らなかつた。井深は細君の勸に任せて此の縁喜の惡い畫を、五錢で屑屋に賣り拂つた。

火事

息が切れたから、立ち留まつて仰向くと、火の粉がもう頭の上を通る。霜を置く空の澄み切つて深い中

に、數を盡して飛んで來ては卒然と消えて仕舞ふ。かと思ふと、すぐあとから鮮なやつが、一面に吹かれながら、追掛けながら、ちら／＼しながら、纔にあらはれる。さうして不意に消えて行く。其の飛んで行く方角を見ると、大きな噴水を集めた樣に、根が一本になつて、隙間なく寒い空を染めてゐる。二三間先に大きな寺がある。長い石段の途中に太い樅が靜かな枝を夜に張つて、土手から高く聳えてゐる。火は其の後から起る。黑い幹と動かぬ枝を殊更に殘して、餘る所は眞赤である。火元は此の高い土手の上に違ない。もう一町程行つて左へ坂を上れば、現場へ出られる。

又急ぎ足に歩き出した。後から來るものは皆追越して行く。中には擦れ違に大きな聲を掛けるものがある。暗い路は自づと神經的に活きて來た。坂の下迄歩いて、愈上らうとすると、胸を突く程急である。其の急な傾斜を、人の頭が一杯に埋めて、上から下迄犇いてゐる。焔は坂の眞上から容赦なく舞ひ上る。此の人の渦に捲かれて、坂の上迄押し上げられたら、踵を回らすうちに焦げて仕舞ひさうである。

もう半町程行くと、同じく左へ折れる大きな坂がある。上るなら此方が樂で安全であると思ひ直して、出合頭の人を煩はしく避けて、漸く曲り角迄出ると、向うから劇しく號鈴を鳴らして蒸汽喞筒が來た。退かぬものは悉く敷き殺すぞと云はぬ許に人込の中を全速力で驅り立てたから、高い蹄の音と共に、馬の鼻面を坂の方へ一捻に向直した。馬は泡を吹いた口を咽喉に摺り附けて、尖つた耳を前に立てたが、いきなり前足を揃へてもろに飛び出した。其の時栗毛の胴が、袢天を着た男の提燈を掠めて、天鵞絨の如く光つた。紅色に塗つた太い車の輪が自分の足に觸れたかと思ふ程際どく回つた。と思ふと、喞筒は一直線に坂を馳け上がつた。

坂の中途へ來たら、前は正面にあつた焔が今度は筋違に後の方に見え出した。坂の上から又左へ取つて返さなければならない。横丁を見附けてゐると、細い路次の樣なのが一つあつた。人に押されて入り込むと眞暗である。たゞ一寸のセキもない程詰んでゐる。さうして互に懸命な聲を揚げる。火は明かに向うに燃えてゐる。

十分の後漸く路次を拔けて通りへ出た。其の通りも亦組屋敷位な幅で、既に人で一杯になつてゐる。路次を出るや否や、先き地を蹴つて、馳け上がつた蒸汽喞筒が眼の前にじつとしてゐた。喞筒は漸く此處迄馬を動かしたが、二三間先きの曲り角に妨げられて、何うする事も出來ずに、焔を見物してゐる。焔は鼻の先から燃え上がる。

傍に押し詰められてゐるものは口々に何處だ、何處だと號ぶ。聞かれるものは、其處だ其處だと云ふ。けれども兩方共に焔の起る所迄は行かれない。焔は勢ひを得て、靜かな空を煽る樣に、凄じく上る。……

翌日午過散歩の序に、火元を見屆樣と思ふ好奇心から、例の坂を上つて、昨夕の路次を拔けて、蒸汽喞筒の留まつてゐた組屋敷へ出て、二三間先の曲角をまがつて、ぶら〳〵歩いて見たが、冬籠りと見える家が軒を竝べてひそりと靜まつてゐる許りである。燒け跡は何處にも見當らない。火の揚がつたのは此邊だと思はれる所は、奇麗な杉垣ばかり續いて、其のうちの一軒からは微かに琴の音が洩れた。

霧

昨宵は夜中枕の上で、ぱち〳〵云ふ響を聞いた。是は近所にクラパム・ジャンクションと云ふ大停車場

のある御蔭である。此のジャンクションには一日のうちに、汽車が千いくつか集まつてくる。それを細かに割付けて見ると、一分に一と列車位宛出入をする譯になる。その各列車が霧の深い時には、何かの仕掛で、停車場間際へ來ると、爆竹の樣な音を立てゝ相圖をする。信號の燈光は青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這ひ下りて、北窓の日蔽を捲き上げて外面を見卸すと、外面は一面に茫としてゐる。下は芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至る迄、何にも見えない。たゞ空しいものが一杯詰つてゐる。さうして、それが寂として凍つてゐる。隣の庭も其通りである。此庭には奇麗なローンがあつて、春先の暖かい時分になると、白い髯を生した御爺さんが日向ぼつこをしに出て來る。其時此御爺さんは、何時でも右の手に鸚鵡を留まらしてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴で突つかれさうに近く、鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴き立てる。御爺さんの出ないときは、娘が長い裾を引いて、斷え間なく芝刈機械をローンの上に轉がしてゐる。此の記憶に富んだ庭も、今は全く霧に埋つて、荒果てた自分の下宿のそれと、何の境もなくのべつに續いてゐる。

表通りを隔てゝ向う側に高いゴシック式の教會の塔がある。其の塔の灰色に空を刺す天邊で何時でも鐘が鳴る。日曜は殊に甚だしい。今日は鋭く尖つた頂きは無論の事、切石を不揃に疊み上げた胸中さへ所在が丸で分らない。それかと思ふ所が、心持黒いやうでもあるが、鐘の音は丸で響かない。鐘の形の見えない濃い影の奥に深く鎖された。

表へ出ると二間許り先は見える。其の二間を行き盡すと又二間許り先が見えて來る。世の中が二間四方

に縮まつたかと思ふと、歩けば歩るく程新しい一間四方が露はれる。其の代り今通つて來た過去の世界は通るに任せて消えて行く。

四つ角でバスを待ち合せてゐると、鼠色の空氣が切り拔かれて急に眼の前へ馬の首が出た。それだのにバスの屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から霧を冒して、飛び乘つて下を見ると、馬の首はもう薄ぼんやりしてゐる。バスが行き違ふときは、行き違つた時丈奇麗だなと思ふ。思ふ間もなく色のあるものは、濁つた空の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裡に包まれて行つた。エストミンスター橋を通るとき、白いものが一二度眼を掠めて翻がへつた。眸を凝らして、其の行方を見詰めてゐると、封じ込められた大氣の裡に、鷗が夢の樣に微かに飛んでゐた。其の時頭の上でビッグベンが嚴かに十時を打ち出した。仰ぐと空の中でたゞ音丈がする。

ヸクトリヤで用を足して、テート畫館の傍を河沿にバタシー迄來ると、今迄鼠色に見えた世界が、突然と四方からぱつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く、身の周圍に流した樣に、黑い色に染められた重たい霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。輕い葛湯を呼吸する許りに氣息が詰る。足元は無論穴藏の底を踏むと同然である。

自分は此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇立んだ。自分の傍を人が大勢通る樣な心持がする。けれども肩が觸れ合はない限りは果して、人が通つてゐるのか何うだか疑はしい。其の時此の濛々たる大海の一點が、豆位の大きさにどんよりと黃色く流れた。自分は夫を目標に、四步許り動かした。するとある店先の窓硝子の前へ顏が出た。店の中では瓦斯を點けてゐる。中は比較的明かである。人は常の如く

振舞つて居る。自分はやつと安心した。

バタシーを通り越して、手探りをしない許りに向うの岡へ足を向けたが、岡の上は仕舞屋許りである。同じ樣な横町が幾筋も竝行して、青天の下でも紛れ易い。自分は向つて左の二つ目を曲つた樣な氣がした。夫から二町程眞直に歩いた樣な心持がした。夫から先は丸で分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けてゐた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前迄來て留まつた。夫から段々遠退いて行く。仕舞には、全く聞えなくなつた。あとは寂としてゐる。自分は又暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるかしらん。

懸物

大刀老人は亡妻の三回忌迄には屹度一基の石碑を立てゝやらうと決心した。けれども倅の痩腕を便に、漸く今日を過すより外には、一錢の貯蓄も出來かねて、又春になつた。あれの命日も三月八日だがなと、訴へるやうな顔をして、倅に云ふと、はあ、さうでしたつけと答へた限りである。大刀老人は、とう〳〵先祖傳來の大切な一幅を賣拂つて、金の工面をしやうと極めた。倅に、どうだらうと相談すると、倅は恨めしい程無雜作に夫が可いでせうと賛成して呉れた。倅は内務省の社寺局へ出て四十圓の月給を貰つてゐる。女房に二人の子供がある上に、大刀老人に孝養を盡すのだから骨が折れる。老人がゐなければ大切な懸物も、とうに融通の利くものに變形した筈である。

此の懸物は方一尺程の絹地で、時代の爲に煤竹の樣な色をしてゐる。暗い座敷へ懸けると、暗澹として

何が畫いてあるか分らない。老人はこれを王若水の畫いた葵だと稱してゐる。さうして、月に一二度位宛袋戸棚から出して、桐の箱の塵を拂つて、中のものを丁寧に取り出して、直に三尺の壁へ懸けては、眺めてゐる。成程眺めてゐると、煤けたうちに、古血の樣な大きな模樣がある。緑青の剝げた迹かと怪しまれる所も微かに殘つてゐる。老人は此の模糊たる唐畫の古蹟に對つて、生き過ぎたと思ふ位に住み古した世の中を忘れて仕舞ふ。ある時は懸物をじつと見詰めながら、煙草を吹かす。又は御茶を飮む。でなければ只見詰めてゐる。御爺さん、これ、なあにと子供が來て指を觸けやうとすると、始めて月日に氣が附いた樣に、老人は、觸つては不可ないよと云ひながら、靜かに立つて、懸物を卷きにかゝる。すると、子供は御爺さん鐵砲玉はと聞く。うん鐵砲玉を買つて來るから、惡戯をしては不可ないよと云ひながら、そろそろと懸物を卷いて、桐の箱へ入れて、袋戸棚へ仕舞つて、さうして其處等を散歩しに出る。歸りには町内の飴屋へ寄つて、薄荷入の鐵砲玉を二袋買つて來て、そら鐵砲玉と云つて、子供にやる。倅が晩婚なので子供は六つと四つである。

倅と相談をした翌日、老人は桐の箱を風呂敷に包んで朝早くから出た。さうして四時頃になつて、又桐の箱を持つて歸つて來た。子供が上り口迄出て、御爺さん鐵砲玉はと聞くと、老人は何にも云はずに、座敷へ來て、箱の中から懸物を出して、壁へ懸けて、ぼんやり眺め出した。四五軒の道具屋を持つて廻つたら、落款がないとか、畫が剝げてるとか云つて、老人の豫期した程の尊敬を、懸物に拂ふものがなかつたのださうである。

倅は道具屋は廢しになさいと云つた。老人も道具屋は不可んと云つた。二週間程してから、老人は又桐

の箱を抱へて出た。さうして倅の課長さんの友達の所へ、紹介を得て見せに行つた。其の時も鐵砲玉を買つて來なかつた。倅が歸るや否や、あんな眼の明かない男にどうして讓れるものか、あすこに有るものは、みんな贋物だと、恰も倅の不德義の樣に云つた。倅は苦笑してゐた。

二月の初旬に偶然旨い傳手が出來て、老人は此の幅を去る好事家に賣つた。老人は直に谷中へ行つて、亡妻の爲に立派な石碑を誂へた。さうして其の餘りを郵便貯金にした。それから五日程立つて、常の如く散歩に出たが、いつもよりは二時間程後れて歸つて來た。其の時兩手に大きな鐵砲玉の袋を二つ抱へてゐた。賣り拂つた懸物が氣にかゝるから、もう一遍見せて貰に行つたら、四疊半の茶座敷にひつそりと懸かつてゐて、其の前には透き徹る樣な臘梅が活けてあつたのださうだ。老人は其處で御茶の御馳走になつたのだといふ。おれが持つてゐるよりも安心かも知れないと老人は倅に云つた。倅はさうかも知れませんと答へた。小供は三日間鐵砲玉ばかり食つてゐた。

紀元節

南向きの部屋であつた。明かるい方を背中にした三十人許りの子供が黑い頭を揃へて、塗板を眺めてゐると、廊下から先生が這入つて來た。先生は脊の低い、眼の大きい、瘠せた男で、顎から頰へ掛けて、髯が爺汚く生えかゝつてゐた。さうして其のざら〳〵した顎の觸る着物の襟が薄黑く垢附いて見えた。此の着物と、此の髯の不精に延びるのと、それから、嘗て小言を云つた事がないのとで、先生はみなから馬鹿にされてゐた。

先生はやがて、白墨を取つて、黒板に記元節と大きく書いた。子供はみんな黒い頭を机の上に押し附けるやうにして、作文を書き出した。先生は低い脊を伸ばして、一同を見廻してゐたが、やがて廊下傳ひに部屋を出て行つた。

すると、後から三番目の机の中程にゐた子供が、席を立つて先生の洋卓の傍へ來て、先生の使つた白墨を取つて、塗板に書いてある記元節の記の字へ棒を引いて、其の傍へ新しく紀と肉太に書いた。外の子供は笑ひもせずに驚いて見てゐた。さきの小供が席へ歸つてしばらく立つと、先生も部屋へ歸つて來た。さうして塗板に氣が附いた。

「誰か記を紀と直した樣だが、記と書いても好いんですよ」と云つて又一同を見廻した。一同は默つてゐた。

記を紀と直したものは自分である。明治四十二年の今日でも、それを思ひ出すと下等な心持がしてならない。さうして、あれが爺むさい福田先生でなくつて、みんなの怖がつてゐた校長先生であればよかつたと思はない事はない。

儲口

「彼方は栗の出る所でしてね。まあ相場がざつと兩に四升位のもんでせうかね。それを此方へ持つて來ると、升に一圓五十錢もするんですよ。それでね、私が丁度向うに居た時分でしたが、濱から千八百俵許注文がありました。旨く行くと一升一圓以上に付くんですから、早速遣りましたよ。千八百俵揃へて、私

が自分で栗と一所に濱迄持つて行くと、――なに相手は支那人で、本國へ送り出すんでさあ。すると、支那人が出て來て、宜しいと云ふから、もう濟んだのかと思ふと、藏の前へ高さ一間もあらうと云ふ大きな樽を持ち出して、水をその中へどん／＼汲み込ませるんです。――いえ何の爲だか私にも一向分らなかつたんで。何しろ大きな樽ですからね、水を張るんだつて容易なこつちや有りません。彼是半日懸つちまいました。それから何をするかと思つて見てゐると、例の栗をね、俵をほどいて、どん／＼樽の中へ放り込むんですよ。――私も實に驚いたが、支那人てえ奴は本當に食へないもんだと後になつて、漸く氣が付いたんです。栗を水の中に打ち込むとね、慥な奴は尋常に沈みますが、蟲の食つた奴丈はみんな浮いちまうんです。それを支那人の野郎笊でしやくつてね、ぺケだつて、俵の目方から引いて仕舞うんだから堪りません。私は傍で見てゐてはら／＼しました。何しろ七分通り蟲が入つてたんだから弱りました。大變な損でさあ。――蟲の食つたんですか。忌々しいから、みんな打遣つて來ました。支那人の事ですから、矢つ張り知らん顏をして、俵にして、大方本國へ送つたでせう。

「夫れから薩摩芋を買ひ込んだこともありますさあ。一俵四圓で、二千俵の契約でね。所が注文の來たのが月半、十四日でして二十五日迄にと云ふんだから、どう骨を折つたつて二千俵と云ふ數が寄りつこありませんや。到底駄目だからつて、一應斷りました。實を云ふと殘念でしたがな。すると商館の番頭がいふには、否契約書には廿五日とあるけれども、決して其通りには嚴行しないからと、再三勸めるもんだから、つい其の氣になりましてね。――いえ芋は支那へ行くんぢやありません。亞米利加でした。矢ッぱり亞米利加にも薩摩芋を食ふ奴があると見えるんですよ。妙な事があるもんで、――で、早速買收に掛りました。

埼玉から川越の方をね。だが口でこそ千俵ですが、いざ買ひ占めるとなると中々大したもんですからな。でも漸くの事で、とう／＼二十八日過ぎに約束通りの俵を揃って、行きますと、——實に狡猾な奴が居るもんで、約定書のうちに、もし萬一、日限の違約があるときは、八千圓の損害賠償を出すと云ふ項目があるんですよ。所が彼は其條款を應用しちまって、どうしても代金を渡さないんです。尤も手附は四千圓取って置きましたがね。さうかうして居る内に、先方では芋を艀へ積み込んぢまったから、何うする事も出來ない譯になりました。あんまり業腹だから、千圓の保證金を納めましてね、現物取押を申請して、とうとう芋を取り押へてやりました。所が上には上があるもんで、先方は八千圓の保證金を納めて、構はず競賣に出しちまったんです。で、愈裁判になったには爲ったんですが、何しろ約定書が入れてあるもんだから、仕樣がない。私は裁判官の前で泣きましたね。芋は只で取られる、裁判には負ける、こんな馬鹿な事はない。が、少しは、まあ私の身になって考へて見て下さいって。裁判官も腹のなかでは、大分私の方に同情した様子でしたが、法律の力ぢや、どうする事も出來ないもんですからな。とう／＼負けました。

行列

不圖机から眼を上げて、入口の方を見ると、書齋の戸が何時の間にか、半分明いて、廣い廊下が二尺許見える。廊下の盡きる所は欄めいた手摺に遮られて、上には硝子戸が立て切ってある。青い空から、まともに落ちて來る日が、軒端を斜に、硝子を通して、縁側の手前丈を明るく色づけて、書齋の戸口迄はつと暖かに射した。しばらく日の照る所を見詰めてゐると、眼の底に陽炎が湧いた樣に、春の思ひが饒かにな

る。
　其の時此の二尺あまりの隙間に、空を踏んで、手摺の高さ程のものがあらはれた。赤に白く唐草を浮き織りにした絹紐を輪に結んで、額から髪の上へすぽりと嵌めた間に、海棠と思はれる花を青い葉ごと、ぐるりと插した。黒髪の地に薄紅の莟が大きな栗の如くはつきり見えた。割合に詰つた顎の眞下から、一襞になつて、たゞ一枚の紫が緣迄ふは／＼と動いてゐる。袖も手も足も見えない。影は廊下に落ちた日を、するりと拔ける樣に通つた。後から、
　今度は少し低い。眞紅の厚い織物を腦天から肩先迄被つて、餘る背中に筋違の笹の葉の模樣を背負つてゐる。胴中にたゞ一葉、消炭色の中に取り殘された綠が見える。夫程笹の模樣は大きかつた。廊下に置く足よりも大きかつた。其の足が赤くちら／＼と三足程動いたら、低いものは、戸口の幅を、音なく行き過ぎた。
　第三の頭巾は白と藍の辨慶の格子である。眉廂の下にあらはれた橫顏は丸く膨らんでゐる。其の片頰の眞中が林檎の熟した程に濃い。尻丈見える茶褐色の眉毛の下が急に落ち込んで、思はざる邊から丸い鼻が膨れた頰を少し乘り越して、先丈顏の外へ出た。顏から下は一面に黃色い縞で包まれてゐる。長い袖を三寸餘も緣に牽いた。是れは頭より高い胡麻竹の杖を突いて來た。杖の先には光を帶びた鳥の羽をふさ／＼と着けて、照る日に輝かした。緣に牽く黃色い縞の、袖らしい裏が、銀の樣に光つたと思つたら是も行き過ぎた。
　すると、すぐ後から眞白な顏があらはれた。額から始まつて、平たい頰を塗つて、顎から耳の附根迄廻

ほつて、壁の樣に靜かである。中に唇丈が活きてゐた。唇は紅の色を重ねて、青く光線を反射した。胸のあたりは鳩の色の樣に見えて、下は裾迄ぱつと視線を亂してゐる中に、小さなヴィオリンを抱へて、長い弓を嚴かに擔いでゐる。二足で通り過ぎる後には、背中へ黒い繻子の四角な片を中てゝ、其の眞中にある金絲の刺繡が、一度に日に浮いた。

最後に出たものは、全く小さい。手摺の下から轉げ落ちさうである。けれども大きな顔をしてゐる。其中でも頭は殊に大きい。それへ五色の冠を戴いてあらはれた。冠の中央にあるぼつちが高く聳えてゐる樣に思はれる。身には卍の字の模樣のある筒袖に、藤鼠の天鵞絨の房の下つたものを、脊から腰の下迄三角に垂れて、赤い足袋を踏んでゐた。手に持つた朝鮮の團扇が身體の半分程ある。團扇には赤と青と黄で巴を漆で描いた。

行列は靜かに自分の前を過ぎた。開け放しになつた戸が、空しい日の光を、書齋の入口に送つて、縁側に幅四尺の寂しさを感じた時、向うの隅で急にヴィオリンを擦る音がした。ついで、小さい咽喉が寄り合つて、どつと笑ふ聲がした。

宅の子供は毎日母の羽織や風呂敷を出して、こんな遊戯をしてゐる。

昔

ピトロクリの谷は秋の眞下にある。十月の日が、眼に入る野と林を暖かい色に染めた中に、人は寢たり起きたりしてゐる。十月の日は靜かな谷の空氣を空の半途で包んで、ぢかには地にも落ちて來ぬ。と云つ

て、山向へ逃げても行かぬ。風のない村の上に、いつでも落附いて、凝と動かずに霞んでゐる。其の間に野と林の色が次第に變つて來る。酸いものがいつの間にか甘くなる樣に、谷全體に時代が附く。ピトロクリの谷は、此の時百年の昔し、二百年の昔にかへつて、安々と寂びて仕舞ふ。人は世に熟れた顏を揃へて、山の背を渡る雲を見る。其の雲は或時は白くなり、或時は灰色になる。折々は薄い底から山の地を透かせて見せる。いつ見ても古い雲の心地がする。

自分の家は此の雲と此の谷を眺めるに都合好く、小さな丘の上に立つてゐる。南から一面に家の壁へ日があたる。幾年十月の日が射したものか、何處も彼處も鼠色に枯れてゐる西の端に、一本の薔薇が這ひかかつて、冷たい壁と、暖かい日の間に挾まつた花をいくつか着けた。大きな瓣は卵色に豐かな波を打つて、萼から翻へる樣に口を開けた儘、ひそりと所々に靜まり返つてゐる。香は薄い日光に吸はれて、二間の空氣の裡に消えて行く。自分は其の二間の中に立つて、上を見た。薔薇は高く這ひ上つて行く。鼠色の壁は薔薇の蔓の屆かぬ限りを盡して眞直に聳えてゐる。屋根が盡きた所にはまだ塔がある。日は其の又上の靄の奥から落ちて來る。

足元は丘がピトロクリの谷へ落ち込んで、眼の屆く遙の下が、平たく色で埋まつてゐる。其の向う側の山へ上る所は層々と樺の黃葉が段々に重なり合つて、濃淡の坂が幾階となく出來てゐる。明かで寂びた調子が谷一面に反射して來る眞中を、黑い筋が橫に蜿つて動いてゐる。泥炭を含んだ溪水は、染粉を溶いた樣に古びた色になる。此山奥に來て始めて、こんな流を見た。

後から主人が來た。主人の髯は十月の日に照らされて七分がた白くなりかけた。形裝も尋常ではない。

腰にキルトといふものを着けてゐる。伜の膝掛の様に粗い縞の織物である。それを行燈袴に、膝頭を截つて、竪に襞を置いたから、膝頭は太い毛糸の靴足袋で隠すばかりである。歩くたびにキルトの襞が揺れて、膝と腿の間がちら/\出る。肉の色に襞を置かぬ昔の袴である。

主人は毛皮で作つた、小さい木魚程の蟇口を前にぶら下げてゐる。夜煖爐の傍へ椅子を寄せて、音のする赤い石炭を眺めながら、此の木魚の中から、パイプを出す、煙草を出す。さうしてぷかり/\と夜長を吹かす。木魚の名をスポーランと云ふ。

主人と一所に崖を下りて、小暗い路に這入つた。スコツチ、フアーと云ふ常磐木の葉が、刻み昆布に雲が蒸しかゝつて、揺つても落ちない様に見える。其の黒い幹をちよろ/\と栗鼠が長く太つた尾を揺つて、駆け上つた。と思ふと古く厚みのついた苔の上を又一匹、眸から疾く駆け抜けたものがある。苔は膨れた儘動かない。栗鼠の尾は蒼黒い地を払子の如くに擦つて暗がりに入つた。

主人は横を振り向いて、ピトロクリの明るい谷を指さした。黒い河は依然として其の真中を流れてゐる。あの河を一里半北へ遡るとキリクランキーの峡間があると云つた。

高地人と低地人とキリクランキーの峡間で戦つた時、屍が岩の間に挟つて、岩を打つ水を塞いた。高地人と低地人の血を飲んだ河の流れは色を変へて三日の間ピトロクリの谷を通つた。

自分は明日早朝キリクランキーの古戦場を訪はうと決心した。崖から出たら足の下に美しい薔薇の花瓣が二三片散つてゐた。

豐三郎が此の下宿へ越して來てから三日になる。始めの日は、薄暗い夕暮の中に、一生懸命に荷物の片附やら、書物の整理やらで、忙しい影の如く動いてゐた。それから町の湯に入つて、歸るや否や寢て仕舞つた。明る日は、學校から戻ると、机の前へ坐つて、しばらく書見をして見たが、急に居所が變つた所爲か、全く氣が乘らない。窓の外でしきりに鋸の音がする。

豐三郎は坐つた儘手を延して障子を明けた。すると、つい鼻の先で植木屋がせつせと梧桐の枝を卸してゐる。可なり大きく延びた奴を、惜氣もなく股の根から、ごし〳〵引いては、下へ落して行く内に、切口の白い所が目立つ位夥しくなつた。同時に空しい空が遠くから窓にあつまる樣に廣く見え出した。豐三郎は机に頰杖を突いて、何氣なく、梧桐の上に高く離れた秋晴を眺めてゐた。

豐三郎が眼を梧桐から空へ移した時は、急に大きな心持がした。其の大きな心持が、しばらくして落附いて來るうちに、懷かしい故郷の記憶が、點を打つた樣に、其の一角にあらはれた。點は遙かの向にあるけれども、机の上に乘せた程明らかに見えた。

山の裾に大きな藁葺があつて、村から二町程上ると、路は自分の門の前で盡きてゐる。門を這入る馬がある。鞍の横に一叢の菊を結附けて、鈴を鳴らして、白壁の中へ隱れて仕舞つた。日は高く屋の棟を照してゐる。後の山を、こんもり隱す松の幹が悉く光つて見える。茸の時節である。豐三郎は机の上で今採つた許の茸の香を嗅いだ。さうして、豐、豐といふ母の聲を聞いた。其の聲が非常に遠くにある。それで手

に取る樣に明らかに聞える。——母は五年前に死んで仕舞つた。

豐三郎は不圖驚いて、わが眼を動かした。すると先刻見た梧桐の先が又眸に映つた。延びやうとする枝が、一所で伐り詰められてゐるので、股の根は、瘤で埋まつて、見惡い程窮屈に力が入つてゐる。豐三郎は又急に、机の前に押し附けられた樣な氣がした。梧桐を隔てゝ、垣根の外を見下すと、汚ない長屋が三四軒ある。綿の出た蒲團が遠慮なく秋の日に照り附けられてゐる。傍に五十餘りの婆さんが立つて、梧桐の先を見てゐた。

所々縞の消えかゝつた着物の上に、細帶を一筋卷いたなりで、乏しい髮を、大きな櫛のまはりに卷きつけて、茫然と、枝を透かした梧桐の頂邊を見た儘立つてゐる。豐三郎は婆さんの顏を見た。其の顏は蒼くむくんでゐる。婆さんは腫れぼつたい瞼の奥から細い眼を出して、眩しさうに豐三郎を見上げた。豐三郎は急に自分の眼を机の上に落した。

三日目に豐三郎は花屋へ行つて菊を買つて來た。國の庭に咲く樣なのをと思つて、探して見たが見當らないので、已を得ず花屋のあてがつたのを、其の儘三本程藁で括つて貰つて、德利の樣な花瓶へ活けた。行李の底から、帆足萬里の書いた小さい軸を出して、壁へ掛けた。是れは先年歸省した時、裝飾用の爲にわざ〳〵持つて來たものである。それから豐三郎は座布團の上へ坐つて、しばらく軸と花を眺めてゐた。其の時窓の前の長屋の方で、豐々と云ふ聲がした。其の聲が調子と云ひ、音色といひ、優しい故鄕の母に少しも違つてゐない。豐三郎は忽ち窓の障子をがらりと開けた。すると昨日見た蒼ぶくれの婆さんが、落ちかかる秋の日を額に受けて、十二三になる鼻垂小僧を手招きして居た。がらりと云ふ音がすると同時に、婆

さんは例のむくんだ眼を飜へして下から豐三郎を見上げた。

金

劇烈な三面記事を、寫眞版にして引き伸ばした樣な小說を、のべつに五六册讀んだら、全く厭になつた。飯を食つてゐても、生活難が飯と一所に胃の腑迄押し寄せて來さうでならない。腹が張れば、腹が切齒詰つて、如何にも苦しい。そこで帽子を被つて空谷子の所へ行つた。此の空谷子と云ふのは、斯ういふ時に、話しをするのに都合よく出來上つた、哲學者見た樣な占者見た樣な、妙な男である。無邊際の空間には、地球より大きな火事が所々にあつて、其の火事の報知が吾々の眼に傳はるには、百年も掛るんだからなあと云つて、神田の火事を馬鹿にした男である。尤も神田の火事で空谷子の家が燒けなかつたのは慥かな事實である。

空谷子は小さな角火鉢に倚れて、眞鍮の火箸で灰の上へ、しきりに何か書いてゐた。どうだね、相變らず考へ込んでるぢやないかと云ふと、さも面倒くささうな顏附をして、うん今金の事を少し考へてゐる所だと答へた。折角空谷子の所へ來て、又金の話なぞを聞かされては堪らないから、默つて仕舞つた。すると空谷子が、さも大發見でもしたやうに、斯う云つた。

「金は魔物だね」

空谷子の警句としては甚だ陳腐だと思つたから、さうさね、と云つたぎり相手にならずにゐた。空谷子は火鉢の灰の中に大きな丸を描いて、君茲に金があるとするぜ、と丸の眞中を突ツついた。

「これが何にでも變化する。衣服にもなれば、食物にもなる。電車にもなれば宿屋にもなる」

「下らんな。知れ切つてるぢやないか」

「否、知れ切つて居ない。此の丸がね」と又大きな丸を描いた。

「此の丸が善人にもなれば惡人にもなる。極樂へも行く、地獄へも行く。あまり融通が利き過ぎるよ。まだ文明が進まないから困る。もう少し人類が發達すると、金の融通に制限を附ける樣になるのは分り切つてゐるんだがな」

「何うして」

「何うしても好いが、――例へば金を五色に分けて、赤い金、青い金、白い金など〻しても好からう」

「左うして、何うするんだ」

「何うするつて。赤い金は赤い區域内丈で通用する樣にする。白い金は白い區域内丈で使ふ事にする。もし領分外へ出ると、瓦の破片同樣丸で幅が利かない樣にして、融通の制限を附けるのさ」

もし空谷子が初對面の人で、初對面の最先から斯んな話をしかけたら、自分は空谷子を以て、或は腦の組織に異狀のある論客と認めたかも知れない。然し空谷子は地球より大きな火事を想像する男だから、安心して其の譯を聞いて見た。空谷子の答は斯うであつた。

「金はある部分から見ると、勞力の記號だらう。所が其の勞力が決して同種類のものぢやないから、同じ金で代表さして、彼是相通ずると、大變な間違になる。例へば僕がこゝで一萬噸の石炭を掘つたとするぜ。其の勞力は器械的の勞力に過ぎないんだから、之を金に代へたにした所が、其の金は同種類の器械的

の勞力と交換する資格がある丈ぢやないか。然るに一度此の器械的の勞力が金に變形するや否や、急に大自在の神通力を得て、道德的の勞力とどん／＼引き換へになる。さうして、勝手次第に精神界が攪亂されて仕舞ふ。不都合極まる魔物ぢやないか。だから色分にして、少し其の分を知らしめなくつちや不可んよ」

自分は色分說に贊成した。それから暫くして、空谷子に尋ねて見た。

「器械的の勞力で道德的の勞力を買收するのも惡からうが、買收される方も好かあないんだらう」

「さうさな。今の樣な善知善能の金を見ると、神も人間に降參するんだから仕方がないかな。現代の神は野蠻だからな」

自分は空谷子と、こんな金にならない話をして歸つた。

心

二階の手摺に湯上りの手拭を懸けて、日の目の多い春の町を見下すと、頭巾を被つて、白い髯を疎らに生やした下駄の齒入が垣の外を通る。古い鼓を天秤棒に括り附けて、竹のへらでかん／＼と敲くのだが、其の音は頭の中で不圖思ひ出した記憶の樣に、鋭いくせに、何處か氣が拔けてゐる。爺さんが筋向ふの醫者の門の傍へ來て、例の冴え損なつた春の鼓をかんと打つと、頭の上に眞白に咲いた梅の中から、一羽の小鳥が飛び出した。齒入は氣が附かずに、靑い竹垣をなぞへに向の方へ廻り込んで見えなくなつた。鳥は一摶に手摺の下迄飛んで來た。しばらくは柘榴の細枝に留つてゐたが、落ち附かぬと見えて、二三度身振を易へる拍子に、不圖欄干に倚り掛つてゐる自分の方を見上げるや否や、ぱつと立つた。枝の上が煙る如

くに動いたと思つたら、小鳥はもう奇麗な足で手摺の棧を踏まへてゐる。

まだ見た事のない鳥だから、名前を知らう筈はないが、其色合が著るしく自分の心を動かした。鶯に似て少し澁味の勝つた翼に、胸は燻んだ、煉瓦の色に似て、吹けば飛びさうに、ふわついてゐる。其の邊には柔かな波を時々打たして、凝と大人しくしてゐる。怖すのは罪だと思つて、自分もしばらく、手摺に倚つた儘、指一本も動かさずに辛抱してゐたが、存外鳥の方は平氣なやうなので、やがて思ひ切つて、そつと身を後へ引いた。同時に鳥はひらりと手摺の上に飛び上がつて、すぐと眼の前に來た。自分と鳥の間は僅か一尺程に過ぎない。自分は半ば無意識に右手を美しい鳥の方に出した。鳥は柔かな翼と、華奢な足と、漣の打つ胸の凡てを挙げて、其の運命を自分に託するもの丶如く、向うからわが手の中に、安らかに飛び移つた。自分は其の時丸味のある頭を上から眺めて、此の鳥は……と思つた。然し此の鳥は……の後はどうしても思ひ出せなかつた。たゞ心の底の方に其の後が潜んでゐて、總體を薄く暈す樣に見えた。此の心の底一面に煮染んだものを、ある不可思議の力で、一所に集めて判然と熟視したら、其の形は、——矢つ張り此の時、此の場に、自分の手のうちにある鳥と同じ色の同じ物であつたらうと思ふ。自分は直に籠の中に鳥を入れて、春の日影の傾く迄眺めてゐた。さうして此の鳥はどんな心持で自分を見てゐるだらうかと考へた。

やがて散歩に出た。欣々然として、あてもないのに、町の數をいくつも通り越して、賑かな往來を行ける所迄行つたら、往來は右へ折れたり左へ曲つたりして、知らない人の後から、知らない人がいくらでも出て來る。いくら歩いても賑かで、陽氣で、樂々してゐるから、自分は何處の點で世界と接觸して、其接

觸するところに一種の窮屈を感ずるのか、殆ど想像も及ばない。知らない人に幾千人となく出逢ふのは嬉しいが、たゞ嬉しい丈で、その嬉しい人の眼附も鼻附も頓と頭に映らなかつた。すると何處かで、寶鈴が落ちて廂瓦に當る樣な音がしたので、はつと思つて向うを見ると、五六間先の小路の入口に一人の女が立つてゐた。何を着てゐたか、どんな髷に結つてゐたか、殆んど分らなかつた。たゞ眼に映つたのは其の顏である。其の顏は、眼と云ひ、口と云ひ、鼻と云つて、離れ離れに敍述する事の六づかしい――否、眼と口と鼻と眉と額と一所になつて、たつた一つ自分の爲に作り上げられた顏である。百年の昔から此處に立つて、眼も鼻も口もひとしく自分を待つてゐた顏である。百年の後迄自分を從へて何處迄も行く顏である。默つて物を云ふ顏である。女は默つて後を向いた。追附いて見ると、小路と思つたのは露次で、不斷の自分なら躊躇する位に細くて薄暗い。けれども女は默つて其の中へ這入つて行く。默つてゐる。けれども自分に後を跟けて來いと云ふ。自分は身を窄める樣にして、露次の中に這入つた。

黑い暖簾がふわ〳〵して居る。白い字が染拔いてある。其の次には頭を掠める位に軒燈が出てゐた。眞中に三階松が書いて下に本とあつた。其の次には硝子の箱に輕燒の霰が詰つてゐた。其の次には軒の下に、更紗の小片を五つ六つ四角な枠の中に并べたのが懸けてあつた。それから香水の瓶が見えた。すると露次は眞黑な土藏の壁で行き留つた。女は二尺程前に居た。と思ふと、急に自分の方を振り返つた。さうして急に右へ曲つた。其の時自分の頭は突然先刻の鳥の心持に變化した。さうして女に尾いて、すぐ右へ曲つた。右へ曲ると、前よりも長い露次が、細く薄暗く、ずつと續いてゐる。自分は女の默つて思惟する儘に、此の細く薄暗く、しかもずつと續いてゐる露次の中を鳥の樣にどこ迄も跟いて行つた。

二人は二疊敷の二階に机を並べてゐた。其の疊の色の赤黒く光つた樣子が有々と、二十餘年後の今日迄も、眼の底に殘つて居る。部屋は北向で、高さ二尺に足らぬ小窓を前に、二人が肩と肩を喰つ附ける程窮屈な姿勢で下調をした。部屋の内が薄暗くなると、寒いのを思ひ切つて、窓障子を明け放つたものである。其の時窓の眞下の家の、竹格子の奥に若い娘がぼんやり立つてゐる事があつた。靜かな夕暮抔は其の娘の顏も姿も際立つて美しく見えた。折々はあゝ美しいなと思つて、しばらく見下してゐた事もあつた。けれども中村には何にも言はなかつた。中村も何にも言はなかつた。

女の顏は今は全く忘れて仕舞つた。たゞ大工か何かの娘らしかつたといふ感じ丈が殘つてゐる。無論長屋住居の貧しい暮しをしてゐたものゝ子である。我等二人の寢起する所も、屋根に一枚の瓦さへ見る事も出來ない古長屋の一部であつた。下には學僕と幹事を混ぜて十人許り寄宿してゐた。さうして吹き曝しの食堂で、下駄を穿いた儘、飯を食つた。食料は一箇月に二圓であつたが、其代り甚だ不味いものであつた。それでも、隔日に牛肉の汁を一度宛食はした。勿論肉の膏が少し浮いて、肉の香が箸に絡まつて來る位な所であつた。それで塾生は幹事が狡猾で、旨いものを食はせなくつて不可んと頻に不平をこぼしてゐた。

中村と自分は此の私塾の教師であつた。二人とも月給を五圓づゝ貰つて、日に二時間ほど教へてゐた。自分は英語で地理書や幾何學を教へた。幾何の説明をやる時に、どうしても一所になるべき線が、一所にならないで困つた事がある。所が込み入つた圖を、太い線で書いてゐるうちに、其の線が二つ、黑板の上

で重なり合つて一所になつて呉れたのは嬉しかつた。

二人は朝起きると、兩國橋を渡つて、一つ橋の豫備門に通學した。其の時分豫備門の月謝は二十五錢であつた。二人は二人の月給を机の上にごちや〳〵に攪き交ぜて、其の内から二十五錢の月謝と、二圓の食料と、それから湯錢若干を引いて、あまる金を懐に入れて、蕎麥や汁粉や壽司を食ひ廻つて歩いた。共同財産が盡きると二人とも全く出なくなつた。

豫備門へ行く途中兩國橋の上で、貴樣の讀んでゐる西洋の小說のなかには美人が出て來るかと中村が聞いた事がある。自分はうん出て來ると答へた。然し其の小說は何の小說で、どんな美人が出て來たのか、今では一向覺えない。中村は其の時から小說抔を讀まない男であつた。

中村が端艇競爭のチャンピヨンになつて勝つた時、學校から若干の金を呉れて、その金で書籍を買つて、其の書籍へある教授が、これ〳〵の記念に贈ると云ふ文句を書き添へた事がある。中村は其の時おれは書物なんか入らないから、何でも貴樣の好なものを買つてやると云つた。さうしてアーノルドの論文と沙翁のハムレットを買つて呉れた。其の本は未だに持つてゐる。自分は其の時始めてハムレットと云ふものを讀んで見た。些とも分らなかつた。

學校を出ると中村はすぐ臺灣に行つた。それぎり丸で逢はなかつたのが、偶然倫敦の眞中で又ぴたりと出喰はした。丁度七年程前である。其の時中村は昔の通りの顏をしてゐた。さうして金を澤山持つてゐた。自分は中村と一所に方々遊んで歩いた。中村も以前と異つて、貴樣の讀んでゐる西洋の小說には美人が出て來るか抔とは聞かなかつた。却て向うから西洋の美人の話を色々した。

日本へ歸つてから又逢はなくなつた。すると今年の一月の末、突然使をよこして、話がしたいから築地の新喜樂迄來いと云つて來た。正午迄にといふ注文だのに、時計はもう十一時過である。さうして其の日に限つて北風が非常に強く吹いてゐた。外へ出ると、帽子も車も吹き飛ばされさうな勢ひである。自分は其日の午後に是非片附けなくてはならない用事を控へてゐた。妻に電話を懸けさせて、明日ぢや都合が惡いかと聞かせると、明日になると出立の準備や何かで、此方も忙しいから……と云ふ所で、電話が切れて仕舞つた。いくら、どうしても懸らない。大方風の所爲でせうと、妻が寒い顔をして歸つて來た。それでとう／＼逢はずに仕舞つた。

　昔の中村は滿鐵の總裁になつた。昔の自分は小說家になつた。滿鐵の總裁とはどんな事をするものか丸で知らない。中村も自分の小說を未だ曾て一頁も讀んだ事はなからう。

クレイグ先生

　クレイグ先生は燕の樣に四階の上に巢をつくつてゐる。鋪石の端に立つて見上げたつて、窓さへ見えない。下から段々と昇つて行くと、股の所が少し痛くなる時分に、漸く先生の門前に出る。門と申しても、扉や屋根のある次第ではない。幅三尺足らずの黑い戶に眞鍮の敲子がぶら下がつてゐる丈である。しばらく門前で休息して、此の敲子の下端をこつ／＼と戶板へぶつけると、內から開けて吳れる。

　開けて吳れるものは、何時でも女である。近眼の所爲か眼鏡を掛けて、斷えず驚いてゐる。年は五十位だから、隨分久しい間世の中を見て暮した筈だが、矢つ張りまだ驚いてゐる。戶を敲くのが氣の毒な位大

きな眼をして入らつしやいと云ふ。

這入ると女はすぐ消えて仕舞ふ。さうして取附の客間――始めは客間とも思はなかつた。別段装飾も何もない。窓が二つあつて、書物が澤山並んでゐる丈である。クレイグ先生は大抵其處に陣取つてゐる。自分の這入つて來るのを見ると、やあと云つて手を出す。握手をしろといふ相圖だから、手を握る事は握るが、向ではかつて握り返した事がない。此方もあまり握り心地が好い譯でもないから、一層廢したら可からうと思ふのに、矢つ張りやあと云つて毛だらけな皺だらけな、さうして例によつて消極的な手を出す。習慣は不思議なものである。

この手の所有者は自分の質問を受けて呉れる先生である。始めて逢つた時報酬はと聞いたら、左うさな、と一寸窓の外を見て、一回七志ぢやどうだらう。多過ぎればもつと負けても好いと云はれた。それで自分は一回七志の割で月末に全額を拂ふ事にしてゐたが、時によると不意に先生から催促を受ける事があつた。君、少し金が入るから拂つて行つて呉れんか杯と云はれる。自分は洋袴の隱しから金貨を出して、むき出しにへえと云つて渡すと、先生はやあ濟まんと受取りながら、例の消極的な手を擴げて、一寸掌の上で眺めた儘、やがて是れを洋袴の隱しへ收められる。困る事には先生決して釣を渡さない。餘分を來月へ繰り越さうとすると、次の週に又、ちよつと書物を買ひたいから抔と催促される事がある。

先生は愛蘭土の人で言葉が頗る分らない。少し焦き込んで來ると、東京者が薩摩人と喧嘩をした時位に六づかしくなる。それで大變疎忽しい非常な焦き込み屋なんだから、自分は事が面倒になると、運を天に任せて先生の顔丈見てゐた。

其の顔が又決して尋常ぢやない。西洋人だから鼻は高いけれども、段があつて、肉が厚過ぎる。其處は自分に善く似てゐるのだが、こんな鼻は一見した所がすつきりした好い感じは起らないものである。其の代り其處いら中むしやくしやしてゐて、何となく野趣がある。髯抔はまことに御氣の毒な位黑白亂生してゐた。いつかベーカーストリートで先生に出合つた時には、襯衣を忘れた御者かと思つた。

先生の白襯衣や白襟を着けたのは未だ曾て見た事がない。いつでも縞のフラネルをきて、むく／＼した上靴を足に穿いて、其の足を煖爐の中へ突き込む位に出して、さうして時々短い膝を敲いて――其の時始めて氣が附いたのだが、先生は消極的の手に金の指輪を嵌めてゐた。――時には敲く代りに股を擦つて、教へて呉れる。尤も何を教へて呉れるのか分らない。聞いてゐると、先生の好きな所へ連れて行つて、決して歸してくれない。さうして其の好きな所が、時候の變り目や、天氣都合で色々に變化する。時によると昨日と今日で兩極へ引越しをする事さへある。わるく云へば、まあ出鱈目で、よく評すると文學上の座談をして呉れるのだが、今になつて考へて見ると、一回七志位で纏つた規則正しい講義抔の出來る譯のものではないのだから、是は先生の方が尤もなので、それを不平に考へた自分は馬鹿なのである。尤も先生の頭も、其の髯の代表する如く、少しは亂雜に傾いてゐた樣でもあるから、寧ろ報酬の値上をして、えらい講義をして貰はない方が可かつたかも知れない。

先生の得意なのは詩であつた。詩を讀むときには顔から肩の邊が陽炎の樣に振動する。――嘘ぢやない。全く振動した。其の代り自分に讀んで呉れるのではなくつて、自分が一人で讀んで樂んでゐる事に歸着して仕舞ふから詰りは此方の損になる。いつかスヰンバーンのロサモンドとか云ふものを持つて行つたら、

先生一寸見せ玉へと云つて、二三行朗讀したが、忽ち書物を膝の上に伏せて、鼻眼鏡をわざ〳〵はづして、あゝ駄目々々スヰンバーンも、こんな詩を書く樣に老い込んだかなあと云つて嘆息された。自分がスヰンバーンの傑作アタランタを讀んで見樣と思ひ出したのは此の時である。

先生は自分を子供の樣に考へてゐた。君かう云ふ事を知つてるか、あゝ云ふ事が分つてるか抔と愚にも附かない事を度々質問された。かと思ふと、突然えらい問題を提出して急に同輩扱に飛び移る事がある。いつか自分の前でワトソンの詩を讀んで、是はシェレーに似た所があると云ふ人と、全く違つてゐると云ふ人とあるが、君はどう思ふと聞かれた。どう思ふたつて、自分には西洋の詩が、先づ眼に訴へて、しかる後耳を通過しなければ丸で分らないのである。そこで好い加減な挨拶をした。シェレーに似てゐる方だつたか、似てゐない方だつたか、今では忘れて仕舞つた。が可笑しい事に、先生は其の時例の膝を叩いて僕もさう思ふと云はれたので、大いに恐縮した。

ある時窓から首を出して、遙かの下界を忙しさうに通る人を見下しながら、君あんなに人間が通るが、あの内で詩の分るものは百人に一人もゐない、可哀相なものだ。一體英吉利人は詩を解する事の出來ない國民でね。其處へ行くと愛蘭土人はえらいものだ。はるかに高尚だ。——實際詩を味ふ事の出來る君だの僕だのは幸福と云はなければならない。と云はれた。自分を詩の分る方の仲間へ入れてくれたのは甚だ難有いが、其の割合には取扱が頗る冷淡である。自分は此の先生に於て未だ情合といふものを認めた事がない。全く機械的に喋舌つてる御爺さんとしか思はれなかつた。

けれども斯んな事があつた。自分の居る下宿が甚だ厭になつたから、此の先生の所へでも置いて貰はう

かしらと思つて、ある日例の稽古を濟ましたあと、頼んで見ると、先生忽ち膝を敲いて、成程、僕のうちの部屋を見せるから、來給へと云つて、食堂から、下女部屋から、勝手から、一應すつかり引つ張り回して見せて呉れた。固より四階裏の一隅だから廣い筈はない。二三分かゝると、見る所はなくなつて仕舞つた。先生は其處で、元の席へ歸つて、君斯ういふ家なんだから、何處へも置いて上げる譯には行かないよと斷るかと思ふと、忽ちワルト・ホイットマンの話を始めた。昔ホイットマンが來て自分の家へ少時逗留して居た事がある——非常に早口だから、よく分らなかつたが、どうもホイットマンの方が來たらしい——で、始めあの人の詩を讀んだ時は丸で物にならない樣な心持がしたが、何遍も讀み過してゐるうちに段段面白くなつて、仕舞には非常に愛讀する樣になつた。だから……

書生に置いて貰ふ件は、丸で何處かへ飛んで行つて仕舞つた。自分はたゞ成行に任せてへえ〳〵と云つて聞いてゐた。何でも其の時はシェレーが誰とかと喧嘩をしたとか云ふ事を話して、喧嘩はよくない、僕は兩方共好きなんだから、僕の好きな二人が喧嘩をするのは甚だよくないと故障を申し立てゝ居られた。いくら故障を申し立てゝも、もう何十年か前に喧嘩をして仕舞つたのだから仕方がない。

先生は疎忽かしいから、自分の本抔をよく置き違へる。さうして夫が見當らないと、大いに焦き込んで、臺所に居る婆さんを、ぼやでも起つた樣に、仰山な聲をして呼び立てる。すると例の婆さんが、是れも仰山な顏をして客間へあらはれて來る。

「お、おれの「ウォーヅウォース」は何處へ遣つた」

婆さんは依然として驚いた眼を皿の樣にして一應書棚を見廻してゐるが、いくら驚いても甚だ慥かなも

ので、すぐに「ウォーヅウォース」を見附け出す。さうして「ヒヤ、サー」と云つて、聊かたしなめる樣に先生の前に突き附ける。先生はそれを引つたくる樣に受け取つて、二本の指で汚ない表紙をぴしや〳〵敲きながら、君、ウォーヅウォースが……と遣り出す。婆さんは、益驚いた眼をして臺所へ退つて行く。先生は二分も三分も「ウォーヅウォース」を敲いてゐる。さうして折角搜して貰つた「ウォーヅウォース」を遂に開けずに仕舞ふ。

先生は時々手紙を寄こす。其の字が決して讀めない。尤も二三行だから、何遍でも繰返して見る時間はあるが、どうしたつて判定は出來ない。先生から手紙がくれば差支があつて稽古が出來ないと云ふことゝ斷定して始めから讀む手數を省く樣にした。たまに驚いた婆さんが代筆をする事がある。其の時は甚だよく分る。先生は便利な書記を抱へたものである。先生は、自分に、どうも字が下手で困ると嘆息してゐられた。さうして君の方が餘程上手だと云はれた。

かう云ふ字で原稿を書いたら、どんなものが出來るか心配でならない。先生はアーデン・シェクスピヤの出版者である。よくあの字が活版に變形する資格があると思ふ。先生は、それでも平氣に序文をかいたり、ノートを附けたりして濟ましてゐる。のみならず、此の序文を見ろと云つてハムレットへ附けた緒言を讀まされた事がある。其の次行つて面白かつたと云ふと、君日本へ歸つたら是非此の本を紹介して吳れと依賴された。アーデン・シェクスピヤのハムレットは自分が歸朝後大學で講義をする時に非常な利益を受けた書物である。あのハムレットのノート程周到にして要領を得たものは恐らくあるまいと思ふ。然し其の時は左程にも感じなかつた。然し先生のシェクスピヤ研究には其の前から驚かされてゐた。

客間を鍵の手に曲ると六疊程な小さな書齋がある。先生が高く巣をくつてゐるのは、實を云ふと、此の四階の角で、其の角の又角に先生に取つては大切な寶物がある。――長さ一尺五寸幅一尺程な青表紙の手帳を約十冊ばかり併べて、先生は閒がな隙がな、紙片に書いた文句を此の青表紙の中へ書き込んでは、吝坊が穴の開いた錢を蓄る樣に、ほつり〳〵と殖やして行くのを一生の樂みにして居る。此の青表紙が沙翁字典の原稿であると云ふ事は、こゝへ來出して暫く立つとすぐに知つた。先生は此の字典を大成する爲に、ウェールスのさる大學の文學の椅子を抛つて、毎日ブリテッシ・ミュージアムへ通ふ暇をこしらへたのださうである。大學の椅子さへ抛つ位だから、七志の御弟子を疏末にするのは無理もない。先生の頭のなかには此の字典が終日終夜槃桓磅礴してゐるのみである。

先生、シュミッドの沙翁字彙がある上にまだそんなものを作るんですかと聞いた事がある。すると先生はさも輕蔑を禁じ得ざる樣な樣子で是れを見給へと云ひながら、自己所有のシュミッドを出して見せた。見ると、さすがのシュミッドが前後二卷一頁として完膚なき迄眞黑になつてゐる。自分はへえと云つたなり驚いてシュミッドを眺めてゐた。先生は頗る得意である。君、もしシュミッドと同程度のものを拵へる位なら僕は何もこんなに骨を折りはしないさと云つて、又二本の指を揃へて眞黑なシュミッドをぴしやぴしや敲き始めた。

「全體何時頃から、こんな事を御始めになつたんですか」

先生は立つて向うの書棚へ行つて、しきりに何か捜し出したが、又例の通り焦れつたさうな聲でジェーン、ジェーン、おれのダウデンは何うしたと、婆さんか出て來ないうちから、ダウデンの在所を尋ねてゐる

る。婆さんは又驚いて出て來る。さうして又例の如くヒヤ、サーと窘めて歸つて行くと、先生は婆さんの一拶には丸で頓着なく、饑じさうに本を開けて、うん此處にある。ダウデンがちやんと僕の名を此處へ擧げて呉れてゐる。特別に沙翁を研究するクレイグ氏と書いて呉れてゐる。此の本が千八百七十……年の出版で僕の研究は夫よりずつと前なんだから……自分は全く先生の辛抱に恐れ入つた。序でに、ぢや何時出來上るんですかと尋ねて見た。何時だか分るものか、死ぬ迄遣る丈の事さと先生はダウデンを元の所へ入れた。

自分は其の後暫くして先生の所へ行かなくなつた。行かなくなる少し前に、先生は日本の大學に西洋人の教授は要らんかね。僕も若いと行くがなと云つて、何となく無常を感じた樣な顔をしてゐられた。先生の顔にセンチメントの出たのは此の時丈けである。自分はまだ若いぢやありませんかといつて慰めたら、いや〳〵何時どんな事があるかも知れない。もう五十六だからと云つて、妙に沈んで仕舞つた。

日本へ歸つて二年程したら、新着の文藝雜誌にクレイグ氏が死んだと云ふ記事が出た。沙翁の專門學者であると云ふことが、二三行書き加へてあつた丈である。自分は其の時雜誌を下へ置いて、あの字引はつひに完成されずに、反故になつて仕舞つたのかと考へた。

四二、一、一――四二、三、四

長谷川君と余

長谷川君と余は互に名前を知る丈で、其他には何の接觸もなかつた。余が入社の當時すらも、長谷川君が既にわが朝日の社員であるといふ事を知らなかつた樣に記憶してゐる。それを知り出したのは、どう云ふ機會であつたか今は忘却して仕舞つた。兎に角入社しても暫くの間は顏を合はせずにゐた。しかも長谷川君の家は西片町で、余も當時は同じ阿部の屋敷内に住んでゐたのだから、住居から云へばつい鼻の先である。だから本當を云ふと、此方から名刺でも持つて訪問するのが世間並の禮であつたんだけれども、そこをつい怠けて、何處が長谷川君の家だか聞き合はせもせずに横着を極めて仕舞つた。すると間もなく大阪から鳥居君が來たので、主筆の池邊君が我々十餘人を有樂町の倶樂部へ呼んで御馳走をしてくれた。余は新入の社員として、其時始めてわが社の重なる人と食卓を共にした。そのうちに長谷川君もゐたのである。是が長谷川君でと紹介された時には、かねて想像してゐた所と、あまりに隔たつてゐたので、心のうちでは驚きながら挨拶をした。始め長谷川君の這入つて來た姿を見たときは――又長谷川君が他の昵懇な社友とやあといふ言葉を交換する調子を聞いた時は――全く長谷川君だとは氣が附かなかつた。たゞ重な社員の一人なんだらうと思つた。余は若い時から色々愚な事を想像する癖があるが、未知の人の容貌態度杯はあまり腦中に描かない。ことに中年からは、此方面にかけると全く散文的になつて仕舞つてゐる。だから長谷川君に就いても別段に鮮明な豫想は持つて居なかつたのであるけれども、冥々のうちに、漠然と

わが腦中に、長谷川君として迎へるあるものが存在して居たと見えて、長谷川君といふ名を聞くや否やおやと思つた。尤も其驚き方を解剖して見るとみんな消極的である。第一あんなに脊の高い人とは思はなかつた。あんなに頑丈な骨骼を持つた人とは思はなかつた。あんなに無粋な肩幅のある人とは思はなかつた。あんなに角張つた顎の所有者とは思はなかつた。君の風丰はどこからどこ迄四角である。頭迄四角に感じられたから今考へると可笑しい。其當時「その面影」は讀んでゐなかつたけれども、あんな艶つぽい小說を書く人として自然が製作した人間とは、とても受取れなかつた。魁偉といふと少し大袈裟で惡いが、いづれかといふと、それに近い方で、到底細い筆杯を握つて、机の前で呻吟してゐさうもないから實は驚いたのである。然し其上にも余を驚かしたのは君の音調である。白狀すれば、もう少しは浮いてるだらうと思つた。所が非常な呂音で大變落ち附いて、緩たりした、少しも逼る所のない話し方をする。しかも余に紹介された時、君はたゞ一二語しか云はなかつた。（尤も余も同じ分量位しか挨拶に費やさなかつたのは事實である。）其言葉は今全く忘れてゐるが、普通にありふれた空虛な辭令でなかつたのは慥かである。寧ろ雙方で無愛想に頭を下げたのだつたらうが、自分の事は分らないから、相手の容子丈に驚くのである。文學者だから御世辭を使ふとすると、外の諸君に濟まないけれども、實を云へば長谷川君と余の挨拶が、あゝ單簡至極に片附かうとは思はなかつた。是等は皆豫想外である。

此席上で余は長谷川君と話す機會を得なかつた。たゞ默つて君の話しを聞いてゐた。其時余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男――文學者でもない、新聞社員でもない、又政客でも軍人でもない、あらゆる職業以外に嚴然として存在する一種品位のある紳士から受くる社交的の快味であつた。さうして、此

品位は單に門地階級から生ずる貴族的のものではない、半分は性情、半分は修養から來てゐるといふ事を悟つた。しかも其修養のうちには、自制とか克己とかいふ所謂漢學者から受け襲いで、強ひて己を矯めた痕迹がないと云ふ事を發見した。さうして其幾分は學問の結果自ら此に至つたものと鑑定した。又幾分は學問と反對の方面、即ち俗に云ふ苦勞をして、野暮を洗ひ落として、さうして再び野暮に安住してゐる所から起つたものと判斷した。

其うち、君は池邊君と露西亞の政黨談をやり出した。大變興味があると見えて、何時迄立つても已めない。娓々數千言と云ふと無暗に能辯に喋舌る樣に聞こえてわるいが、時間から云へば、斯んな形容詞でも使はなくつてはならなくなる位論じてゐた。其知識の詳密精細なる事は又格別なもので、向つて左の何の邊に誰がゐて、其反對の側に誰の席がある杯と、丸で露西亞へ昨日行つて見て來た樣に、例の六つかしい何々スキー杯と云ふ名前がいくつも出た。然し不思議にも此談話は、物知り振つた、又通がつた嫌惡な分子を一點も含んでゐなかつた。余は固より政黨政治に無頓着な質であつて、今の衆議院の議長は誰だつたかねと聞いて友達から笑はれた位の男だから、露西亞に議會があるかないかさへ知らない。從つて此談話には何等の興味もなかつた。それで、あんまり長いから、談話の途中で失敬して宅へ歸つて仕舞つた。是が余の長谷川君と初對面の時の感想である。

それから、幾日か立つて、用が出來て社へ行つた。汚い階子段を上がつて、編輯局の戸を開けて這入ると、北側の窓際に寄せて据ゑた洋机を圍んで、四五人話しをしてゐるものがある。外の人の顏は、戸を開けるや否やすぐ分つたが、たつた一人余に背中を向けて椅子に腰を卸ろして、鼠色の背廣を着て、長い胴

を椅子の脊から食み出さしてゐたものは誰だか見當が附かなかつた。横へ回つて見ると、それが長谷川君であつた。其時余は長谷川君に向つて「一寸御訪ねをしようと思ふんだが」と言ひ出して、まだ何を切らないうちに、君は「いや低氣壓のある間は來客謝絶だ」と云つた。低氣壓とは何の事だか、君の平生を知らない余には不得要領であつたけれど、來客謝絶の四字の方が重く響いたので、聞き返しもしなかつた。たゞ好い加減に頭の惡い事を低氣壓と洒落てゐるんだらう位に解釋してゐたが、後から聞けば實際の低氣壓の事で、苟も低氣壓の去らないうちは、君の頭は始終煩惱を離れないんだといふ事が分つた。當時余も君の向うを張つて來客謝絶の看板を懸けてゐた。尤も是は創作の低氣壓の爲であつたけれども、來客謝絶は表向き雙方同じ事なんだから、此看板を引き下ろさせる丈の緣故も親しみもない兩人は、夫切り面談をする機會がなかつた。

所がある日の午後湯に行つた。着物を脫いで、流しへ這入らうとして、不圖向うむきになつて洗つてゐる人の横顏を見ると、長谷川君である。余は長谷川さんと聲を掛けた。夫迄は丸で氣が附かなかつた君は、顏を上げて、やあと云つた。湯の中では夫ぎりしか口を利かなかつた。何でも暑い時分の事と覺えてゐる。余が身體を拭いて、茣蓙の敷いてある緣先で、團扇を使つて涼んでゐると、やがて長谷川君が上がつて來た。まづ眼鏡を掛けて、余を見附け出して、向うから話しを始めた。雙方とも眞赤裸の樣に記憶してゐる。然し長谷川君の話し方は初對面の折露西亞の政黨を論じた時と些も異なる所なく、呂音で落ち附いて、緩りしてゐるものだから、全く赤裸と釣り合はない。君は少しも顧慮する氣色も見えず醇々として頭の惡い事を說かれた。何でも去年とか一度卒倒して、しばらく田端邊で休養してゐたので、今ぢや少しは好い樣

だとかいふ話しであつた。「それぢや、まだ來客謝絶だらう」と冗談半分に聞いて見たら、「まあ……」とか何とか云ふ返事であつた。「それぢや、行くのはまあ見合せよう」と云つて分かれた。

其次余は西片町を引き上げて早稻田へ移つた。長谷川君と余とは此引越のため益〻縁が遠くなつて仕舞つた。其代り君の著作にかゝる「其面影」を買つて來て讀んだ。さうして大いに感服した。（ある意味から云へば、今でも感服してゐる。こゝに余の所謂ある意味を説明する事の出來ないのは遺憾であるが、作物の批評を重にして書いたものでないから已むを得ない。）そこで、手紙を認めて、聊かながら早稻田から西片町へ向けて賛辭を郵送した。實は腦病が氣の毒でならなかつたから、こんな餘計な事をしたのである。其當時君は文學者を以て自ら任じてゐないなどとは夢にも知らなかつたので、同業者同社員たる余の言葉が、少しは君に慰藉を與へはしまいかといふ己惚があつたんだが、文士たる事を恥づといふ君の立場を考へて見ると、これは實際入らざる差し出た所爲であつたかも知れない。返事には端書が一枚來た。其文句は、難有う、いづれ拜顏の上とか何とかある丈で、頗る簡單且あつさりしてゐた。ちつとも「其面影」流でないのには驚いた。長谷川君の書に一種の風韻のある事も其時始めて知つた。然し其書體も決して「其面影」流ではなかつた。

それから、ずつと打絶えた。次に逢つたのは君が露西亞へ行く事が略内定した時の事である。大阪の鳥居君が出て來て、長谷川君と余を呼んで午餐を共にした。所は神田川である。旅館に落ち合つて、彼處にしよう、此處にしようと評議をして居る時に、君はしきりに食ひ物の話を持ち出した。中華亭とはどう書いたかねと余に聞いた事を覺えてゐる。神田川では、滿洲へ旅行した話やら、露西亞人に捕まつて牢へ

打ち込まれた話をしてゐた。夫から、現今の露西亞文壇の趨勢の斷えず變つてゐる有樣やら、知名の文學者の名やら（其名は澤山あつたが、みんな余の知らないもの許りであつた）、日本の小說の賣れない事やら、露西亞へ行つたら、日本人の短篇を露語に譯して見たいといふ希望やら、色々述べた。何しろ三人寐てべつて、二三時間暮らしてゐたのだから、隨分ゆつくり話しも出來た。最後にダンチエンコの爲に宴會をやる積りだから出席して吳れろといふ事と、それから物集の御孃さんを、自分がゐなくなつたら托したいといふ二件を依賴した。それで分かれた。

最後に逢つたのは、出立の數日前暇乞に來られた時である。長谷川君が余の家へ足を入れたのは是が最初であつて又最終である。座敷へ通つて、室內を見渡して、何だか伽藍の樣だねと云つた。暇乞の爲だから別段の話しも出なかつたが、たゞ門弟としての物集の御孃さんと今一人北國の人の事を繰り返して賴んで行つた。

一日越えて、余が答禮に行つた時は、不在で逢へなかつた。見送りにはつい行かなかつた。長谷川君とは、それ限り逢へない事になつて仕舞つた。露都在留中たゞ一枚の端書をくれた事がある。それには、弱い話だが此方の寒さには敵はないとあつた。余は其端書を見て氣の毒のうちにも一種の可笑味を覺えた。まさか死ぬ程寒いとは思はなかつたからである。然し死ぬ程寒かつたものと見える。長谷川君はとう〳〵死んで仕舞つた。長谷川君は余を了解せず、余は長谷川君を了解しないで死んで仕舞つた。生きてゐても、あれ限りの交際であつたかも知れないが、あるひは、もつと親密になる機會が來たかも分らない。余は以上の長谷川君を、長谷川君として記憶するより外に仕方のない遠い朋友である。君の托されて行つた物集

の御孃さんは時々見える。北國の人に至つては音信さへない。

——四二、八、一——

滿韓ところ〴〵

一

南滿鐵道會社つて一體何をするんだいと眞面目に聞いたら、滿鐵の總裁も少し呆れた顏をして、御前も餘つ程馬鹿だなあと云つた。是公から馬鹿と云はれたつて怖くも何ともないから默つてゐた。すると是公が笑ひながら、何うだ今度一所に連れてつて遣らうかと云ひ出した。是公の連れて行つて遣らうかは久いもので、二十四五年前、神田の小川亭の前にあつた、怪しげな天麩羅屋へ連れて行つて呉れた以來時々連れてつて遣らうかを余に向つて繰返す癖がある。其癖未だ大した所へ連れて行つて呉れた試がない。「今度一所に連れてつて遣らうか」も大方其格だらうと思つてたゞうんと答へて置いた。此氣のない返事を聞いた總裁は、ちと海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て來るが可い。御前見た樣に何にも知らないで高慢な顏をしてゐられては傍が迷惑するからと頗る適切めいた事を云ふ。何でも是公に聞いて見ると馬關や何かで我々の不必要と認める程の御茶代抔を宿屋へ置くんださうだから、是公と一所に歩いて、此尨大な御茶代が宿屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるか一寸見たくなつた。そこで、おい、御前の供をしてへい／＼云つて歩いて見たいなと注文を付けたら、そりや何うでも構はない、一所が厭なら別でも差支ないと云ふ返事であつた。

夫から御供をするのは何時だらうかと思つて、面白半分に待つてゐると、八月半ばに使が來て何時でも立てる用意が出來てるかと念を押した。立てると云へば立てる樣な身上だから立てると答へた。すると又十日程して何時何日の汽車で馬關から乘るが、好いかと云ふ手紙が來た。それも、ちやんと心得た。次には用事が出來たから一週延ばすが何うだと云ふ便りがあつた。これも譯なく承知した。然し承知してゐる最中に、突然急性胃カタールでどつと遣られて仕舞つた。かうなると如何に約束を重んずる余も、出發迄に全快するかしないか自分で保證し悪くなつて來た。胸へ差し込みが來ると、約束どころぢやない。馬關も御茶代も、是公も大連も滅茶々々になつて仕舞ふ。世界がたゞ眞黑な塊に見えた。夫でも御供旅行の好奇心はどこかに潛んで居たと見えて、先へ行つてくれと云ふ事は一口も是公に云はなかつた。

そのうち胃の所が瓦斯か何かで一杯になつた。茶碗の音抔を聞くと腹が立つた。人間は何の必要があつて飯抔を食ふのか氣の知れない動物だ、斯うして氷さへ噛つて居れば清淨潔白で何も不足はないぢやないかと云ふ氣になつた。枕元で人が何か云ふと、話をしなくつちや生きてゐられない御喋舌程情ない下賤なものはあるまいと思つた。眼を開いて本棚を見渡すと書物がぎつしり詰つてゐる。其書物が一々違つた色をしてさうして悉く別々な名を持つてゐる。煩はしい事夥しい。何の酔興でこんな差別を付けたものだらう、又何の因果でそれを大事さうに列べ立てたものだらう。實にしち面倒臭い世の中だ。早く死んぢまへと云ふ氣になつた。

禎二さんが蒲團の横へ來て、どうですと尋ねたが、返事をするのが馬鹿氣てゐて何とも云ふ了見にならない。代診が來て、是ぢや旅行は無理ですよ、醫者として是非止めなくつちやならないと説諭したが、御

尤もだとも不尤もだとも答へるのが厭だつた。
そのうち日は容赦なく經つた。病氣は依然として元の所に逗留してゐた。とう〳〵出發の前日になつて、電話で中村へ斷つた。中村は御大事になさいと云つて先へ立つて仕舞つた。

二

小蒸氣を出て鐵嶺丸の舷側を上るや否や、商船會社の大河内さんが、どうか總裁と御一所の樣に伺ひましたがと云はれる。船が動き出すと、事務長の佐治君が總裁と同じ船で御出になると聞いてゐましたがと聞かれる。船長さんにサルーンの出口で出逢ふと總裁と御同行の筈だと誰か云つてた樣でしたがと質問を受ける。斯うみんなが總裁々々と云ふと是公と呼ぶのが急に恐ろしくなる。仕方がないから、えゝ總裁と一所の筈でしたが、えゝ總裁と同じ船に乘る約束でしたがと、忽ち二十五年來用ひ慣れた是公を儉約し始めた。此儉約は鐵嶺丸に始まつて、大連から滿洲一面に廣がつて、とう〳〵安東縣を經て、韓國に迄及んだのだから少なからず恐縮した。總裁といふ言葉は、世間には何う通用するか知らないが、余が舊友中村是公を代表する名詞としては、餘りにえら過ぎて、餘りに大袈裟で、餘りに親しみがなくつて、餘りに角が出過ぎてゐる。一向味がない。たとひ世間が何う云はうと、余一人は矢張り昔の通り是公々々と呼び棄てにしたかつたんだが、衆寡敵せず、已を得ず、折角の友達を、他人扱ひにして五十日間通して來たのは遺憾である。

船の中は比較的樂だつた。二百十日の明る日に神戸を立つたのだから、多少の荒風は無論御出なさるん

だらうと思つてちやんと覺悟を極めてゐた所が、天氣は存外呑氣に出來たもので、神戸から大連に着く迄大抵は鈍り返つてゐた。甲板の上に若い英吉利の男が犬を抱いて穩かに寢てゐたと云つたら、海の容子も大抵は想像されるだらうと思ふ。

あれや何ですかと事務長の佐治さんに聞くと、え、あれは英國の副領事だらうですと、佐治さんが答へた。副領事かも知れないが余には美しい二十一二の青年としか思はれなかつた。之に反して犬は頗る妙な顏をしてゐた。尤もブルドツグだから兩親からして既に普通の顏とは緣の遠い方に違ひない。從つて特に此奴丈を責めるのは殘酷だが、一方から云ふと、また不思議に妙な顏をしてゐるんだから已を得ない。此犬は其後大連に渡つて、大和ホテルに投宿した。さうとは些とも知らずに、食堂に入つて飯を食てゐると、突然此顏に出食はして一驚を喫した。固より犬の食堂ぢやないんだけれども、犬の方で間違へて這入つて來たものと見える。尤も彼の主人も其時食堂にゐた。主人は多數の人間のゐる所で、犬と高聲に談判するのを非紳士的と考へたと見えて、いきなり彼の妙な顏を胴ぐるみ脇の下に抱へて食堂の外に出て行つた。其退却の模樣は頗る優美であつた。彼は重い犬を恰も風呂敷包の如く安々と小脇に抱へて、多くの人の並んでゐる食卓の間を、足音も立てずに大股に歩んで戸の外に身體を隱した。其時犬はわんとも云はなかつた。ぐうとも云はなかつた。恰も彈力ある暖かい器械の、素直に自然の方に從ふ樣に、大人しく抱かれて行つた。顏は度々云ふ通り甚だ妙だが、行状に至つては頗る氣高いものであつた。余は其後遂に此犬に逢ふ機會を得なかつた。

退屈だから甲板に出て向うを見ると、晴れたとも曇つたとも方の付かない天氣の中に、黒い影が烟を吐いて、靜かな空を濁しながら動いて行く。少時其痕を眺めてゐたが、やがて又籐椅子の上に腰を卸した。例の英吉利の男が、今日は犬を椅子の足に鎖で縛り付けて、長い脛を其上に延ばして書物を讀んでゐる。もう一人の異人はサルーンで何か頻りに認め物をしてゐる。其妻君は何處へ行つたか見えない。亞米利加の宣教師夫婦は席を船長室の傍へ移した。甲板の上は何時もの通り無事であつた。たゞ機關の音丈が足の裏へ響ける程猛烈に鳴り渡つた。其響の中で何時の間にかうと／＼した。

眼が覺めてから、サルーンに入つて亞米利加の繪入りの雜誌を引つ剝がして見た。傍には日本の雜誌も五六册片寄せてあつた。いづれも佐治文庫と云ふ判が押してある。是は事務長の佐治さんが、自分で讀む爲めに上陸の際に買入れて、讀んで仕舞ふと船の圖書館に寄附するのだと佐治さん自身から聞いた。佐治さんは文學好と見えて、余の著書抔も讀んでゐる。友人の畔柳芥舟と同鄕だと云ふから、差し向ひで芥舟の評判を少しやつた。

又室を出て海を眺めた。すると先刻黑い影を波の上に殘して、遠くの向うを動いてゐた船が、すぐ眼の前に見える。大きさは鐵嶺丸と略同じ位に思はれるが、船足が大分遲いと見えて、少時の間にもう是程追付かれたのである。欄干に頰杖を突いて、見てゐると鐵嶺丸が刻一刻と後から逼つて行くのが能く分る。仕舞には黃色い文字で書いた營口丸の三字さへ明かに讀める樣になつた。やがて余の船の頭が營口丸の尻

より先へ出た。さうして、尻から胴の方へぢり〳〵と競り上げて行つた。船は約一丁を隔てゝ殆んど並行の姿勢で進行してゐる。もう七八分すると、余の船は全く營口丸を乘り切る事が出來さうに思はれた。時に約一丁もあらうと云ふ船と船の間隔が妙に逼つて來た。向うの甲板に居る乘客の影が確に勘定が出來る樣になつた。見ると悉く西洋人である。中には眼鏡を出して此方を眺めてゐるのもあつた。けれども見るうちに眼鏡は不必要になつた。髪の色も眼鼻立も甲板に立つてゐる人は御互に鮮かな顔を見合せる程船は近くなつた。其時は全く美しかつた。と思ふと、船は今迄よりも倍以上の速力を鼓して刹那に近寄り始めた。海の水が細い谷川の樣に仕切つて、營口丸の船體が、六尺程の眼の前に黒く切つ立つた時は、あゝ打つかるなと思つた。途端に向うの舳は余の眼を掠めて過ぎ去りつゝ、逼りつゝ、とう〳〵中等甲板の角の所迄行つてどさりと留つた。同時に甲板の上に釣るしてあつた端艇が二艘程でんぐり返つた。端艇を繋いであつた鐵の棒は無雑作に曲つた。營口丸の船員は手を拍つてわあと囃し立てた。余と並んで立つてゐた異人が、妙な聲を出してダム何とか云つた。

一時間の後佐治さんが遣つて來て、夏目さん身をかはすのかはすと云ふ字は何う書いたら好いでせうと聞くから、左樣ですねと云つて見たが、實は余も知らなかつた。爲替の替せると云ふ字ぢや不可ませんかと甚だ文學者らしからぬ事を答へると、佐治さんは承知出來ない顔をして、だつてあれは物を取り替へる時に使ふんでせうと遣り込めるから、已を得ず、ぢや假名が好いでせうと忠告した。佐治さんは呆れて出て行つた。後で聞くと、衝突の始末を書くので、其中に、本船は身をかはしと云ふ文句を入れたかつたのださうである。

四

船が飯田河岸の樣な石垣へ横にぴたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が澤山並んでゐる。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う澤山塊ると更に不體裁である。余は甲板の上に立つて、遠くから此群集を見下しながら、腹の中で、へえー、此奴は妙な所へ着いたねと思つた。其中船が段々河岸に近づいてくるに從つて、陸の方で帽子を振つて知人に挨拶をするもの抔が出來て來た。宣教師のキンといふ人の妻君が、中村さんが多分迎へに來て御出でせうと、笑ひながら御世辭を云つたが、電報も打たず、何時着くとも知らせなかつた余の到着を、いくら權威赫々たる總裁だつて豫知し得る道理がない。余は欄干に頰杖を突きながら、成程此奴は何うしたものかな、一先是公の家へ行つて宿を聞いて、それから其宿へ移る事にでもするかなと思つてゐる中に、船は鷹揚にかの汚ならしいクーリー團の前に横付になつて止まつた。止まるや否や、クーリー團は、怒つた蜂の巣の樣に、急に鳴動し始めた。其鳴動の突然なのには、一寸膽力を奪はれたが、何しろ早晩地面の上へ下りるべき運命を持つた身體なんだから、仕舞には何うかして呉れるだらうと思つて、矢つ張り頰杖を突いて河岸の上の混戰を眺めてゐた。すると佐治さんが來て、夏目さん何處へ御出になりますと聞いて呉れた。まあ一先總裁の家へでも行つて見ませうと答へてゐると、其處へ脊の高い、紺色の夏服を着た立派な紳士が出て來て、懷中から名刺を出して叮嚀に挨拶をされた。それが祕書の沼田さんだつたので、頰杖を突いて、いつ迄も鳴動を眺めてゐる余には、大變な好都合になつた。沼田さんは今度郷里から呼び迎へられた

老人を、自宅へ案内される為に、船迄来られたのださうだが、同じ鐵嶺丸に余の乗つてる事を聞いて、わざ〳〵刺を通じられたのである。

　ぢやホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話してゐる。河岸の上を見ると、成程馬車が並んでゐた。力車も澤山ある。所が力車はみんな鳴動連が引くので、内地のに比べると甚だ景気が好くない。馬車の大部分も亦鳴動連によつて、御せられてゐる様子である。従つて何れも鳴動流に汚ないもの許であつた。ことに馬車に至つては、其昔日露戦争の當時、露助が大連を引上る際に、此儘日本人に引渡すのは残念だと云ふので、御叮嚀に穴を掘つて、土の中に埋めて行つたのを、チャンが土の臭を嗅いで歩いて、とう〳〵嗅ぎ中てゝ、一つ掘つては鳴動させ、二つ掘つては鳴動させ、とう〳〵大連を縦横十文字に鳴動させる迄に掘り盡したと云ふ評判のある、――評判だから、本當の事は分らないが、此評判があらゆる評判のうちで尤も巧妙なものと、誰しも認めざるを得ない程の泥だらけの馬車である。

　其中に東京の眞中でも容易に見る事の出来ない位、新しい奇麗なのが二臺あつた。御者が立派なリヾリーを着て、光つた長靴を穿いて、哈爾賓産の肥た馬の手綱を取つて控へてゐた。佐治さんは、船から河岸へ掛けた橋を渡つて、鳴動の中を突き切つて、わざ〳〵余を其奇麗な馬車の傍迄連れて行つた。さあ御乗んなさいと勧めながら、すぐ御者臺の方へ向いて、總裁の御宅迄と注意を與へた。御者はすぐ轡を執つた。車は鳴動の中を揺ぎ出した。

五

門を這入つて馬車の輪が砂利の上を二三間軋つたかと思ふと、馬は大きな玄關の前へ來て靜かに留まつた。石段を上つて、入口の所に立つや否や、色の白い十四五の給仕が、頑丈な樫の戸を内から開いて、余の顏を見ながら挨拶をした。もう御歸りかと尋ねると、まだで御座いますと云ふ。留守では仕方がない。何うしたものだらうと思つて、石の上に停んで首を傾けてゐる所へ、後に足音がする樣だから振り向くと、先刻鐵嶺丸で知己になつた沼田さんである。さあ、どうぞと云はれるので、中に入つた。沼田さんは先へ立つて、ホールの突き當りにある厚い戸を開いた。其戸の中へ首を突つ込んで、室の奧を見渡した時に、こりや滅法廣いなと思つた。數字の觀念に乏しい性質だから何疊敷だか頓と要領を得ないが、何でも細長い御寺の本堂の樣な心持がした。其廣い座敷が只一枚の絨毯で敷き詰められて、四角丈が僅許り華やかな織物の色と映り合ふ爲めに、薄暗く光つてゐる。此大きな絨毯の上に、應接用の椅子と卓がちよんぼり二所に竝べてある。一方の卓と一方の卓とは、丸で隣家の座敷位離れてゐる。沼田さんは余を其一方に導いて席を與へられた。仰向いて見ると天井が無暗に高い。高い筈である。室の入口には二階が付いてゐて、其二階の手摺から、余の坐つてゐる所が一目に見下される樣な構造なんだから、詰る所は、余の頭の上が、一階の天井兼二階の天井である。後に人の說明を聞いて始めて知つたのだが、此だゞつ廣い應接間は、實は舞踏室で、それを見下してゐる手摺付の二階は、樂隊の樂を奏する所に出來て居るのださうだ。

そんなら、さうと早くから敎へて呉れゝば、安心するものを、斷りなしに急に佛樣のない本堂へ案内されたもんだから先づ一番に吃驚した。余は大連滯在中何度となく此部屋を橫切つて、是公の書齋へ通つたので、喫驚する事は、最初の一度丈で濟んだが、通るたんびに、居りもせぬ阿彌陀樣を思ひ出さない事はな

かつた。

室を這入つて右は、往來を向いた窓で、左の中央から長い幕が次の部屋の仕切りに垂れてゐる。正面に五尺程の盆栽を二鉢置いて、横に奇麗な象の置物が据ゑてある。大きさは豚の子程ある。是は狸穴の支社の客間で見たものと同じだから、一對を二つに分けたものだらうと思つた。其外には長い幕の上に、大な額が懸つてゐた。其左りの端に、小さく南滿鐵道會社總裁後藤新平と書いてある。書體から云ふと、上海邊で見る看板の様な字で、筆意が頗る整つてゐた。後藤さんも滿洲へ來てゐた丈に、字が旨くなつたものだと感心したが、其實感心したのは、後藤さんの揮毫ではなくつて、清國皇帝の御筆であつた。右の肩に賜ふと云ふ字があるのを見落した上に、後藤さんの名前が小さ過ぎるのでつい失禮をしたのである。後藤さんも、清國皇帝に逢つて、斯う小さく呼び棄に書かれちや堪らない。えらい人からは、滅多に賜はつたり何かされない方が可いと思つた。

沼田さんは給仕を呼んで、處々方々へ電話を掛けさして、是公の行方を聞き合せて呉れたが全く分らない。米國の艦隊が港内に碇泊してゐるので、歡迎の爲、今日はベースボールがある筈だから、或は夫を觀に行つてるかも知れないと云ふ話であつた。

其内廣い部屋が漸く暗くなりかけた。ぢや何處ぞ宿屋へでも行つて待ちませうと云ふと、社の宿屋ですから、矢つ張り大和ホテルが宜いでせうと、沼田さんが親切に自分で余をホテルまで案内して呉れた。

六

湯を立てゝもらつて、久し振に鹽氣のない眞水の中に長くなつて寐てゐる最中に、湯殿の戸をこつ〳〵叩くものがある。風呂場で訪問を受けた試しは未だ曾てないんだから、湯槽の中で身を浮かしながら少々逡巡してゐると、叩く方では何うあつても訪問の禮を盡さねば已まぬといふ決心と見えて、猶のこと、こつ〳〵やる。いくらこつ〳〵遣つたつて、まさか赤裸で飛び出して、室の錠を明ける譯にも行かないから、風呂の中から大きな聲で、おい何だと用事を聞いて見た。すると摺硝子の向側で、一寸明けなさいと云ふ聲がする。此聲なら明けても差支ないと思つて、身體全體から雫を垂らしながら、素裸でボールトを外すと、果して是公が杖を突いて戸口に立つて居た。來るなら電報でも一寸掛ければ好いものをと云ふ。何處へ行つてゐたんだと聞くと、ベースボールを觀て、夫から舟を漕いでゐたと云ふ挨拶である。飯を食つたら遊びに來なさいと案内をするから、よろしいと答へて又戸を締めた。締めながら、おい此宿は少し窮屈だね、浴衣でぶら〳〵する事は禁制なんだらうと聞いたら、此處が厭なら遼東ホテルへでも行けと云つて歸つて行つた。

例刻に食堂へ下りて飯を食つたら、知らない西洋人と一所の卓へ坐らせられた。其男が御免なさい、どうも嚏が出てと、手帛を鼻へ當たが、嚏の音はちつともしなかつたから、余はさあ〳〵と、暗に嚏を奬勵して置いた。此男は自分で英人だと名乘つた。さうして御前は旅順を見たかと余に尋ねた。旅順を見ないなら敎へるが、何時の汽車で行つて、何處と何處を見て、夫から何時の汽車で歸るが好いと、自分の遣つた通りを委しく語つて聞かせた。余は成程々々と聞いてゐた。次に御前は門司を見たかと聞いた。次にあすこの石炭は最早澤山は出まいと聞いた。澤山は出まいと答へた。實は澤山出るか出ないか知らなかつ

たのである。
　少時して、君は旅順に行つた事があるかと又同じ事を尋ね出した。少々變だが面倒だから、いやまだと、此方も前同樣な返事をして置いた。すると旅順に行くには朝八時と十一時の汽車があつて……と又先刻と寸分違はない樣な案内者めいた事を云つて聞かせた。先が先だから余も依然として成程々々を繰り返した。最後に突然御前は日本人かと尋ねた。余はさうだと正直な所を答へた樣なものゝ、今迄は何國人と思はれてゐたんだらうかと考へると、多少心細かつた。
　余は日本人なりの答を得るや否や、此男が、おれも四十年前横濱に行つた事があるが、どうも日本人は、叮嚀で親切で慇懃で實に模範的國民だ抔としきりに御世辭を振り廻し始めた。折角だとは思つたが、是公との約束もある事だから、好い加減な所で談話を切り上げて、此老人と別れた。
　表へ出るとアカシヤの葉が朗らかな夜の空氣の中にしんと落ち付て、人道を行く靴の音が向うから響いて來る。暗い所から白服を着た西洋人が馬車で現れた。ホテルへ歸つて行くのだらう。馬の蹄は玄關の前で留まつたらしい。是公の家の屋根から突出した細長い塔が、瑠璃色の大空の一部分を黑く染拔いて、大連の初秋が、内地では見る事の出來ない深い色の奧に、數へる程の星を輝つかせてゐた。

七

　此間から米國の艦隊が四艘來てゐるんで、毎日色々な事をして遊ばせるのだが、翌日の晩は舞踏會をやる筈になつてゐるから出て見ろと是公が勸めた。出て見ろつたつて、燕尾服も何も持つて來やしないから

駄目だよと斷ると、是公が希知な奴だなと云つた。燕尾服は其上倫敦留學中トテナムコートロードの怪しげな洋服屋で、尤も安い奴を拵へた覺があるが、爾來簞笥の底に深く藏してゐるのみで、親友と雖も、持つてゐるか持つてないか知らない位である。いくら大連がハイカラだつて、東京を立つ時に、此古燕尾服が役に立たうとは思ひ掛けないから、矢つ張り簞笥の底に仕舞つたなりで出て來た。ぢや、おれの袴羽織を貸してやるから、日本服で出ろ、出て、まあ、何んな容子だか見るが好いと、是公は何でも引き摺り出さうとする。一層出る位なら踴らなくつちや詰らないから、日本服ならまあ止さうと云ひたかつたが、是公は正直だから本當にすると好くないと思つて、たゞ羽織袴は不可ないよと斷つた。是公は夫でも舞踏會を見せる氣と見えて、翌日の午、社の二階で上田君を捕へて、君の燕尾服を此奴に貸してやらないか、君のなら丁度合ひさうだと云つて居た。上田君も此突然な相談には辟易したに違ない。笑ひながら、いえ私のは誰にも合ひませんと謙遜された。

舞踏會は夫で濟んだが、しばらくすると、今度は是から倶樂部へ連れて行つて遣らうと、例の如く連れて行つて遣らうを出し始めた。大分遲い樣だとは思つたが、座にある國澤君も、行かうと云はれるので、三人で涼しい夜の電燈の下に出た。廣い通りを一二丁來ると日本橋である。名は日本橋だけれども其實は純然たる洋式で、しかも歐洲の中心でなければ見られさうもない程に、雅にも丈夫にも出來てゐる。三人は橋の手前にある一棟の煉瓦造りに這入つた。誰か居るかなと、玉突場を覗いたが、たゞ電燈が明るく點いてゐる丈で玉の鳴る音はしなかつた。讀書室へ這入つたが、西洋の雜誌が、秩序よく列べてあるばかりで、ページを繰る手の影はどこにも見えなかつた。將棋歌留多を遣る所へ這入つて腰をかけたが、三人の

尻を卸した外は、椅子も洋卓も悉く空いてゐた。今日は遲いので西洋人が居ないから詰まらないと是公が云ふ。是公の會話の下手な事は天品と云ふ位なものだから、不思議に思つて、御前は平生此處に出入して赤髯と交際するのかと聞いたら、まあ來た事はないなと澄ましてゐる。夫ぢや西洋人がゐなくつて詰まらない所か、居なくつて仕合せな位なものだらうと聞いて見ると、夫でもおれは此倶樂部の會長だよ、出席しないでも好いと云ふ條件で會長になつたんだと呑氣な説明をした。

會員の名札は成程外國流の綴が多い。國澤君は大きな本を擴げて、余の姓名を書き込ました上、是公に君此處へと催促した。是公はよろしいと答へて、自分の名の前に proposed by と付けた。夫へ國澤君が、同く seconded by と加へて呉れたので、大連滯在中は何時でも、倶樂部に出入する資格が出來た。

夫から三人でバーへ行つた。バーは支那人が遣つてゐる。英語だか支那語だか日本語だか分らない言葉で注文を通して、妙に赤い酒を飲みながら話をした。醉つて外へ出ると濃い空が益濃く澄み渡つて、見た事のない深い高さの裡に星の光を認めた。國澤君がわざ／＼ホテルの玄關迄送つてくれた。玄關を入ると、正面の時計が丁度十二時を打つた。國澤君は此十二時を聞きながら、では御休みなさいと云つて、戻られた。

八

ホテルの玄關で、是公が馬車をと云ふと、ブローアムに致しますかと給仕が聞いた。いや開いた奴が好いと命じてゐる。余は石段の上に立つて、玄關から一直線に日本橋迄續いてゐる、廣い往來を眺めた。大連の日は日本の日よりも慥かに明るく眼の前を照らした。日は遠くに見える、けれども光は近くにある、

とでも評したら可からうと思ふ程空氣が透き徹つて、路も樹も屋根も煉瓦も、夫々鮮やかに陽の中に浮き出した。

やがて蹄の音がして、是公の馬車は二人の前に留まつた。二人は此の麗かな空氣の中をふわ〳〵搖られながら日本橋を渡つた。橋向うは市街である。それを通り越すと滿鐵の本社になる。馬車は市街の中へ這入らずに、すぐ右へ切れた。氣が附いて見ると、遙向うの岡の上に高いオベリスクが、白い劍の樣に切つ立つて、青空に聳えてゐる。其の奧に同じく白い色の大きな棟が見える。屋根は鈍い赤で塗つてあつた。オベリスクの手前には奇麗な橋が懸つてゐた。家も塔も橋も三つながら同じ色で、三つとも強い日を受けて耀いた。余は遠くから此の三つの建築の位地と關係と恰好とを眺めて、其の釣合のうまく取れてゐるのに感心した。

あれは何だいと車の上で聞くと、あれは電氣公園と云つて、內地にも無いものだ。電氣仕掛で色々な娛樂を遣つて、大連の人に保養をさせる爲に、會社で拵へてるんだと云ふ說明である。電氣公園には恐縮したが、內地にもない位のものなら、頗る珍らしいに違ないと思つて、娛樂つてどんな事を遣るんだと重ねて聞き返すと、娛樂とは字の如く娛樂でさあと、何だか少々危しくなつて來た。能く〳〵糺明して見ると、實は今月末とかに開場するんで、何をやるんだか、其の日になつて見なければ、總裁にも分らないのださうである。

其の內馬車が、電車の軌道を敷いてゐる所へ出た。電車も電氣公園と同じく、今月末に開業するんだとか云つて、會社では今支那人の車掌運轉手を雇つて、訓練のために、ある局部丈の試運轉を遣らしてゐる。

御忘れものはありませんか、ちん／＼動きますな支那の口で稽古してゐる最中なのだから軌道が此處迄延長して來るのは、別段怪しい事もないが、氣が附いて見ると、鐵軌の据ゑ方が少々違ふ樣である。第一内地の濠に石を敷かない計畫らしい。御影石が搗底なのかいと質問して見たら、すぐ、冗談云つちや不可ないと遣られて仕舞つた。之が最新式の敷方なんで、土臺を何うとかして、何うとかして、鐵軌と鐵軌の間を混合金屬で牽り固めて全線をたつた一本の長い棒にして仕舞つて……と恰も自分が技師であるかの如き自慢である。内地から來たものは成程田舍もの取扱にされても仕方がない。そいつは感心だと、全く感心すると、技師を信任して、少しも口を出さずに、何うでも自分の思つた通りを遣らせるから、そんな仕事も出來るのさと云つた。内地では何でも八釜敷く干渉する奴が澤山出て來るものと見える。

馬車が岡の上へ出た。其處はまだ道路が完成してゐないので、滿洲特有の黄土が、見るうちに靴の先から洋袴の膝の上迄細かに積もつた。此の邊ももう少しすると、ホテルの前の樣に、カン／＼した路に變化する事だらうが、そんな事を口外すれば、是公が益得意になる許りだから、わざと默つてゐた。

九

これが豆油の精製しない方で、此方が精製した方です。色が違ふ許りぢやない、香も少し變つてゐます。嗅いで御覽なさいと技師が注意するので嗅いで見た。

用ひる途ですか、まあ料理用ですね。外國では動物性の油が高價ですから、斯う云ふのが出來たら便利でせう。第一大變安いのです。是でオリーブ油の何分の一にしか當らないんだから。さうして效用は兩方

共略同じです。其點から見ても甚だ重寶です。それに此油の特色は他の植物性のもの丶樣に不消化でないです。動物性と同じ位に消化れますと云はれたので急に豆油が難有くなつた。矢張り天麩羅抔に出來ますかと聞くと、無論出來ますと答へたので、近き將來に於て一つ豆油の天麩羅を食つて見樣と思つて其室を出た。

出掛に御邪魔でもこれをお持ちなさいと云つて細長い箱を與れたから、何だらうと思つて、卽座に開けて見ると、石鹼が三つ竝んでゐた。是が矢つ張り同じ材料から製造した石鹼ですと說明されたが、普通の石鹼と別に變つた所もない樣だから、たゞ成程と云つたなり眺めてゐた。すると、この石鹼に面白い所は、鹽水に溶解するから奇體ですよとの追加があつたので、急に貰つて行く氣になつて蓋をした。

柞蠶から取つた絲を竝べて、是が從來の奴ですと云ふのを見ると、成程色が黑い。此方は精製した方でと、傍に出されるを見ると全く白い。且節なしに出來上つてゐる。是で織つたのがありますかと聞いて見ると、生憎有りませんと云ふ答である。然しもし織つたらどんなものが出來るでせうと聞くと、羽二重の樣なものが出來る積ですと云ふ。其上價段が半分だと云ふ。柞蠶から羽二重が織れて、それが內地の半額で買へたら嘸善からう。

高粱酒を出して洋盃に注ぎながら、此方が普通の方で、此方が精製した方でと、又遣りたしたから、いや御酒は澤山ですと斷つた。さすが酒好きの是公も高粱酒の比較飲みは、思はしくないと見えて、並製も上製も同じく謝絕した。是公の話によると、此間高嶺讓吉さんが來て高粱からヰスキーを採るとか採らないとか頻りに研究してゐたさうである。ヰスキーが此試驗場で出來る樣になつたら是公が嘸喜んで飲む事

だらう。

陶器を作つてゐる部屋もあつた樣だが、是はほんの試驗中で、並製も上製もない樣であつた。

中央試驗所を出て、五六町來ると、馬車を下りて草の中に迷ひ込んだ。路のない谷へ下りたり、足場のない岡へ上つたりするので、汗が出て、顏の皮がひり／＼して來た。其上胃が頻りに痛む。是公に聞いて見ると、射的場へ連れて行つてやるんだと云ふから、僕の連れて行つてやると云ふ好意に感じて、腹の痛いのを我慢して目的の家迄行つてすぐ椅子の上へ腰を掛けて仕舞つた。是公が頻りに鐵砲の話をする樣であつたが、頓と頭に響かない。何でも此家丈け會社から寄附して遣つた。是でも一千圓とか二千圓とか掛かつたといふ事丈が漸く耳に這入つた。

そこへ汚ない支那人が一二三人、奇麗な鳥籠を提げて遣つて來た。支那人て奴は風雅なものだよ。着るものもない貧乏人の癖に、あゝやつて、鳥をぶら下げて、山の中をまご付いて、鳥籠を樹の枝に釣るして、其下に坐つて、食ふものも食はずに大人しく聞いてゐるんだよ。夫がもし二人集まれば鳴き競をするからね。あゝ實に風雅なものだよ。と頻りに支那人を賞めてゐる。余はポッケットからゼムを出して呑んだ。

十

政樹公が大連の税關長になつてゐると聞いて一寸驚いた。政樹公には十年前上海で出逢つたきりである。其時政樹公は、サー・ロバート・ハートの子分になつて、矢張り其處の税關に勤務してゐた。政樹公の大學を卒業したのは余より一年前で、二人共同じ英文科の出身だから、職業違ひであるに拘はらず、比較的

縁が近いのである。

政樹公の姓は立花と云つて柳川藩だから、立派な御侍に違ない。それを何故立花さんと云はないで、政樹公と呼ぶかと云ふに、同じ頃同じ文科に同藩から出た同姓の男がゐた。しかも双方共寄宿舎に這入つてゐたものだから、立花君や立花さんでは紛れ易くて不可ない。で一方は政樹といふ名だから政樹公と呼び、一方は銑三郎といふ俗稱だから銑さん銑さんと云つた。何故片つ方が公なのに、片つ方はさん付にされて仕舞つたのか、一寸分らない。銑さんの方は、余と前後して洋行したが、不幸にして肺病に罹つて、歸り路に香港で死んで仕舞つた。そこで殘るは政樹公ばかりになつた。從つて政樹公をやめて立花君と云つたつて、少しも混雜はしないのだが、つい立花よりは政樹公の方が先へ出る。矢つ張り中村とも總裁とも云はないで是公と云ひ馴れた樣なものだらう。

此處だと云ふので、二人馬車を下りて稅關に這入つて見ると、生憎政樹公は先刻具合が惡いとかで家へ歸つた後であつた。此方の都合もあるし、所勞の人に迷惑をかけるのも本意でないから、他日を期して稅關を出た。すると今度は馬車が滿鐵の本社へ橫附になつた。廣い階子段を二階へ上がつて、右へ折れて、突き當りを又左へ行くと、取付が重役の部屋である。重役は東京に行つてるもの丶外は皆出てゐた。夫に一々紹介された。其中で昔見た田中君の顏を覺えてゐた。何うです始めて大連に御着きになつた時の感想はと聞かれるから、左樣です船から上がつて此方へ來る所は、丸で燒迹の樣ぢやありませんかと、正直な事を答へると、あすこはね、軍用地だものだから建物を拵へる譯に行かないんで、誰もさう云ふ感じがするんですと敎へられた。

しばらく椅子に腰を掛けて、大人しく執務の樣子を見てゐると、やがて午になつた。さあ飯を食はうと、食堂へ案內された。此處へと云ふ席へ坐つて、サーギエットを取り上げると、給仕が來て、夫は國澤さんのですから、只今新しいのを持つて參りますと云つた。食堂は社の表二階にあたる大廣間で、晚になれば、それが舞踏室に變化する程の大きなものであつた。是は社員全體に向つて公開してあるのださうだが、同じ食卓に着いた人の數を云ふと、約三十人に過ぎなかつた。此人數から推して、或は制限でもありはせぬのかと思つたのは余の想像に過ぎなかつた。

料理は大和ホテルから持つて來るのださうで、同席の三十餘人が、みな一樣の皿を平らげてゐた。胃が痛いので肉刀と肉匙は人並に動かした樣なもの丶、其實は肉も野菜も咽喉の奥へ詰め込んだ姿である。一つ何うですと向ふ側の田中君から瓢簞形の西洋梨を勸められた時は、手を出す勇氣すらなかつた。

十一

河村調査課長の前へ行つて挨拶をすると、河村さんはまあお掛けなさいと椅子を勸めながら、何を御調べになりますかと叮嚀に聞かれる。何を調べる程の人間でもないんだから、此間に逢つた時は實は弱つた。先刻重役室へ河村さんが這入つて來たとき、是公が余を紹介して、河村さん滿鐵の事業の種類其他に就て、あとで此男にすつかり說明して遣つて下さいと云つたのが本で、とう／＼余は調査課へ來る樣な譯になつたもの丶、其實世間の知る如き人間なんだから、斯う眞面目に、何う云ふ方面の研究をやる氣かと尋ねられると甚だ迷付いて仕舞ふ。さうかと云つて、決して惡氣があつて冷かしに來た次第でない事も亦、

世間の知る通りなんだから、河村さんに對して敬意を失する樣な冗談は云へた義理のものでない。已を得ず、鹿爪らしい顏をして、蒲鐵のやつてゐる色々な事業一般に就て知識を得たいと述べた。――何でも述べた積である。固より內心に確乎たる覺悟があつて述べる事でないんだから、顏丈は鹿爪らしいが、述べる事の內容は、頗る赤毛布式に縹緲とふわついてゐたに違ない。たゞ今から顧みても、少し得意なのは、其時余の態度擧動は非常に落ち付いて、魂がさも丹田に膠着してゐるかの如く河村さんには見えたらうといふ自覺である。人を欺し終せて知らん顏をしてゐるのは善くない事だから、此處で全く懺悔して仕舞ふが、實を云ふと、其時は胃がしく／＼痛んで、言葉に抑揚を付け樣にも、聲に張りを見せ樣にも、身體に活氣を漲ぎらせやうにも、到底自己が自己以上に沈着して仕舞つて、一寸も足搔きが取れなかつたのである。

其處へ大きな印刷ものが五六冊出て來た。一番上には第一回營業報告とある。二冊目は第二回で、三冊目は第三回で、四冊目は第四回の營業報告に違ない。此大冊子を机の上に置いて、大抵是で分りますがねと河村さんが云ひ出した時は、さあ大變だと思つた。今此胃の痛い最中に此大部の營業報告を研究しなければ濟まない事になつては、到底持ち切れる譯のものではない。余は未だ營業報告を開けないうちに、早速一工夫して斯う云つた。――私は專門家でないんですから、さう詳い事を調査しても、とても分りますまいと思ひますので、たゞ諸君が色々な方面でどんな風に働いてゐられるか、ざあつと其狀況を目擊さして頂けば澤山ですから、縱覽すべき箇所を御面倒でも一寸書いて下さいませんか。

河村さんは、はあ左樣ですかと、氣輕にすぐ筆を執つて呉れた。所へ何處からか突然妙な小さな男が現はれて、やあと聲を掛けた。見ると股野義郎である。昔「猫」を書いた時、其中に筑後の國は久留米の住

人に、多々羅三平といふ好人物ありと吹聴した事がある。當時此男は三池の炭坑に在勤してゐたが、どう云ふ間違か、多々羅三平は即ち股野義郎であると云ふ評判がぱつと立つて仕舞には股野を捕まへて、おい多々羅君抔と云ふものが澤山出て來たさうである。其處で股野は大いに憤慨して、至急親展の書面を余に寄せて、是非取り消して呉れと請求に及んだ。余も氣の毒に思つたが、多々羅三平の件を悉く削除しては、全巻を改板する事になるから、[illegible]に多々羅三平は股野義郎にあらずと新聞に廣告しちや不可ないかと照會したら、不可ないと云つて來た。夫から二度も三度も猛烈な手紙を寄こしたあとで、とう〳〵斯う云ふ條件を出した。自分が三平と誤られるのは、畢竟自分と三平が齷齪たる稼業の住人だからである。幸ひ、肥前唐津に多々羅の濱と云ふ名所があるから、責めて三平の戸籍丈でもそつちへ移して呉れ。是丈は是非斷行するとあつたんで、余はとう〳〵三平の方を肥前唐津の住人に改めて仕舞つた。今でも「猫」を御讀みになれば分る。肥前の國は唐津の住人多々羅三平とちやんと訂正してある。

斯う云ふ譯で余と因緣の淺からざる股野に、此處でひよつくり出逢ふとは全く思ひがけなかつた。しかも、其家へ呼ばれて御馳走になつたり、三日間朝から晩迄懇切に連れて歩いて貰つたり、昔日の紛議を忘れて、舊歡を暖める事が出來たのは望外の仕合である。實を云ふと、余は股野が撫順に居る事とばかり思つてゐた。

十二

余は大連で見物すべき滿鐵の事業其他を、此處で河村さんと股野に、表の樣な形に拵へて貰つた。

腹がしきりに痛むので、寢室へ退いて、長椅子の上に横になつてゐると、窓を撲つ雨の音が次第に繁くなつた。是ぢや舞踏會に行く連中も、大分御苦勞樣な事になつたものだと思つて、ポッケットから招待狀を出して寐ながら、又眺めて見た。繪端書位の大きさの厚紙の一面には、歌麿の美人が好い色に印刷されてゐる。一面には中村是公同夫人連名で、夏目金之助を招待してゐる。能くこんなものを拵へる暇があつたなと感心して、うと／＼しかけた所へ、ボーイ頭が來て、只今總裁からの電話で、今夜舞踏會へ御出になるか伺へと云ふ事で御座いますがと云ふから、行かないと返事をして呉れと頼んで、本當に寢て仕舞つた。眼が覺めたら雨は何時の間にか歇んで、奇麗な空が磨き上げた樣に一色に廣く見える中に、明かな月が出て居た。余は硝子越に此大きな色を覗いて、思はず是公の爲に、舞踏會の成功を祝した。

後で本人に聞いて見ると、是公は其夜舞踏の濟んだ後で、多數の亞米利加士官と共に倶樂部のバーに繰り込んだのださうだ。そこで、士官連が是公に向つて、今夜の會は大成功であるとか、非常に盛であつたとか、口々に賛辭を呈したものだから、是公は已を得ず、大聲を振り絞つて gentlemen! と叫んだ。すると今迄がや／＼云つてゐた連中が、總裁の演説でも始まる事と思つて、一度に口を閉ぢて、満場は水を打つた樣に靜かになつた。是公は固よりゼントルメンの後を何とか付けなければならない。所がゼントルメン以外の英語が生憎一言も出て來なかつた。英語と云ふ英語は頭の底から悉く酒で洗ひ去られて仕舞つてゐるので、仕方なしに、急に日本語に鞍換をして、ゼントルメンの次へもつてきて、すぐ大いに飲みませうと怒鳴つた。ゼントルメン大いに飲みませうは、大抵の亞米利加人に通じる譯のものではないが、其處がバーのバーたる所で、ゼントルメン大いに飲みませうと遣るや否や、士官連がわあつと云つて主人公を

胴上にしたさうである

明治二十年の頃だつたと思ふ。同じ下宿にごろ〳〵してゐた連中が七人程、江の島迄日着日歸りの遠足を遣つた事がある。赤毛布を背負つて辨當をぶら下げて、懷中には各二十錢づゝ持つて、さうして夜の十時頃迄かゝつて、漸く江の島の此方側迄着いた事は着いたが、思ひ切つて海を渡るものは誰もなかつた。申し合せた樣に毛布に包まつて砂濱の上に寐た。夜中に眼が覺めると、ぽつり〳〵と雨が顏へ中つてゐた。其上犬が來て眞水英夫の脚絆を啣へて行つた。夜が白んで物の色が仄に明るくなつた頃、御互の顏を見渡すと、誰も彼も奇麗に砂だらけになつてゐる。眼を擦ると砂が出る。耳を掘くると砂が出る。頭を掻いても砂が出る。七人は夫で江の島へ渡つた。其時夜明けの風が島を繞つて、山にはびこる樹がさあと靡いた。すると余の傍に立つてゐた是公が何と思つたものか急に、どうだ、あの樹を見ろ、戰々兢々としてゐるぢやないかと云つた。

草木の風に靡く樣を戰々兢々と眞面目に形容したのは是公が嚆矢なので、夫れから當分の間は是公の事を、みんなが戰々兢々と號してゐた。當人丈は、未だに戰々兢々で差支ないと信じてゐるかも知れないんだから、ゼントルメン大いに飲みませうも、此際亞米利加語として士官側に通用したと心得てゐるんだらう。通じた證據には胴上にしたぢやないか位、醉ふと云ひかねない男である。

十三

昨夕は川崎造船所の須田君から一所に晩飯でも食はうと云ふ案内があつたが、例の如く腹が痛むので、

殘念ながら辭退して、寢室で肉汁を飲んで寢て仕舞つた。朝起きるや否や、もう好からうと思つて、腹の近所へ神經を遣つて、探りを入れて見ると、矢つ張り變だ。何だか自分の胃が朝から自分を裏切らうと工んでゐる樣な不安がある。さて何處が不安だらうと、局所を押へに掛ると、何處も應じない。たゞ曇つた空の樣に、鈍痛が薄く一面に廣がつてゐる。苦い顏をして食堂へ下りて飯を濟まして又室へ歸つてぼんやりしてゐると、河村さんが戶口迄來て、今夜滿鐵のものが主人役になつて貴方がた二三名を扇芳亭へ招待したいからと云ふ叮嚀な御挨拶である。どうも折角ですが、實は是々でと斷ると、さうですか、實は總裁も今夜は所勞で出られませんと答へて歸られた。

河村君が歸るや否や股野が案内もなく遣つて來た。今日は襟の開いた着物を着て、ちやんと白い襯衣と白い襟を掛けてゐるから感心した。股野と少し話してゐる所へ、又御客があらはれた。ボイの持つて來た名刺には東北大學教授橋本左五郎とあつたので、おやと思つた。

橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極樂水の傍で御寺の二階を借りて一所に自炊をしてゐた事がある。其時は間代を拂つて、隔日に牛肉を食つて、一等米を焚いて、夫で月々二圓で濟んだ。尤も牛肉は大きな鍋へ汁を一杯拵へて、其中に浮かして食つた。十錢の牛を七人で食ふのだから、斯うしなければ食ひ樣がなかつたのである。飯は釜から杓つて食つた。高い二階へ大きな釜を揚げるのは難義であつた。

余は此處で橋本と一所に豫備門へ這入る準備をした。橋本は余よりも英語や數學に於て先輩であつた。入學試驗のとき代數が六づかしくつて途方に暮れたから、そつと隣席の橋本から敎へて貰つて、其御蔭でやつと入學した。所が敎へた方の橋本は見事に落第した。入學をした余もすぐ盲腸炎に罹つた。是は每晩寺

の門前へ賣に來る汁粉を、規則の如く毎晩食つたからである。汁粉屋は門前迄來た合圖に、屹度團扇をばたばたと鳴らした。其ばた／＼云ふ音を聞くと、どうしても汁粉を食はずにはゐられなかつた。從つて、余は此汁粉屋の爺の爲に盲腸炎にされたと同然である。

其の後左氏は——當時余等は橋本を呼で、左氏／＼と云つてゐた——左氏は其後追試驗に及第したにはしたが、するかと思ふと又落第した。實際彼は岡山の農家の生れであつた。さうして、何だか下らないと云つて北海道へ行つて農學校へ這入つて仕舞つた。夫から獨逸へ行つた。獨逸へ行つて、何時迄經つても歸らない。とう／＼五年か六年か居た。つまり官費留學の仕舞頃から向ふで暮した事になる。其費用は何うして拵へたものか頓と分らない。

此橋本が不思議にも余より一二ヶ月前に滿鐵の依賴に應じて、蒙古の畜産事狀を調査に來て、其調査を濟まして今大連に歸つた許りの所へ出つ喰はしたのである。顏を見ると、昔から髭の濃い男であつたのだが、其髭が今蒙古と親しい關係が付いた爲、頗る猖獗してゐる。閭を排して這入て來るや否や、どうだ相變らず頑健かねと聞かざるを得なかつた位である。

十四

えゝまあ相變らずでと、橋本は案に相違した落付方である。昔書生時代に這入つて及第だとか落第だとか騷いでゐた時分には決して斯う穩やかでなかつた。彼の鼻の先が反返つてゐる如く、彼は剽輕で且苛辣であつた。余は此鼻の爲によく凹まされた事を記憶してゐる。

其頃は大勢で猿樂町の末富屋といふ下宿に陣取つてゐた。此同勢は前後を通じると約十人近くあつたが、みんな揃ひも揃つた馬鹿の腕白で、勉強を輕蔑するのが自己の天職であるかの如くに心得てゐた。下讀抔は殆んど遣らずに、一學期から一學期へ辛うじて綱渡りをしてゐた。英語は教場で中てられた時に、分らない譯を好い加減に付ける丈であつた。數學は出來る迄塗板の前に立つてゐるのを常としてゐた。余の如きは毎々一時間ぶつ通しに立往生をしたものだ。みんなが、代數書を抱へて今日も脚氣になるかなど云つては出掛けた。

かう云ふ連中だから、大概は級の尻の方に塊まつて、何時でも雜然と陳列されてゐた。余の如きは、入學の當時こそ芳賀矢一の隣に坐つてゐたが、試驗のあるたんびに下落して、仕舞には土俵際からあまり遠くない所でやつと踏み應へてゐた。それでも、みんな得意であつた。級の上にゐるものを見て、なんだ點取がと云つて威張つてゐた位である。さうして、稍ともすると、我々はポテンシャル・エナージーを養ふんだと云つて、無暗に牛肉を喰つて端艇を漕いだ。試驗が濟むと其晩から机を重ねて緣側の隅へ積み上げて、誰も勉強の出來ない樣な工夫をして、比較的廣くなつた座敷へ集つて腕押をやつた。岡野といふ男は何處からか、玩具の大砲を貰つて來て、それをポン／＼座敷の壁へ向つて發射した。壁には穴が澤山開いた。試驗の成績が出ると、一人では恐いからみんなを驅り催して揃つて見に行つた。すると悉く六十代で際どく引つ掛つてゐる。橋本は威勢の好い男だから、ある時詩を作つて連中一同に示した。韻も平仄もない長い詩であつたが、其中に、何ぞ憂へん席序下算の便と云ふ句が出て來たので、誰にも分らなくなつた。段々聞いて見ると席序下算の便とは、席順を上から勘定しないで、下から計算する方が早分りだと云ふ意

味であつた。丸で御籤見た樣な文句である。我々はみんな此御籤に中つてひや／＼してゐた。

其内下算にも上算にも丸で勘定に這入らないものが、ほつ／＼出來て來た。一人消え、二人消えるうちに橋本がゐた。是公がゐた。斯う云ふ自分もゐた。大連で是公に逢つて、此落第の話が出た時、是公は、やあ、あの時貴樣も落第したのかな。そいつは賴母しいやと大いに嬉しがるから、落第だつて、落第の質が違はあ。己のは名譽の負傷だと答へて置いた。

是公だの、余だの、今の旅順の警視總長だのが落ちながら、ぶら下がつてゐる間に、左五丈は決然として北海道へ落ち延びたのである。其落第の張本とも云ふべき彼が、いくら年を取つたつて、斯程に慇懃にならうとは思ひも寄らぬ事であつた。今日は午後から滿鐵の社へ行つて、蒙古旅行に關する話をするんだと云つてゐる。

十五

河村さんの書いて呉れた表を見ると、娛樂機關といふ題目のもとに、倶樂部とか會とか名のつくものが十ばかり竝べてある。中にはゴルフ會だの、ヨット倶樂部だのと、名前からして洒落たのさへ、ちらほら見える。ヨット倶樂部の下に（但し一艘）と括弧で註がついてゐるのは、新設だからまだ一艘しかないといふ意味なんだらう。

參觀すべき場所と云ふ標題のもとには、山城町の大連醫院だの、兒玉町の從事員養成所だの近江町の合宿所だの、濱町の發電所だの、何だの蚊だのみんなで十五六程ある。成程是では大連に一週間位居なけれ

ば、満鐵の事業も一通り觀る譯に行かないと云はれる筈だ。しかも是公は是非共萬遍なくよく觀て行かなくつちやいけないよと命令的に注意するんだから、容易ぢやない。其上よく觀て、何でも氣が付いた事があるなら、さう云ひなさいと、恰も余を視察家扱にするんだから猶更痛み入る。余は手に持つた表に一通り眼を通しながら、傍にゐる股野に、おい少し出て見るかなと云つた。股野は固より余を連れて、大連中ぐる／＼引き廻す氣で來てゐる。尤も別段社から付けて呉れたといふ譯ぢやないんだが、本人の特志で社の用事をすつぽかす了見らしい。さうして何時の間にか、ホテルへ馬車を云ひ付けてゐる。

余は股野と相乘りで立派な馬車を走らして北公園に行つた。と云ふと大層だが、車の輪が五六度回轉すると、もう公園で、公園に這入つたかと思ふと、もう突き拔けて仕舞つた。夫から社員倶樂部と云ふのに連れて行かれて、謠の先生の月給が百五十圓だと云ふ事を聞いて、又馬車へ乘つて、今度は川崎造船所の須田君の所の工場を外から覗き込んで、すぐ隣の事務所に這入つて、須田君に昨日の御禮を述べた。事務所の前がすぐ海で、船渠の中が蒼く澄んでゐる。あれで何噸位の船が這入りますかと聞いたら、三千噸位迄は入れる事が出來ますといふ須田君の答であつた。船渠の入口は四十二尺だとか云つた。余は高い口がまともに水の中に差し込んで、動きたがる波を、じつと締め付けてゐる樣に靜かな船渠の中を、窓から見下しながら、夏の盛りに、此大きな石で疊んだ風呂へ這入つて泳ぎ回つたら嘸結構だらうと思つた。

今度は何處だと股野に聞いて見ると、今度は電氣の工場へ行きませうといふ事である。鐵嶺丸が大連の港へ這入つたとき先づ第一に余の眼に、高く赤く眞直に映じたものは此工場の煙突であつた。船のものはあれが東洋第一の煙突だと云つてゐた。成る程東洋第一の煙突を持つてゐる丈に、中へ這入ると、凄じい

ものである。其一部分では、天井を突き抜いて、青空が見える樣にして、四方の壁を高く積み上げてゐた。屋根の高さを斯く必要があつての事だらうが、青空が煉瓦の上に遠く見える許りか、尋常の會話は到底聞えない位に、恐ろしい音が響いてゐる中に、塵を浴びて立つた時は、妙な心持がした。ある所は足の下も掘り下げて、暗い所に樣々の仕掛が猛烈に活動してゐた。工業世界にも、文學者の頭以上に奇體なものがあるなと感心して、すぐ其棟を飛び出した位である。詮ずるに要領は只凄まじい音を聞いて、同じく凄まじい運動を見たのみである。

牧野は其間を廻り廻つて、おい誰さんは居ないかねと、頻に技師を探してゐた。技師は牧野に捕まる程閑でなかつたと見えて、とう／＼見當らなかつた。

十六

今日は化物屋敷を見て來たと云ふと、田中君が笑ひながら、夏目さん、何故化物屋敷といふんだか譯を知つてゐますかと聞いた。余は固より下級社員合宿所の標本として、化物屋敷の中を一覧した迄で、化物の因縁はまだ詮議してゐなかつた。けれども化物屋敷に是だと云はれた時には、うんさうかと云つて、少しも躊躇なく足を踏込んだ。何故そんな恐ろしい名か、此建物に付纏つてゐるのかと、立ち留まつて疑つて見る暇も何もなかつた。所謂化物屋敷はそれ程陰氣に出來上がつてゐた。出來上つたといふと新規に拵らへた意味を含んでゐるから、此建築の形容としては、寧ろ不適當であるかも知れない。化物屋敷は其位古い色をしてゐる。壁は煉瓦だらうが、外部は一面の灰色で、中には日の透りさうもない、薄暗い空氣を

湛へる如くに思はれた。

余は此屋敷の長い廊下を一階二階三階と幾度か往來した。歩けば固い音がする。階段を上るときは猶更こつ〳〵鳴つた。階段は鐵で出來てゐた。廊下の左右は悉く部屋で、部屋といふ部屋は皆締め切つてあつた。其戸の上に、室の所有者の標札が懸つてゐる。然し暗い光線に慣れた眼で、すぐ其標札を讀まうとすると、判然讀めない位廊下は暗かつた。余は一寸立ち留つて室の中を見る譯には行かないのかねと股野に聞いて見た。股野はすぐ持つてゐた洋杖で右手の戸をとんと叩いた。然しはいとも、這入れとも應へるものはなかつた。股野は又二番目の戸をとん〳〵叩いた。是も中は森としてゐる。股野は毫も辟易した氣色なく無遠慮に其所いら中こつ〳〵叩いて歩いたが、仕舞迄人氣のする室には打つからなかつた。恰も立ち退いた町の中を歩いてゐる樣な感じがした。三階に來た時、細い廊下の曲り角で一人の女が鍋で御菜を煮てゐるのに出逢つた。其所には臺所があつた。化物屋敷では五六軒寄つて一つの臺所を持つてゐるのださうだ。御神さん水は上にありますかと尋ねたら、いえ下から汲んで揚げますと答へた。余は此暗い町内に、便所が何處に幾何あるか不審に思つたが、つい聞きもせず、女の前を行き過ぎて通らうとすると、其方は行き留りで御座いますと注意された。道理で眞闇であつた。

田中君の話によると、此建物は日露戰爭の當時の病院だとか云ふ事である。戰爭が烈しくなつて、負傷者の數が増して來るに從つて、收容した人間に充分の手當が出來ない許でなく、氣の毒ながら見殺しにしなければならない兵士が澤山に出來て、其等の創口から出る怨みの聲が大連中に響き渡る程凄じかつたので、その以後は此一廓を化物屋敷と呼ぶ樣になつた。然し本當だか嘘だか實は僕も保證しないと、田中君

自身が笑つてゐたから、余は尚更保證しない。

たゞ滿鐵の重役が始めて大連に渡つたとき、此化物屋敷に陣を構へた事丈は事實である。其時此建物は化物さへ住みかねる程に荒れ果てゝ、殘燒家屋として、骸骨の如くに突つ立てゐたさうである。陣取つた連中は死物狂で、天候と缺乏と不便に對して戰後の戰爭を開始した。汽車の中で炭を焚いて死に損なつたり、貨車へ乘つて、カンテラを點けて用を足さうとすると、其カンテラが搖振てすぐ消えて仕舞つたり、サイホンを吞むと二三滴口へ這入る丈であとはすぐ氷の棒に變化したり、凡てが探險と同樣であつた。

「清野が毛織の襯衣を半ダース重ねて着たのは彼時だよ」

「清野は驚いて、あれつ限り遣つて來ない」

余は田中君と是公がこんな話をするのを聞いて、つい化物屋敷の事を忘れて仕舞つた。

十七

三階へ上つて見ると豆許りである。只窓際丈が人の通る幅位裸の床になつてゐる。余は靜かに豆と壁の間をぐる／＼廻つて歩いた。氣を付けないと、足の裏で豆を踏み潰す恐れがある上に、人の居ない天井裏を無益に響かすのが苦になつたからである。豆は砂山の如く脚下に起伏してゐる。此方の端から向うの端迄眺めて見ると、隨分と長い豆の山脈が出來上つてゐた。其眞中を通して三ヶ所程に井桁に似た恰好の穴が掘てある。豆は其中から斷えず下へ落ちて行つて、平たく引割られるのださうだ。時々どさつと音がして、三階の一隅に新しい砂山が出來る。是はクーリーが下から豆の袋を背負つて來て、加減の好い場所を

見計らつて、袋の口から、ばらに打ち撒けて行くのである。其時はほうと咽る樣な湯氣が立つて、數へ切れぬ程の豆と豆の間に潛んでゐる塵が一度に踊り上る。

クーリーは大人なしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、たゞ見物するのでさへ心持が好い。彼等の背中に擔いでゐる豆の袋は、米俵の樣に輕いものではないさうである。夫を遙の下から、のそ／＼背負つて來ては三階の上へ空けて行く。空けて行つたかと思ふと又空けに來る。何人掛りで順々に運んでくるのか知れないが、其歩調から態度から時間から、間隔から悉く一樣である。通り路は長い厚板を坂に渡して、下から三階迄を、普請の足場の樣に拵へてある。彼等は此坂の一つを登つて來て、其一つを又下りて行く。上るものと下りるものが左右の坂の途中で顏を見合せても殆んど口を利いた事がない。彼等は舌のない人間の樣に默々として、朝から晩迄、此重い豆の袋を擔ぎ續けに擔いで、三階へ上つては、又三階を下るのである。其沈默と、其規則づくな運動と、其忍耐と其精力とは殆んど運命の影の如くに見える。實際立つて彼等を觀察してゐると、しばらくするうちに妙に考へたくなる位である。

三階から落ちた豆が下へ回るや否や、大きな麻風呂敷が受取つて、忽ち釜の中に運び込む。釜の中で豆を蒸すのは實に早いものである。入れるかと思ふと、すぐ出してゐる。出すときには、風呂敷の四隅を攫んで、濛々と湯氣の立つやつを床の上に放り出す。赤銅の樣な肉の色が煙の間から、汗で光々するのが勇ましく見える。この素裸なクーリーの體格を眺めたとき、余は不圖漢楚軍談を思ひ出した。昔韓信に股を潛らした豪傑は屹度こんな連中に違ひない。彼等は胴から上の筋肉を逞しく露はして、大きな足に牛の生皮を縫合せた堅い靴を穿いてゐる。蒸した豆を藺で圍んで、丸い枠を上から穿めて、二尺許の高さになつ

た時、クーリーは忽ち此轆の仕掛の中に這入つて、ぐん／＼豆を踏み始める。さうして、夫を螺旋の縮棒の下に押込んで、把をぐる／＼と廻し始める。油は同時に搾られて床下の溝にどろ／＼に流れ込む。豆は全くの粕丈になつて仕舞ふ。凡てで約二三分の仕事である。

此油が喞筒の力で一丈四方もあらうといふ大きな鐵の槽に吸上げられて、靜に重さうに淀んでゐる所を、二階へ上がつて三つも四つも覗き込んだときには、恐ろしくなつた。この中に落ちて死ぬ事がありますかと、案内に聞いたら、案内は平氣な顔をして、まあ滅多に落ちる樣な事はありませんねと答へたが、余はどうしても落ちさうな氣がしてならなかつた。

クーリーは實に大事に働きますね、且非常に靜粛だ、と出掛に感心すると、案内は、とても日本人には眞似も出來ません。あれで一日五六錢で食つてゐるんですからね。どうしてあゝ強いのだか全く分りませんと、左も呆れた樣に云つて聞かせた。

十八

股野が先生私の宅へ來なさらんか、八疊の間が空いてゐます、夜具も蒲團もあります。ホテルにゐるより呑氣で好いでせうと親切に云つて呉れる。何でも股野の家の座敷からは、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取る樣に眺められるのみならず、海の向うに連なる突兀嶂たる山脈さへ、坐つてゐると、窓の中に向うから這入つて來て呉れるといふ重寶な家なんださうである。

始めのうちは股野の自慢を好加減に聞き流して、左樣か左樣かと答へてゐたが、折角の好意ではあるし、

もと〳〵氣の多い男だから、都合によつては少し厄介になつても好い位に思つて、序の時是公に此話をすると、そんな所へ行つちや不可んと忽ち叱られて仕舞つた。もしホテルが厭なら、おれの宅へ來い、あの部屋へ入れてやるからと云ふんで、書齋の次の疊の敷いてある間を見せて呉れるんだが、別に西洋流の宿屋に愛想をつかした譯でもないんだから、ぢや厄介にならうとも云はなかつた。

是公は書齋の大きな椅子の上に胡坐をかいて、河豚の干物を噛つて酒を呑んでゐる。どうして、あんな堅いものが胃に收容出來るかと思ふと、實に恐ろしくなる。さうかうする内に、おいゼムを持つてゐるなら少し呉れ、何だかおれも胃が悪くなつたやうだと手を出した。さうして、胃が悪いときは、河豚の干物でも何でも、ぐん〳〵喰つて、胃病を驚かしてやらなければ駄目だ。さうすれば屹度癒ると云つた。醉つてゐたに違ない。

余はポッケットから注文の藥を出して相手にあてがつた。これは二三日前是公と一所に馬車に乗つて、市中を乗り廻した時、是公の御者から二十錢借りて大連の藥屋で買つたものである。其時は是公の御者に對する態度の頗る叮嚀なのに氣が付いて少しく驚かされた。君ちよつと其處いらの藥屋へ寄つて、ゼムを買つて遣て下さいと云ふんだから非凡である。

君は御者に對して叮嚀過ぎるよと忠告して遣つたら、うんあの時の二十錢をまだ拂はなかつたつけと思ひ出した樣に河豚の干物を又噛つてゐた。

是公の御者には廿錢借がある丈だが、其別當に至つては全く奇拔である。第一日本人ぢやない。辮髪を自慢さうに垂らして、黄色の洋袴に羅紗の長靴を穿いて、手に三尺程の拂子をぶら下げてゐる。さうして

馬の先へ立つて駈ける。よくあんな紳士的な服裝をして汗も出さずに駈られる事だと思ふ位に早く駈ける。尤も足も長かつた。身の丈は六尺近くある

別當と御者は此位にして又股野にかへるが、余は是公に叱られたため、とう〳〵股野の家へは移らなかつた。けれども遊びには行つた。成程小山の上に建てられた好い社宅である。尤も一軒立ではない。長い棟がいくつも灰色に並んでゐるうちの一番はづれの棟の、一番最後の番號の其二階が彼の實際の領分であつた。岡の下から見ると、丸で英國の避暑地へ行つた樣だとある西洋人が評した程、外部は厚い壁で洋式に出來てゐるが、中には日本の香がする奇麗な疊が敷いてあつた。成程景色が好い。大連の市街が見える、大連の海が見える、大連の向うの山が見える。股野の家には勿體ない位である。余は其處で村井君に逢つて、股野の細君に逢つて、手厚い御馳走になつて歸つた。

十九

支那の宿屋を一つ見せうと云ひながら、股野は路の左側にある戸を開けて中へ這入つた。其處には日本人が二三人程机を並べて事務を執つてゐた。股野は其うちの紺の洋服を着た人を捕まへて、話を始めた。君此處は宿屋だらうと聞いてゐる。宿屋ぢやないよと立ちながら返事をしてゐる。何だか樣子が變になつて來た。やがて余は此紺服の人に紹介された。紹介されて見ると、是は商業學校出の谷村君で、無論旅屋の亭主ではなかつた。谷村君は此地で支那人と組んで豆の商賣を營んでゐる。從つて取引上の必要があつて、奥の方から大連へ出て來る豆の荷主と接觸しなければならないのだが、此方の習慣として、斯う云ふ

荷主は決して普通の旅籠を取らない。出て來れば乾度取引先へ宿つて、用の濟む迄は何時迄でも其處に滯在してゐる。しかも其數は一人や二人ではない。從て谷村君の奧座敷は一種の宿屋見た樣な組織に出來てゐる。

ちや其奧座敷を一寸拜見出來ますかと云ふと、谷村君はさあ／＼と自分から席を離れて、快よく案内に立たれる。余は谷村君の後へ追いて事務室の裏へ出た。股野も食付いて出た。裏は眞四角な庭になつてゐる。無論樹も草も花も見當らない。たゞの平たい場所である。其處を突き拔けた正面の座敷が應接間であつた。應接間の入口は低い板間で、突當りの高い所に蒲團が敷いてある。其上に胯を掛けて談判をするのださうだが、横着な事には大きな括枕さへ備へ付けてある。然し臂を突く爲か、頭を載せる爲かは聞き糺して見なかつた。彼等は談判をし乍ら阿片を飲む。でなければ煙草を吸ふ。其煙管は煙管と云ふよりも一種の器械と評した方が好い位である。錫の胴に水を盛つて雁首から洩れる煙が此水の中を通つて吸口迄昇つてくる仕掛なのだから、慣ないうちは水を吸ひ上て口中へ入れる恐れがある。一服遣つて御覽なさいと勸められたから、遣つて見たが、ごほ／＼音がして丸で腦を呑む樣な心持がした。

二階が荷主の室だと云ふんで、二階へ上つて見ると、成程室が澤山並んでゐる。其中の一つでは四人で博奕を打つてゐた。博奕の道具は頗る雅なものであつた。厚みも大きさも將棋の飛車角位に當る札を五六十枚程四人で分て、それを色々に並べ更へて勝負を決してゐた。其札は磨いた竹に薄い象牙と背中合せに接いだもので、其象牙の方には色々の模樣が彫刻してあつた。此模樣の揃つた札を何枚か並て出すと勝になる樣にも思はれたが、要するに、竹と象牙がぱち／＼觸れて鳴る許りで、何處が博奕なんだか、實は

一向鳴らなかつた。たゞ此象牙と竹を接ぎ合はした札を二三枚貰つて來たかつた。

一つの室では五六人寄つて、そのうちの一人が笛を吹くのを聞いてゐた。幕を開て首を出したら、ぼたりと笛を歇めて仕舞つた。又吹き始めるかと思つて、しばらく室の中に立つてゐたが、とう〳〵吹かなかつた。室の中には妙な書が麗々と壁に貼り付けてある。いづれも下手いものだのに、何々先生、爲に何々書すと云つた樣に勿體振つた許であつた。股野が何か云ふと、向うの支那人も何か云ふ。然し兩方の云ふ事は兩方へ通じない樣である。

二十

波止場から上つて眞直に行くと、大連の町へ出る。それを眞直に行かずに、すぐ左へ折れて長い土塀の影を向うへ、三四町通り越た所に相生さんの家がある。西洋館の二階を客間にして古い佛像やら鏡やら銅器陶器の類を奇麗に飾つてゐるから、客間を見た丈ではたゞ一通りの風流人としか見えない。相生さんは滿鐵の社員として埠頭事務所の取締である。

もつと卑近な言葉で云ふと、荷物の揚卸に使はれる仲仕の親方をやつてゐる。かつて門司の勞働者が三井に對してストライキを遣つたときに、相生さんが進んで其衝に當つた爲、手際よく解決が着いたとか云ふので、滿鐵から仲仕の親分として招聘された樣なものである。實際相生さんは親分氣質に出來上つてゐる。滿鐵から任用の話があつたとき、子供が病氣で危篤であつたのに、相生さんはさつさと大連へ來て仕舞つた。來て一週間すると子供が死んだと云ふ便りがあつた。相生さんは内地を去る時、既に此悲報を手

にする覺悟をしてゐたのださうだ。

相生さんは大連に來るや否や、仲仕其他凡て埠頭に關する事務を取り扱ふ連中を集めて此處に一部落を築き上げた。相生さんの家を通り越すと、左右に並んでゐる建物は皆自分の經營になつたもの許である。其中には圖書館がある。倶樂部がある。運動場がある。演武場がある。部下の住宅は無論ある。倶樂部では玉を突いてゐた。圖書館には沙翁全集があつた。ポルグレーヴの經濟字彙があつた。余の著書も二三冊あつた。

此處は柔道の道場に使つてゐますが、時によると講談を遣つたり演說を遣つたりしますと云ふ相生さん自身の說明に追いて、中を覗き込むと、成程道場には丁度好い建物がある。其奧に高座が出來てゐて、何時でも寄席もしくは講演を開く樣な設備もある。講演てどんな講演ですかと聞き返したら、相生さんは、まあ内地から來られた人だとか何とかいふのを頼んでやりますと答へられた。ことによると、遠からぬうちに捕まつて、此處へ引つ張り出されはしまいかと、其時すぐ氣が付いたが、眞逆私はどうぞ廢しにして下さいと、頼まれもしないうちに斷るのも失禮だと思つて、はあ成程と首肯て通り過ぎた。

最後に木の香の高い二階建の一棟の前に出た。是が共同生活を遣してゐる所だと、相生さんが先へ這入る中は勸工場の樣に眞中を往來にして、同じく勸工場の見世に當る所を長屋の上り口にしてある。だから長屋と長屋とは壁一重で仕切られながら、約一丁も並んでゐる許か、三尺の往來を越すとすぐ向うの家になる。上り口を枕にして寢れば、吸付莨の遣り取り位は出來る程近い。相生さんが先へ立つて、此狹い往來を通ると、裁縫をしたり、子供を寢かしたりしてゐる神さん達が、みんな叮嚀に挨拶をする。然し中には

氣が付かずに何か話して居るやうに見える。

此部落に住んでゐる人間が總掛りになつた上に、其何十倍か何百倍のクーリーを使つても、豆の出盛りには持て餘す程荷が後から〳〵と出てくる。相生さんの話によると、多い時は着荷の量が一日にして五千噸あるさうである。是がため去年同期に持ち越した噸數は四萬噸で、今年はそれが十五萬噸に上つたと聞いた。

南北千五百尺東西四千二百尺の埠頭の側に此位豆を積んだら隨分盛なものだらう。

二十一

旅順から電話が掛つて此方へは何時來るかといふ問合はせである。おい誰が掛けて呉れるんだらうなと橋本に聞いて見ると、橋本は左樣だなあと云ふ丈で要領を得ない。おい名前は分らないのかと已を得ずボイに尋ね返したら、ボイは依然として、たゞ民政署だと云つて掛けて參りましたと同じ事を繰返してゐる。大方友熊だらう位に橋本と二人で見當をつけて返事をさせた。是が白仁長官の好意から出た聞き合せであつた事は旅順に着いて後始めて知つた。

旅順には佐藤友熊と云ふ舊友があつて、警視總長と云ふ嚴しい役を勤めてゐる。これは友熊の名前が廣告する通りの薩州人で、顔も氣質も看板の如く精悍に出來上がつてゐる。始めて彼を知つたのは駿河臺の成立學舍といふ汚ない學校で、其學校へは佐藤も余も豫備門に這入る準備の爲めに通學したのであるから餘程古い事になる。佐藤は其頃備組に、脛の出る袴を穿いて遣つて來た。余の如く東京に生れたものゝ眼

には、此姿が頗る異樣に感ぜられた。丁度白虎隊の一人が、腹を切り損なつて、入學試驗を受に東京に出たとしか思はれなかつた。教場へは無論下駄を穿いた儘上つた。尤も是は佐藤許ぢやない。我等も悉く下駄の儘あがつた。上草履や素足で歩く樣な學校ぢやないのだから仕方がない。床に穴が開いてゐて、氣を付けないと、椽の下へ落ちる拍子に、向脛を擂剝く丈か、普通の往來より惡い位のものである。

古い屋敷を其儘學校に用ひてゐるので玄關からが既に教場であつた。ある雨の降る日余は此玄關に上つて時間の來るのを待つてゐると、黑い桐油を着て饅頭笠を被つた郵便脚夫が門から這入つて來た。不思議な事に此郵便屋が鐵瓶を提げてゐる。しかも全くの素足である。足袋は無論の事、草鞋さへ穿いてゐない。さうして、普通なら玄關の前へ來て、郵便と大きな聲を出すべき所を、無言の儘すた〳〵敷臺から教場の中へ這入つて來た。此郵便屋が即ち佐藤であつたので大いに感心した。何故鐵瓶を提げてゐたものか其理由は今日迄遂に聞く機會がない。

其後佐藤は成立學舍の寄宿へ這入つた。そこで賄征伐を遣つた時、何うした機勢か額に創をして、しばらくの間白布で頭を卷いてゐたが、それが、後鉢卷の樣に如何にも勇ましく見えた。賄に擲られたなと調戲つて苛い目に逢つたので今に其颯爽たる姿を覺えてゐる。

佐藤は其頃頭に毛の乏い男であつた。無論老朽した禿ではないのだが、まあ土質の惡い草原の樣に、一面に青々とは茂らなかつたのである。漢語でいふと短髮種々とでも形容したら好いのか知れない。風が吹けば毛の方で一本々々に靡く傾があつた。此頭は象牙門へ這入つても黑くならなかつた。夫で皆して佐藤の事を寒雀々々と囃してゐた。當時余は寒雀とはどんなものか知らなかつた。けれども、佐藤の頭の樣な

ものが寒雀なんだらうと思つて、一所になつて矢張り寒雀々々と調戯つた。此渾名を發明した男は其後技師になつて今は北海道にゐる。

話が前後する樣だが、旅順に來て十何年振かに佐藤に逢つて、例の頭を注意して見ると、不思議な事に、其頭には萬遍なく綿密に毛が生えてゐた。しかも黑いのばかりではなかつた。近頃は非常に繁殖の爲めに、斯う短く刈つてゐるんだと云つて、三分刈の濃い頭を笑ひながら撫でて見せた。旅順から二度目の電話が掛つた翌日の朝、橋本と余は、此舊友に逢ふ爲、又日露の戰跡を觀る爲、大連から汽車に乘つた。乘る時、是公が友達によろしくと云つた。是公は何か用事があつたと見えて、國澤技師と二人で停車場の構内を橫切つて妙な方角へ向いて步いて行つた。やがて二人の影は物に遮ぎられて、汽車の窓から見えなくなつた。さうして滿洲に有名な高粱の色が始めて眼中に映じ出した。汽車は廣い野の中に出たのである。

二十二

おい旅順に着いたら久し振りに日本流の宿屋へ泊らうかと橋本に相談を掛けるとさうだな浴衣を着てごろごろするのも好いねといふ同意である。橋本は新しく蒙古から歸つたので、頻りに支那宿に降參した話を始めた。其支那宿には、名は塞北に馳せ、味は江南を壓す抔といふ廣告の文字がべた〳〵壁に貼り付けてあるさうだ。橋本はかう云ふ文句を澤山手帳に控へてゐる。外に使ひ路のない文句だもんだから、汽車の中で、それを殘らず余に讀んで聞かせて仕舞つた。二人は笑ひながら日本流の奇麗な宿屋を想像して旅

順のプラットフォームに降りた。降りると其處に馬車がある。我々の名前を聞くものがある。
此馬車が民政署の馬車で、我々を尋ねて呉れた人が、渡邊秘書であるといふ事を發見した時は兩人とも大分恐縮した。橋本を振り返ると相變らず鼻の先を反らして、臺灣パナマだか何だかぺこ／＼になつた帽子を被つてゐる。おい宿屋は何うするんだいと小さな聲で聞くと、うん左樣さなと云つたが、其内二人とも馬車へ乘らなければならない段になつた。一體橋本と一所にあるくときは、何でも橋本が進んで始末を付けて呉れる事に昔から極つてゐるんだから此際もどうかするだらうと思つて放つて置いた。すると豫想通り、日本流の宿屋へ行く積で來たんですがと渡邊さんに相談し始めた。所が渡邊さんはどうも御泊りになられる樣な日本の宿屋は一軒もありませんから、矢つ張り大和ホテルに爲さつた方が好いでせうと忠告してゐる。

やがて馬車は新市街の方へ向いて動き出した。二人は十五分の後ホテルの二階に導かれて、行き通ひの出來る室を二つ竝べて取つた。そこで革鞄の中から刷毛を出して塵だらけの服を拂つたあとで、しばらく休息のため安樂椅子に腰を卸して見ると、急に氣が付いた樣に四邊が森閑としてゐる。ホテルの中には一人も客がゐない樣に見える。ホテルの外にも一切人が住んでゐる樣には思はれない。開廊へ出て往來を眺めると、往來は大分廣い。手摺の眞下にある人道の石の中から草が生えて、莖の長さが一尺餘りになつたのが二三本見える。日中だけれども蟲の音が微かに聞える。隣は主のない家と見えて、締め切つた門やら戸やらに蔦が一面に絡んでゐる。往來を隔てゝ向うを見ると、ホテルよりは廣い赤煉瓦の家が一棟ある。けれども煉瓦が積んである丈で屋根も葺いてなければ窓硝子も付いてない。足場に使つた材木さへ處々に

殘つてゐる位の半建である。淋しい事には、工事を中止してから何年になるか知らないが、何年になつても此儘の姿で、到底變る事はあるまいと云ふ感じが起る。さうして其感じが家にも往來にも、美しい空にも、一面に充ちてゐる。余は開廊の手欄を掌で抑へながら、奥にゐる橋本に、淋しいなあと云つた。旅順の港は鏡の如く靑綠に光つた。港を圍む山は悉く坊主であつた。

丸で廢墟だと思ひながら、又室の中に這入ると、寢床には雪の樣な敷布が掛つてゐる。床には柔かい絨氈が敷いてある。豐かな安樂椅子が据ゑてある。器物は悉く新式である。一切が整つてゐる。外と内とは全く反對である。滿鐵の經營にかゝる此ホテルは、固より算盤を取つての儲け仕事でないと云ふ事を思ひ出す迄は、どうしても矛盾の念が頭を離れなかつた。

食堂に下りて、窓の外に咲いてゐる草花の香を嗅ぎながら、橋本と二人靜かに午餐の卓に着いたときは、機會があつたら、此處へ來て一夏氣樂に暮したいと思つた。

二十三

旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、圓柱の樣な高い塔が見えた。それが餘り高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈に仰向かなくては頂點迄見上げる譯に行かなかつた。

馬車が新市街を通り越して又此塔の眞下に出た時に、これが白玉山で、あの上の高い塔が表忠塔だと說明して呉れた。よく見ると高い燈臺の樣な恰好である。二百何尺とか云ふ話であつた。此山の麓を通り越

して、舊市街を抜けると、又山路に掛る。其登り口を少し右へ這入つた所に、戰利品陳列所がある。佐藤は第一番にそれを見せる積で兩人を引張つて來た。

陳列所は固より山の上の一軒家で、其山には樹と名の付く程の青いものが一本も茂つてゐないのだから、甚だ淋しい。當時の戰爭に從事したと云ふ中尉のA君がたゞ獨り番をしてゐる。此將官は陳列所に幾種となく並べてある戰利品に就て、一々叮嚀に説明の勞を取つて呉れるのみならず、兩人を鷄冠山の上迄連れて行つて、草も木もない高い所から、遙の麓を指さしながら、自分の從軍當時の實歴譚を悉く語つて聞かせて呉れた人である。始め佐藤から此案内を依賴したときには、今日は些と差支があるから四時頃迄ならと云ふ條件であつたが、山の出鼻へ立て洋劍を鞭の代りにして、彼方此方と方角を教へる段になると、肝心の要事は丸で其方退にして、滿洲の赤い日が、向うの山の頂に、大きくなつて近づく迄歸らうとは云はなかつた。もし忘れたんぢや氣の毒だと思つて、此方から注意すると、何宜う御座います、構ひませんと斷りながら、益々講釋をしてくれる。あんまり不思議だから、全體何の御用事が御有なのですかと、詮索がましからぬ程度に聞いて見ると、實は妻が病氣でと云ふ返事である。流石横着な兩人も、此際丈は、それぢや御迷惑でも折角だから序にもう少し案内を願はうと云ふ氣にもなれなかつた。言葉は無論出なかつた。長い日が山の途中で暮れて、電氣の力を借りなければ人の顔が判然分らない頃になつて、我々の馬車が漸く舊市街迄戻つた時、中尉はある煉瓦塀の所で、それぢや私は此處で失禮しますと挨拶して、馬車から下りて、門の中へ急いで這入つて行かれた。此煉瓦の塀を回らした一構は病院であつた。さうして中尉の細君は此病院の一室に寢て居たのである。

是程世話になり、面倒を掛けた人の名前を忘れるのは甚だ濟まん事だが、どうしても思ひ出せない。佐藤に、よろしくと傳言を頼んだ時には、たゞ、あの中尉君と書いた。此處に某中尉などと餘所々々しく取り扱ふのはあまり失禮だから、已を得ずA君として置いた。

A君の親切に説明して呉れた戰利品の一々を敍述したら、此陳列場丈の記載でも、二十枚や三十枚の紙數では足るまいと思ふが、殘念な事に大抵忘れて仕舞つた。然したつた一つ覺えてゐるものがある。夫は女の穿いた靴の片足である。地は繻子で、色は薄鼠であつた。其他の手投彈や、鐵條網や、魚形水雷や、僞造の大砲は、たゞ單なる言葉になつて、今は頭の底に判然殘つてゐないが、此一足の靴丈は色と云ひ、形と云ひ、何時なん時でも意志の起り次第鮮に思ひ浮べる事が出來る。

戰爭後ある露西亞の士官が此陳列場を一覽の爲めに來て、恰度此處迄來た事がある。其時彼は此靴を一目觀て非常に驚いたさうだ。さうしてA君に、これは自分の妻の穿いてゐたものであると云つて聞かしたさうだ。此小さな白い華奢な靴の所有者は、戰爭の際に死んで仕舞つたのか、又はいまだに生存してゐるものか。その點はつい聞き洩らした。

二十四

今迄は白馬を着けた佐藤の馬車に澄まして乘つてゐたが、山へ掛るや否や、例の泥だらけの掘出しものの中へ放り込まれて仕舞つた。到底普通の馬車では上れないと云ふんだから已を得ない。夫でも露西亞人丈あつて、眼にあまる山の悉くに砲臺を構へて、其砲臺の悉くに、馬車を驅つて頂邊迄登れる樣な廣い路

を付けたのは感心ですとＡ君が語られる。實際其當時は奇麗な馬車を傷めずに、心持よく砲臺のある地點迄乗り付けられたものと見える。所が戰爭が濟んで往復の必要がなくなつたので、折角出來た山路に手を入れる機會を失つた爲、我々如き物數奇は、斯樣に零落した馬車をさへ、時々復活させる始末になるのである。元來旅順程小山が四方に割據して、禿頭を炎天に曝し合つてゐる所はない。樹が乏しい土質へ、遠慮のない強雨がどつと突き通ると、傾斜の多い山路の側面が、すぐ往來へ崩れ出す。其崩れるものが決して尋常の土ぢやない。堅い石である。しかも頑固に角張つてゐる。ある所抔は、五寸から一尺程もあらうと云ふ火打石の爲に、累々と往來を塞がれてゐる。零落した馬車は容赦なく蹴動して其上を通るのだから、凸凹の多い川床を渡るよりも危險である。二百三高地へ行く途中などでは、とう／＼此火打石に降參して、馬車から下りて仕舞つた。さうして痛い腹を抱へながら、膏汗になつて歩いた位である。鞍形山を下りるとき、馬の足搔が何だか變になつたので、氣を付けて見ると、左の前足の爪の中に大きな石が一杯に詰つてゐた。餘程厚い石と見えて爪から餘つた先が一寸程もある。從つて馬は一寸がた跛を引いて車體を前へ運んで行く譯になる。廂から首を延ばして、此樣子を見た時は、安んじて車に乘つてゐるのが氣の毒な位、馬に對して痛わしい心持がした。御者に注意してやると、御者は支那語で何とか云ひながら、鞭を棄てゝ下へ下りたが、非常に固く詰つてゐたと見えて、叩いても引つ張つても石が取れないので、又のそのそ御者臺へ上がつた。さうして、後にゐる余の方を振り返て、にや／＼笑ひながら、又鞭を鳴らし出した。馬も存外平氣なもので、其儘とう／＼大和ホテル迄歸つて來た。

橋本と余は斯う云ふ馬車の中で、斯う云ふ路の上に搖振られべく舊市街から出立した。あれがステッセ

ル將軍の家でと云ふのを遠くから見ると、中々立派に出來てゐる。戰爭の烈しくならない時は、將軍が見事な馬車を驅つて其處いらを乘り廻してゐるのが遙の先から見えたさうである。A君の指して敎へられた中で、たゞ一つ質素な板圍の小さい家があつた。それが丸で日本の內地で見る普通の木造なのだから珍らしかつた。何とか云ふ有名な將軍の住宅だと說明されたが、不幸にして其有名な將軍の名を忘れて仕舞つた。何でも非常に人望のある人で、戰爭のときも一番先に打死をしたのださうである。あゝ云ふ質素の家に住んで居られたのも、一つは人望のあつた原因になつてゐるのでありませうとA君は丁寧に敬慕の意を表される。此將軍は戰爭丈には熱心で、外の事には餘程無頓着であつた人らしい。此邊にある露國の將軍達の住宅は皆それ相應に立派なもの許である。新市街の白仁長官の家を訪ねた時、結構な舊住居だが、もとは誰の居た所ですかと聞いたら、何でもある大佐の家ださうですと答へられた。斯う云ふ家に住んで、斯ういふ景色を眼の下に見れば、內地を離れる賠償には充分なりますねと云つたら、白仁君も笑ひながら、日本ぢや到底這入れませんと云はれた位である。

其內馬車は無鐵砲に山鼻を上つて、旅順の市街を遙の下に打遣る樣になつた。A君は坂の途中で車を留めて、私は近路を步いて、お先へ行つて御待ち申しますと云ひながら、左手の急な細路をすん／＼登つて行つた。我々の車は又のそ／＼動き出した。

二十五

下を見下すと、山の側面は夫程急でないが、樹と名の付く樣な青いものは丸で眸を遮らない。一眼に麓

迄透かされるのみならず、麓からさき一里餘の畠が眞直に脚の下に集まつて來る。此邊の空氣は內地より も遙に澄んでゐるから、遠くのものが、つい鼻の先にある樣に鮮である。其うちで高粱の色が一番多く眼を染めた。

あの先に、小指の頭の樣な小さい白いものが見えるでせう、あすこから此方の方へ向いて對壕を掘出したのですとA君が遠くの方を指さしながら云つた。此邊に穴を掘るのは石を割ると一般なのだから一町掘るのだつて容易な事ではない。現に外濠から壕道へ通ずる路をつけるとき抔は、朝から晩迄一日働いて四十五サンチ掘つたのが一番の手柄であつたさうだ。

余は余の立つてゐる高い山の鼻と、遠くの先にある白いものとを見較べて、其中間に横はる距離を胸算用で割り出して見て、軍人の根氣の好いのに悉く敬服した。全體何處迄掘つて來たのですかと聞き返すと、つい其處ですと洋劍を向けて數へてくれた。何でも九月二日から十月二十日とか迄掘つてゐたと云ふのだから恐るべき忍耐である。其時敵も砲臺の方から反對壕道と云ふのを掘つて來た。日本の兵卒が例の如く工事をしてゐると何處かでかん〳〵石を割る音が聞えたので、敵も暗い中を一寸二寸と近寄つて來た事が知れたのだと云ふ。爆發藥の御蔭で外濠を潰したのは此時の事でありますと、中尉は其潰れた土山の上に立つて我々を顧みた。我々も無論其上に立つてゐる。此下を掘ればいくらでも死骸が出て來るのだと云ふ。

土山の一隅が少し缺けて、下の方に暗い穴が半分見える。其天井が厚さ六尺もあらうと云ふセメントで出來上つてゐる。身を横にして、其穴に這ひ込みながら、だら〳〵と石の廻廊に降りた時に、仰向いて見て始めて其堅固なのに氣が付いた。外濠を崩した上に、此厚い壁を破壞しなければ、砲臺を何うする事も

出来ないのは攻手に取つて非常な困難である。しかし此小さな裂け目から無理に割り込んで、一寸二寸とむり／＼にセメントで築上げた坑道を占領するに至つては、全く人間以上の辛抱比べに違ない。其時両軍の兵士は、此暗い中で、僅の仕切りを界に、たゞ一尺程の距離を取つて戦をした。仕切は土嚢を積んで作つたとかA君から聞いた様に覚えてゐる。上から頭を出せばすぐ撃たれるから身體を隠して銃射したさうだ。それに疲れると鐵砲をやめて、両側で話を遣つた事もあると云つた。酒があるなら呉れと強請つたり、死體の收容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩は已めにしやうと相談したり、色々の事を云ひ合つたと云ふ話である。

二人は暗い廻廊を這ひ出して、坊主山の上に立つた。日は遠き微なる様に明かるく坊主山を照らしてゐる。野菊に似た小さな花が處々に見える。凝と目を凝して佇んでゐると、微かに蟲の音がする。草の裏で鳴いてゐるのか、崩れ掛つた壕内で鳴いてゐるのか分らなかつた。向ふの方に支那人の影が二人見えたが、我我の姿を認めるや否や、草の中に隠れた。あゝ遣つて、何か掘りに來るんです。捕まると怖いものだから、すぐに逃げます、中々取り押へるのが困難ですとA君が苦笑した。

後側へ回ると廣い空場の中に立派な二階建の兵舎がある。もとは橋を掛けて渡つたものと思はれるが、今では下りる事も出來ない。兵舎の脊はもとより、山に圍はれて、外からは見えなくなつてゐる。三人は空濠を横に通り越して稍高く上つた。とう／＼四方にあるものは山の頂許になつた。さうして夫が一つ殘らず昔の砲臺であつた。中尉はそれ等の名前を悉く諳んじてゐた。余は遮るものゝない高い空の真下に立つて、数限りもない山の脊を見渡ながら、砲臺巡りも容易な事ではないと思つた。

二十六

大連に着いてから二三日すると、滿洲日々の伊藤君から滯留中に是非一度講演をやつて貰ひたいといふ依頼であつた。えゝ都合が出來ればと受合つた樣な又斷つた樣な輕い挨拶をして旅順に來た。すると其伊藤君が我々より一日前に同じ大和ホテルに泊つてゐたので、たゞ、やあ來てゐるね位では事が濟まなくなつた。伊藤君の話によると、余の承諾を得て講演を開くと云ふ事を、もう自分の新聞に廣告して仕舞つたと云ふんだから、忽ち弱つた。何うしても遣らなければならない樣に伊藤君は頼むし、何だか遣れさうもない氣分ではあるし、かた〴〵安樂椅子に尻を埋めて、苦く澁り出した。すると橋本がにや〳〵笑ひながら、まあ遣つてやるさと傍から餘計な事を云ふ。實を云ふと、講演は馬車でホテルに着くや否や、此處の和木君からも頼まれてゐる。尤も此方は暇がないので、頼まれ放しの體であるが、大連に歸ればもう多忙らしく見せる譯には行かない。橋本は其處をよく見破つてゐるので、君さう云ふときには快よく承諾するものだとか、君の樣な人は遣る義務があるさとか、色々な口を出す。余の大連で喋舌らせられたのは全く此男の御蔭である。しかも短い時日のうちに二遍も遣らせられた。その内の一遍では、云ふ事が無くつて仕方がなかつたから、私は今晩、何故講演といふものが、さう容易に出來るものでないか、卽ち講演が出來ない譯を講演致しますと云つて、妙な事を辯じて仕舞つた。それを是公が聞きに來てゐて、うん貴樣は中々旨い、是から何處へ出て演說しやうと勝手だ、おれが許して遣ると評したから難有い。けれども勸告の本人たる橋本は、平氣な顏をして、何處か遊んで歩いてゐて聞きに來なかつた。其癖營口で又頼まれ

ると早速、君遣るさ、折角頼むんだものと例の通り遣り出したので、已を得ず痛い腹の上に掛けてゐた蒲團を跳ね退けて、演說をしに行つた。其代りおれが先へ遣るよと斷つて、橋本のは聞かずに、すぐ宿屋へ歸つて來て、又腹の上に蒲團を掛けてゐた。橋本は斯うだと云ふ所を見ると、君演說を遣つてる間は苦しいか抔と氣樂な質問をする。尤も招待を斷つたり何かするときには、いや實際此男は胃病で何時でも證人に立つて呉れた。して見ると、橋本はたゞ演說に對してだけ冷刻なのかも知れない。奉天でも危うく高い所へ乘せられる所を、一日日取が狂つた爲、如何な橋本にも、君頼まれたときには遣つてやるべきだよと繰返す餘地がなかつた。京城では宿屋が前後した上に、宿屋さへ違つたものだから、泰然と講演を謝絶する餘裕がなかつた。是は偶に橋本の居なかつた御蔭である。

面白い事に、此演說の勸誘家に、其後札幌へ歸るや否や、自身と烈しい胃病に罹つて、急に苦しみ出した。夫で普通ならば毎週十時間餘も講義を持たせられる所を、僅一時間に減らして貰つて、其一時間が濟むとすぐに藥を呑むさうだ。旅行中は君の病氣である事を知りながら、無理に講演を勸めて大いに惡かつた。何事も自分で經驗しないうちは分らぬもので、斯うして胃病に惱まされて始めて氣が付いたが、痛いときに演說などが出來る譯のものでは、決してない。君があの際衝つて演壇に立つたのは實際感心である、と大いに褒めたり詫まつたりして來た。實際橋本の云ふ通りである。然し果して橋本の推察する程胃が痛かつたら、如何な余も、いくら折角だから君出るが好いよを繰返されたつて、遂に講演を斷つて仕舞つたらう。

二十七

白仁さんから正餐の御馳走になつたときは、民政部内の諸君が大分見えた。みんな揃つてカーキー色の制服を着てゐた。食事が済んで別室へ戻つて話してゐると佐藤が、あしたは朝のうち二百三高地の方を見たら好からう、案内を出すからと云つて呉れる。余も好からうと答へた。すると、大した案内にも及ぶまいと笑ひながら相談を掛けた。我々は一私人で、たゞ遊覧に来たのだから、公の職務を帯びてゐる人を使つては済まないが、折角案内を付けて呉れると云ふなら、小使でも何でも構はない。非番か閑散の人を一人世話して呉れと頼んだ。是は正直恐れ入つた本当の謙遜である。其時佐藤は懐中から自分の名刺を出して、端の方に鉛筆で何か書いて、ぢや明日の朝八時に此人が来るから、来たら一所に行くが好いと云つて分れた。

明日の朝の八時は例の通り強い日が空にも山にも港にも一面に輝いてゐた。馬車を棄てゝ山に掛つたとき抔は、其強い日の光が毛孔から総身に浸込む様に空気が澄徹してゐた。相変らず樹のない山で、山の上には日がある許だから、眼の向く所は、左右ともに、又前後ともに、何處迄も明らかである。其明かな足元から、ぱつと音がして、何物だか飛び出した。案内の市川君が鶉ですと云つたので始めてさうかと気がついた位早く、鶉は眼を掠めて、空濶の中に消えて仕舞つた。其迹を見上げると、遙たる大きい鏡である。

其時我々はもう頂近くにゐた。此處いらへも砲丸が飛んで来たんでせうなと聞くと、此處で遣られたものは、多く味方の砲丸自身のためです。それも砲丸自身のためと云ふよりか、砲丸が山へ當つて、石の砕

けたのを跳ね返した爲です。斯う云ふ傾斜の甚だしい所ですから、いざと云ふ時に、すぐ遠くから驅け寄せて敵を追ひ退ける譯に行きませんので、みんな斯う云ふ處へ平たくなつて嚙り付いてゐるのであります。さうして味方の砲丸が眼の前へ落ちて、一度に砂煙が揚がると其虛に乘じて一間か二間づゝ這ひ上がるのですから、時々砂煙に交る石の爲に身體中創だらけになるのですと、市川君は詳しい說明を與へられた。

味方の砲彈で遣られなければ、勝負の付かない樣な烈しい戰を續けたと思ひながら、天邊迄上つた。其處には道標に似た御影の角柱が立つてゐた。其右を少しだら／＼と降りた處が新に土を掘返した如く白茶けて見える。不思議な事には所々が黑ずんで色が變つてゐる。これが石油を襤褸に浸み込まして、火を着けて、下から放り擲げた處ですと、市川君はわざ／＼崩れた土饅頭の上迄降りて來た。其時逆下の方を見渡して、山やら、谷やら、畠やら、一々實地の地形に就いて、當時の日本軍がどう云ふ徑路をとつて、此處へぢり／＼攻め寄せたかを序ながら物語られた。不幸にして、二百三高地の上迄は來た樣なものゝ、何方が東で何地が西か、方角が丸で分らない。たゞ廣々として、山の頭がいくつとなく起伏してゐる一角に、藍色の海が二ヶ處程平たく見える丈である。余はたゞ闊かな空の下に立つて、市川君の指さす方を眺めてゐた。

自分で此處へ攻め寄せて來た經驗を有つてゐる市川君の話は、甚だ詳しいものであつた。市川君の云ふ所によると、六月から十二月迄屋根の下に寢た事は一度もなかつたさうである。あるときは水の溜つた溝の中に腰から下を濡して何時間でも唇の色を變へて竦んでゐた。食事は鐵砲を打たない時を見計つて、何時でも構はず口中に運んだ。其食事さへ雨が降つて車の輪が泥の中に埋つて、馬の力ではどうしても運搬

が出來なかつた事もある。今あんな眞似をすれば一週間經たないうちに大病人になるに極つてゐますが、醫者に聞いて見ると、戰爭のときは身體の組織が暫らくの間に變つて、全く犬や猫と同樣になるんださうですと笑つて居た。市川君は今旅順の巡査部長を勤めてゐる。

二十八

旅順の港は袋の口を括つた樣に狹くなつて外洋に續いてゐる。袋の中は何時見ても油を注したと思はれる程平らかである。始めて此色を遠くから眺めたときは嬉しかつた。然し水の光が強く照り返して、灣內が只一枚に堅く見えたので、あの上を舟で漕ぎ廻つて見たいと云ふ氣は少しも起らなかつた。魚を捕る料簡は無論無かつた。露西亞の軍艦が何處で沈沒したらうか抔と思ひ浮かべる暇も出なかつた。たゞ頭へぴかぴかと、平たい研ぎ澄したものが映つた。

余は大和ホテルの二階からも此晴やかな色を眺めた。ホテルの玄關を出たり這入つたりするときにも此鋭い光の斷片に眼を何度となく射られた。それでも單に烈しい奇麗な色と光だなと感ずる丈であつた。佐藤から港內を見せてやるからと案內される迄は、到底港內は人間の這入る處ではない位に、頭の底で、無意識ながら分別してゐたらしい。

さあ行くんだと催促された時に、成程旅順に來る以上、催促されなければならん筈の場處へ行くんだと思つた。今日の同勢は朝大連から來た田中君を入れて五人である。港務部を這入るときに水兵が此五人に禮をした。兵隊に禮をされたのは生れて是が初めてゞあつた。佐藤が眞先に中へ這入つて、やがて出て來た

から、もう舟に乘れるのかと思つたら、おい這入れ〳〵といふ。我々は石垣の上に立つてゐた。足元にはすぐ小蒸氣が繋いである。我々の足は、家の方よりも、寧ろ水の方に向いてゐた。

十分の後五人は又河野中佐と一所に家を出てすぐ小蒸氣に移つた。海軍の將校が下士や水兵を使ふのは實に簡潔明瞭である。船は河野中佐の云ひなり次第の速力で、思ふ通りの方角へ出た。港の入口では此處彼處の潛水器へ船の上から空氣を送つてゐる。船の數は十艘近くあつた。みんな波に搖られて上つたり下つたりしてゐる。我々五人のも固より平ではない。鏡の樣に見えた灣の入口が斯う盪動いてゐるとは思ひ掛けなかつた。波で潛水器の調子が浮いたり沈んだりする上に、強い日が頭から射り付けるので、少し胸が惡くなつた。河野さんは軍人だから、そんな事に氣の付く筈がない。あゝ云ふ唧筒で空氣を送るのは舊式でね、時々潛水夫を殺して仕舞ひますよと講釋をしてゐる。田中君は、ふうんとさも感心したらしく聞いてゐる。

河野さんの話によると、日露戰爭の當時、此附近に沈んだ船は何艘あるか分らない。日本人が好んで自分で沈めに來た船丈でも餘程の數になる。戰爭後何年かの今日いまだに引揚切れない所を見ても大凡の見當は付く。器械水雷なぞになると此近海に二千も裝置したのださうだ。

おや今でも危險ですねと聞くと、危險ですともと答へられたので成る程そんなものかと思つた。沈んだ船を引揚る方法も聞いて見たが、是は委しく覺えてゐる。百キロ位な爆發薬で船體の部分々々に切り壞して、それを六吋の針金で結はへて、さうして六百噸のブイアンシーのある船を、水で重くした上、干潮に乘じて作事をして置いて、夫から滿潮の勢ひと唧筒の力で引き揚げるのださうだ。然し我々が眺めてゐた時

は、いつ迄立つても、何も揚つて來さうになかつた。

港の入口は左右から續いた山を掘り割つた樣に岸が聳えてゐて、其上に砲臺がある。彼處から探海燈で照されると、一番困る。丸で方角も何も分らなくなつて仕舞ふと河野さんが高い處を指さした。

やがて小蒸汽は濁りを逆に吐いて港内に引返した。戰鬪艦が竝んで撃沈されたといふ前を横に曲つて又元の石垣の下へ着いた。向う岸には戰利品のブイや錨が澤山竝んでゐる。あれで約二十萬圓の價格ですと河野さんが云つた。門の出口には防材の標本が一本寢かしてあつた。其先から尖つた劍の樣なものが出てゐた。

二十九

風呂を注文して置いたら、用意が出來たと見えて、向うの部屋で、湯の迸ばしる音が盛にする。靴を脱いで、スリッパを突つ掛けて、戸を開けに掛ると、まだ廊下に出ないうちに給仕が遣つて來た。田中さんが一所にスキ燒を食べに入らつしやいませんかと云ふ案内である。スキ燒の名は此際兩人に取つて珍らしい響がした。けれども白状すると、毫も食ふ氣にはならなかつた。スキ燒つて家で拵へるのかいと尋ねると、いえ近所の料理屋ですと云ふ。近所の料理屋はスキ燒よりも一層不思議な言葉である。ホテルの窓から往來を一日眺めてゐたつて、通行人は滅多に眼に觸れない處である。外へ出て廣い路を向の上迄見通すと、左右の家は數へる程しか竝んでゐない。さうして夫が悉く西洋館である。しかも三分の一は半建の儘雨露に曝されてゐる。他の三分の一は空家である。殘る三分の一には無論人が住んでゐる。けれども其

主人は大抵月給を取つて衣食するものとしか受け取れない輩である。新市街といふ名はあるにしても、其實は閑靜な寂れた屋敷町に過ぎない。其屋敷のどこに、すき燒を食はす家があるかと思ふと、一種小說に近い心持が起る。

たゞ、晝の疲れを忘れるため、胃の不安を逃れるため、早く湯に入つて、レースの敷蒲團の中で、穩かに寢たかつた。そこで給仕に、今湯に這入り掛けてゐるからね、少し時間が取れるかも知れないから、田中さんに、どうか御先へと云つて吳れと賴んだ。すると傍にゐた橋本が例の如く、そりや不可んよと云ひ出した。折角誘つて吳れるものを、そんな挨拶をする法はないぜと、又長い說敎が始まりさうで恐ろしくなつたので、仕方がないから、うんよし／＼、夫ぢやあね、今湯に這入つてゐますから、すぐ行きますつて左樣云つて吳れ、よく云ふんだよ、分つたかねと念を押しておいて風呂に飛込んだ。

さうして、少しも醉つた顏も見せずにみんなと連れ立つて、ホテルを出た。空はよく晴れて星が遠くに見える晩であつたが、月がないので往來は暗かつた。危なう御座いますから御案內を致しませうと云つて、ホテルの小僧が付いて來た。草の生えた四角な空地を橫切て、瓦斯も電氣もない所を、茫漠と二丁程來ると、門の奧から急に強い光が射した。玄關に女が二三人出てゐる。我々の來るのを待つてゐた樣な挨拶をした。座敷は疊が敷いて胡坐がかける樣になつてゐた。窓を見ると、壁の厚さが一尺程あつたので、始めて普通の日本家屋でないと云ふ事が解つた。窓の高さは疊から一尺に足りないから、足を掛けると厚い壁の上に乘る事が出來る。女が危なう御座いますと云つた。外を覗いたら眞闇に靜かであつた。女は三四人で、いづれも東京の言葉を使はなかつた。田中君はわざと名古屋訛を眞似て調戲つてゐた。

女は御上手だ事とか、御上手やなとか、何とか云つて賞めてゐた。所が前觸のスキ燒は中々出て來ない。酒を飲まないで、肴を突つついて手持無沙汰であつた。スキ燒があらはれても、胃の加減で旨くも何ともなかつた。天下に何が旨いつてスキ燒程旨いものは無いと思ふがねと田中君が云つた。田中君はスキ燒の主唱者丈あつて、大變食た。傍で見てゐて羨ましい程食た。余は仕樣がないから疊の上に仰向に寐てゐた。すると女の一人が枕を御貸し申しませうかと云ひながら、自分の膝を余の頭の傍へ持つて來た。此枕では御氣に入りますまいとか何とか辯じてゐる。結構だから、もう少し此方の方へ出してくれと頼んで、其女の膝の上に頭を乘せて寐てゐた。不思議な事に、橋本も活動の餘地がないものと見えて、余と同樣の眞似をして、向うの方に長くなつてゐる。枕元では田中君が女を相手に碁石でキシヤゴ彈きを遣つて大騷ぎをしてゐる。余があまり靜だものだから、膝を貸した女は眠つたのだと思つて、頤の下をくすぐつた。

歸るときには、神さんらしいものが、頻りに泊つて行けと勸めた。門を出ると又急に暗くなつた。森閑として人の氣合のない往來をホテル迄、影の樣に歩いて來て、今迄の派手なスキ燒を眼前に浮かべると、矢張り小說じみた心持がした。

三十

朝食に鶉を食はすから來いといふ案内である。朝飯の御馳走には、ケムブリヂに行つたとき慥か濱口君に呼ばれた事があると云ふ記憶がぼんやり殘つてゐる丈だから、大變珍らしかつた。尤も午前十一時に立つ客に晩餐を振舞ふ方法は、世界にないんだから仕方がない。鶉に至つては生れてからあんまり食つた事

かない。昔正岡子規に、手紙を以てわざ〳〵大宮公園に呼び寄せられたとき、鶉だと云つて喰はせられたのが初めて位なものである。其鶉の朝飯を拵へるからと云つて、特に招待するんだから、佐藤は物數奇に違ひない。さうして、好いか外に何にもない、鶉ばかりだよと念を押した。一體鶉を何羽喰はせる積か知らんと思つて、何處から買つたのかと聞くと、いや鶉は旅順の名物だ、もう出る時分だから丁度好からうと既に鶉を捕つた樣な事を云つてゐた。

是公さんの處へ喚びに行つたので少し後れて着くと、さき程推擧した田中君がもう來てゐた。田中君も鶉の御相伴と見える。佐藤は食卓の準備を見るために、出たり這入つたりする。立派な仙臺平の袴を着けてはゐるが、腰板の所が妙に口を開いて、丸で鋏を割つた樣である。さうして、夫を後下りに引き摺つてゐる。それでもつて、さあ食はうと云つて、次の間の食堂へ案内した。西洋流の食卓の上に、會席膳を四つ並べて愈鶉の朝飯となつた。

まづ御椀の蓋を取ると、鶉がゐる。所謂鶉の御椀だから不思議もなく食べて仕舞つた。皿の上にもゐるが、是は甘い醬油で燒かれた樣だ。是も旨く食た。第三は何でも芋か何かと一所に煮られた樣に記憶してゐる。然し遺憾ながら、判然と其味を覺えてゐない。是等を漸次に平げると、佐藤はまだあるよと云つて、次の皿を取り寄せた。それも無論鶉には相違なかつた。けれども只西洋流の油揚にしてある許で、前の附燒と紛れ易かつた。しかも此紛れ易い油揚は大分仕込んで有つたと見えて、まだ喰ひ切らない先に御代りが出て來た。

斯の如く鶉が豐富であつた爲、つい食べ過ぎた。余の胃の中に這入つた骨丈の分量でも隨分ある。大連

へ歸つて胃の痛みが增たとき、あまり鶉の骨を喰つた所爲ぢやなからうかと橋本に相談したら、橋本は全くさうだらうと答へた。食事が終つてから應接間へ歸つて來ると、佐藤が突然、時に君は何かやるさうぢやないかと聞いた。是公に東京で逢つたとき、是公はにや〳〵笑ひながら、一體貴樣は新聞社員だつて、何か書いてるのかと聞いた。斯う云ふ質問になると、是公も友熊も同程度のものである。

何か遣るなら一つ書いて行くが好いと云つて、妙な短冊を出した。それを傍へ置いて話をしてゐると、一つ書かうぢやないかと催促する。今考へてゐる所だと辯解すると、あゝさうかと云つて、又話をする。仕舞に墨を磨つて、とう〳〵手を分つ古き都や鶉鳴くと書いた。佐藤の事だから何を書いたつて解るまいと思つたが、佐藤は短冊を取上げて、何だ年を分つ古き都やと讀んでゐた。

鶉の腹を抱へたなり、ホテルへ歸つて勘定を濟まして、停車場へ驅付けると、プラットフォームに大きな網籠があつた。其中に鶉の生たのが一杯這入つて雛鳥を詰めた樣にむく〳〵動いてゐる。發車の時間に少し間があつたので、田中君は籠の傍へ行つて所有主と談判を始めた。余が近寄たときは、一羽が三錢だとか四錢だとか云つてゐた。所へ驛員が來て、宜しう御座います、此汽車へ積込んで御屆け申しますと受合つた。三人はとう〳〵鶉と別れて汽車へ乘つた。

三十一

愈腹が痛んだ。ゼムを嚙んだり、寶丹を呑んだり、通じ藥を遣つたり、內地から持つて來た散藥を用ひたりする。毎日飯を食つて呑氣に出歩いてゐる樣なものゝ、內心では是りや堪まらないと思ふ位であつ

た。大連の病院を見に行つたとき、苦し紛れに、案内をして吳れた院長の河西君に向つて、僕も一つ診察を願はうかなと云つたら、河西君は飛んだお客樣だといふやうな顔もせず、明日の十時頃入らつしやいと親切に引き受けて吳れた。所が明日の十時頃になると、診察の事は丸で忘れて仕舞つて、相變らず鳥打帽子を被つて、強い日の下を焦けながら、驅け廻つた。

橋本が、全體何處迄行く積なんだいと聞くから、さうさまあ哈爾賓位迄行かなくつちや義理が惡い樣だなと答へたが、其橋本は何うする料簡か些とも分らない。考へて見ると、內地ではもう九月の學期が始つて、教授連がそろ／＼講義に取り掛る頃である。君は是から何うするんだと反問して見た。さあ僕も哈爾賓位迄行つて見たいのだが、何しろ六月から學校を空けてゐるんだからねと決心しかねてゐる。かやうに義務心の強い男を唆かして見當違の方角へ連れて行つたのは、全く余の力である。其代り哈爾賓を見て奉天へ歸るや否や、橋本は札幌から電報を掛けられた。愈催促を受けたと電報を見ながら苦笑してゐるので、可いや、急ぎ歸りつゝありと掛けて置くさと、他の事だから甚だ洒落な助言をした。

橋本が愈一所に北へ行くと云ふ事になつてから、余は凡てのプログラムを橋本に委任してぶら／＼してゐた。橋本は汽車の時間表を見たり、宿泊地の里程を計算したり二三日の間はしきりに手帳へ鉛筆で何か付け込んでゐた。とき／＼、おい何うも旨く行かんよ、此所を火曜の急行で出るとすると抔と相談を掛けるから、いゝさ火曜が不可なければ水曜の急行にしようと、丸で無學な事を云つてゐるので、橋本も呆れてゐた。よく聞いて見て始めて了解したが、實は哈爾賓へ接續する急行は、一週にたつた二囘しかないのださうである。普通の客車でも、京濱間の樣に無暗には出ない。一日に僅二度か三度らしい。だから君

の様に呑氣な事を云つたつて駄目だよと橋本から叱られた。成程駄目である。しかも余の駄目は汽車にとどまらない。地理道程に至つても悉皆眞闇であつた。さすが遼陽だの奉天だのと云ふ名前は覺えてゐるが、それが何の邊にあつて、何方が近いのだか一切知らなかつた。其上、是から先何處と何處へ泊つて、何處と何處を通り拔けるのかに至る迄、全く無頓着であつたのだから橋本も呆れる筈である。然し、おい鐵嶺へは降るのかと聞いて、いや降りないと答へられゝば、はあ、さうかと云つたなりで濟ましてゐた。別に降りて見たい氣にもならなかつたからである。從つて橋本は實に順良な道伴を得た譯で、同時に余は結構な御供を雇つた事になる。

愈プログラムが極つたので、是公に出立の事を持ち出すと、奉天へ行つて、夫から北京へ出て、上海へ來て、上海から滿鐵の船で大連迄歸つて、夫から又奉天へ行つて、今度は安奉線を通つて、朝鮮へ拔けたら好いだらうと頗る大袈裟な助言を與へる。其上、錢が無ければやるよと註釋を付けた。錢が無くなれば無論貰ふ氣でゐた。然し餘つても困るから、無暗には手を出さなかつた。

余は錢問題を離れて、單に時間の點から、此大袈裟な旅行の計畫を、實行しなかつた。其癖奉天を去つて愈朝鮮に移るとき、紙入の內容の充實してゐないのに氣が付いて、少々是公に無心をした。もとより返す氣があつての無心でないから、今以て使ひ放しである。

立つ時には、是公はもとより、新たに近付になつた滿鐵の社員諸氏に至るまで、こと〴〵く停車場迄送られた。貴樣が生れてから、まだ乘つた事のない汽車に乘せてやると云つて、是公は橋本と余を小さい部屋へ案內して吳れた。汽車が動き出してから、橋本が時間表を眺めながら、おい此部屋は上等切符を買つ

た上に、外に二十五弗拂はなければ這入れない所だよと云つた。成程表にちやんとさう書いてある。專有の便所、洗面所、化粧室が附屬した立派な室であつた。余は痛い腹を忘れて其中に横になつた。

三十二

トロと云ふものに始めて乘つて見た。停車場へ降りた時は、柵の外に五六軒長屋の樣な低い家が見える許なので、何だか汽車から置き去りにされた樣な氣持であつたが、是からトロで十五分掛るんだと聞いて、やつと納得した。

トロは昔軍人の拵へたのを、手入れもせずに、其儘利用してゐるらしい。軌道の間から草が生えてゐる。然し軌道の外にも草が生えてゐる。先迄見渡すと、鐵色の筋が二本生えない草の中を眞直に貫ぬいてゐる。然し細い筋が草に隱れて、行方知れずになる迄眺め盡しても、建物らしいものは一軒も見當らなかつた。さうして軌道の兩側は悉く高粱であつた。其大きな穗先は、眼の屆く限り代赭で染めた樣に日の光を吸つてゐる。橋本と余と荷物とは、此茫漠たる畠の中をトロに搖られながら、眩しさうに動いた。トロは頑丈な細長い涼み臺に、鐵の車を着けたものと思へば差支ない。軌道の上を轉がす所を、餘所から見てゐると、甚だ滑らかで輕快に走るが、實地に乘れば、胃に響ける程搖れる。押すものは無論支那人である。勢ひよく二三十間突いて置いて、ひよいと腰を掛ける。汗臭い淺黄色の股引が背廣の裾に觸るので氣味が惡い事がある。すると、速力の鈍つた頃を見計らつて、又素足の儘飛び下りて、肩と手を一所にして、うん／＼押す。押さなければ可いと思ふ位、車が早く廻るので、乘つてる人の臟器は少からず振盪する。余は此トロ

に運搬されたため、悪い胃を著るしく悪くした。車の上では始終ゼムを含んで早く目的地へ着けば好いと思つてゐた。勢ひよく驅けられゝば、驅けられる程猶辛かつた。夫でも臺からぶら下げた足を折らなかつたのが、まだ仕合せである。實際酒に醉つて腰を掛けた儘脛を折つぺしよつた人があるさうだ。見ると橋本の帽子の鍔が風に吹かれてひら〳〵と靡いてゐる。余は鳥打の前庇を深く下げて成るべく日に背を向ける樣にしてゐた。

苦しい十五分か廿分の後車は漸く留まつた。軌道の左側丈が、畠を切り開いて平らにしてある。眼を蔽ふ高粱の色を、百坪餘り刈り取つて、黑い砂地にした迹へ、左右に長い平屋を建てた。壁の色もまだ新しかつた。玄關を這入つて座敷へ通ると、窓の前は二間程しかない。其緣に朝顏の樣な草が繁つてゐるが、絡まる竹も杖もないので、蔓と云はず、葉と云はず、花を包んで雜然と簇がる許である。朝顏の下はすぐ崖で、崖の向うは廣い河原になる。水は崖の眞下を少し流れる丈であつた。

橋本と余は、申し合せた樣に立つて窓から外を眺めて居た。首を出すと、崖下にも家が一軒ある。然し屋根瓦しか見えない。支那流の古い建物で、廻廊の樣な段々を藉りて、余のゐる部分に續いてゐるらしく思はれる。あれは何だいと聞いて見た。料理場と子供を置く所になつてゐますと答へた。子供とは酌婦藝妓の類を指すものだらうと推察した。眼の下に橋が渡してある。厚くはあるが幅一尺足らずの板を八つ橋に繼だものに過ない。水は只砂を洗ふ程に流れてゐる。足の甲を濡らしさへすれば徒歩渉るのは容易である。橋本の後に食付いて手拭をぶら下げて、此橋を渡つた時、板の眞中で立ち留まつて、下を覗き込んで見たら、砂が動く許で水の色は丸でなかつた。十里程上に遡ぼると鮎が漁れるさうだ。余は汽車の中で鮎

のフライを食つて滿洲には珍らしい肴だと思つた。恐らく此上流からクーリーが賣りに來たものだらう。

三十三

足駄を踏むとざくりと這入る。踵を上るとばら〳〵と散る。渚よりも恐ろしい砂地である。冷たくさへなければ、跣足になつて歩いた方が心持が好い。俎を引摺つて居ては一足毎に後しざる樣で齒痒くなる。それを一町程行つて板圍の小屋の中を覗き込むと、溫泉があつた。大きい四角な桶を縁迄地の中に埋け込んだと同じ樣な槽である。溫泉は一杯溜つてゐたが、澄み切つて底迄見える。何時の間に附着したものやら底も縁も青い苔で色取られてゐる。橋本と余は容赦なく湯の穴へ飛び込んだ。さうして遠くから見ると、砂の中へ生埋にされた人間の樣に、頭丈地平線の上に出してゐた。支那人の中には、實際生埋になつて湯治をやるものがある。此河原の幅は、向うに見える高粱の畠迄行き詰めた事がないから何の位か分らないが、兎に角眼が平になる程廣いものである。其平らな何處を、何う掘つても、湯が湧いて來るのだから、裸體になつて、手で砂を搔き分けて、凹んだ處へ横になれば、一文も使はないで事は濟む。其上寢ながら腹の上へ砂を掛ければ、溫泉の搔卷が出來る譯である。たゞ砂の中を潛つて出る湯が如何にも熱い。ぢく〳〵湧いたものを、大きな湯槽に溜めて見ると、色丈は非常に奇麗だが、それに騙されて迂闊飛び込まうものなら苛い目に逢ふ。橋本と余は、勢ひよく浴衣を拋げて、競爭的に毛脛を突込んで、急に顔を見合せながら縮んだ事がある。大の男がわざ〳〵裸になつて、其裸の始末を付けかねるのは極りが好いものぢやないから、兩人は顔を見合せて苦笑しながら小屋を飛び出して、四半丁程先の共同風呂迄行つて、平氣な

風にどほりと浸つた。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐるりと緩く折れ曲つてゐる。其向う側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を渉つて來た。距離が遠いので小さく動いてゐるが、色丈は判然分る。皆茶褐色をして柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりも猶小かつた。凡てが世間で云ふ南畫と稱するものに髣髴として面白かつた。中にも高い柳が細い葉を悉く枝に收めて、靜まり返つてゐる所は、全く支那めいてゐた。遠くから望んでも日本の柳とは趣が違ふ樣に思はれた。水は柳の茂る處で見えなくなつて居るが、猶其先を辿つて行くと、忽ち眼に打つかる樣な大きな山脈がある。襞が鋭く刻まれてゐる所爲か、ある部分は雪が積つた程白く映る。其位に周圍はどす黒かつた。漢語には崔嵬とか巑岏とか云つて、斯う云ふ山を形容する言葉が澤山あるが、日本には一つも見當らない。あれは何と云ふ山だらうと傍に居る大重君に尋ねたら、大重君も知らなかつた。大重君は支那語の通譯として橋本に隨いて蒙古迄行つた男である。余の質問を受けるや否や何處かへ消えて無くなつたが、やがて歸つて來て、高麗城子と云ふんださうですと教へて呉れた。土人を捕まへて聞いて來たのださうである。固より支那音で教はつたのだが、それは忘れて仕舞つた。

濡れ手拭を下げて、砂の中をぼく／＼橋の傍迄歸つて來ると、崖の上から若い女が跣足で降りて來た。橋は一尺に足らぬ幅だからどつちかで待ち合せなければなるまいと思つたが、向うはまだ土堤を下り切らないので、此方は躊躇せず橋板に足をかけた。下駄を二三度鳴らして、一間程來たとき、女も余と同じ平面に立つた。そこで留まると思ひの外、ひら／＼と板の上を舞ふ樣に進んで余に近づいた。余と女とは板

と板の継目の所で行き合つた。危ないよと注意すると、女は笑ひながら輕い御辭儀をして、余の肩を擦つて行き過ぎた。

三十四

明日は梨畑を見に行くんだと橋本から申し渡されたので、宜しいと受合つた上、床に就いた樣なもの丶實を云ふと例のトロで搖られるのが内心苦になつた。其所爲でもなからうが、容易に寢つかれない。橋本はもう鼾をかいてゐる。しかも豪宕な鼾である。緞子の夜具の中から出るべき聲ぢやない。まして裾の方には金屏風が立て回してある。

明日になると、空が曇つて小雨が落てゐる。窓から首を出して、一面に濡れた河原の色を眺めながら、おれは梨畑をやめて休養しやうかしらと云ひ出した。橋本は合羽も有つてゐるし、すヴーシャーも用意して來てゐるので中々景氣が好い。ことに農科の教授丈あつて、梨を見たがつたり、栗を見たがつたり、豚や牛を見たがる事人一倍である。早速用意をして大童君を連れて出て行つた。余はたゞつくねんとして、窓の中に映る山と水と河原と高粱とを眼の底に陳列さしてゐた。薄く流れる河の厚さは昨日と同じ樣に殆んど二三寸しかないが、其眞中に鐵の樋竹が、砂に埋れながら首を出してゐるのに氣が付いたので、あれは何だいと下女に聞いて見た。あれはボアリングを遣つた迹ですと下女が答へた。滿洲の下女丈あつて、術語を知つてゐる。つい此間雨が降つて、上の方から砂を押し流して來る迄は、河の流れが丸で違つた見當を通つてゐたので、あすこへ湯場を新築する積であつたのだと云ふ。河の流れが一雨每に變る樣では、

滅多な處へ風呂を建てる譯にも行くまい。現に窓の前の崖抔も水に大分喰はれてゐる。

其內雨が歇んだ。退屈だから横になつた。約十分も立つたと思ふ頃、下女が又遣つて來て、只今驛から電話が掛りまして、是から梨畑へ御出になるなら、驛からトロを仕立ますがと云ふ問ひ合せである。雨が歇んだので、座敷に寢てゐる口實はもう消滅して仕舞つたが、此上トロを仕立られては敵はないと思つて、わざ／＼晴掛つた空を見上げて、八の字を寄せた。

今から行つて間に合ふのかなと尋ねると、器械トロだから汽車と同じ位早いんだと云ふ話である。胃は固より切ない程不安であるが、汽車と同じ速度の器械トロたるものにも、心得のため一寸乘つて見たい樣な氣がしたので、つい手輕に仕度を始めた。すると隣の部屋に泊つてゐた御客さんが三四人、十一時の汽車で大連へ行くとか云つて、同じ樣に仕度を始めた。それを送る下女も仕度を始めた。從つて同勢は大分になつた。其中に昨日橋の途中で行き合つた女が居た。それが余と尻合せに同じ車に乘る事になつた。互に尻を向けてゐるので、別段口も利かなかつた。顏もよくは見なかつた。が、其言葉丈は慥かに聞いた。しかも支那語である。固より意味は通じない。然し盛んにクーリーを極め付けてゐた。其達辯なのは又驚く許である。昨日微笑しながら御辭儀をして、余の傍を摺り拔けた女とはどうしても思へなかつた。此女は我々の立つ前の晩に、始めて御給仕に出て來た。洋燈の影で御白粉を着けてゐる事は分つたが、依然として口は利かなかつた。

苦しい十五分の後車は又停車場に着いた。御客はすぐ汽車に乘つて大連の方へ去つた。下女はみんな溫泉宿へ歸つた。余は獨り構內を徘徊した。所謂器械トロなるものは姿さへ見せない。そこへ驛員が來て、

今松山を出たさうですからと斷つた。其松山は遙向うにある。余は軌道の上に立つて、一直線の平たい路を視力のつゞく限り眺めた。然しトロの來る氣色は丸でなかつた。

三十五

宿屋の者ともつかず、驛の者ともつかない洋服を着た男が附いて來た。此男の案内で村へ這入ると路は全く砂である。深さは五六寸もあらうと思はれた。土で造つた門の外に女が立つてゐたが、我々の影を見るや否や逃げ込んだ。手に持つた長い煙管が眼に着いた。犬が門の奥で頻りに吠える。其うちに村は盡きて松山に掛かつた。と云ふと大層だが、實は飛鳥山の大きいのに、櫻を拔いて松を植替へた樣なものだから、心持の好い平庭を歩るくと同じである。松も三四十年の若い木ばかり芝の上に並んでゐる。春先辨當でも持つて遊びに來るには至極結構だが、處が滿洲丈に猶珍らしい。余は痛い腹を抑へて、とう／＼天邊まで登つた。すると其處に小さな廟があつた。正面に向つて、聯などを讀んでゐると、すぐ傍で梭の音がする。廟守でも居りさうなので、白壁を切り拔いた入口を潛つて中へ這入つた。暗い土間を通り越して、奥を覗いて見たら、窓の傍に機を据ゑて、白い疎髯を生やした爺さんが、せつせと梭を抛げてゐた。織つてゐたものは粗い白布である。案内の男が二言三言支那語で何か云ふと、老人は手を休めて、暢氣な大きい聲で返事をする。七十ださうですと案内が通譯して呉れた。たつた一人で此處にゐて、飯はどうするのだらうと、序に通譯を煩はして見た。下の家から運んでくるものを食つてゐるさうであつた。其下の家と云ふのが卽ち梨畠の主人の處だと案内は説明した。

やがて、山を降りて梨畠へ行かうとしたが、正門から這入るのが面倒なので、どうです土堤を乘り越さうぢやありませんかと案内が云ひ出した。余はすぐ賛成して蒲鉾形の土塀を向側へ馳せ下りた。胃は實に痛かつた。樹の下を潛つて二十間も來ると、向うの方に橋本始め連中が床几に腰を掛けて梨を食つてゐる。腕に金筋を入れた驛長迄一所である。余も同勢に交つて一つ二つ食つた。是は胃の中に何か入れると、一時痛みが止むからである。さうして又畠の中をぐる／＼歩き出した。此處の梨は丸で林檎の樣に赤い色をしてゐる。大きさは日本の梨の半分もない。然し小さい丈あつて、鈴なりに枝を撓はして、累々とぶら下つてゐる所が如何にも見事に見える。主人が其中で一番旨い奴を――何と云つたか名は思ひ出せないが、下男に云ひ付けて、笊に一杯取り出さして、みんなに御馳走した。主人は脊の高い大きな男で、支那人らしく落付拂つて立つてゐる。案内の話では二千萬とか二億萬とかの財産家ださうだが、それは嘘だらう。脂の強い亞米利加煙草を吹かしてゐた。

梨にも喰ひ飽きた頃、橋本が通譯の大重君に、色々御世話になつて難有いから、御禮のため梨を三十錢程買つて歸りたいと云ふ樣な事を話して呉れと頼んでゐる。それを大重君が頗る嚴肅な顏で支那語に譯してゐると、主人は中途で笑ひ出した。三十錢位なら上げるから持つて御歸りなさいと云ふんださうである。橋本はぢや貰つて行かうとも云はず、又三十錢を三十圓に改めやうともしなかつた。宿へ歸つたら、下女がある御客さんと一所に梨畠へ行つて、梨を七圓程御土產に買つて歸つた話をして聞かせた。其時橋本は、うんさうか、己は又三十錢がた買つて來やうと思つたら、三十錢位なら進上すると云つたよと澄ましてゐた。

三十六

壁と云ふと鏝の力で塗り固めた様な心持がするが、此壁は普通の泥が天日で干上つたものである。たゞ大地と直角に出来上つてゐる所丈が泥でなくつて壁に似てゐる。其上部には西洋の御城の様に、形儀よく四角な孔をいくつも開けて、一ぱし櫓の體裁を示してゐる。然し一番人の注意を惹くのは、此孔から見える赤い旗である。旗の数は孔の数丈あつて、孔の数は一つや二つではないから、一寸賑かに思はれる。始めて此景色が眼に觸れた時には、村のお祭りで、若いものが、面白半分に作り物でも拵へたのだらうかと推測した。所が此櫓は馬賊の来襲に備へるために、梨畠の主人が、わざ〳〵家の周圍に打ち建てたのだと聞いて、半分は驚いたが、半分は可笑しかつた。たゞ何故あんな赤い旗を孔の間から一つ宛出して居るかゞ、薩張分らなかつた。裏側へ廻つて、段々を上つて見て、始めて此赤旗の一つが一挺の鐵砲を代表して居る事を知つた。鐵砲は博物館にでもありさうな古風な大きいもので、どれも是も錆を吹いてゐた。尤も弾丸を込めても恐らく、筒から先へ出る氣遣はあるまいと思はれる程、安全に立て掛けられてゐた。赤い旗丈は丁寧に括り付けてある。さうして丁度壁孔から外に見える位な所にぶら下げてある。番兵は汚ない顔を揃へて、後の小屋の中にごろ〳〵してゐた。馬賊の来襲に備へるために雇はれたればこそ番兵だが、其實は、日當三四十錢の苦力である。櫓を下りて門を出る前に、家の内部を觀る譯に行くまいかと通譯を以て頼んだら、主人はかぶりを振つて聞かなかつた。女の居る所は見せる譯に行かないと云ふんださうである。其代り客間へ案内して遣らうと番頭を一人付けて呉れた。其客間といふのは往来を隔てゝ向つ

側にある一軒建の家であつた。外には大きな柳が、靜な葉を細長く空に曳いてゐた。長屋門を這入ると鼠色の騾馬が木の株に繫いである。余は此騾馬を見るや否や、三國志を思ひ出した。何だか玄德の乘つた馬に似てゐる。全體騾馬といふのを滿洲へ來て始めて見たが、腹が太くつて、脊が低くつて、總體が丸く逞しくつて、萬事邪氣のない樣な好い動物である。橋本に騾馬の講義を聞くと、先づ驢と駃騠の區別から始めるので、眞幸な頭腦をたゞ徒らに混亂させる許だから、默つて鞍のない裸姿を眺めてゐた。騾馬は首を伏せて頻りに短い草を食つてゐた。

門の突き當りが所謂客間であるが、觀音扉を左右に開けて這入る所などは御寺に似て居る。中は汚ないものであつた。客でも招待するときには、臨時に掃除をするのかと聞いたら、左うだと答へてゐた。主人に挨拶をして又松山を拔けたら、松の間に牛が放してあつた。驛長が行く〳〵初茸を取つた。何處から目付け出すか不思議な位目付け出した。橋本も余も面白半分少し探して見たが、全く駄目であつた。山を下るとき、おい滿洲を汽車で通ると、甚だ不毛の地の樣であるが、斯うして高い所に登つて見ると、沃野千里といふ感があるねと、橋本に話しかけたが、橋本にはそんな感がなかつたと見えて、別に要領の好い返事をしなかつた。余の沃野千里は全く色から割り出した感じであつた。松山の上から見渡すと、高い日に映る、茶色や黃色が、縞になつたり、段になつたり、模樣になつたり、霞で薄くされて、雲に接く迄、一面に平野を蔽ふてゐる。滿洲は大きな所であつた。

宿へ歸つたら、御神さんが驛長の贈つて來た初茸を汁にして、晩に御膳の上へ乘せて吳れた。それを食つて、梨畑や、馬賊や、土の櫓や、赤い旗の話しなぞをして寐た。

三十七

立つ用意をしてゐる所へ御神さんが帳面を持て出て來た。是へ何か書いて行つて下さいと云ふ。御神さんは余を二つ接ぎ合せた樣に肥えてゐる。それで病氣ださうだ。始めは何處のものだか分らなかつたが、御神さんと知つて、調子の下女と違つてゐるのに驚いた。御神さんは其體格の示す如き好い女であつた。どうしてあんな擂れつ枯らしの下女を、使ひこなすかゞ疑問になつた位である。帳面を前へ置いて、どうぞと手を膝の上に重ねた。其膝の厚さは八寸位ある。

帳面を開けると、第一頁に林學博士のH君が「本邦の山水に似たり」と揮つて仕舞つたあとである。其次にはどこ／＼聯隊長何のなにがしと書いてある。宿帳だか、書畫帳だか、判然しないものゝ、第三頁に記念を遺す事に差し逼つて來た。橋本は帳面を見るや否や、向を向いて澄ましてゐる。余は仕方がないから、書くには書くが、少し待つて呉れと賴んだ。すると御神さんが、さう仰しやらずに、どうぞ／＼と二遍も繰返して御辭儀をする。無論嘘を吐く氣は始めからないのだが、かう拜む樣にされて書いて遣る程の名筆でもあるまいと思ふと、困却と慚愧でほと／＼持て餘して仕舞ふ。時に橋本が例の如く口を利いて呉れた。此人は嘘を云ふ男ぢやないから、大丈夫ですよ今に何か書きますよと笑つてゐる。余は又世間話をしながら、其間に發句でも考へ出さなければならなくなつた。

同情して呉れる人は大分あると思ふから白狀するが、旅をして惡筆を懇望される程厄介な事はない。それも句作に熱心で壁柱へでも書き散らしかねぬ時代なら兎に角、書く材料の拂底になつた今頃、何か記念

の爲にと、短冊でも出された日には、節季に無心を申し込まれるよりも苛い。大連を立つとき、手荷物を悉皆革鞄の中へ詰め込んで仕舞つて、さあ大丈夫だと立ち上つた時、不圖氣が付いて見ると、化粧臺の鏡の下に、細長い紙包があつた。不思議に思つて、折目を返して中を改めると、短冊である。何時誰が持つて來て載せたものか分らないが、其意味は大抵推察が出來る。俳句を書かせやうと思つて來た所が、生憎留守なので、又出直して賴む氣になつて、わざと短冊丈置いて行つたに違ひない。余は此時化粧臺から紙包を取り卸して、革鞄の中へ押し込んで、ホテルを出た。此短冊はいまだに誰のものか分らない。數は五六枚で雲形の洒落たものであつたが、朝鮮へ來て、何を懇望されるたびに、それへ書いて遣つて仕舞つたから今では一枚も殘つて居ない。長春の宿屋でも御神さんに捕まつた。此御神さんは濱のものだとか云つて、意氣な言葉使ひをしてゐたが、新しい折手本を二冊出して、是へどうぞ同なじものを二つ書いて下さいと云つた。同じでなければ不可ないのかと尋ねると、えゝと答へる。其理由は、夫婦別れをしたときに、夫婦が一冊づゝ持つてゐる事が出來るためださうだ。

斯う書いて行くと、朝鮮の宴會で絖を持出された事迄云はなくてはならないから、好い加減に切り上げて、話を元へ戻して、肥つた御神さんの始末を付けるが、余は切ない思ひをして、汽車の時間に間に合ふ樣に一句浮かんだ。浮かぶや否や、帳面の第三頁へ熊岳城にてと前書をして、黍遠し河原の風呂へ渡る人と認めて、ほつと一息吐いた。さうして御神さんの御禮も何も受る暇のない程急いでトロに乘つた。電話の柱に柳の幹を使つたのが、何時の間にか根を張つて、針金の傍から青い葉を出してゐるのに氣が付いて、あれでも句にすれば可かつたと思つた。

三十八

窓から覗いて見ると、何時の間にか高粱が無くなつてゐる。先刻迄は遠くの方に黄色い屋根が處々眺められたが、夫もつひに消えて仕舞つた。此黄色い屋根は奇麗であつた。あれは玉蜀黍が干してあるんだよと、橋本が說明して吳れたので、漸く左樣かと想像し得た位、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。朝鮮では同じく屋根の上に唐辛子を干してゐた。松の間から見える孤つ家が、秋の空の下で、燃え立つ樣に赤かつた。然しそれが唐辛子であると云ふ事丈は一目ですぐ分つた。滿洲の屋根は距離が遠い所爲か、たゞ茫漠たる單調を破るための色彩としか思はれなかつた。所が其屋根も高粱も悉く影を隱して仕舞つて、あるものは只の地面丈になつた。其地面には赤黑い茨の樣な草が限りなく生えてゐる。始めは蓼の種類かと思つて、橋本に聞いて見たら橋本はすぐ冠を橫に振つた。蓼ぢやない海草だよと云ふ。成程平原の盡きる邊りを、眼を細くして、見究めると、暗くなつた奥の方に、一筋鈍く光るものがある樣に思はれる、海邊かなと橋本に聞いて見た。其時日はもう暮れ掛つてゐた。際限もなく蔓つてゐる赤い草のあなたは薄い靄に包まれて、幾らか蒼くなりかけた頃である。明ら樣に目に映るすぐ傍を能々見詰めると、乾いた土ではない。踏めば靴の底が濡れさうに水氣を含んでゐる。橋本は鹹氣があるから穀物の種が卸せないのだと云つた。豚も出ない樣だねと余は橋本に聞き返した。汽車に乘つて始めて滿洲の豚を見たときは、實際一種の怪物に出逢つた樣な心持がした。あの黑い妙な動物は何だと眞面目に質問した位、異な感じに襲はれた。それ以來滿洲の豚と怪物とは離せない樣になつた。此薄暗い、苔の樣に短い草ばかりの、不毛の澤地の何

處かに、あの怪物は屹度點綴されるに違ないと云ふ氣が中々拔けなかつた。けれども一匹の怪物に出逢ふ前に、日は全く暮て仕舞つた。目に餘る赤黑い草の影は次第に一色の夜に變化した。たゞ北の方の空に、夕日の名殘の樣な明るい所が殘つたのである。さうして其明るい雲の下が目立つて黑く見える。恰も高い城壁の影が空を遮つて長く續てゐる樣である。余は高い此影を眺めて、何時の間にか萬里の長城に似た古迹の傍でも通るんだらう位の空想を逞うしてゐた。すると誰だか此城壁の上を驅けて行くものがある。はてなと思つて少時するうちに、又誰か驅けて行く。不思議だと覺つて瞬もせず城壁の上を見詰めて居ると、又誰か驅けて行く。何う考へても人が通るに違ひない。無論夜の事だから、どんな顏のどんな身裝の人かは判然しないが、比較的明かな空を背景にして、黑い影法師が規則正しく壁の上を馳け拔ける事は確である。余は橋本の意見を問ふ暇もない程面白くなつて、一生懸命に、眼前を往來する此黑い人間を眺めてゐた。同時に汽車は、刻々と城壁に向つて近寄つて來た。それが一定の距離迄來ると、俄然として失笑した。今迄慥かに人間だと思ひ込んでゐたものは、急に電信柱の頭に變化した。城壁らしく横長に續いてゐたのは大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追ひ越した。高い所で動くものが漸く眼底を掃つた。

三十九

狹い小路の左右は煉瓦の塀で、一寸見ると屋敷町の樣に人通りが少い。それを二十間程來て左手の門を這入つた。只偶然に這入つたのだから、家の名も主人の名も知る筈がない。今から考へると、小路のうちには同じ樣な家が何軒となく竝んでゐて、同じ樣な門が亦幾何でも開いてゐるのだから、とくに此處丈を

覗く可き誘致は少しもなかつたのである。余はたゞ案内者の後に跟いて何の氣なしに這入つた。其案内者も亦好い加減に這入つた。案内者は清林館と云ふ宿の主人である。かつて二葉亭と一所に北の方を旅行して、露西亞人に苛い目に逢つたと話した。

門を這入ると、右も室、突き當りも室である。左りも隣の壁に隔てられなければ室であるべき筈なのだから、中の一筋丈が頭の上に空を仰ぐ譯になる。其處に立つて右手の部屋を覗くと、狹い路次から淺草の仲店を看る樣な趣がある。實際仲店よりも低く小さい部屋であつた。其一番目には幕が垂れてゐて、中は判然と分らなかつたが、次を覗いて見る段になつて驚いた。三疊敷位の土間の後の方を、上り框の樣に、腰を掛ける丈の高さに仕切つて、其處に若い女が三人ゐた。三人共腰を掛けるでもなく、寐轉ぶでもなく、互に凭れ合つて身體を支へる如くに、後の壁を一杯にした。三人の着物が隙間なく重なつて、柔かい絹をしなやかに壓し付けるので、少し誇張して形容すると、三人が一枚の上衣を引き廻してゐる樣に見える。其間から小さな繻子の靴が出てゐた。

三人の身體が竝んでゐる通り、三人の顏も竝んでゐた。其左右が比較的尋常なのに引きかへて、眞中のは不思議に美しかつた。色が白いので、眉がいかにも判然してゐた。眼も朗かであつた。頰から顎を包む弧線は春の樣に軟かつた。余が驚きながら、見惚れてゐるので、女は眼を反らして、空を見た。余が立つてる間、三人は少しも口を利かなかつた。

清林館の主人は自分程此女に興味がなかつたと見えて、好加減に步を移して、突き當りの部屋に這入つた。其處も狹い土間で、中央には普通の卓が据ゑてあつた。それを圍んで三人の男が食事をしてゐる。

皿小鉢から箸茶碗に至る迄汚ない事甚だしい。卓に着いてゐる男に至つては尚更汚なかつた。丸で大連の埠頭で見る苦力と同樣である。余は此體裁を一見するや否や、臺所で下男が飯を搔き込んでゐるんぢやなからうかと考へた。所がつい隣の室でしきりに音樂を遣つてゐる。今見た美人のゐる所とはつい三間とは離れてゐない。實に矛盾な感じである。

余は二歩ばかり洋卓を遠退いて、次の室の入口を覗いて見た。さうして又驚いた。向の壁に倚添へて一脚の机を置いて、其右に一人の男が腰を掛けてゐる。其左に女が三人立つてゐる。其前には十二三の少女が男の方を向いて立てゐる。少し離れて室の入口には盲目が床几に腰を掛けてゐる。調子の高い胡弓と歌の聲は此一團から出るのである。歌の意味も節も分らない余の耳には此音樂が一種異樣に凄じい響を傳へた。机の右に居る男が、右の手に筮竹の樣な物を持て、時々机の上を敲くと同時に左の掌に八橋と云ふ菓子に似た竹の片を二つ入て、それをかち／＼と打合せながら、歌の調子を取る。趣向はスペインの女の用ひるカスタネットに似てゐるが、其男の顔を見ると、アルハンブラの昔を思ひ出す所ではない。蒼黒く土氣付た色を、一心不亂に少女の頭の上に乗しかける樣に翳して、腸を絞る程恐ろしい聲を出す。少女は又瞬きもせず、此男の方を見詰めて、細い咽喉を合してゐる。それが怖い魔物に魅入られて身動きの出來ない樣子としか受取れない。盲目は彼の眼の暗い如く、暗い顔をして、悲しい陰氣な、しかも高い調子の胡弓を擦り續けに擦つてゐる。左の方に立つてゐる女の一人が余を見た。それが忌むべき藪睨であつた。日の目の乏しくつて暮易い室のうちで、此怪しい團體は此怪しい音樂を奏して夢中である。余は案内の袖を引いてすぐ外へ出た。

四十

橋本は遠い所へ馬を見に行つた。何でも市街から一里余もあるとか云ふ話である。こんな痛い腹を抱へて今更旅でもあるまいと思つて止めた。其代りに其処いらをぶら付くべく主人と一所に馬車で出た。主人が是非運河を御覧なさいと云ふ。馬車を捨てゝ河岸へ出ると眼一杯に見えた。色は出水の後の大川に似てゐる。其の間に動くものが、凄まじい勢で遠くから流れて来る。哈爾賓に行く途中で、木戸さんに聞いた話だが、満洲の黄土は大昔中央亜細亜の方から風の力で吹き寄せたもので、それを年々河の流れが御叮嚀に海へ押出してゐるのださうである。地質学者の計算によると、五万年の後には今の渤海湾が全く埋つて仕舞ふ都合になつてゐるさうだと木戸君が語られた。河辺に立つて岸と岸との間を眺めてゐると、水の量が泥の量よりも少い位濁つたものが際限なく押し寄せて来る。五万年は愚か、一二ヶ月で河口は悉皆塞がつて仕舞ひさうである。それでも三千噸位な汽船は苦もなくのそ〳〵上つて来ると云ふんだから支那の河は無頓着である。人間に至つては固より無神経で、古来から此泥水を飲んで、悠然と子を生んで今日迄栄えてゐる。

サンパンと云ふ船が此処彼処に浮かんで形に合しては大き過ぎる位な帆を上げてゐる。帆の裏には細い竹を何本となく横に渡してあるから、帆に角が立つのみか、捲き上げる時にはがら〳〵鳴る。日本では見られない絵である。其間を横切つて向岸へ着いた。向岸には何にもない。たゞ停車場が一つある。北京への急行が出るとか云ふので、客が澤山列車に乗り込んでゐる。下等室を覗いたら、腰掛も何もない平土間

に、みんなごろ／＼寝ころんでゐた。歸りにはサンパンに乘つて、泥の流を押し渡つた。風が出ると難儀だそうである。春の初めには山の樣な氷が流れてくる。先が見えないので、氷と氷の間に挾まれると命を取られる。ある時氷に路を塞がれて仕方がないから、船を棄てゝ氷の上へ上つて、乘り捨てた船を引き摺つて向う側へ出て、漸く又船に乘つたと云ふ話がある。是は主人の實歷談である。

サンパンは妙な處へ着いた。岸は蘆を疊んで出來てゐる。石垣ではなくて蘆垣である。かうしなければ水の力で浚れる恐れがあると云ふ。蘆は幾何でも水を吸ひ込んで平氣であるから無難だと見える。細い小路を突き拔けると、支那町の眞中へ出た。妙な臭がする。先刻から胸が痛むのでポッケットから、粉藥を出して飮まうとするが生憎水がない。一滴の飮料も用ひずに散藥を呑み下す方法は、その後苦し紛れに發見した分別だが、此時はまだ夫程老練な患者でないので、拜む樣に主人を煩はした。主人はえゝ譯はありませんと云ひつゝも、隨分烈しく引張り廻した上、殆んど苦しくつて道傍に蹲みさうになつた頃、漸く一軒の店へ這入つた。盆栽杯の据ゑてある中庭を通り拔けて角の一部屋へ案内されたが、水は中々出る樣子がない。そのうち、此方へと云つて又二階へ招ぜられた。蟲の樣に段々と上つて廊下から室へ這入ると、日本人が二三人事務を執つてゐる。さあどうぞと椅子を與へられたので、挨拶をして始めて解つたが、水を貰ひに飛び込んだ處は日淸豆粕會社で、さあどうぞと迎へてくれたのは、社員の倉田君である。倉田君は固より日本から漫遊もしくは視察の目的を以てわざ／＼營口迄遣つて來たものと余を信じてゐる。服藥の爲に通りがゝりの序ながら、日淸豆粕會社の奧二階へ水を貰ひに立ち寄つたと判じやう筈がない。そこで水は容易に出ない。湯も出ない。今御茶を上げると云つて、ボイが頻りに支度をしてゐる。余は淸林館

の主人が恨めしくなつた。けれども倉田君に對しては相應に體裁を具へた應對をしなければならない。豆が汽車で大連へ出る樣になつてから、河を下つてくる豆の量が減つたでせうかて樣な事を、眞面目腐つて質問してゐた。

四十一

　橋本が博士になつたり、ならなかつたりした話がある。大連の大和ホテルにゐる時分、滿鐵から封書が屆いた。其表に橋本農學博士殿と明暸に書いてあつたのを乙に眺めながら、是だから厭になつちまうと云つて余の方へ向いて苦笑したから、先生は學者ぶつて、無暗に博士呼はりをされるのを苦にする意味なんだらうと鑑定して、取り合つて遣らなかつた。實際こんな事が苦になる位なら、初めから博士にならなければ好いと思つたからである。其時は夫で濟んだ。

　余は橋本を以て固より農學博士と信じてゐた。是公もさう信じてゐた。現にある人に向つて橋本つて農學博士さと說明してゐるのを聞いた。余に至つては、何時かの新聞で、本人の博士になつた事を慥かに承知した記憶がある。それで大連を立つて北に行く時も、榮譽ある博士の同伴者だと云ふ自覺がちやんとあつた。所が每日每晚一つ鍋のものを突ついて進行してゐるうちに、何かの拍子だつたが、いや己は博士ぢやないよと急に橋本が云ひ出した。其時はいくら本人が證明したつて成程と云ふ氣になれない位驚いた。第一、十年近くも大學の教授をしてゐる男を、博士にしない法はないと考へてる上、何うしても新聞で其授與式を拜見したとしか思はれないんだから、余も出來る丈は抗辯したが、矢つ張り博士ぢやないと頑固

を張つて云ふ事を聞かない。余も已を得ず、さうかと云つて我を折つた。此時から橋本は氣の毒ながらとうとう、たゞの人間になつて仕舞つた。

けれども、世間には迂濶ものが多いと見へて、何處へ行つても橋本博士、橋本博士と云ふ。新聞を折々讀むと屹度橋本博士と出てゐる。仕舞にはおい又博士だよと注意するのが面倒になつた。橋本も澄し返つてゐる。尤も澄まし返さなくつたつて、一々博士ぢやありませんと訂正して歩く譯に行くものぢやない。斯う云ふ余にも覺がある。釜山から馬關へ渡る船中で、拓殖會社の峰八郎君の細君に逢つたとき、八郎君は眞面目な顏をして、是は夏目博士と引き合した。すると細君が御名前はかねて伺つて居りますと叮嚀に御辭儀をされるから、余も已を得ず、はあと云つたなり博士らしく挨拶をした。だから橋本が博士に慣れ切つて滿洲を朝鮮へ渡るに何も不思議はない。余も一旦は彼の博士を撤回した樣なもの丶、日を重ねるに從つて又何だか博士らしい氣持がし出した。それで道中恙なく安奉線を通つて、安東縣迄遣つて來た。所がこゝで橋本の博士が一寸氣に食はなくなつた。安東縣の宿屋の番頭がどう云ふ不料簡か、橋本博士御手荷物のうちと云ふ札を余の革鞄にぴた〳〵結び付けて仕舞つた。腹が立つたが面倒だから其儘にして置くと次の宿屋で橋本と分れる事になつて、向うの手荷物を停車場へ運び出す際に、余の奇麗な革鞄を橋本のものだと思ひ込んで、宿屋の小僧がずん〳〵停車場迄持つて行つて仕舞つた。余は冗談ぢやないぜと云つた。橋本は面白がつて笑つて居た。それだから未だ博士にならない。

四十二

此處だと云ふので、降りたには降りたが、夜の事だから方角も見當も丸で分らない。頼りに思ふ停車場は縁日の夜店程に小さいものであつた。其軒を離れると猶更淋しい。空には星があるが、高い所に己と光るのみで、足元の景氣にはならなかつた。汽車路を通つて行くと、鐵軌の色が前後五六尺ばかり、提灯の灯に照されて、露の如く映つては又消えて行く。其外に何も見えなかつた。やがて右へ切れて堤の樣なものをだら／＼と下りる心持がしたが、それも六七歩を超えると、靴を置く土の感じが不斷に底つたので、又平地へ出たなと氣が付いた。すると蟲の音が聞えだした。足元で少しばかり鳴いてゐる樣な家庭的なものではない。蟲の音だと云ふ分別が出た時には、其聲がもう左右前後に遠く續いてゐた。我々は一つの提灯を先にして、平原にはびこる無盡藏の蟲の音に包まれながら歩いた。

今考へると、中々風流である。筆を執つて書いてゐても、魏叔子の大鐵椎の傳にある曠野の景色が眼の前に浮んでくる。けれども歩いてゐる途中は實に苦しかつた。膳の菜に凍豆腐を一丁食つた所が、其豆腐が腹へ這入るや否や急に石灰の塊に變化して、胃の中を塞いでゐる樣な心持である。腮の奥から締め付けられて已を得ない性質の唾液が流れ出す。それに誘はれる儘にして置くと、嘔きたくなる。せめて口中の折合でもと思つて、少し抵抗しに掛かると、足が竦んで動けなくなる。余は幾度か蟲の音の中に苦しい尻を落付けやうかと思つた。たゞ橋本に心配させるのが、氣の毒である。支那の荷持に野糞を垂れてると誤解されたつて手柄にもならない。そこで無理に歩いた。

遙向うに灯が一つ見える。余が歩いてゐる路は平らである。灯は其眞正面に當る。彼處へ行くんだらうと推測して星の下を無言に辿つた。今日の午は營口で正金銀行の杉原君の御馳走を断つた。晩は天春君の

斡旋で既に準備の出來てゐる宴會を斷つた。さうして逃げる樣に汽車に乘つた。乘る時橋本に此樣子ぢや千山行は撤回だと云つた。實際撤回しなければならない程、容體が危しくなつて來た。たゞ向うに見える一點の灯火が、今夜の運命を決する孤つ家であると覺悟して、寂寞たる原を眞直に橫切つた。原のなかには、此灯火より外に當になるものは一つも見付からないのだから心細かつた。宿屋はたつた一軒かと聞いたら、案內がえゝと答へた。湯崗子は溫泉場だと橋本のプログラムの中にちやんと出てゐるのだから、溫泉が此茫々たる原の底から湧いて出るのだらうとは、始めから想像する事が出來たが、是程淋しい野の面に、たゞ一軒の宿屋がひつそり立つてゐやうとは思ひがけなかつた。

其うち漸く灯のある所へ着いた。平家作の西洋館で、床の高さが地面とすれ〳〵になる程低い。板間ではあるが無論靴で出入をする。宿の女は草履を穿てゐた。遠くから見たと同じ樣に浮き立たない家であつた。造作の付かない廣い空家へ洋燈を點して住つてゐるのかと思つた。這入るとすぐの大廣間に置いてあつたオルガンさへ、先の持主が忘れて置いて行つたものとしか受取れなかつた。暗い廊下を突き當つて右へ折れた翼の端の室へ案內された。中を二つに仕切つてある。低い床には、椅子と洋卓と色の褪めた長椅子とが置いてあつた。高い方は疊を敷いて、日本らしく取り繕つてあつた。丁度土間から座敷へ上る樣にして、甲から乙に移る構造である。余はいきなり疊の上に倒れた。三四十分の後膳が出た。橋本がしきりに起きて食へと勸めたが、遂に起きなかつた。第一食卓に何が盛られたかをさへ見なかつた。眼を開ける勇氣すら無かつたのである。

四十三

朝起きると、馬が來たとか來ないとか云つて橋本の連中が騒いでゐる。連中は三人だから、一人が一つの馬に乘るとすれば、三匹要る譯になる。此茫漠たる原の中で、生きた馬を三匹生捕るとなると、手數のかゝるのは一通りではあるまい。連中は格別早起きもしない癖に、今更苦情を並べたつて始まらないと思つて、同行を斷念した余は、冷然と落付いてゐた。本來を云ふと、千山へ行くのが目的で、わざ／＼此處に降りたには相違ないが、一旦自分が千山行を諦めたとなると、外の連中が豫定通に行動するのが、忌々しくなる。第一橋本なんて農科の男は、千山を見る必要も何もないのである。千山は唐の時代に開いた梵刹で、今だに殘つてゐるのは、牛でもなければ豚でもない、たゞ山と谷と巖と御寺と坊主丈であるから、農科の教授がわざ／＼馬に乘つて見物に行くべき處では決してない。と云つて折角行くと云ふものを、異見迄して思ひ止まらせる程の口實は無論考へ出せないから、爲すが儘にさせて放つて置いた。そのうち不思議な事に、注文通馬が三匹出て來た。何處から出て來たものか聞いても見なかつたが、慥かに出て來た。三人は癪に障る程勇んで外へ飛び出した。余は仕方がないから西洋間と日本間の唯一の主人として、此一日を物靜かに休養すべく準備した。先づ何よりも横になるのが藥だらうと思つて、狸だか狐だか分らない毛皮の上にごろりと轉がつた。すると窓の外から橋本の聲で、おい／＼一寸出て見ろと呼んでゐる。彼れまだ其處いらを迷付いてるなと思ふと、少し面白くなつたから請求通原の中へ草履の儘出た。すると廣い牧場の様な處に、馬が三匹立つてゐた。それが孰れも小汚ない駄馬だつたので甚だ愉快であつた。の

みならず、其中の一匹が何うしても大重君を乘せやうと云はない。傍へ行くと、飛んだり蹴たりする。馬が怖がるからだと云つて、手拭で眼隱しをして、支那の小僧が兩手で轡を確り抑へてゐる。遠くから見ると、馬が鉢卷をした樣で可笑しかつた。其傍へ大重君が苦笑ひをしながら近寄つて行く所は、一層面白かつた。しかも一度や二度ではない。餘程馬に遠慮する性質と見えて、容易に埒を明けないから、みんなが猶喝采する。橋本は北海道の住人だから苦もなく鞍に跨つた。もう一人――名前を忘れたから、もう一人といふより外に仕方がないが――是は熊岳城の苗圃の長で、もと橋本に敎はつた事があると云ふ丈に、手綱を執る術を心得てゐる。余は此時立ちながら心の中で、要するに千山行を撤回した方が、馬術家としての余の名譽を完うする所以ではなからうかと考へた。

けれども、そんな氣色は顏にも出さず、たゞ殘り惜しげに三人の後姿を眺めてゐた。さうして大重君の腰つきから推測して、千山迄あれで乘り通すのは、定めて心配な事だらうと同情した。橋本は今夜のうちに歸るんだとか號して、しきりに馬を急がせるらしい。苗圃長も負けずに、續いて行く。獨り大重君丈が後れた。馬はまだ眼隱をしてゐる。やがて二人の影が高粱に遮ぎられて、何方へ向いて行くか一寸分らなくなつた。先刻からそこいらを徘徊してゐた脊の高い支那人も亦高粱の裡に姿を隱した。此支那人は肩から脊へ掛けて長い鐵砲を釣つてゐた。人數は二人であつた。始めて氣が付いたときは咄嗟の際に馬賊といふ聯想が起つた。橋本と前後して高粱の底に沒して、しばらくすると、どんと云ふ砲聲が聞えて、又しばらくすると、三人の馬の前に何處からかあの脊の高い奴が現はれて來たら大事件だと想像して、又室の中へ歸つて狸の皮の上に寐た。

四十四

手拭を下げて風呂に行く。一町ばかりの原の中を歩かなければならない。四方を石で疊上げた中へ段々を三つ程磨から下へ降りると湯泉に足が屆く。露治時代に露人が建てたものだから可なり立派に出來てゐる代りに頗る殺風景である。入浴時間は十五分を越ゆべからず杯と云ふ布告めいたものがまだ入口に貼付てある通りの構造である。犯則を承知の上で、石段に腰を掛けたり、腹這に身を浮かしたり、頬杖を突いて倚かかつたり、色々の工夫を盡した上、表へ出て風呂場の後へ廻ると、大きな池があつた。若い男が破舟の中へ這入つてしきりに竿を動かしてゐる。おい此池は湯か水かと聞くと、若い男は眞面目な顔をして湯だと答へた。あまり馬鹿な奴だから、其間口を利くのを已めにした。岸の上から底を覗くと、時々泡の樣なものが浮いて來る。少しは湯氣が立つてゐるかとも思はれる。實は魚がゐないかと、念の爲聞いて見たかつたのだけれども、相手が相手だから歩を回らして宿の方へ歸つた。後で、此池に魚が泳いでゐる由を承知して甚だ奇異の思ひをなした。其上此處には水が一滴も出ないのだと教へられたときには全く驚いた。

驚いた事はまだある。湯から歸つて、丁度入口の大廣間を通り拔けて、自分の室へ行かうとすると、其處に見慣れない女がゐた。何處から來たものか分らないが、紫の袴を穿いて、深い靴を鳴らして、其邊を往つたり來たりする樣子が、どうしても學校の教師か、女生徒である。東京でこそ外へさへ出れば、向うから眼の中へ飛び込んでくる圖だが、渺茫たる草原のいづくを物色したつて、斯樣な文采は瞳に落るべき筈でない。余は寧ろ怪しい趣を以て、此女の姿をしばらく見詰めてゐた。

室に歸つて又寢た。眼が覺めると窓の外で蟲の聲がする、淋しくなつたから、西洋間へ出て、長椅子の上に腰を掛けて、謠をうたつた。無論出鱈目である。そこへ下女が來た。先刻の女の事を聞いたら、何でも宅で知つてる人なんでせうと云つた丈で、ちつとも要領を得ない。昨夕飯を濟まして煙草を呑んでゐると急に廣間の方で、オルガンを彈く音がしたが、あの女が遣つたんぢやないかと聞くと、いゝえ昨夕のは宅の下女ですと云ふ。此原のなかに、其程ハイカラな下女が居やうとは思ひがけなかつた。先刻の袴はもう歸つたさうである。

余は一人長椅子の上に坐つた。さうして永い日が傾き盡して、原の色が寒く變る迄ぼかんとしてゐた。すると靜かな野の中でどうぞ、ちと御遊びに、私一人ですからと云ふ嬌かしい聲がした。其音調は全くの東京ものである。余は突然立つて、窓の外を眺めた。生憎窓には寒冷紗が張つてあつた。手早く硝子を開けて首を外へ出すと、外はもう一面に夕暮れてゐて、蒼い煙が女の姿を包んで仕舞つたので誰だか分らなかつた。

橋本の連中は其晩歸つて來た。下女のしらせで、暗い背戸に出て見ると、豆の樣な灯が一つ遠くに見えた。下女はあれが連中だと云ふ。いくら野廣い處だつて、橋本以外にも灯が見える事もあるだらうと尋ねても、矢つ張りあれだと云ふ。果してさうであつた。灯は夕方宿から迎に出した支那人の持つて行つた提灯である。背戸口に馬を乘り捨てた橋本は、さう骨を折つて見に行く所でもないよと云つた。大重君は馬から三度落ちたさうである。

四十五

奉天へ行つたら滿鐵公所に泊るが可いと、立つ前に是公が敎へて呉れた。滿鐵公所には俳人肋骨がゐる筈だから、世話になつても構はない位のずるい腹は無論あつたのだが、橋本が一所なので、多少遠慮した方が紳士だらうといふ事に相談がいつか一決して仕舞つた。停車場には宿屋の馬車が迎へに來てゐた。矢張り泥の中から掘出して、炎天で乾かした樣に色が變つてゐる。荷物と人間をたゞゐるに乘せて、構内を離れるや否や、御者が凄じく鞭を鳴らした。峠を越す田舍の乘合馬車よりも手荒な取扱方である。廣い通りは夫程でもないが、次第に城内に近づくに從つて、今迄野原同然に茫々としてゐた往來が、左右の店の立込んで來ると共に狹くなる上に、鐵道馬車が其眞中を驅けつゝあるにも拘らず、烈しい鞭の影は一分に一度位は屹度頭の上で閃めいた。馬は無理にも急がなければならない。けれども奉天丈あつて、往來の人は馬車の右にも左にも、前にも後にも、のべつに動いてゐる。其處へ騾馬を六頭も着けた荷車がくるのだから、牛を驅る樣にのろく歩いたつて危ない。それだのに無人の境を行くが如くに飛ばして見せる。我々の樣な平和を喜ぶ輩は此車に乘つてゐるのが既に苦痛である。御者は勿論チヤン〳〵で、油に埃の食ひ込んだ辮髮を振り立てながら、時々滿洲の聲を出す。余は八の字を寄せて、馬の尻をすかしつゝ、眺めた。さうして、みだりに鞭を瘠せ骨に加へて、旅客の御機嫌を取るのは、女房を叱つて佳賓をもてなすの類だと思つた。

現に北陵から歸りがけに、宿近く乘付けると、左り側に人が黑山の樣にたかつてゐる。其邊は支那の豆腐やら、肉饅頭やら、豆素麵抔を賣る汚ない店の隙間なく竝んでゐる所であつたが、黑い頭の塊まつた下

を覗くと、六十許の爺さんが大地に腰を据ゑて、兩脛を折つたなり前の方へ出してゐた。其右の膝と足の甲の間を二寸程、强い力で刳り拔いた樣に、脛の肉が骨の上を滑つて、下の方迄行つて、一所に縮れ上つてゐる。丸で柘榴を潰して叩き付けた風に見えた。斯う云ふ光景には慣れてゐるべき筈の案内も、少し寒くなつたと見えて、すぐに馬車を留めて、支那語で何か尋ね出した。余も分らない乍ら耳を立てゝ、何だ何だと繰返して聞いた。不思議な事に、黑くなつて集つた支那人はいづれも口も利かずに老人の創を眺めてゐる。動きもしないから至つて靜かなものである。猶感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝してゐる老人の顏に、何等の表情もない事であつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。氣が付いたのは、たゞ其眼である。老人は曇よりと睡面の上を見てゐた。

馬車に引かれたのださうですと案内が云つた。醫者はゐないのかな、早く呼んでやつたら可いだらうにと間接ながら窘なめたら、えゝ今に何うかするでせうといふ答である。此時案内はもう本來の氣分を囘復してゐたと見える。鞭の影は間もなく又閃めいた。埃だらけの御者は人にも車にも往來にも遠慮なく、滅法無賴に馬を追つた。眉も着物も黃色な粉を浴びて、宿の玄關へ下りた時は、漸く殘酷な支那人と緣を切つた樣な心持がして嬉しかつた。

四十六

支那の古家を其儘使つてゐるから、御寺の本堂を客間に仕切たと同じ樣である。釣り廊下を渡つて正面の

座敷を覗くと、骨董が一杯並べてあつたので、何事かと思つたら、北京へ買出しに行つた道具屋が、歸り途に此處で逗留中の見世を張つたのだと分つたから、冷し半分這入つて見てゐるうちに、時間が來たので、外へ出た。今度は車だから好からうと安心して、一寸ハイカラに膝頭を重ねて反り返つて見たが、矢張決して無難ではない。人力は日本人の發明したものであるけれども、引子が支那人もしくは朝鮮人である間は決して油斷しては不可ない。彼等はどうせ他の拵へたものだといふ料簡で、毫も人力に對して尊敬を拂はない引き方をする。海城といふ處で高麗の故跡を見に行つた時なぞは、尻が蒲團の上に落ち付く暇がない程搖れた。一尺ばかり跳ね上げられる事は、一丁の間に一度は必ずあつた。仕舞に朝鮮人の頭をこきんと張付けて遣りたくなつた位殘酷に取扱はれた。奉天の道路は海城程凸凹に出來上つてゐないから、無暗に車の上で踊ををどる苦痛はないが、其引き方の如何にも無技巧で、たゞ見境なく走けさへすれば車夫の能事畢ると心得てゐる點に至つては、全く朝鮮流である。余は車に搖られながら、乘客の神經に相應の注意を拂はない車夫は、如何に能く走けたつて、遂に成功しない車夫だと考へた。

そのうち大きな門の下へ出た。奉天へ前後四泊した間に、此門を何度となく潛つた覺がある。其名前も幾度となく耳にした。所がそれを忘れて仕舞つた。其恰好も甚だ曖昧に頭に映る丈である。然し奉天の市街に入つて始めて埃だらけの屋根の上に、高く此門を見上げた時は、はあと思つた。其時の印象はいまだに消えない。橋本と一所に此門の傍にある小さな店に筆と墨を買に行つた折の事も、寂びた經驗の一つとしてよく覺えてゐる。其時橋本は敷居を跨いで、中へ這入つた。余も橋本に續かうとして身體を半分廂から奥へ差し込んだが、支那の家に固有な一種の臭が、忽ち鼻に感じたので、一二歩往來の方へ出て佇んで

ゐた。今云ふ門は十間ばかり先の四辻にあるので、余は鳥打帽の庇に高い角度を與へてわざ〳〵仰むいて見た。時刻は暮に近い頃だつたから、日の色は瓦にも棟にも射さないで、眩しい局部もなく、總體が粛然と喧びすしい十字の街の上に超越してゐた。此門は色としては、古い心持を起す以外に、特別な采を一向具へてゐなかつた。木も瓦も土も略一色に映る中に、風鈴丈が器用に緑を吹いてゐた丈である。瓦の崩れた間から長い草が見えた。庇の暗い影を掠めて白い鳩が二羽飛んだ。余は久し振りに漢詩といふものが作りたくなつた。待つてゐる間少し工夫して見たが、一句も纏まらないうちに、橋本が筆と墨を抱えて出て來たので興趣は破れて仕舞つた。

此外に此門から得た經驗は、暗い穴倉のなかで、車に突き當りはしまいかと云ふ心配と、煉瓦に封じ込められた塵埃を一度に頭から浴びると云ふ苦痛丈であつた。余の車屋は此暗い門の下を潜つて、城内の満鐵公所迄、惡辣無双に引いて行つた。余は生きた風呂敷包の如く車の上で浮沈した。

四十七

茶を飲むと、酸い様な鹽はゆい様な一種の味がする。少し妙だと思つて、茶碗を下へ置いて緩り橋本の講釋を聞いた。其講釋によると、奉天には昔から今日に至る迄下水と云ふものがない。兩便の始末は無論不完全である。そこで古來から何百年となく奉天の民が垂れ流した糞小便が歳月の力で自然天然に地の底に浸み込んで、いまだに飲料水に祟りをなしてゐるんだと云ふ。一應は尤もだが、說明が少し科學的でない様である。第一それ程の所なら穀類野菜ともに、もつと能く出來なければならない筈だと思つたが、馬

罷氣てゐるから議論もしなかつた。橋本も是は傳說だよと斷つた。傳說と云へば日本武尊の東夷征伐と同種類に屬すべきもので、眞僞以外に、重く取扱はねばならぬ筋の來歷を有してゐるに違ひない。如何にも汚ない國民である。

湯を立て貰つて這入つて見ると、濁つてゐる。別に黃色く濁つてゐる譯ではないが、御茶の味から演繹すれば矢つ張り酸つぱい湯に浸つてゐるとより外に考へ樣がない。鹹水にも溶けるとか云つて大連で呉れた豆石鹼でも、行李の底から出せば可かつたと思つた。風呂場も風呂桶も小さいものである。其上下女が出て來て背中を流して呉れる。窮屈に身體を曲げながら、御前は日本人だらう。日本は何處の生れだい抔と話をした。此下女は始めて宿へ着いた時、余を橋本の隨行と間違へて、そら何とかさんも一所に入らしつたと云つた。其何とかさんは橋本が蒙古へ行くとき、彼と同じく此處へ泊つた事があるのださうだ。顏が似てゐるから間違へたのか、樣子が御供らしいから間違へたのかは、つい聞き糺して見なかつた。窓の外に大きな甕が埋けてある。我々の汗や垢が例の酸つぱい水と一所になつて、朝に晩に流れ込んでゐるのだから、時々汲み出さなければ溢れる程溜つて仕舞ふ。それを支那の下男が石油罐へ移して天秤棒で擔いで、何處かへ持つて行く。風呂に漬りながら、何處へ持つて行くんだらうなと考へた。餘計な心配の樣だが余は此汚水が結局どう片付けられるかの處置を想像して見て、少しく恐ろしくなつた。

是でゐて御馳走が無暗に出る。胃の悪い余の如きものは、御膳の上を眺めた丈で、腹が一杯になつて仕舞ふ。夜は緞子の夜具に寢かして呉る。店の方では電話が仕切なしにちりん／＼と鳴つてゐる。品の好い御神さんが、はあもし／＼を乃別に繰返す。或時チョコレートの菓子が食ひたくなつたから、下女に有る

かいと聞いて見ると、すぐもしくで取り寄せて呉れた。のみならず滿鐵公所へ御馳走を受けに行けば、三鞭が現れる。領事館へ挨拶に行けば、英吉利の王樣の寫眞などが恭々しく飾つてあつて、丸で倫敦の樣な氣持になる。さうかと思ふと、宿の座敷の廊下の向うが白壁で、高い窓から光線が横に這入つて來るのは仕方がないが、其窓に嵌めてある障子には、北齋の畫いた繪入の三國志に出てくる樣な唐めいたものである。しかも餘り綺麗ではない。其上室の中が妙な臭を放つ。支那人が執拗く置き去にして行つた臭だから、いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたつて、依然として臭い。宿では近々停車場附近へ新築をして引移る積だと云つてゐた。さうしたら、此臭丈は落ちるだらう。然し酸つぱい御茶は奉天のあらん限り人畜に祟るものと覺悟しなければならない。

四十八

黑い柱が二本立つてゐる。扉も黑く塗つてある。鋲は飯茶碗を伏せた樣に大きく見える。支那町の眞中に斯んな大名屋敷に似た門があらうとは思ひがけなかつた。門を這入ると又門がある。是は支那流に出來てゐた。それを通り越と幅一間程の三和土が眞直に正面迄通つてゐる。尤も左右共に家續きであるから、四角な箱の中をがらん胴にして、其屋根のない眞中を、三和土を辿て突き當る譯になる。肋骨君の說明を聞いて知つたのだが、此突當りが正房で、左右が廂房である。肋骨君は此正房の一棟に純粹の日本間さへ設けてゐる。一寸見給へと云つて案内するから、後に跟いて行くと、思はざる所に玄關があつて、次の間が見えて、其奥の座敷には立派な掛物が掛つてゐた。かと思ふと左の廂房の扉を開いて此處が支那流の應

接間だと云ふ。成程紫檀の椅子ばかり並んでゐる。尤も西洋の客間と違つて室の眞中は塞いでゐない。周圍に行儀よく据ゑ付けてある。是ぢや客が來ても向ひ合つて坐る事の出來ない譯だから、みんな隣同志で話をする男許りでなければならない。中にも正面の二脚は、玉座とも云ふべき程に手數の込んだもので、上に赤い角枕が一つ宛乘せてあつた。支那人てえものは横着なものでね、斯うして倚つ掛つて談判をするんですと肋骨君が教へて呉れた。肋骨君は支那通丈あつて、支那の事は何でも心得てゐる。あるとき余に向つて、辮髮迄辯護した位である。肋骨君の説によると、あゝ云ふぶく／＼の着物を着て、派出な色の背中へ細い髮を長く垂らした所は、振へ付きたくなる程好いんださうだから仕方がない。實際肋骨君が振へ付きたくなると云ふ言葉を使つたには驚いた。今でも此言葉を考へ出しては驚いてゐる。一返汚ない爺さんが泥溝の樣な奴をあたじけなく豚尾へ垂らしてゐたのを見て、ひどく異樣に感じた所爲だらう。

是程の肋骨君も、正當の應接間には西洋流で我慢してゐる。其隣の食堂では西洋料理を御馳走した。夫から襯衣一枚で玉を突く。其樣子は決して支那ぢやない。萬事橋本から聞いたより倍以上活潑に出來てゐる所を以て見ると、振へ付たいは少々言ひ過ぎたのかも知れない。肋骨君は戰爭で右か左か何方かの足を失くなした。所がそれが何方だか分らない位、自由自在に起つたり坐つたりする。さうして軍人に似合はない樣な東京辯を使ふ。何處で生れたか聞いて見たら、神田だと云つた。神田ぢや其筈である。要するに肋骨君は支那好であると同時に、尤も支那に縁の遠い性質の人である。

室は空いてゐるから來給へとしきりに云つて呉れるので、ぢや歸りに厄介になるかも知れないと云ふとすぐ宜しいと快諾した所だけは旨かつたが、歸りには夜半の汽車で奉天へ着く時間割だと橋本から聞くや否

や、肋骨君は忽ち宿泊を斷つた。いや、あの汽車ぢや御免だと云ふ。もう一つの汽車が好いぢやないかと勸めるんだが、プログラムの全權が先刻此方にないので、已を得ず、そんなら、もし夜半の汽車でなかつたなら泊めて貰はうと云ふ條件を付けた。すると肋骨君は又宜しいと答へた。所が歸りには矢つ張り豫定通夜半着の汽車へ乘つたので、とう／＼滿鐵公所へは泊まれない事になつた。滿鐵公所で余の知らない所は寢室丈である。

四十九

右へ折れると往來とは云はれない位狹い所へ出たので漸く安心した。是ならば人を引殺す心配もなからうと思つて、案内をしてくれる、宿の番頭を相手に、行く／＼話をした。滿洲の日は例によつて秋毫の先を鮮かに照す程に照り切つたのである。目深に鳥打帽を被つても、三日月形の廂では額から下を何うする事も出來ないので、直下に射りつけられる所に痛い位ほてる。そこへ馬の蹄に搔き立てられた輕い埃が、車の下から濛々と飛んで來る。番頭は、結構な御日和です。少し風でも吹いたら斯んなものぢやありませんと喜んでゐる。其うち馬車が家を離れて廣い原へ出た。原だから無論樹も草も見えないのは當然だが、遠く眺めると、季節丈に青いものが際限のない地の上皮に幾色かの影になつて、一面に吹き出してゐる。何故是程の地面を空しく明て置くかは、家屋の發展に忙殺されつゝある東京者の眼には、卽時の疑問として起る譯であるが、此際は夫よりも窮屈な人間を通り拔けて晴々したと云ふ意識の方が一度に余の頭を照した。路は固より付いてゐない。東西南北共に天の作つた儘であるから、轍の迹は行く人の心任せに思ひ／＼の

見當に延びて行く。

　支那人の馬車が來た。屋根に蒲鉾形の丸味を取つた欄の樣なもの丶なかに、髮を油で煉固めた女が坐つてゐる。長柄は短いが、車の輪は厚く丈夫なものであつた。云ふ迄もなく騾馬に引かしてゐる。まづ日本の昔に流行つた牛車の小ぢんまりしたものと思へば差支ないが、見た所は牛車よりも却て雅である。其代り乘つてる人間は苦しいさうだ。余は此車のごろ／＼行く所を見て、輗たり軏たりと形容したくなつた。輗の字も軏の字も判然たる意味を知らないのだが、乘つてゐる人は定めて輗軏たるものに相違なからうと思つたからである。實を云ふと輗軏たるものは支那の車ばかりではない。斯う云ふ自分も甚だ危しかつた。一體して原だよと澄ましてゐれば夫迄の事で、轎の如く平らにも見えるが、いざ時間に制限を切つて、突切つて見ろと云はれると、恐ろしく凸凹が出來てくる。おい此所で馬車の引つくり返る事はあるまいなと番頭に念を押すと、番頭はえゝ、まあ大抵大丈夫でせうと云ふ丈で、決して萬一を受け合はない。どうも並んでゐる番頭の座が急に高くなつて、番頭そのものが余の方に轉落ちて來さうになつたり、又はあべこべに、余が番頭のシャーぽい上に顚び落ちさうになるのは心好ないものである。余は神經質で臆病な性分だから、車が傾くたんびに飛び降りたくなる。然るに人の氣も知らないで、例の御者が無敵に馬を驅けさせる。入らぬ事だと冷や／＼してゐるうちに、一ケ所路の惡い所へ出た。原因は解らないが、轍の迹が際立つて三四十本並んでゐる。しかも其幅が何れも五六寸ある。さうして見るからに深さうに、日影を遮つて、奥の方を黑く且暗くしてゐる。我々の御者は平氣に其所へ乘り込んだ。順當に乘り込んだのならまだ可かつたけれども、片方の輪丈が泥の中へぐしや／＼と減り込むと同時に、片方は依然として固い土に支へら

れてゐる。余は泥側に席を占めてゐた。すると足が土と擦れ〳〵になる迄車が濘海に沈んで來た。番頭は余の頭の上にある如く感ぜられた。余は堪らなくなつて、泥の中へ飛び下りた。

五十

原が急に叢に變化するのは不思議であつた。此處に是丈の樹が生えるなら、原の中ももう少し茂つて然るべきであると氣が付いた時は既に車の兩側が塞がつてゐた。竹こそないが、藪と云ふのが適當と思はれる位な綠の高さだから、日本の田舍道を歩く樣な大人しい感じである。所々細い枝などが列を外れて往來へ差し出てゐるのを、通りながら潛り拔けたり、撓はしたりして行き過ぎるのが何より愉快だつた。路も先刻よりは平たくなつて、眞白に草と木の間を貫いてゐる。ある所には大きな松があつた。葉の長さが日本の倍もあつて色は海邊のそれよりも黑い。ある所は荒れ果た庭園の體に見えた。さう云ふ場所へ來ると、馬車の上から低い雜木を一目に二丁も眺られる、向うに細長い石碑が立てゐた。模樣丈が薄く見えるが、刻字は無論分らなかつた。

しばらくすると、路が盡きて高い門の下へ出た。門は石を疊んだ三つのアーチから出來上つてゐるが、アーチの下迄行くには大分高い石段を登らなくてはならない。門の左右には大きな龍が壁に彫り込んであつた。是が正門ですがね、締切りだから壁へ添て廻るんですと云つて、馬を土堤の樣な高い所へ上げた。右は煉瓦の壁である。それが所々崩れ掛つてゐる。左はだら〳〵の谷で野葡萄や雜木が隙間なく立て込んだ。路は馬車が辛うじて通れる位狹い。其處を廻つて横手の門から車を捨てゝ這入ると、眼がすつきりと

靜まつた。一抱もある松ばかりが遙の向迄並んでゐる下を、長方形の石で敷き詰めた間から、短い草が物寂びて生えてゐる。靴の底が石に落ちて一歩毎に鳴つた。一丁許行つて正面に曲ると、左右に石の象がゐた。大きくつて、鷹揚で、しかも石だから甚だ靜かである。突き當りにある樓門の樣な所へ這入つたら、今度は大きな龜の脊に頌德碑が立てゝあつた。龜も大きかつたが、碑も高い。蒙古と滿洲と支那の三國語で文章が刻つてある。後へ出ると隆恩門と云ふのが空に聳えてゐた。積み上たアーチの上を見ると三層あつた。左右に廻らしてある壁も尋常ではない。あの上を歩いて見たいと番頭に賴むと、えゝ今乘つて見ませうと云つて中へ這入つた。中は眞四角に仕切つてある。正面にある廟の横から石段を登つて壁の上へ出ると、廟の後丈が半月形になつて所謂北陵を取り卷いてゐる。

支那の小僧が跣足で跟いて來た。番頭を捕まへて頻りにこそ／＼何か云つてゐる。番頭に聞くと、えゝなにと曖昧な答をする。又聞き返したら斯う云つた。屋根の廟の所に着けてある金の玉を、此間一つ落ちた時に、拾つて置いたから、買つて吳れと云ふんです。表向にすると嚴しいものですから、斯うして見物に來た時、そうつと賣付けやうてんで、支那人は實に狡猾ですからね。

支那の陵守も無論狡猾だらうが、金の玉を安く買はうと云ふ番頭もあまり正直な方ぢやない。番頭はそつと錢を遣つて金の玉をポツケツトへ入れた樣である。

壁の上を歩くと太い樹が眼の下に見える。桑があんなに大きくなつてますと番頭が指した。成程一抱もある。此四角な壁の一側は長さどの位かねと尋ねると、へえ今勘定して見ませうと云ひながら、一歩二尺の割で一二三四と歩いて行つた。余は壁の外を見下して、其處らを絡んでゐる赤い木の實を眺めてゐた。

折角番頭の勘定した壁の長さは忘れて仕舞つた。

五十一

撫順は石炭の出る所である。そこの坑長を松田さんと云つて、橋本が滿洲に來る時、船中で知己になつたとかで、其折の勸誘通り明日行くと云ふ電報を打つた。汽車に乘ると西洋人が二人居た。朝早いので、客車内で持參の辨當か何か食つてゐたが、撫順に着いたら我々と一所に汽車を降りた。出迎へのものが挨拶してゐる所を聞いて見ると、其内の一人は奉天の英國領事であつた。我々も此英人等と一所に炭坑の事務室に行つて、二階で松田さんに逢つた。松田さんは縞の綿の襯衣の上に薄い背廣を着てゐた。脊の低い氣輕な人なので、到底坑長とは思へなかつた。我々と英國人を二所に置いて、雙方へ向けて等分に話をした。橋本も余も英語は一切口にしなかつた。從つて英人とは言葉を交へなかつた。

やがて松田さんが案内になつて表へ出た。貯水池の土堤へ上ると、市街が一目に見える。まだ完全には出來上つて居ないけれども、悉く煉瓦作りである上に、スチュヂオにでも載りさうな建築ばかりなので、全く日本人の經營したものとは思はれない。しかも其洒落た家が殆んど一軒毎に趣を異にして、十軒十色とも云ふべき風に變化してゐるには驚いた。其中には教會がある、劇場がある、病院がある、學校がある、坑員の邸宅は無論あつたが、いづれも東京の山の手へでも持つて來て眺めたいもの許りであつた。松田さんに聞いたら皆日本の技師の拵へたものだと云はれた。

市街から眼を放して反對の方角を眺めると、低い丘の起伏してゐる向うに煙突の頭が二ヶ所程微かに見

える。雙方共距離はたしかに一里以上あるんだから廣い炭坑に違ない。松田さんの話しによると、何處を何う掘つても一面の石炭だから、それを掘盡すには百年でも二百年でも掛かるんださうである。我々の立つてゐるつい傍でも、八百尺と九百尺のシャフトを拔いてゐた。

事務所へ歸つて午餐の御馳走になつたとき英國人は箸も持てず、米も喰へず氣の毒なものであつた。此領事は支那に十八年とかゐたと云ふのに、二本の箸を如何ともする事の出來ないのは案外である。其代り官話は達者ださうだ。松田さんは用事が忙しいとかで、食卓へは出て來られなかつた。接待役として松田さんに代つた人は、英語で英國人に話したり、日本語で余等に話したり甚だ多事であつた。けれども橋本氏も余も此時迄英語は一切使はなかつた。元來英人と云ふものはプラウドな氣風を帶びてゐて、紹介されない以上は、他に向つて容易に口を利かない。だから我々も英人に對しては同樣にプラウドである。

食後は坑内を見物する事になつた。田島君といふ技師が案内をして呉れた。入口で安全燈を一つ宛點して、杖を五本用意して、それを各自に分けて、一間四方位の穴をだら／＼と下りた。十四五間行くか行かないに坑のなかは眞暗になつた。カンテラの灯は足元を照らすにさへ不足である。けれども路は存外平らで、天井も可なり高かつた。右へ曲つて、探る樣に下て行くと、余のすぐ前に居る田島君がぴたりと留つた。余も留つた。案内が留つたから、あとから續いて來たものも悉く留つた。此處に腰掛があります。坑へ這入るものは此處で五六分休んで眼を慣らすんですと云つた。五人は休みながらカンテラの灯で互の顏を見合はした。みんな立つて默つてゐる。腰を卸すものは一人もない。靜かな中で時の移るのは多少凄かつた。其内暗い所が自然と明るくなつて來た。田島君はやがて、もう可からうと云つて、又すぐ右へ曲つて、奧

へ奥へと下りて行つた。余も續いて下りた。あとの三人も續いて下りて來た。

玆處まで新聞に書いて來ると、大晦日になつた。二年に亙るのも變だから一先やめる事にした。

四二、一〇、二一――一二、三〇

思ひ出す事など

一

漸くの事で病院迄歸つて来た。思ひ出すと此處で暑い朝夕を送つたのも最早三ヶ月の昔になる。其頃は二階の廂から六尺に餘る程の長い葭簀を日除に差し出して、熱りの強い縁側を幾分か暗くしてあつた。其縁側に是公から貰つた楓の盆栽と、時々人が見舞に持つて来て呉れる草花抔を置いて、退屈も凌ぎ暑さも紛らして居た。向に見える高い宿屋の物干に眞裸の男が二人出て、日盛を事ともせず、欄干の上を危なく渡つたり、又は細長い横木の上にわざと仰向に寝たりして、巫山戯る樣子を見て自分も何時か一度はもう一遍あんな逞しい體格になつて見たいと羨んだ事もあつた。今は凡てが過去に化して仕舞つた。再び眼の前に現れぬと云ふ不確な點に於て、夢と同じく果敢ない過去である。

病院を出る時の余は醫師の勸めに從つて轉地する覺悟はあつた。けれども、轉地先で再度の病に罹つて、寐たまゝ東京へ戻つて来ようとは思はなかつた。東京へ戻つてもすぐ自分の家の門は潜らずに釣臺に乘つたまゝ、又當時の病院に落ち付く運命にならうとは猶更思ひ掛けなかつた。

歸る日は立つ修善寺も雨、着く東京も雨であつた。扶けられて汽車を下りるときわざ〳〵出迎へて呉れた人の顔は半分も眼に入らなかつた。目禮をする事の出来たのは其中の二三に過ぎなかつた。思ふ程の會

釋もならないうちに余は早く釣臺の上に横へられてゐた。黄昏の雨を防ぐ爲め釣臺には桐油を掛けた。余は坑の底に寐かされた樣な心持で、時々暗い中で眼を開いた。鼻には桐油の臭がした。耳には桐油を撲つ雨の音と、釣臺に付添うて來るらしい人の聲が微かながらとぎれ〳〵に聞えた。けれども眼には何物も映らなかつた。汽車の中で森成さんが枕元の信玄袋の口に插し込んで呉れた大きな野菊の枝は、降りる混雜の際に折れて仕舞つたらう。

　　釣臺に野菊も見えぬ桐油哉

是は其時の光景を後から十七字にちゞめたものである。余は此釣臺に乘つた儘病院の二階へ舁き上げられて、三ヶ月前に親しんだ白いベッドの上に、安らかに瘠せた手足を延べた。雨の音の多い靜な夜であつた。余の病室のある棟には患者が三四名しか居ないので、人聲も自然絶え勝に、秋は修善寺よりも却てひつそりしてゐた。

此靜かな宵を心地よく白い毛布の中に二時間程送つた時、余は看護婦から二通の電報を受取つた。一通を開けて見ると「無事御歸京を祝す」と書いてあつた。さうして其差出人は滿洲に居る中村是公であつた。他の一通を開けて見ると、矢張り無事御歸京を祝すと云ふ文句で、前のと一字の相違もなかつた。余は平凡ながら此の暗合を面白く眺めつゝ、誰が打つて呉れたのだらうと考へて差出人の名前を見た。所がステトとある許で一向に要領を得なかつた。たゞ掛けた局が名古屋とあるので漸く判斷が付いた。ステトと云ふのは、鈴木禎次と鈴木時子の頭文字を組み合はしたもので、妻の妹と其夫の事であつた。余は二ツの電報を折り重ねて、明朝又來るべき妻の顏を見たら、先づ此話をしやうかと思定めた。

病室は疊も青かつた。襖も張り易へてあつた。壁も新に塗つた許であつた。萬事心よく整つてゐた。杉本副院長が再度修善寺へ診察に來た時、疊替をして待つてゐますと妻に云ひ置かれた言葉をすぐに思ひ出した程奇麗である。其約束の日から指を折つて勘定して見ると、既に十六七日目になる。青い疊も大分久しく人を待つたらしい。

　思ひけり既に幾夜の蟋蟀

其夜から余は當分又此病院を第二の家とする事にした。

[illegible]

病院に歸り着いた十一日の晩、回診の後藤さんに此頃院長の御病氣は何うですかと聞いたら、え丶一仕切は大分好い方でしたが、近來又少し寒くなつたものですから……と云ふ答だつたので、余は何うぞ御逢ひの節は宜しくと挨拶した。其晩はそれ限何の氣も付かずに寐て仕舞つた。すると明日の朝妻が來て枕元に坐るや否や、實は貴方に隱して居りましたが長與さんは先月五日に亡くなられました。葬式には東さんに代理を頼みました。惡くなつたのは八月末丁度貴方の危篤だつた時分ですと云ふ。余は此時始めて附添のものが、院長の訃をことさらに祕して、余に告げなかつた事と、又其告げなかつた意味とを悟つた。さうして生き殘る自分やら、死んだ院長やらを兎角に比較して、少時は茫然とした儘默つてゐた。

院長は今年の春から具合が惡かつたので、此前入院した時にも六週間の間ついぞ顏を見合せた事がなかつた。余の病氣の由を聞いて、夫は殘念だ、自分が健康でさへあれば治療に盡力して上げるのにと云ふ言

傳があつた。其後も副院長を通じて、よろしくと云ふ言傳が時々あつた。

修善寺で病氣がぶり返して、社から見舞のため森成さんを特別に頼んで呉れた時、着いた森成さんが、病院の都合上とても長くはと云つてゐる其晩に、院長はわざ〳〵直接森成さんに電報を打つて、出來る丈余の便宜を計らつて呉れた。其の文句は寐てゐる余の目には無論觸れなかつた。けれども枕元にゐる雪鳥君から聞いた其文句の音丈は、未だに好意の記憶として余の耳に殘つてゐる。それは當分其地に留まり、充分看護に心を盡すべしとか云ふ、森成さんに取つては隨分嚴かに聞える命令的なものであつた。

院長の容體が惡くなつたのは余の危篤に陷つたのと略同時ださうである。余が鮮血を多量に吐いて傍人から到底囘復の見込がない樣に思はれた二三日後、森成さんが病院の用事だからと云つて、一寸東京へ歸つたのは、生前に一度院長に會ふためで、夫から十日程經つて、又病院の用事が出來て二度東京へ戾つたのは院長の葬式に列する爲であつたさうである。

當初から余に好意を表して、間接に治療上の心配をして呉れた院長は斯くの如く次第に死に近づきつゝある間に、余は不思議にも命の幅の縮まつて殆んど絹絲の如く細くなつた上を、漸く無難に通り越した。院長の死が一基の墓標で永く確められたとき、辛抱強く骨の上に絡み付いてゐて呉れた余の命の根は、辛うじて冷たい骨の周圍に、血の通ふ新しい細胞を營み初めた。院長の墓の前に供へられる花が、幾度か枯れ、幾度か代つて、萩、桔梗、女郎花から白菊と黃菊に秋を進んで來た一ヶ月餘の後、余は又其一ヶ月餘の間に盛返し得る程の血潮を皮下に盛得て、再び院長の建てた此胃腸病院に歸つて來た。さうして其間いまだ曾て院長の死んだと云ふ事を知らなかつた。歸る明る朝妻が來て實は是々でと話をする迄、院長は余

の病氣の經過を東京にゐて承知してゐるものと信じてゐた。さうして回復の上病院を出たら禮にでも行かうと思つてゐた。もし病院で會へたら篤く謝意でも述べやうと思つてゐた。

　　逝く人に留まる人に來る雁

考へると余が無事に東京まで歸れたのは天幸である。斯うなるのが當り前の樣に思ふのは、未だに生きてゐるからの惡度胸に過ぎない。生き延びた自分丈を頭に置かずに、命の綱を踏み外した人の有樣を思ひ浮べて、幸福な自分と照し合せて見ないと、わが難有さも分らない、人の氣の毒さも分らない。

　　たゞ一羽來る夜ありけり月の雁

三

ジェームス教授の訃に接したのは長與院長の死を耳にした明日の朝である。新着の外國雜誌を手にして、五六頁繰つて行くうちに、不圖教授の名前が眼に留つたので、又新らしい著書でも公けにしたのか知らんと思ひながら讀んで見ると、意外にもそれが永眠の報道であつた。その雜誌は九月初めのもので、項中には去る日曜日に六十九歲を以て逝かるとあるから、指を折つて勘定して見ると、丁度院長の容體が次第に惡い方へ傾いて、傍のものが晝夜眉を顰めてゐた頃である。又余が多量の血を一度に失つて、死生の境に彷徨してゐた頃である。思ふに教授の呼息を引き取つたのは、恐らく余の命が、瘠せこけた手頸に、有るとも無いとも片付かない脈を打たして、看護の人をはら〳〵させてゐた日であらう。

教授の最後の著書「多元的宇宙」を讀み出したのは今年の夏の事である。修善寺へ立つとき、向へ持つ

て行つて讀み殘した分を片付けやうと思つて、それを五六卷の書物とともに鞄の中に入れた。所が着いた明日から心持が惡くて、出歩く事もならない始末になつた。けれども宿の二階に寐轉びながら、一日二日は少しづゝでも前の續きを讀む事が出來た。無論病勢の募るに伴れて讀書は全く廢さなければならなくなつたので、教授の死ぬ日迄教授の書を再び手に取る機會はなかつた。

病牀にありながら、三たび教授の「多元的宇宙」を取り上げたのは、教授が死んでから幾日目になるだらう。今から顧みると當時の余は恐ろしく衰弱してゐた。仰向に寐て、兩方の肘を蒲團に支へて、あの位の本を持ち應へてゐるのに隨分と骨が折れた。五分と經たないうちに、貧血の結果手が痲痺れるので、持ち直して見たり、甲を撫でゝ見たりした。けれども頭は比較的疲れてゐなかつたと見えて、書いてある事は苦もなく會得が出來た。頭丈はもう使へるなと云ふ自信の出たのは大吐血以後此時が始てゞあつた。嬉しいので、妻を呼んで、身體の割に頭は丈夫なものだねと云つて譯を話すと、妻が一體貴方の頭は丈夫過ぎます。あの危篤かつた二三日の間抔は取り扱ひ惡くて大變弱らせられましたと答へた。

「多元的宇宙」は約半分程殘つてゐたのを、三日許で面白く讀み了つた。ことに文學者たる自分の立場から見て、教授が何事によらず具體的の事實を土臺として、類推で哲學の領分に切り込んで行く所を面白く讀み了つた。余はあながちに辯證法を嫌ふものではない。又妄りに理知主義を厭ひもしない。たゞ自分の平生文學上に抱いてゐる意見と、教授の哲學に就いて主張する所の考とが、親しい氣脈を通じて彼此相倚る樣な心持がしたのを愉快に思つたのである。ことに教授が佛蘭西の學者ベルグソンの説を紹介する邊りを、坂に車を轉がす樣な勢で馳け拔けたのは、まだ血液の充分に通ひもせぬ余の頭に取つて、どの

位嬉しかつたか分らない。余が教授の文章にいたく推服したのは此時である。今でも覺えてゐる。一間置いて隣にゐる東君をわざ〳〵枕元へ呼んで、ジェームスは實に能文家だと敎へる樣に云つて聞かした。其時東君は別に是といふ明瞭な答をしなかつたので、余は、君、西洋人の書物を讀んで、此人のは流暢だとか、彼人のは細緻だとか、凡て特色のある所がその書き振りで、讀みながら解るかいと失敬な事を問ひ糺した。

　教授の兄弟にあたるヘンリーは、有名な小說家で、非常に難澁な文章を書く男である。ヘンリーは哲學の樣な小說を書き、ヰリアムは小說の樣な哲學を書く、と世間で云はれてゐる位ヘンリーは讀みづらく、又其位教授は讀み易くて明快なのである。――病中の日記を檢べて見ると九月二十三日の部に、「午前ジェームスを讀み了る。好い本を讀んだと思ふ」と覺束ない文字で認めてある。名前や標題に欺されて下らない本を讀んだ時程殘念な事はない。此日記は正に此裏を云つたものである。

　余の病氣に就て治療上色々好意を表してくれた長與病院長は、余の知らない間にいつか死んでゐた。余の病中に、空漠なる余の頭に陸離の光彩を拋げ込んでくれたジェームス教授も余の知らない間にいつか死んでゐた。二人に謝すべき余はたゞ一人生き殘つてゐる。

　　菊の雨われに閑ある病哉

　　菊の色縁に未し此晨

（ジェームス教授の哲學思想が、文學の方面より見て、どう面白いかこゝに詳說する余地がないのは余の遺憾とする所である。又教授の深く推賞したベルグソンの著書のうち第一卷は昨今漸く英譯になつてゾンネンシャインから出版

された。其標題は Time and Free Will（時と自由意思）と名づけてある。著者の立場は無論故教授と同じく反理知派である。）

四

病の重かつた時は、固より其日々々に生きてゐた。さうして其日々々に變つて行つた。自分にもわが心の水の樣に流れ去る樣がよく分つた。自白すれば雲と同じく且つ去り且つ來るわが腦裡の現象は、極めて平凡なものであつた。それも自覺してゐた。生涯に一度か二度の大患に相應する程の深さも厚さもない經驗を、恥とも思はず無邪氣に重ねつゝ移つて行くうちに、夫でも他日の參考に日毎の心を日毎に書いて置く事が出來たならと思ひ出した。其時の余は無論手が利かなかつた。しかも日は容易に暮れ容易に明けた。さうして余の頭を掠めて去る心の波紋は、隨つて起るかと思へば隨つて消えて仕舞つた。余は薄ぼけて微かに遠きに行くわが記憶の影を眺めては、寐ながらそれを呼び返したいやうな心持がした。ミュンステルベルグと云ふ學者の家に賊が入つた引合で、他日彼が法庭へ呼び出されたとき、彼の陳述は殆んど事實に相違する事許であつたと云ふ話がある。正確を旨とする几帳面な學者の記憶でも、記憶は是程に不慥なものである。「思ひ出す事など」の中に思ひ出す事が、日を經れば經るに從つて色彩を失ふのは勿論である。

わが手の利かぬ先にわが失へるものは既に多い。わが手に筆を持つの力を得てより逸するもの亦少からずと云つても嘘にはならない。わが病氣の經過と、病氣の經過に伴れて起る内面の生活とを、不秩序ながら斷片的にも敍して置きたいと思ひ立つたのは是が爲である。友人のうちには、もう夫程好くなつたかと喜

んで呉れたものもある。或は又あんな輕擧をして遣り損なはなければ可いがと心配して呉れたものもある。

其中で一番若い顔をしたのは池邊三山君であつた。余が原稿を書いたと聞くや否や、忽ち余計な事だと叱り付けた。しかも其聲は尤も無愛想な聲であつた。醫者の許可を得たのだから、普通の人の退屈凌ぎ位な所と見たらよからうと余は辯解した。醫者の許可も要る事だが、友人の許可を得なければ不可んと云ふのが三山君の挨拶であつた。それから二三日して三山君が宮本博士に會つて此話をすると、博士は、成程退屈をすると胃に酸が湧く恐れがあるから却つて惡いだらうと調停して呉れたので、余は漸く助かつた。

其時余は三山君に、

遺却新詩無處尋。　嗒然隔牖對遙林。　斜陽滿徑照僧遠。　黄葉一村藏寺深。
懸偈壁間焚佛意。　見雲天上抱琴心。　人間至樂江湖老。　犬吠鶏鳴共好音。

と云ふ詩を遣つた。巧拙は論外として、病院に居る余が窓から寺を望む譯もなし、又室内に琴を置く必要もないから、此詩は全くの實況に反してゐるには違ないが、たゞ當時の余の心持を咏じたものとしては頗る恰好である。宮本博士が退屈をすると酸がたまると云つた如く、忙殺されて酸が出過ぎる事も、余は親しく經驗してゐる。詮する所、人間は閑適の境界に立たなくては不幸だと思ふので、其閑適を少時なりとも貪り得る今の身の嬉しさが、此五十六字に形を變じたのである。

尤も趣から云へばまことに舊い趣である。何の奇もなく、何の新もないと云つても可い。實際ゴルキーでも、アンドレーフでも、イブセンでもシヤウでもない。其代り此趣は彼等作家の未だ嘗て知らざる

興味に屬してゐる。又彼等の決して與からざる境地に存してゐる。現今の吾等が苦しい實生活に取り卷かれる如く、現今の吾等が苦しい文學に取り付かれるのも、已を得ざる悲しき事實ではあるが、所謂「現代的氣風」に煽られて、三百六十五日の間、傍目も振らず、しかく人世を觀じたら、人世は定めし窮屈で且つ殺風景なものだらう。たまにはこんな古風の趣が却つて一段の新意を吾等の内面生活上に放射するかも知れない。余は病に因つて此陳腐な幸福と爛熟な寛裕を得て、初めて洋行から歸つて平凡な米の飯に向つた時の樣な心持がした。

「思ひ出す事など」は忘れるから思ひ出すのである。漸く生き殘つて東京に歸つた余は、病に因つて纔かに享け得た此長閑な心持を早くも失はんとしつゝある。まだ床を離れる程に足腰が利かないうちに、三山君に遣つた詩が、既に此太平の趣をうたふべき最後の作ではなからうかと、自分ながら掛念してゐる位である。「思ひ出す事など」は平凡で低調な個人の病中に於ける述懷と敍事に過ぎないが、其中には此陳腐ながら拂底な趣が、珍らしく大分這入つて來る積であるから、余は早く思ひ出して、早く書いて、さうして今の新らしい人々と今の苦しい人々と共に、此古い香を懷かしみたいと思ふ。

五

修善寺に居る間は仰向に寢たまゝよく俳句を作つては、それを日記の中に記け込んだ。時々は面倒な平仄を合して漢詩さへ作つて見た。さうして其漢詩も一つ殘らず未定稿として日記の中に書き付けた。

余は年來俳句に疎くなりまさつた者である。漢詩に至つては、殆んど當初からの門外漢と云つても可い。

詩にせよ句にせよ、病中に出來上つたものが、病中の本人にはどれ程得意であつても、それが專門家の眼に整つて（ことに現代的に整つて）映るとは無論思はない。

けれども余が病中に作り得た俳句と漢詩の價値は、余自身から云ふと、全く其出來不出來に關係しないのである。平生は如何に心持の好くない時でも、苟も塵事に堪へ得るだけの健康を有つてゐると自信する以上、又有つてゐると人から認められる以上、われは常住日夜共に生存競爭裏に立つ惡戰の人である。佛語で形容すれば絶えず火宅の苦を受けて、夢の中でさへ焦々してゐる。時には人から勸められる事もあり、偶には自ら進む事もあつて、不圖十七字を並べて見たり又は起承轉結の四句位組み合せないとも限らないけれども何時もどこかに間隙がある樣な心持がして、隈も殘さず心を引き包んで、詩と句の中に放り込む事が出來ない。それは歡樂を嫉む實生活の鬼の影が風流に纏る爲かも知れず、又は句に熱し詩に狂するのあまり、却て句と詩に飜弄されて、いら／＼すまじき風流にいら／＼する結果かも知れないが、夫ではいくら佳句と好詩が出來たにしても、贏ち得る當人の愉快はたゞ二三同好の評判丈で、其評判を差し引くと、後に殘るものは多量の不安と苦痛に過ぎない事に歸着して仕舞ふ。

所が病氣をすると大分趣が違つて來る。病氣の時には自分が一歩現實の世を離れた氣になる。他も自分を一歩社會から遠ざかつた樣に大目に見て呉れる。此方には一人前働かなくても濟むといふ安心が出來、向ふにも一人前として取り扱ふのが氣の毒だといふ遠慮がある。さうして健康の時にはとても望めない長閑かな春が其間から湧いて出る。此安らかな心が即ちわが句、わが詩である。從つて、出來榮の如何は先づ措いて、出來たものを太平の記念と見る當人にはそれがどの位貴いか分らない。病中に得た句と詩は、

退屈を紛らすため、閑に强ひられた仕事ではない。實生活の壓迫を逃れたわが心が、本來の自由に跳ね返つて、むつちりとした餘裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天來の彩紋である。吾ともなく興の起るのが既に嬉しい、其興を捉へて橫に咬み竪に碎いて、之を句なり詩なりに仕立上る順序過程が又嬉しい。漸く成つた曉には、形のない趣を判然と眼の前に創造した樣な心持がして更に嬉しい。果してわが趣とわが形に眞の價値があるかないかは顧みる遑さへない。

病中は知ると知らざるとを通じて四方の同情者から懇切な見舞を受けた。衰弱の今の身では其一々に一一の好意に背かない程に詳しい禮狀を出して、自分がつい死にもせず今日に至つた經過を報ずる譯にも行かない。「思ひ出す事など」を牀上に書き始めたのは、是が爲である。――各々に向けて云ひ送るべき筈の所を、略して文藝欄の一隅にのみ載せて、余の如きもの丶ために時と心を使はれた難有い人々にわが近況を知らせる爲である。

從つて「思ひ出す事など」の中に詩や俳句を挾むのは、單に詩人俳人としての余の立場を見て貰ふ積ではない。實を云ふと其善惡などは寧ろ何でも好いと迄思つてゐる。たゞ當時の余は此の如き情調に支配されて生きてゐたといふ消息が、一瞥の迅きうちに、讀者の胸に傳はれば滿足なのである。

秋の江に打ち込む杭の響かな

是は生き返つてから約十日許して不圖出來た句である。澄み渡る秋の空、廣き江、遠くよりする杭の響、此三つの事相に相應した樣な情調が當時絕えずわが微かなる頭の中を徂徠した事は未だに覺えて居る。

秋の空淺黃に澄めり杉に斧

是も同じ心の耽りを他の言葉で云ひ現したものである。

別るゝや夢一筋の天の川

何といふ意味か其時も知らず、今でも分らないが、或は仄に東洋城と別れる折の連想が夢の樣な頭の中に這回つて、恍惚と出來上つたものではないかと思ふ。當時の余は西洋の語に殆んど見當らぬ風流と云ふ趣をのみ愛してゐた。其風流のうちでも茲に擧げた句に現れる樣な一種の趣丈をとくに愛してゐた。

秋風や唐紅の咽喉佛

といふ句は寧ろ實況であるが、何だか殺氣があつて含蓄が足りなくて、口に浮かんだ時から既に變な心持がした。

風流人未死。　病裡領清閑。　日々山中事。　朝々見碧山。

詩に圏點のないのは障子に紙が貼てない樣な淋しい感じがするので、自分で丸を付けた。余の如き平仄もよく辨へず、韻脚もうろ覺えにしか覺えてゐないものが何を苦しんで、支那人に丈しか利目のない工夫を敢てしたかと云ふと、實は自分にも分らない。けれども平仄韻字は偖置いて、詩の趣は王朝以後の傳習で久しく日本化されて今日に至つたものだから、吾々位の年配の日本人の頭からは、容易にこれを奪ひ去る事が出來ない。余は平生事に追はれて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫で猶手を下さない。たゞ斯樣に現實界を遠くに見て、杳な心に些の蟠りのないとき丈、句も自然と湧き、詩も興に乘じて種種な形のもとに浮んでくる。さうして後から顧みると、夫が自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。

風流を盛るべき器が、無作法な十七字と、詰屈な漢字以外に日本で發明されたらいざ知らず、左もなければ、余は斯かる時、斯かる場合に臨んで、何時でも其無作法と其詰屈とを忍んで、風流を這裏に樂しんで悔いざるものである。さうして日本に他の恰好な詩形のないのを憾みとは決して思はないものである。

六

始めて讀書欲の萌した頃、東京の玄耳君から小包で醉古堂劍掃と列仙傳を送つて呉れた。此列仙傳は秩入の唐本で、少し手荒に取扱ふと紙がびり／＼破れさうに見える程の古い——古いと云ふよりも寧ろ汚ない——本であつた。余は寐ながら此汚ない本を取り上げて、其中にある仙人の插畫を一々丁寧に見た。さうして是等仙人の髯の模樣だの、頭の恰好だのを互に比較して樂んだ。其時は畫工の筆癖から來る特色を忘れて、かう云ふ頭の平らな男でなければ仙人になる資格がないのだらうと思つたり、又かう云ふ疎な髯を風に吹かせなければ仙人の群に入る事は覺束ないのだらうと思つたりして、ひたすら彼等の容貌に表はれてくる共通な骨相を飽かず眺めた。本文も無論讀んで見た。平生氣の短かい時にはとても見出す事の出來ない悠長な心を目出度意識しながら讀んで見た。——余は今の青年のうちに列仙傳を一枚でも讀む勇氣と時間を有つてゐるものは一人もあるまいと思ふ。年を取つた余も實を云ふと此時始めて列仙傳と云ふ書物を開けたのである。

けれども惜い事に本文は插畫程雅に行かなかつた。中には欲の塊が羽化した樣な俗な仙人もあつた。それでも讀んで行くうちには多少氣に入つたのも出來てきた。一番無雜作で且可笑しいと思つたのは、何ぞ

と云ふと、手の垢や鼻糞を丸めて丸藥を作つて、それを人に遣る道樂のある仙人であつたが、今では其名を忘れて仕舞つた。

然し插畫よりも本文よりも余の注意を惹いたのは卷末にある附錄であつた。是は手輕にいふと長壽法とか養生訓とか稱するものを諸方から取り集めて來て、一所に並べたものゝ樣に思はれた。尤も仙に化するための注意であるから、普通の深呼吸だの冷水浴だのとは違つて、頗る抽象的で、實際解るとも解らぬとも片の付かぬ文字であるが、病中の余にはそれが面白かつたと見えて、其二三節をわざ／＼日記の中に書き拔いてゐる。日記を檢べて見ると「靜これを性となせば心其中にあり、動これを心となせば性其中にあり、心生ずれば性滅し、心滅すれば性生ず」といふ樣な六づかしい漢文が曲がりくねりに半頁ばかりを埋めてゐる。

其時の余は印氣の切れた萬年筆の端を撮んで、ペン先へ墨の通ふ樣に一二度揮るのが頗る苦痛であつた。實際健康な人が片手で樫の六尺棒を振り廻すよりも辛い位であつた。夫程衰弱の劇しい時にですら、わざ／＼と斯んな道經めいた文句を寫す余裕が心にあつたのは、今から考へても眞に愉快である。子供の時聖堂の圖書館へ通つて、徂徠の蘐園十筆を無暗に寫し取つた昔を、生涯にたゞ一度繰り返し得た樣な心持が起つて來る。昔の余の所作が單に寫すといふ以外には全く無意味であつた如く、病後の余の所作も亦殆んど同樣に無意味である。さうしてその無意味な所に、余は一種の價値を見出して喜んでゐる。長生の工夫のために列仙傳が、長生もしかねまじきほど悠長な心の下に、病後の余から斯く氣樂に取扱はれたのは、余に取つて全くの偶然であり、又再び來るまじき奇緣である。

佛蘭西の老畫家アルピニーはもう九十一二の高齢である。夫でも人並の氣力はあると見えて、此間のスチューヂオには目醒しい木炭畫が十種程載つてゐた。國朝六家詩鈔の初にある沈德潛の序には、乾隆丁亥夏五長洲沈德潛書す時に年九十有五。とわざ〳〵斷つてある。長生の結構な事は云ふ迄もない。長生をしてこの二人の樣に頭が慥かに使へるのは猶更目出たい。不惑の齡を越すと間もなく死なうとして、纔かに助かつた余は、これから何時迄生きられるか固より分らない。思ふに一日生きれば一日の結構で、二日生きれば二日の結構であらう。其上頭が使へたら猶難有いと云はなければなるまい。ハイヅンは世間から二返も死んだと評判された。一度は弔詩迄作つてもらつた。夫にも拘はらず彼は依然として生きて居た。余も當時はある新聞から死んだと書かれたさうである。それでも實は死なずにゐた。さうして列仙傳を讀んで子供の時の無邪氣な努力を繰り返し得る程に生き延びた。夫丈でも弱い余に取つては非常な幸福である。其頃ある知らない人から、先生死に給ふ事なかれ、先生死に給ふことなかれと書いた見舞を受けた。余は列仙傳を讀むべく生き延びた余を悅ぶと同時に、此同情ある青年の爲に生き延びた余を悅んだ。

七

ウォードの著はした社會學の標題には力學的といふ形容詞をわざ〳〵冠してあるが、是は普通の社會學でない、力學的に論じたのだといふ事を特に斷つたものと思はれる。所が此本の嘗て露西亞語に翻譯された時、魯國の當局者は直ちにその發賣を禁止してしまつた。著者は不審の念に打たれて、其理由を在魯の友人に聞き合せた。すると友人から、自分にも能くは分らぬが、恐らく標題に力學的といふ字と社會學と

いふ字があるので、當局者は一も二もなくダイナマイト及び社會主義に關係のある恐ろしい著述と速斷して、この暴擧を敢てしたのだらうといふ返事が來たさうである。

　魯國の當局者ではないが、余も此力學的といふ言葉には少からぬ注意を拂つた一人である。平生から一般の學者が此一字に着眼しないで、恰も動きの取れぬ死物の樣に、研究の材料を取り扱ひながら却つて平氣でゐるのを、常に飽き足らず賤めてゐたのみならず、自分と親密の關係を有する文藝上の議論が、ことに此弊に陷り易く、又陷りつゝある樣に見えるのを遺憾と批判してゐたから、參考のため、一度は魯國當局者を恐れしめたといふこの力學的社會學なるものを一讀したいと思つてゐた。實は自分の恥を白狀する樣で甚だ極りが悪いが、是は決して新しい本ではない。製本の體裁からしてが既にスペンサーの綜合哲學に類した古風なものである。けれども亦恐ろしく分厚に書き上げた著作で、上下二卷を通じて千五百頁ほどある大冊子だから、四五日は愚か一週間掛つても樂に讀みこなす事は出來悪い。それで已を得ず時機の來る迄と思つて、本箱の中へ仕舞つて置いたのを、小說類に興味を失した此頃の讀物としては適當だらうと不圖考へ付いたので、それを宅から取り寄せてとう／＼力學的に社會學を病院で研究する事にした。

　所が讀み出して見ると、恐ろしく玄關の廣い前置の長い本であつた。さうして肝心の社會學そのものになると頗る不完全で、且つ折角の賴みと思つてゐる所謂力學的が甚だ心細くなる程に手荒に取扱はれてゐた。今更ウォードの著述に批評を下すのは余の目的でない、たゞ序に云ふ丈ではあるが、今に本當の力學的が出るだらう、今に高潮の力學的が出るだらうと、何處迄も著者を信用して、とう／＼千五百頁の最後の一頁の最後の文字迄讀み拔けて、さうして期待した程のものが何處からも出て來なかつた時には、丁度

ハレー彗星の尾で地球が包まれべき當日を、何の變化もなく無事に經過した程あつけない心持がした。

けれども道中は、道草を食ふべく餘儀なくされる丈それ丈多趣多樣で面白かつた。其中で宇宙創造論と云ふ嚴めしい標題を掲げた所へ來た時、余は覺えず昔し學校で先生から教はつた星雲說の記憶を呼び起して微笑せざるを得なかつた。さうして不圖考へた。——

自分は今危險な病氣からやつと回復しかけて、それを非常な仕合の樣に喜んでゐる。さうして自分の癒りつゝある間に、容赦なく死んで行く知名の人々や惜しい人々を今少し生かして置きたいとのみ冀つてゐる。自分の介抱を受けた妻や醫者や看護婦や若い人達を難有く思つてゐる。世話をしてくれた朋友やら、見舞に來てくれた誰彼やらには篤い感謝の念を抱いてゐる。さうして此所に人間らしいあるものが潜んでゐると信じてゐる。其證據には此處に始めて生き甲斐のあると思はれる程深い強い快よい感じが漲つてゐるからである。

然し是は人間相互の關係である。よし吾々を宇宙の本位と見ない迄も、現在の吾々以外に頭を出して、世界のぐるりを見回さない時の内輪の沙汰である。此世に亙る生物全體の進化論と、(ことに)物理の原則に因つて無慈悲に運行し情義なく發展する太陽系の歷史を基礎として、其間に微かな生を營む人間を考へて見ると、吾等如きものゝ一喜一憂は無意味と云はん程に勢力のないといふ事實に氣が付かずには居られない。

限りなき星霜を經て固まり掛つた地球の皮が熱を得て溶解し、尙膨脹して瓦斯に變形すると同時に、他の天體も亦これに等しき革命を受けて、今日迄分離して運行した軌道と軌道の間が隙間なく充たされた時、

今の秩序ある太陽系は日月星辰の區別を失つて、爛たる一大火雲の如くに盤旋するだらう。更に想像を逆さまにして、此星雲が熱を失つて收縮し、收縮すると共に回轉し、回轉しながらに外部の一片を振りちぎりつゝ進行するさまを思ふと、海陸空氣歴然と整へるわが地球の昔は、凡て是皚々たる一塊の瓦斯に過ぎないといふ結論になる。面目の髣髴たる今日から溯つて、科學の法則を、想像だも及ばざる昔に引張れば、一糸も亂れぬ普遍の理で、山は山となり、水は水となつたものには違なからうが、此山と此水と此空氣と太陽の御蔭によつて生息する吾等人間の運命は、吾等が生くべき條件の備はる間の一瞬時――永劫に展開すべき宇宙歴史の長きより見たる一瞬時――を貪ぼるに過ぎないのだから、果敢ないと云はんよりも、ほんの偶然の命と評した方が當つてゐるかも知れない。

平生の吾等はたゞ人を相手にのみ生きてゐる。其生きる爲の空氣に就ては、あるのが當然だと思つて未だ嘗て心遣さへした事がない。其心根を糺すと、吾等が生れる以上、空氣は無ければならない筈だ位に觀じてゐるらしい。けれども、此空氣があればこそ人間が生れるのだから、實を云へば、人間のために出來た空氣ではなくて、空氣のために出來た人間なのである。今にもあれ此空氣の成分に多少の變化が起るならば、――地球の歴史は既に此變化を豫想しつゝある――活潑なる酸素が地上の固形物と抱合して次第に減却するならば、炭素が植物に吸收せられて黒い石炭層に運び去らるゝならば、月球の表面に瓦斯の懸らぬ如くに、吾等の世界も亦冷却し盡すならば、吾等は悉く死んで仕舞はねばならない。今の余の樣に生き延びた自分を祝ひ、遠く逝く他人を悲しみ、友を懷しみ敵を惡んで、内輪丈の活計に甘んじて得意に其日を渡る譯には行くまい。

進んで無機有機を通じ、動植兩界を貫き、それ等を萬里一條の鐵の如くに隙間なく發展して來た進化の歴史と見做すとき、さうして吾等人類が此大歴史中の單なる一頁を埋むべき材料に過ぎぬ事を自覺するとき、百尺竿頭に上り詰めたと自任する人間の自惚は又急に脱落しなければならない。支那人が世界の地圖を開いて、自分の居る所丈が中華でないと云ふ事を發見した時よりも、無氣味な黒船が來て日本丈が神國でないといふ事を覺つた時よりも、更に溯つては天動説が打ち壞されて、地球が宇宙の中心でなかつた事を無理に合點せしめられた時よりも、進化論を知り、星雲説を想像する現代の吾等は辛きデスイリュージョンを嘗めてゐる。

種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬのが進化論の原則である。學者の例證する所によると、一疋の大口魚が毎年生む子の數は百萬疋とか聞く。牡蠣になるとそれが二百萬の倍數に上るといふ。其うちで生長するのは僅か數匹に過ぎないのだから、自然は經濟的に非常な濫費者であり、德義上には恐るべく殘酷な父母である。人間の生死も人間を本位とする吾等から云へば大事件に相違ないが、しばらく立場を易へて、自己が自然になり濟ました氣分で觀察したら、たゞ至當の成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟は毫も存在してゐないだらう。

斯う考へた時、余は甚だ心細くなつた。又甚だ詰らなくなつた。そこで殊更に氣分を易へて、此間大磯で亡くなつた大塚夫人の事を思ひ出しながら、夫人のために手向の句を作つた。

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

八

忘るべからざる八月二十四日の來る二週間程前から余は既に病んでゐた。縁側を絶えず通る湯治客に、吾姿を見せるのが苦になつて、蒸し暑い時ですら障子は常に閉て切つてゐた。二度々々獻立を持つて誂を聞きにくる婆さんに、二品三品口に合ひさうなものを注文はしても、膳の上に揃つた皿を眺めると共に、何處からともなく反感が起つて、箸を執る氣には丸でなれなかつた。其内に嘔氣が來た。

始めは煎藥に似た黄黒い水をしたゝかに吐いた。吐いた後は多少氣分が癒るので、いさゝかの物は咽喉を越した。然し越した嬉しさがまだ消えないうちに、又其内容の胃に滯る重き苦しみに堪へ切れなくなつて來た。さうして又吐いた。吐くものは大概水である。其色が段々變つて、仕舞には緑青の樣な美くしい液體になつた。しかも一粒の飯さへ敢て胃に送り得ぬ恐怖と用心の下に、卒然として容赦なく食道を逆さまに流れ出た。

青いものが又色を變へた。始めて熊の膽を水に溶き込んだ樣に黒ずんだ濃い汁を、金盥になみ〳〵と反した時、醫者は眉を寄せて、斯ういふものが出る樣では、今のうち安靜にして東京に歸つた方が好からうと注告した。余は金盥の中を指して一體何が出るのかと質問した。醫者は興のない顔付で、是は血だと答へた。けれども余の眼には此黒いものが血とは思へなかつた。すると又吐いた。其時は熊の膽の色が少し紅を含んで、咽喉を出る時腥い臭がぷんと鼻を衝いたので、余は胸を抑へながら自分で血だ血だと云つた。玄耳君が驚ろいて森成さんに坂元君を添へてわざ〳〵修善寺迄寄こして呉れたのは、此報知が長距

離電話で胃腸病院へ傳つて、其所から又直に社へ通じたからである。別館から馳けて來た東洋城が枕邊に立つて、今日東京から醫者と社員が來る筈になつたと知らして呉れた時は全く救はれた樣な氣がした。

此時の余は殆んど人間らしい複雜な命を有して生きてはゐなかつた。苦痛の外は何事をも容れ得ぬ程に烈しく活動する胸を懷いて朝夕悩んでゐたのである。四十年來の經驗を刻んで猶餘りあると見えた余の頭腦は、たゞ此截然たる一苦痛を秒毎に深く印し來るばかりを能事とする樣に思はれた。從つて余の意識の内容はたゞ一色の悶に塗抹されて、臍上方三寸の邊を日夜にうね〳〵行きつ戻りつするのみであつた。余は明け暮れ自分の身體の中で、此部分丈を早く切り取つて犬に投げて遣りたい氣がした。夫でなければ此恐ろしい單調な意識を、一刻も早く何處へか打ち遣つて仕舞たい氣がした。又出來るならば、此儘睡魔に冒されて、前後も知らず一週間程寐込んで、しかる後鷹揚な心持をゆたかに抱いて、爽かな秋の日の光りに、兩の眼を颯と開けたかつた。少くとも汽車に揺られもせず車に乗せられもせず、すうと東京へ歸つて、胃腸病院の一室に這入つて、其所に仰向けに倒れてゐたかつた。

森成さんが來ても此苦しみは一寸除れなかつた。胸の中を棒で攪き混ぜられる樣な、又胃の腑が不規則な大波を其全面に向つて層々と描き出す樣な、異な心持に堪へかねて、床の上に起き返りながら、吐いて見せうかと云つて、腥いものを面のあたり咽喉の奥から金盥の中に傾けた事もあつた。森成さんの御蔭で此苦しみが大分退いた時ですら、動くたびに腥い噫は常に鼻を貫ぬいた。血は絶えず腸に向つて流れてゐたのである。

此煩悶に比べると、忘るべからざる二十四日の出來事以後に生きた余は、如何に安住の地を得て靜穏に

生を營んだか分らない。其靜穩の日が卽ち余の一生涯にあつて最も恐るべき危險の日であつたのだと云ふ事を後から知つた時、余は下の樣な詩を作つた。

圓覺曾參棒喝禪。瞎兒何處觸機緣。靑山不拒庸人骨。囘首九原月在天。

九

忘るべからざる二十四日の出來事を書かうと思つて、原稿紙に向ひかけると、何だか急に氣が進まなくなつたので又記憶を逆まに向け直して、後戾りをした。

東京を立つときから余は劇しく胃膓を痛めてゐた。一所に來るべき筈でつい乘り後れた東洋城の電報を汽車中で受け取つて、其意の如くに御殿場で一時間程待ち合せてゐた間に、余は不用になつた一枚の切符代を割り戾して貰ふために、驛長室へ這入つて行つた。すると其所に腰圍何尺とでも形容すべきほど大きな西洋人が、椅子に腰を掛けて頻りに繪端書の表に何か認めてゐた。余は驛長に向つて當用を辨ずる傍、思ひがけない所に思ひがけない人がゐるものだといふ好奇心を禁じ得なかつた。すると其大男が突然立ち上がつて、貴方は英語を話すかと聞くから、嗄れた聲で纔にイエスと答へた。男は次に是から京都へ行くにはどの滊車へ乘つたら好いか敎へて呉れと云つた。甚だ簡單な用向であるから平生ならば何うとも挨拶が出來るのだけれども、聲量を全く失つてゐた當時の余には、それが非常の困難であつた。固より云ふ事はあるのだから、何か云はうとするのだが、その云はうとする言葉が咽喉を通るとき千條に擦り切れてでもする如くに、口へ出て來る時分には全く光澤を失つて殆んど用をなさなかつた。余は英語に通ずる驛員の

助を籍りて、漸くのこと此大男を無事に京都へ送り屆けた事とは思ふが、其時の不愉快は未だに忘れない。

修善寺に着いてからも咽喉は一向好くならなかつた。醫者から藥を貰つたり、東洋城の拵えてくれた手製の含漱を用ひたりなどして、辛く日常の用を辨ずる丈の言葉を使つて濟ましてゐた。其頃修善寺には北白川の宮が御出になつてゐた。東洋城は始終そちらの方の務に追はれて、つい一丁程しか隔つてゐない菊屋の別館からも、容易に余の宿迄は來る事が出來ない樣子であつた。凡てを片付けてから、夜の十時過になつて、始めて蚊帳の外迄來て、一言見舞を云ふのが常であつた。

さういふ夜の事であつたか、又は晝の話であつたか今は忘れたが、ある時何時もの樣に顏を合はせると、東洋城が突然、殿下からあなたに何か講話をして貰ひたいといふ御注文があつたと云ひ出した。この思ひ掛けない御所望を耳にした余は少からず驚いた。けれども自分でさへ聞かずに濟めば、聞かずにゐたい樣な不愉快な聲を出して、殿下に御話などをする勇氣はとても出なかつた。其上羽織も袴も持ち合せなかつた。さうして余の如き位階のないものが、妄りに貴い殿下の前に出て然るべきであるかないか夫が第一分らなかつた。實際は東洋城も獨斷で先例のない事を敢てするのを憚つて、確とした御受はしなかつたのださうである。

余の苦痛が咽喉から胃に移る間もなく、東洋城は故郷にある母の病を見舞ふべく、去る人と入れ代つて一先づ東京に歸つた。殿下も夫から程なく御立になつた。さうして忘るべからざる二十四日の來た頃、東洋城は余に關する何の消息も知らずに、又東海道を汽車で西へ下つて行つた。其時彼は四五分の停車時間を偸んで、三島から余にわざ〲一通の手紙を書いた。其手紙は途中で紛失してしまつて、つい宿へ着か

なかつたけれども、東洋城が御暇乞に上がつた時、余の病氣の事を御忘れにならなかつた殿下から、もし逢ふ機會があつたなら、どうか大事にする樣にといふ樣な篤い意味の御言葉を承つたため、それをわざ〳〵病中の余に知らせたのださうである。咽喉の病も癒え、胃の苦しみも去つた今の余は、謹んで殿下に御禮を申上げなければならない。又殿下の健康を祈らなければならない。

十

雨が頻りに降つた。裏山の絶壁を眞逆に下る筧の竹が、青く冷たく光つて見えた幾日を、物憂く室の中に呻吟しつゝ暮してゐた。人が寐靜まると始めて夢を襲ふ(欄干から六尺餘りの所を流れる)水の音も、風と雨に打ち消されて全く聞えなくなつた。其うち水が出るとか出たとか云ふ聲が何處からともなく耳に響いた。

お仙と云ふ下女が來て、昨夕桂川の水が増したので門の前の小家では大方の荷を拵へて、預けに來たといふ話をした。序に何處とかでは家が丸で流されて仕舞つて、さうして其家の寶物が何處とかから掘り出されたと云ふ話もした。此下女は伊東の生れで、濱邊か畑中に立つて人を呼ぶやうな大きな聲を出す癖のある頗る殺風景な女であつたが、雨に鎖された山の中の宿屋で、斯ういふ昔の物語めいた、噓か眞か分らないことを聞かされたときは、御伽噺でも讀んだ子供の時の樣な氣がして、何となく古めかしい香に包まれた。其上家が流されたのが何處で、寶物を掘出したのが何處か、丸で不明なのを一向構はずに、それが當然である如くに話して行く樣子が、如何にも自分の今居る溫泉の宿を、浮世から遠く〳〵離隔して、どん

な便りや噂の外には這入つてこられない山里に變化して仕舞つた所に一種の面白味があつた。

兎角するうちに此樂い空想が、不便な事實となつて現れ始めた。東京から來る郵便も新聞も悉く後れ出した。たま〳〵着くものは墨が煮染む程びしよ〳〵に濡れてゐた。濕つた頁を破けない樣に開けて見て、始めて都には今洪水が出盛つてゐるといふ報道を、鮮やかな活字の上にまのあたり見たのは、何日の事であつたか、今慥には覺てゐないけれども、不安な未來を眼先に控て、其日々々の出來榮を案じながら病む身には、決して嬉しい便りではなかつた。夜中に胃の痛みで自然と眼が覺めて、身體の置所がない程苦い時には、東京と自分とを繋ぐ交通の線が當分切れた其頃の狀態を、多少心細いものに觀じない譯に行かなかつた。余の病氣は歸るには餘り劇し過た。さうして東京の方から余の居る所迄來るには、道路が餘り打壞れ過た。のみならず東京其物が既に水に浸つてゐた。余は殆ど崖と共に崩れる吾家の光景と、茅が崎で海に押し流されつゝある吾子供等を、夢に見やうとした。雨のしたゝか降る前に余は妻に宛て手紙を出して置いた。それには好い部屋がないから四五日したら歸ると書いた。又病氣が再發して苦んでゐると云ふ事はわざと知らせずに置いた。さうして其手紙も着いたか着かないか分らない位に考へて寢てゐた。

其處へ電報が來た。それは恐るべき長い時間と勞力を費して、やつとの事無事に宛名の人に通ずるや否や、其宛名の人をして封を切らぬ先に少しはつと思はせた電報であつた。然し中は、今度の水害で此方は無事だが、其方はどうかといふ、見舞と平信をかねたものに過なかつた。出した局の名が本鄕とあるのを見て是は草平君を煩はしたものと知つた。

雨は益降り續いた。余の病氣は次第に惡い方へ傾いて行つた。其時、余は夜の十二時頃長距離電話を

掛けられて、硬い胸を抑へながら受信器を耳に當てた。茅ヶ崎の子供も無事、東京の家も無事といふ事丈が微かに分つた。然し其他は全く不得要領で、殆んど風と話をする如くに纏まらない雜音がぼう〳〵と鼓膜に響くのみであつた。第一掛けた當人がわが妻であるといふ事さへ覺らずに此方から貴方といふ敬語を何遍か繰返した位漠然とした電話であつた。東京の音信が雨と風と洪水の中に、僻んでゐる余の眼に始めて瞭然と映つたのは、坐る暇もない程忙しい思をした妻が、當時の事情を有の儘に認めた巨細の手紙が漸く余の手に落ちた時の事であつた。余は其手紙を見て自分の病を忘れる程驚いた。

病んで夢む天の川より出水かな

十一

妻の手紙は全部の引用を許さぬ程長いものであつた。冒頭に東洋城から余の病氣の報知を受けた由と、それが爲め少からず心を惱ましてゐる旨を記して、看病に行きたいにも汽車が不通で仕方がないから、せめて電話丈でもと思つて、其日の中には通じかねる所を、無理な至急報にして貰つて、夜半に山田の奥さんの所から掛けたといふ顛末が書いてあつた。茅ヶ崎にゐる子供の安否に就ても一方ならぬ心配をしたものらしかつた。十間坂下といふ所は水害の恐れがないけれども、もし萬一の事があれば、郵便局から電報で宅迄知らせて貰ふ筈になつてゐると、余に安心させるため、わざ〳〵斷つてあつた。其外市中大抵の平地は水害を受けて、現に江戸川通抔は矢來の交番の少し下迄浸つた爲め、舟に乘つて往來をしてゐるといふ報知も書き込んであつた。然し其頃は後れながらも新聞が着いたから、一般の模樣は妻の便りがなくても

略分つてゐた。余の心を動かすべき現象は漠然たる大社會の雨や水やと戰ふ有樣にあると云ふよりも、寧ろ己丈に密接の關係ある個人の消息にあつた。さうして其個人の二人迄に、此雨と水が命の間際迄祟つた顛末を、余は此書面の中に見出したのである。

一つは横濱に嫁いだ妻の妹の運命に關した報知であつた。手紙には斯う書いてある。――

「……梅子事末の弟を伴れて塔の澤の福住へ參り居り候處、水害のため福住は浪に押し流され、浴客六十名のうち十五名行方不明との事にて、生死の程も分らず、如何とも致し方なく、横濱へは汽車不通にて參る事叶はず、電話は申込者多數にて一日を待たねば通じ不申……」

後には、色々込入つた工面をして電話を掛けた手續が書いてあつて、其末に會社の小使とかゞ徒歩で箱根迄探しに行つた揚句、幽靈の樣に哀れな姿をした彼女を伴れて戻つた模樣が述べてあつた。余は其處迄讀んで來て、つい二三日前宿の下女から、ある所で水が出て家が流されて、其家の寶物が又ある所から掘り出されたといふ昔話の樣な物語を聞きながら、其裏には自分と利害の絲を絡み合せなければならない恐ろしい事實が潜んでゐるとも氣が付かずに、尾頭もない夢とのみ打ち興じて濟ましてゐた自分の無智に驚いた。又其無智な人間に強ひる運命の威力を恐れた。

もう一つ余の心を躍らしたのは、草平君に關する報知であつた。妻が本郷の親類で用を足した歸りとかに、水見舞の積で柳町の低い町から草平君の住んでゐる通り迄來て、此處らだがと思ひながら、表から奥を覗いて見ると、かねて見覺のある家がくしやりと潰れてゐたさうである。

「家の人達は無事ですか、何處へ行きましたかと聞いたら、薪屋の御上さんが、昨晩の十二時頃に崖が

崩れましたが、幸ひに何方も御怪我は御座いません。一先づ柳町の斷ういふ所へ御引移りになりましたと、教へて呉れましたから、柳町へ来て見ると、まだ水の引き切らない床下のびた〳〵に濡れた貸家に疊建具も何も入れずに、荷物丈運んでありました。實に何と云つて好いか憐れな姿でお種さんが、私の顔を見ると馳け出して來ました。……晩の御飯を拵へる事も出來ないだらうと思つて、御壽司を誂へて御夕飯の代りに上げました……」

草平君は平生から崖崩れを恐れて、出來る丈表へ寄つて寢るとか聞いてゐたが、家の潰れた時には、外のものが丸で無難であつたにも拘はらず、自分丈は少し顔へ怪我をしたさうである。其怪我の事も手紙の中に書いてあつた。余はそれを讀んで怪我丈でまづ仕合せだと思つた。

家を流し崖を崩す凄まじい雨と水の中に都のものは幾萬となく恐るべき叫び聲を揚げた。同じ雨と同じ水の中に余と關係の深い二人は身を以て免れた。さうして余は毫も二人の災難を知らずに、遠い温泉の村に雲と煙と、雨の絲を眺め暮してゐた。さうして二人の安全であるといふ報知が着いたときは、余の病が次第々々に危險の方へ進んで行つた時であつた。

　風に聞け何れか先に散る木の葉

十二

つゞく雨の或晴に、すこし病の閑を偷んで、下の風呂場へ降りて見ると、半切を三尺ばかりの長に切つて、それを細長く竪に貼り付けた壁の色が、暗く映る灯の陰に、不圖余の視線を惹いた。余は湯壺の傍に

立ちながら、身體を濕めす前に、まづ此異樣の廣告めいたものを讀む氣になつた。眞中に素人落語大會と書いて、其下に催主裸連と記してある。場所は「山莊にて」と斷つて、催しのあるべき日取を其傍に書き添へた。余はすぐ裸連の何人なるかを覺り得た。裸連とは余の隣座敷にゐる泊り客の自撰にかゝる異名である。昨日の午襖越に聞いてゐると、太郎冠者が何うの斯うのと長い評議の末、そこん所でやるまいぞ、やるまいぞにしたら好いぢやねえかと云ふ樣な相談があつた。其趣向は寐てゐる余とは固より無關係だから、知らう筈もなかつたが、兎に角此議決が山莊での催しに一異彩を加へた事は慥かに違ないと思つた。余は風呂場の貼書に注意してある日付と、裸連の趣向を凝らしてゐた時刻を照らし合せつゝ、此落語會なるものゝ、既に滯りなく濟んだ昨日の午後を顧みて、裸連――少くとも裸連の首腦を形作る隣座敷の泊り客――の成功を祝せざるを得なかつた。

此泊り客は五人連で一間に這入つてゐた。其中の一番年嵩に見える三十代の男に、その妻君と娘を合せると既に三人になる。妻君は品のいゝ靜かな女であつた。子供は猶更大人しかつた。其代り夫は頗る騷々しかつた。あとの二人はいづれも二十代の青年で、その一人は一行のうちで尤も八釜しく振舞つてゐた。誰でも中年以後になつて、二十一二時代の自分を眼の前に憶ひ浮べて見ると、色々回想の簇がる中に、氣恥かしくて冷汗の流れさうな一斷面を見出すものである。余は隣の室に呻吟しながら、此若い男の言葉使ひや起居を注意すべく余儀なくされた結果として、二十年の昔に經過した、自分の生涯のうちで、甚だ不面目と思はざるを得ない生意氣さ加減を今更の樣に恐れた。

此男は何の必要があつてか知らないけれども、絶えず大道で講演でもする樣に大きな聲を出して得意で

あつた。さうして下女が來ると、必ず通客めいた粋がりを連發した。それを隣坐敷で聞いてゐると、ホットにもならなければヒューモーにもなつてゐないのだから、如何にも無理やりに、(しかも大得意に、)半可もしくは四半可を殺風景に怒鳴りつけてゐるとしか思はれなかつた。所が下女の方では、又それを聞くたびに不必要にふんだんな笑ひ方をした。本氣とも御世辭とも片の付かない笑ひ方だけれども、聲帶に異狀のある樣な恐ろしい笑ひ方をした。病氣にのみ屈託する余も、是には少からず惱まされた。

　裸連の一部は下座敷にも居た。凡てゞ九人ゐるので、自ら九人組とも稱へてゐた。其九人組が丸裸になつて幅六尺の縁側へ出て踴ををどつて一晩跳ね廻つた。便所へ行く必要があつて、障子の外へ出たら、九人組は躍り草臥て、素裸の儘縁側に胡坐をかいてゐた。余は邪魔になる尻や脛の間を跨いで用を足して來た。

　長い雨が漸く歇んで、東京への汽車が略通ずる樣になつた頃、裸連は九人とも申し合せた樣に、どつと東京へ引き上げた。それと入れ代りに、森成さんと雪鳥君と妻とが前後して東京から來てくれた。さうして裸連のゐた部屋を借り切つた。其次の部屋も亦借り切つた。仕舞には新築の二階座敷を二間ともに吾有とした。余は比較的閑寂な月日の下に、吸飲から牛乳を飲んで生きてゐた。一度は匙で突き碎いた水瓜の底から湧いて出る赤い汁を飲まして貰つた。弘法樣で花火の揚つた宵は、縁近く寐床を摺らして、横になつたまゝ、初秋の天を夜半近く迄見守つてゐた。さうして忘るべからざる二十四日の來るのを無意識に待つてゐた。

　　萩に置く露の重きに病む身かな

十三

其日は東京から杉本さんが診察に來る手筈になつてゐた。雪鳥君が大仁迄迎に出たのは何時頃か覺えてゐないが、山の中を照す日がまだ山の下に隱れない午過であつたと思ふ。其山の中を照す日を、床を離れる事の出來ない、又室を出る事の叶はない余は、朝から晩迄殆んど仰ぎ見た試しがないのだから、斯う云ふのも實は廂の先に餘る空の端丈を目當に想像した刻限である。――余は修善寺に三月と五日ほど滯在しながら、何方が東で、何方が西か、どれが伊東へ越す山で、どれが下田へ出る街道か、丸で知らずに歸つたのである。

杉本さんは豫定の如く宿へ着いた。余は其少し前に、妻の手から吸飲を受け取つて、細長い硝子の口から生溫い牛乳を一合程飲んだ。血が出てから、安靜狀態と流動食事とは固く守らなければならない掟の樣になつてゐたからである。其上出來る丈病人に營養を與へて、體力の囘復の方から、潰瘍の出血を抑へ付けるといふ療治法を受けつゝあつた際だから、否應なしに飲んだ。實を云ふと此日に朝から食慾が萌さなかつたので、吸飲の中に、動く事の出來ぬほど濁つた白い色の漲ぎる樣を見せられた時は、すぐと重苦しく舌の先に溜るしつ濃い乳の味を豫想して、手に取らない前から既に反感を起した。強ひられた時、余は已むなく細長く反り返つた硝子の管を傾けて、湯とも水とも捌けない液を、舌の上に辷らせようと試みた。それが流れて咽喉を下る後には、潔よからぬ粘り強い香が妄りに殘つた。半分は口直しの積りであとから氷クリームを一杯取つて貰つた。所が何時もの爽かさに引き更へて、咽喉を越すとき一旦溶けたものが、

胃の中で再び固まつた樣に妙に落ち付が惡かつた。夫から二時間ほどして余は杉本さんの診察を受けたのである。

診察の結果として意外にも左程惡くないと云ふ報告を得た時、平生森成さんから病氣の質が面白くないと聞いてゐた雪鳥君は、喜びの餘りすぐ社へ向けて好いといふ電報を打つて仕舞つた。忘るべからざる八百グラムの吐血は、此吉報を逆襲すべく、診察後一時間後の暮方に、突如として起つたのである。

斯く多量の血を一度に吐いた余は、其暮方の光景から、日のない眞夜中を通じて、明る日の天明に至る有樣を巨細殘らず記憶してゐる氣でゐた。程經て妻の心覺に付けた日記を讀んで見て、其中に、ノウヒンケツ（狼狽した妻は腦貧血を斯の如く書いてゐる）を起し人事不省に陷るとあるのに氣が付いた時、余は妻を枕邊に呼んで、當時の模樣を委しく聞く事が出來た。徹頭徹尾明瞭な意識を有して注射を受けたとのみ考へてゐた余は、實に三十分の長い間死んでゐたのであつた。

夕暮間近く、俄かに胸苦しい或物のために襲はれた余は、悶えたさの餘りに、折角親切に床の傍に坐つてゐて呉れた妻に、暑苦しくて不可ないから、もう少し其方へ退いて呉れと邪慳に命令した。夫でも堪へられなかつたので、安靜に身を橫ふべき醫師からの注意に背いて、仰向の位地から右を下に寐返らうと試みた。余の記憶に上らない人事不省の狀態は、寐ながら向を換へにかゝつた此努力に伴ふ腦貧血の結果だと云ふ。

余は其時さつと迸しる血潮を、驚ろいて余に寄り添はうとした妻の浴衣に、べつとり吐き懸けたさうである。雪鳥君は聲を顫はしながら、奧さん確かりしなくては不可ませんと云つたさうである。社へ電報を

懸けるのに、手が戰いて字が書けなかつたさうである。醫師は追つ懸け追つ懸け注射を試みたさうである。後から森成さんに其數を聞いたら、十六筒迄は覺えてゐますと答へた。

淋漓絳血腹中文。嘔照黄昏漾綺紋。入夜空疑身是骨。臥牀如石夢寒雲。

十四

眼を開けて見ると、右向になつた儘、瀬戸引の金盥の中に、べつとり血を吐いてゐた。金盥が枕に近く押付けてあつたので、血は鼻の先に鮮かに見えた。其色は今日迄の樣に酸の作用を蒙つた不明瞭なものではなかつた。白い底に大きな動物の肝の如くどろりと固まつてゐた樣に思ふ。其時枕元で含嗽を上げませうといふ森成さんの聲が聞えた。

余は默つて含嗽をした。さうして、つい今しがた傍にゐる妻に、少し其方へ退いてくれと云つた程の煩悶が忽然何處かへ消えてなくなつた事を自覺した。余は何より先にまあ可かつたと思つた。金盥に吐いたものが鮮血であらうと何であらうと、そんな事は一向氣に掛からなかつた。日頃からの苦痛の塊を一度にどさりと打ち遣り切つたといふ落付をもつて、枕元の人がざわ〳〵する樣子を殆んど餘所事の樣に見てゐた。余は右の胸の上部に大きな針を刺されて夫から多量の食鹽水を注射された。其時、食鹽を注射される位だから、多少危險な容體に逼つてゐるのだらうとは思つたが、それも殆んど心配にはならなかつた。たゞ管の先から水が洩れて肩の方へ流れるのが厭であつた。左右の腕にも注射を受けた樣な氣がした。然し夫は確然覺えてゐない。

妻が杉本さんに、是でも元の様になるでせうかと聞く聲が耳に入つた。左樣潰瘍では是まで隨分多量の血を止めた事もありますが……と云ふ杉本さんの返事が聞えた。すると床の上に釣るした電氣燈がぐらぐらと動いた。硝子の中に彎曲した一本の光が、線香煙花の様に疾く閃めいた。余は生れてから此時程強く又恐ろしく光力を感じた事がなかつた。其咄嗟の刹那にすら、稲妻を眸に焼き付けるとは是だと思つた。時に突然電氣燈が消えて氣が遠くなつた。

カンフル、カンフルと云ふ杉本さんの聲が聞えた。杉本さんは余の右の手頸をしかと握つてゐた。カンフルは非常に能く利くね、注射し切らない内から、もう反響があると杉本さんが又森成さんに云つた。森成さんはえゝと答へた許りで、別にはか〴〵しい返事はしなかつた。夫からすぐ電氣燈に紙の蔽をした。傍が一しきり靜かになつた。余の左右の手頸は二人の醫師に絶えず握られてゐた。其二人は眼を閉ぢてゐる余を中に挾んで下の様な話をした（其單語は悉く獨逸語であつた）。

「弱い」

「えゝ」

「駄目だらう」

「えゝ」

「子供に會はしたら何うだらう」

「さう」

今迄落付いてゐた余は此時急に心細くなつた。何う考へても余は死にたくなかつたからである。又決し

て死ぬ必要のない程、樂な氣持でゐたからである。醫師が余を昏睡の狀態にあるものと思ひ誤つて、忌憚なき話を續けてゐるうちに、未練な余は、瞑目不動の姿勢にありながら、半無氣味な夢に襲はれてゐた。そのうち自分の生死に關する斯樣に大膽な批評を、第三者として床の上にぢつと聞かせられるのが苦痛になつて來た。仕舞には多少腹が立つた。德義上もう少しは遠慮しても可ささうなものだと思つた。遂に先がさう云ふ料簡なら此方にも考へがあるといふ氣になつた。——人間が今死なうとしつゝある間際にも、まだ是程に機略を弄し得るものかと、回復期に向つた時、余はしば／＼當夜の反抗心を思ひ出しては微笑んでゐる。——尤も苦痛が全く取れて、安臥の地位を平靜に保つてゐた余には、充分夫丈の餘裕があつたのであらう。

余は今迄閉ぢてゐた眼を急に開けた。さうして出來る丈大きな聲と明瞭な調子で、私は子供抔に會ひたくはありませんと云つた。杉本さんは何事をも意に介せぬ如く、さうですかと輕く答へたのみであつた。やがて食ひ掛けた食事を濟まして來るとか云つて室を出て行つた。夫からは左右の手を左右に開いて、其一つ宛を森成さんと雪鳥君に握られた儘、三人とも無言のうちに天明に達した。

　　冷やかな脈を護りぬ夜明方

十五

強ひて寐返りを右に打たうとした余と、枕元の金盥に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連續してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髮毛を挾む餘地のない迄に、自覺が働いて來たとのみ心得てゐた。

程經て妻から、左樣ぢやありません、あの時三十分許は死んで入らしつたのですと聞いた折は全く驚いた。子供のとき惡戲をして氣絶をした事は二三度あるから、夫から推測して、死とは大方斯んなものだらう位にはかねて想像してゐたが、半時間の長き間、其經驗を繰返しながら、少しも氣が付かずに一ヶ月あまりを當然の如くに過したかと思ふと、甚だ不思議な心持がする。實を云ふと此經驗――第一經驗と云ひ得るかゞ疑問である。普通の經驗と經驗の間に挾まつて毫も其連結を妨げ得ないほど内容に乏しい此――余は何と云つてそれを形容して可いか遂に言葉に窮して仕舞ふ。余は眠から醒めたといふ自覺さへなかつた。陰から陽に出たとも思はなかつた。微かな羽音、遠きに去る物の響、逃げ行く夢の匂ひ、古い記憶の影、消える印象の名殘――凡て人間の神秘を叙述すべき表現を數へ盡して漸く髣髴すべき靈妙な境界を通過したとは無論考へなかつた。たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾むけ樣とした次の瞬間に、赤い血を金盥の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても經驗の記憶として全く余に取つて存在しなかつたと一般である。妻の説明を聞いた時余は死とは夫程果敢ないものかと思つた。さうして余の頭の上にしかく卒然と閃めいた生死二面の對照の、如何にも急劇で且没交渉なのに深く感じた。何う考へても此懸隔つた二つの現象に、同じ自分が支配されたとは納得出來なかつた。よし同じ自分が咄嗟の際に二つの世界を横斷したにせよ、其二つの世界が如何なる關係を有するがために、余をして忽ち甲から乙に飛び移るの自由を得せしめたかと考へると、茫然として自失せざるを得なかつた。

生死とは緩急、大小、寒暑と同じく、對照の連想からして、日常一束に使用される言葉である。よし輓近の心理學者の唱ふる如く、この二つのものも亦普通の對照と同じく同類連想の部に屬すべきものと判ず

るにした所で、かく掌を翻へすと一般に、唐突なる懸け離れた二象面が前後して我を擒にするならば、我は此懸け離れた二象面を、何うして同性質のものとして、其關係を迹付ける事が出來やう。

人が余に一個の柹を與へて、今日は半分食へ、明日は殘りの半分を食へ、其翌日は又其半分の半分を食へ、かくして毎日現に餘れるもの丶半分づ丶を食へと云ふならば、余は食ひ出してから幾日目かに、遂に此命令に背いて、殘る全部を悉く食ひ盡すか、又は半分に割る能力の極度に達した爲め、手を拱いて空しく餘れる柹の一片を見詰めなければならない時機が來るだらう。もし想像の論理を許すならば、斯の條件の下に與へられたる一個の柹は、生涯食つても食ひ切れる譯がない。希臘の昔ゼノが足の疾きアキリスと歩みの鈍い龜との間に成立する競爭に辭を託して、如何なるアキリスも決して龜に追ひ付く事は出來ないと說いたのは取も直さず此消息である。わが生活の內容を構成る個々の意識も亦此の如くに、日毎か月毎に、其半宛を失つて、知らぬ間に何時か死に近づくならば、いくら死に近付いても死ねないと云ふ非事實な論理に愚弄されるかも知れないが、斯う一足飛びに片方から片方に落ち込む樣な思索上の不調和を免がれて、生から死に行く徑路を、何の不思議もなく最も自然に感じ得るだらう。俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かさるゝものは、たゞ寒くなる許である。

縹緲玄黃外。　死生交謝時。　寄託冥然去。　我心何所之。　歸來覓命根。
杳窅竟難知。　孤愁空遶夢。　宛動蕭瑟悲。　江山秋已老。　粥藥鬢將衰。
廓寥天尚在。　高樹獨餘枝。　晚懷如此澹。　風露入詩遲。

十六

安らかな夜は次第に明けた。室を包む影法師が床を離れて遠退くに從つて、余は又常の如く枕邊に寄る人々の顔を見る事が出來た。其顔は常の顔であつた。さうして余の心も亦常の心であつた。病の何處にあるかを知り得ぬ程に落ち付いた身を床の上に横へて、少しだに動く必要を有たぬ余に、死の簷近く徘徊して居やうとは全く思ひ設けぬ所であつた。眼を開けた時余は昨夕の騷ぎを(たとひ忘れないまでも)遠い過去の夢の如く遠くに眺めた。さうして死に明け渡る夜と共に立ち退いたのだらう位の度胸でも据つたものと見えて、何等の掛念もない氣分を、障子から射し込む朝日の光に、心地よく曝してゐた。實は無知な余を詐はり終せた死は、何時の間にか余の血管に潜り込んで、乏しい血を追ひ廻しつゝ流れてゐたのださうである。「容體を聞くと、危險なれど極安靜にしてゐれば持ち直すかも知れぬといふ」とは、妻の此日の朝の部に書き込んだ日記の一句である。余が夜明迄生きやうとは、誰も期待して居なかつたのだとは後から聞いて始めて知つた。

余は今でも白い金盥の底に吐き出された血の色と恰好とを、ありありとわが眼の前に思ひ浮べる事が出來る。況して其當分は寒天の樣に固まり掛けた腥いものが常に眼先に散ら付いてゐた。さうして吾が想像に映る血の分量と、それに起因した衰弱とを比較しては、どうしてあれ丈の出血が、斯う劇しく身體に應へるのだらうと何時でも不審に堪へなかつた。人間は脈の中の血を半分失ふと死に、三分の一失ふと昏睡するものだと聞いて、それに吾ともなく妻の肩に吐き掛けた生血の容積を想像の天秤に盛つて、命の向

ふ側に重りとして付け加へた時ですら、余は是程無理な工面をして生き延びたのだとは思へなかつた。

杉本さんが東京へ歸るや否や、——杉本さんは其朝すぐ東京へ歸つた。もつと居りたいが忙がしいから失禮します、其代り手當は充分する積でありますと云つて、新らしい襟と襟飾を着け易へて、余の枕邊に坐つたとき、余は昨夕夜半に、裄丈の足りない宿の浴衣を着たまゝ、そつと障子を開けながら、どうかと一言森成さんに余の樣子を聞いてゐた彼人の樣子を思ひ出した。余の記憶にはたゞそれ丈しか留まらなかつた杉本さんが、出掛に妻を顧みて、もう一遍吐血があれば、何うしても回復の見込はないものと御諦らめなさらなければ不可ませんと注意を與へたさうである。實は昨夕にも此恐るべき再度の吐血が來さうなので、態々モルヒネ迄注射してそれを防ぎ止めたのだとは、後になつて其顛末を審らかにした余に取つて、全く思ひ掛けない報知であつた。あれ程胸の中は落ち付いてゐたものをと云ひたい位に、余は平常の心持で苦痛なく其夜を明したのである。——話がつい外れて仕舞つた。

杉本さんは東京へ歸るや否や、自分で電話を看護婦會へ掛けて、看護婦を二人すぐ余の出先へ送る樣に頼んで呉れた。其時、早く行かんと間に合はないかも知れないからと電話口で急いたので、看護婦は汽車で走る途々も、もう不可ない頃ではなからうかと、絶えず余の生命に疑ひを挾さんでゐた。折角行つても行き着いて見たら、遲過て間に合はなかつたと云ふ樣な事があつては詰らないと語り合つて來た。——是も回復期に向いた頃、病牀の徒然に看護婦と世間話をした序に、彼等の口からぢかに聞いたたよりである。

斯く凡ての人に十の九迄見放された眞中に、何事も知らぬ余は、曠野に捨てられた赤子の如く、ほかんとして居た。苦痛なき生は余に向つて何等の煩悶をも與へなかつた。余は寐ながらたゞ苦痛なく生きて居

るといふ一事實を認める丈であつた。さうして此事實が、はからざる病のために、周圍の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一歩浮世の風の當り悪い安全な地に移つて來た樣に感じた。實際余と余の妻とは、生存競爭の辛い空氣が、直に通はない山の底に住んでゐたのである。

　露けさの里にて靜なる病

十七

臆病者の特權として、余はかねてより妖怪に逢ふ資格があると思つてゐた。余の血の中には先祖の迷信が今でも多量に流れてゐる。文明の肉が社會の鋭どき鞭の下に萎縮するとき、余は常に幽靈を信じた。けれども虎列剌を畏れて虎列剌に罹らぬ人の如く、神に祈つて神に棄てられた子の如く、余は今日迄是と云ふ不思議な現象に遭遇する機會もなく過ぎた。それを殘念と思ふ程の好奇心もたまには起るが、平生はまづ出逢はないのを當然と心得て濟まして來た。

自白すれば、八九年前アンドリュ・ラングの書いた「夢と幽靈」といふ書物を床の中に讀んだ時は、鼻の先の燈火を一時に寒く眺めた。一年程前にも「靈妙なる心力」と云ふ標題に引かされてフランマリオンといふ人の書籍を、わざ〳〵外國から取り寄せた事があつた。先頃は又オリヴー・ロッヂの「死後の生」を讀んだ。

死後の生！名からしてが既に妙である。我々の個性が我々の死んだ後迄も殘る。活動する、機會があれば地上の人と言葉を換す。スピリチズムの研究を以て有名であつたマイエルは慥かに斯う信じて居たらし

い。其マイエルに自己の著述を捧げたロッヂも同じ考への樣に思はれる。つい此間出たボドモアの遺著も恐らくは同系統のものだらう。

獨乙のフェヒナーは十九世紀の中頃既に地球其物に意識の存すべき所以を說いた。石と土と鑛に靈があると云ふならば、有るとするを妨げる自分ではない。然し切めて此假定から出立して、地球の意識とは如何なる性質のものであらう位の想像はあつて然るべきだと思ふ。

吾々の意識には敷居の樣な境界線があつて、其線の下は暗く、其線の上は明らかであるとは現代の心理學者が一般に認識する議論の樣に見えるし、又わが經驗に照しても至極と思はれるが、肉體と共に活動する心的現象に斯樣の作用があつたにした所で、わが暗中の意識即ち是死後の意識とは受取れない。

大いなるものは小さいものを含んで、其小さいものに氣が付いてゐるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己等の寄り集つて拵らへてゐる全部に對しては馬馬牛の如く無頓着であるとは、ゼームスが意識の內容を解き放したり、又結び合せたりして得た結論である。それと同じく、個人全體の意識も亦より大いなる意識の中に含まれながら、しかも其存在を自覺せずに、孤立する如くに考へてゐるのだらうとは、彼が此類推より下し來るスピリチズムに都合よき假定である。

假定は人々の隨意であり、又時にとつて研究上必要の活力でもある。然したゞ假定だけでは、如何に臆病の結果幽靈を見ようとする、又迷信の極不可思議を夢みんとする余も、信力を以て彼等の說を奉ずる事が出來ない。

物理學者は分子の容積を計算して蠶の卵にも及ばぬ（長さ高さともに一ミリメターの）立方體に一千萬

を三乘した數が這入ると斷言した。一千萬を三乘した數とは一の下に零を二十一付けた莫大のものである。想像を恣まにする權利を有する吾々も此一の下に二十一の零を付けた數を思ひ浮べるのは容易でない。形而下の物質界にあつてすら、——相當の學者が綿密な手續を經て發表した數字上の結果すら、吾々はたゞ數理的の頭腦にのみ尤もと首肯く丈である。數量のあらましさへ應用の利かぬ心の現象に關しては云ふ迄もない。よし物理學者の分子に對する如き明瞭な知識が、吾人の內面生活を照らす機會が來たにした所で、余の心は遂に余の心である。自分に經驗の出來ない限り、如何な綿密な學說でも吾を支配する能力は持ち得まい。

余は一度死んだ。さうして死んだ事實を、平生からの想像通りに經驗した。果して時間と空間を超越した。然し其超越した事が何の能力をも意味さなかつた。余は余の個性を失つた。余の意識を失つた。たゞ失つた事丈が明白な許である。どうして幽靈となれよう。どうして自分より大きな意識と冥合出來よう。臆病にして且つ迷信強き余は、たゞ此不可思議を他人に待つばかりである。

迎火を焚いて誰待つ絽の羽織

十八

たゞ驚ろかれたのは身體の變化である。騷動のあつた明る朝、何かの必要に促がされて、肋の左右に横たへた手を、顏の所迄持つて來ようとすると、急に持主でも變つた樣に、自分の腕ながら丸で動かなかつた。人を煩らはす手數を厭つて、無理に肘を杖として、手頸から起し掛けたは掛けたが、僅か何寸かの距

離を通して、宙に短かい弧線を描く努力と時間とは容易のものでなかつた。漸く浮き上つた筋の力を利用して、高い方へ引く丈の精氣に乏しいので、途中から斷念して、再び元の位置にわが腕を落さうとすると、それが又安くは落ちなかつた。無論其儘にして心を放せば、自然の重みで故に倒れる丈の事ではあるが、其倒れる時の激動が、如何に全身に響き渡るかと考へると、非常に恐ろしくなつて、つひに思ひ切る勇氣が出なかつた。余は卸す事も上げる事も、又半途に支へる事も出來ない腕を意識しつゝ、其遣り所に窮した。漸く傍のものの氣が付いて、自分の手をわが手に添へて、無理のない樣に顏の所迄持つて來てくれて、歸りにも亦二つ腕を一所にしてやつと床の上まで戻した時には、何うして斯う自己が空虛になつたものか、我ながら殆んど想像が付かなかつた。後から考へて見て、あれは全く護謨風船に穴が開いて、その穴から空氣が一度に走り出したため、風船の皮が忽ちしゆつといふ音と共に收縮したと一般の吐血だから、夫であゝ身體に應へたのだらうと判斷した。夫にしても風船はたゞ縮まる丈である。不幸にして余の皮は血液の外に大きな長い骨を澤山に包んでゐた。其骨が――

余は生れてより以來此時程に吾骨の硬さを自覺した事がない。其朝眼が覺めた時の第一の記憶は、實にわが全身に滿ち渡る骨の痛みの聲であつた。さうして其痛みが、宵に、酒を被つた勢で、多數を相手に劇しい喧嘩を挑んだ末、散々に打ち据ゑられて、手も足も利かなくなつた時の如くに吾を鈍く叩きこなしてゐた。砧に擣たれた布は、斯うもあらうかと迄考へた。夫程正體なく極め付けられ了つた狀態を適當に形容するには、ぶちのめすと云ふ下等社會で用ひる言葉が、たゞ一つある許である。少しでも身體を動かさうとすると、關節がみし〳〵と鳴つた。

昨日迄狹い布團に劃された余の天地は、急に又狹くなつた。其布團のうちの一部分より外に出る能力を失つた今の余には、昨日迄狹く感ぜられた布團が更に大きく見えた。余の世界と接觸する點は、こゝに至つてたゞ肩と背中と細長く伸べた足の裏側に過ぎなくなつた。――頭は無論枕に着いてゐた。是程に切り詰められた世界に住む事すら、昨夕は許されさうに見えなかつたのにと、傍のものは心の中で余の爲に觀じて呉れたらう。何事も辨へぬ余にさへ夫が憐れであつた。たゞ身の布團に觸れる所のみがわが世界である丈に、さうして其觸れる所が少しも變らないために、我と世界との關係は、非常に單純であつた。全くスタチック（靜）であつた。從つて安全であつた。綿を敷いた棺の中に長く寐て、われ棺を出でず、人棺を襲はざる亡者の氣分は――もし亡者に氣分が有り得るならば、――此時の余のそれと餘り懸け隔つては居なかつたらう。

しばらくすると、頭が痲痺れ始めた。腰の骨が骨丈になつて板の上に載せられてゐる樣な氣がした。足が重くなつた。かくして社會的の危險から安全に保護された余一人の狹い天地にも亦相應の苦しみが出來た。さうして其苦痛を逃れるべく余は一寸の外にさへ出る能力を持たなかつた。枕元に何んな人が何うして坐つてゐるか、丸で氣が付かなかつた。余を看護する爲に、余の視線の屆かぬ傍らを占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般であつた。

余はこの安らかながら痛み多き小世界にじつと仰向に寐た儘、身の及ばざる所に時々眼を走らした。さうして天井から釣つた長い氷嚢の絲を屢見詰めた。其絲は冷たい袋と共に、胃の上でぴくり〳〵と鋭どい脈を打つてゐた。

朝寒や生きたる骨を動かさす

十九

余は此の心持を何う形容すべきかに迷ふ

力を商ひにする相撲が、四つに組んで、かつきり合つた時、土俵の眞中に立つ彼等の姿は、存外靜かに落ち付いてゐる。けれども其腹は一分と經たないうちに、恐るべき波を上下に描かなければ已まない。さうして熱さうな汗の球が幾條となく背中を流れ出す。

最も安全に見える彼等の姿勢は、此波と此汗の辛うじて齎らす努力の結果である。靜かなのは相剋する血と骨の、僅に平均を得た象徴である。之を互殺の和といふ。二三十秒の現狀を維持するに、彼等が何れほどの氣魄を消耗せねばならぬかを思ふとき、看る人は始めて殘酷の感を起すだらう。

自活の計に追はれる動物として、生を營む一點から見た人間は、正に此相撲の如く苦しいものである。吾等は平和なる家庭の主人として、少くとも衣食の滿足を、吾等と吾等の妻子とに與へんがために、此相撲に等しい程の緊張に甘んじて、日々自己と世間との間に、互殺の平和を見出さうと力めつゝある。戸外に出て笑ふわが顏を鏡に映すならば、さうして其笑ひの中に殺伐の氣に充ちた我を見出すならば、更に此笑ひに伴ふ恐ろしき腹の波と、背の汗を想像するならば、最後にわが必死の努力の、回向院のそれの樣に、一分足らずで引分を期する望みもなく、命のあらん限は一生續かなければならないといふ苦しい事實に想ひ至るならば、我等は神經衰弱に陷るべき極度に、わが精力を消耗するために、日に生き月に生きつゝあ

ると迄言ひたくなる。

かく單に自活自營の立場に立つて見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社會は不正で人情のある敵である。もし彼對我の觀を極端に引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。さう思ふ自分さへ日に何度となく自分の敵になりつゝある。疲れても已め得ぬ戰ひを持續しながら、煢然として獨り其間に老ゆるものは、見惨と評するより外に評しやうがない。

古臭い愚痴を繰返すなといふ聲が頻りに聞えた。今でも聞える。それを聞き捨てにして、古臭い愚痴を繰返すのは、しみ〴〵さう感じたから許りではない、しみ〴〵さう感じた心持を、急に病氣が來て顚覆したからである。

血を吐いた余は土俵の上に仆れた相撲と同じ事であつた。自活のために戰ふ勇氣は無論、戰はねば死ぬといふ意識さへ持たなかつた。余はたゞ仰向けに寢て、纔な呼吸を敢てしながら、怖い世間を遠くに見た。病氣が床の周圍を屏風の樣に取り卷いて、寒い心を暖かにした

今迄は手を打たなければ、わが下女さへ顏を出さなかつた。人に頼まなければ用は辨じなかつた。いくら仕ようと焦慮つても、調はない事が多かつた。それが病氣になると、がらりと變つた。余は寢てゐた。默つて寢てゐた丈である。すると醫者が來た。社員が來た。妻が來た。仕舞には看護婦が二人來た。さうして悉く余の意志を働かさないうちに、ひとりでに來た。

「安心して療養せよ」と云ふ電報が滿洲から、血を吐いた翌日に來た。思ひがけない知己や朋友が代る

〴〵枕元に來た。あるものは鹿兒島から來た。あるものは山形から來た。又あるものは眼の前に逼る結婚を延期して來た。余は是等の人に、どうして來たと聞いた。彼等は皆新聞で余の病氣を知つて來たと云つた。仰向に寢た余は、天井を見詰めながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。

四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左したる過去を持たぬ男に、忙しい世が、是程の手間と時間と親切を掛てくれやうとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。又余のために是程の手間と時間と親切とを惜まざる人々に謝した。さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壞す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。

馬上青年老。鏡中白髮新。幸生天子國。願作太平民。

二十

ツルゲニエフ以上の藝術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつゝあるドストイエフスキーには、人の知る如く、子供の時分から癲癇の發作があつた。われ等日本人は癲癇と聞くと、たゞ白い泡を連想するに過ぎないが、西洋では古くこれを神聖なる疾と稱へてゐた。此神聖なる疾に冒かされる時、或は其少し前に、ドストイエフスキーは普通の人が大音樂を聞いて始めて到り得るやうな一種微妙の快感に支配されたさうである。それは自己と外界との圓満に調和した境地で、丁度天體の端から、無限の空間に足を滑らして落ちるやうな心持だとか聞いた。

「神聖なる疾」に罹つた事のない余は、不幸にして此年になるまで、さう云ふ趣に一瞬間も捕はれた記憶を有たない。たゞ大吐血後五六日――經つか經たないうちに、時々一種の精神狀態に陷つた。それからは毎日の樣に同じ狀態を繰り返した。遂には來ぬ先にそれを豫期する樣になつた。さうして自分とは緣の遠いドストイエフスキーの享けたと云ふ不可解の歡喜をひそかに想像して見た。それを想像するか思ひ出す程に、余の精神狀態は尋常を飛び越えてゐたからである。ドクインセイの細かに書き殘した驚くべき阿片の世界も余の連想に上つた。けれども讀者の心目を眩惑するに足る妖麗な彼の敍述が、鈍い色をした卑しむべき原料から人工的に生れたのだと思ふと、それを自分の精神狀態に比較するのが急に厭になつた。

余は當時十分と續けて人と話をする煩はしさを感じた。聲となつて耳に響く空氣の波が心に傳つて、平らかな氣分をことさらに騷つかせるやうに覺えた。口を閉ぢて黃金なりといふ古い言葉を思ひ出して、たゞ仰向けに寢てゐた。難有い事に室の廂と、向うの三階の屋根の間に、青い空が見えた。其空が秋の露に洗はれつゝ次第に高くなる時節であつた。余は默つて此空を見詰めるのを日課の樣にした。何事もない、又何物もない此大空は、其靜かな影を傾むけて悉く余の心に映じた。さうして余の心にも何事もなかつた、又何物もなかつた。透明な二つのものがぴたりと合つた。合つて自分に殘るのは、縹緲とでも形容して可い氣分であつた。

其内穩かな心の隅が、何時か薄く暈されて、其所を照す意識の色が微かになつた。すると、ヹイルに似た霞が輕く全面に向つて萬遍なく展びて來た。さうして總體の意識が何處も彼處も稀薄になつた。それは普通の夢の樣に濃いものではなかつた。尋常の自覺の樣に混雜したものでもなかつた。又其中間に橫はる

重い影でもなかつた。魂が身體を抜けると云つては既に語弊がある。靈が細かい神經の末端に迄行き亙つて、泥で出來た肉體の内部を、輕く淸くすると共に、官能の實覺から杳かに遠からしめた狀態であつた。余は余の周圍に何事か起りつゝあるかを自覺した。同時に其自覺が窈窕として地の臭を帶びぬ一種特別のものであると云ふ事を知つた。床の下に水が廻つて、自然と疊が浮き出すやうに、余の心は己の宿る身體と共に、蒲團から浮き上がつた。より適當に云へば、腰と肩と頭に觸れる堅い蒲團が何處かへ行つて仕舞つたのに、心と身體は元の位置に安く漂つて居た。發作前に起るドストイエフスキーの歡喜は、瞬刻のために十年もしくは終生の命を賭しても然るべき性質のものとか聞いてゐる。余のそれは左樣に強烈のものではなかつた。寧ろ恍惚として幽かな趣を生活面の全部に輕く且つ深く印し去つたのみであつた。從つて余にはドストイエフスキーの受けた樣な憂鬱性の反動が來なかつた。余は朝から屢此狀態に入つた。午過にもよく此蕩漾を味つた。さうして覺めたときは何時でも其樂しい記憶を抱いて幸福の記念にした位であつた。

ドストイエフスキーの享け得た境界は、生理上彼の病の將に至らんとする豫言である。生を半に薄めた余の興致は、單に貧血の結果であつたらしい。

仰臥人如啞。　默然見大空。　大空雲不動。　終日杳相同。

二十一

同じドストイエフスキーも亦死の門口迄引き摺られながら、辛うじて後戻りをする事の出來た幸福な人

である。けれども彼の命を危めにかゝつた災は、余の場合に於けるが如き悪辣な病氣ではなかつた。彼は人の手に作り上げられた法と云ふ器械の敵となつて、どんと心臓を打ち貫かれやうとしたのである。

彼は彼の倶樂部で時事を談じた。已なくんば只一揆あるのみと叫んだ。さうして囚はれた。八ヶ月の長い間薄暗い獄舍の日光に浴したのち、彼は蒼空の下に引き出されて、新たに刑壇の上に立つた。彼は自己の宣告を受けるため、二十一度の霜に、襯衣一枚の裸姿となつて、申渡の終るのを待つた。さうして銃殺に處すの一句を突然として鼓膜に受けた。「本當に殺されるのか」とは、自分の耳を信用しかねた彼が、傍に立つ同囚に問うた言葉である。――白い手帛を合圖に振つた。兵士は覘を定めた銃口を下に伏せた。ドストイエフスキーは斯くして法律の捏ね丸めた熱い鉛の丸を呑まずに濟んだのである。其代り四年の月日をサイベリヤの野に暮した。

彼の心は生から死に行き、死から又生に戻つて、一時間と經たぬうちに三たび鋭どい曲折を描いた。さうして其三段落が三段落ともに、妥協を許さぬ強い角度で連結された。其變化丈でも驚くべき經驗である。生きつゝあると固く信ずるものが、突然是から五分のうちに死ななければならないと云ふ時、既に死ぬと極つてから、猶餘る五分の命を提げて、將に來るべき死を迎へながら、四分、三分、二分と意識しつゝ進む時、更に突き當ると思つた死が、忽ちとんぼ返りを打つて、新たに生と名づけられる時、――余の如き神經質では此三象面の一つにすら堪へ得まいと思ふ。現にドストイエフスキーと運命を同じくした同囚の一人は、是がために其場で氣が狂つて仕舞つた。

夫にも拘はらず、回復期に向つた余は、病牀の上に寐ながら、屢ばドストイエフスキーの事を考へた。

ことに彼が死の宣告から蘇へつた最後の一幕を眼に浮べた。――寒い空、新らしい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襯衣一枚の儘顫へてゐる彼の姿、――悉く鮮やかな想像の鏡に映つた。獨り彼が死刑を免かれたと自覺し得た咄嗟の表情が、何うしても判然映らなかつた。しかも余はたゞ此咄嗟の表情が見たい許に、凡ての畫面を組み立てゝ居たのである。

余は自然の手に罹つて死なうとした。現に少しの間死んでゐた。後から當時の記憶を呼び起した上、猶所々の穴へ、妻から聞いた顛末を埋めて、始めて全く出來上る構圖を振り返つて見ると、所謂慄然と云ふ感じに打たれなければ已まなかつた。其恐ろしさに比例して、九仞に失つた命を一簣に取り留める嬉しさは又特別であつた。此死此生に伴ふ恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なつたため、余は連想上常にドストイエフスキーを思ひ出したのである。

「もし最後の一節を欠いたなら、余は決して正氣ではゐられなかつたらう」と彼自身が物語つてゐる。氣が狂ふほどの緊張を幸ひに受けずと濟んだ余には、彼の恐ろしさ嬉しさの程度を料り得ぬと云ふ方が寧ろ適當かも知れぬ。夫であればこそ、畫龍點睛とも云ふべき肝心の刹那の表情が、何う想像しても漠として眼の前に描き出せないのだらう。運命の擒縱を感ずる點に於て、ドストイエフスキーと余とは、殆んど詩と散文ほどの相違がある。

夫にも拘はらず、余は屢ばドストイエフスキーを想像して已まなかつた。さうして寒い空と、新らしい刑壇と、刑壇の上に立つ彼の姿と、襯衣一枚で顫へてゐる彼の姿とを、根氣よく描き去り描き來つて已まなかつた。

今は此想像の鏡も何時となく曇つて來た。同時に、生き返つたわが嬉しさが日に〳〵われを遠ざかつて行く。あの嬉しさが始終わが傍にあるならば、　ドストイエフスキーは自己の幸福に對して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた。

二十二

余はうと〳〵しながら何時の間にか夢に入つた。すると鯉の跳ねる音で忽ち眼が覺めた。

余が寢てゐる二階座敷の下はすぐ中庭の池で、中には鯉が澤山に飼つてあつた。其鯉が五分に一度位は必ず高い音を立て、ぱしやりと水を打つ。晝のうちでも折々は耳に入つた。夜は殊に甚しい。隣りの部屋も、下の風呂場も、向うの三階も、裏の山も悉く靜まり返つた眞夜中に、余は絶えず此音で眼を覺ました。

犬の眠りと云ふ英語を知つたのは何時の昔か忘れてしまつたが、犬の眠りと云ふ意味を實地に經驗したのは此頃が始めてゞあつた。余は犬の眠りのために夜毎悩まされた。漸く寢付いて難有いと思ふ間もなく、すぐ眼が開いて、まだ空は白まないだらうかと、幾度も曉を待ち佗びた。床に縛り付けられた人の、しんとした夜半に、たゞ獨り生きてゐる長さは存外な長さである。――鯉が勢よく水を切つた。自分の描いた波の上を叩く尾の音で、余は眼を覺ました。

室の中は夕暮よりも猶暗い光で照されてゐた。天井から下がつてゐる電氣燈の球は黒布で隙間なく掩がしてあつた。弱い光りは此黒布の目を洩れて、微かに八疊の室を射た。さうして此薄暗い灯影に、眞白な着物を着た人間が二人坐つてゐた。二人とも口を利かなかつた。二人とも動かなかつた。二人とも膝の上

へ手を置いて、互ひの肩を並べた儘凝としてゐた。

黒い布で包んだ球を見たとき、余は紗で金箔を卷いた弔旗の頭を思ひ出した。此喪章と關係のある球の中から出る光線によつて、薄く照された白衣の看護婦は、靜かなる點に於て、行儀の好い點に於て、幽靈の雛の樣に見えた。さうして其雛は必要のあるたびに無言の儘必ず動いた。

余は聲も出さなかつた。呼びもしなかつた。夫でも余の寐てゐる位置に、少しの變化さへあれば彼等は屹度動いた。手を毛布のうちで、もぢ付かせても、心持肩を右から左へ搖つても、頭を——頭は眼が覺める度に必ず痲痺れてゐた。或は痲痺れるので眼が覺めるのかも知れなかつた。——其頭を枕の上で一寸揩らしても、或は足——足は能く寐覺めの種となつた。平生の癖で時々、片方を片方の上へ重ねて、其儘とろとろとなると、下になつた方の骨が澤庵石でも載せられた樣に、みし／＼と痛んで眼が覺めた。さうして余は必ず強い痛さと重たさとを忍んで足の位置を變へなければならなかつた。——是等のあらゆる場合に、わが變化に應じて、白い着物の動かない事は決してなかつた。時にはわが動作を豫期して、向うから動くと思はれる場合もあつた。時には手も足も頭も動かさないのに、眠りが盡きて不圖眼を開けさへすれば、白い着物はすぐ顏の傍へ來た。余には白い着物を着てゐる女の心持が少しも分らなかつた。けれども白い着物を着てゐる女は余の心を善く悟つた。さうして影の形に隨ふ如くに變化した。響の物に應ずる如くに働らいた。黒い布の目から洩れる薄暗い光の下に、眞白な着物を着た女が、わが肉體の先を越して、ひそ／＼と、しかも規則正しく、わが心のまゝに動くのは恐ろしいものであつた。

余は此氣味の惡い心持を抱いて、眼を開けると共に、ぼんやり眸に映る室の天井を眺めた。さうして黒

い布で包んだ電氣燈の球と、其黑い布の織目から洩れてくる光に照らされた白い着物を着た女を見た。見たか見ないうちに白い着物が動いて余に近づいて來た。

秋風鳴萬木。　山雨撼高樓。　病骨稜如劍。　一燈青欲愁。

二十三

余は好意の干乾びた社會に存在する自分を甚だぎごちなく感じた。

人が自分に對して相應の義務を盡して呉れるのは無論難有い。けれども義務とは仕事に忠實なる意味で、人間を相手に取つた言葉でも何でもない。從つて義務の結果に浴する自分は、難有いと思ひながらも、義務を果した先方に向つて、感謝の念を起し惡い。夫が好意となると、相手の所作が一擧一動悉く自分を目的にして働いてくるので、活物の自分に其一擧一動が悉く應へる。其所に互を繋ぐ暖い糸があつて、器械的な世を頼母しく思はせる。電車に乘つて一區を瞬く間に走るよりも、人の脊に負はれて淺瀬を越した方が情が深い。

義務さへ素直には盡して呉れる人のない世の中に、又自分の義務さへ碌に盡しもしない世の中に、斯んな贅澤を竝べるのは過分である。さうとは知りながら余は好意の干乾びた社會に存在する自分を切にぎごちなく感じた。――或る人の書いたものゝ中に、余りせち辛い世間だから、自用車を節儉する格で、當分良心を質に入れたとあつたが、質に入れるのは固より一時の融通を計る便宜に過ぎない。今の大多數は質に置くべき好意さへ天で持つて居るものが少なさうに見えた。如何に工面が付いても受出さうとは思へな

かつた。とは悟りながら矢張り好意の干乾びた社會に存在する自分をぎごちなく感じた。

今の青年は、筆を執つても、口を開いても、身を動かしても、悉く「自我の主張」を根本義にしてゐる。夫程世の中は切り詰められたのである。夫程世の中は今の青年を虐待してゐるのである。「自我の主張」を正面から承れば、小憎らしい申し分が多い。けれども彼等をして此「自我の主張」を敢てして憚かる所なき迄に押し詰めたものは今の世間である。ことに今の經濟事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊つたり身を投げたりすると同程度に悲慘な煩悶が含まれてゐる。ニーチェは弱い男であつた。多病な人であつた。又孤獨な書生であつた。さうしてザラツストラは斯の如く叫んだのである。

斯うは解釋する樣なもの丶、依然として余は常に好意の干乾びた社會に存在する自分をぎごちなく感じた。自分が人に向つてぎごちなく振舞ひつゝあるにも拘はらず、自らをぎごちなく感じた。さうして病に罹つた。さうして病の重い間、此ぎごちなさを何處へか忘れた。

看護婦は五十グラムの粥をコップの中に入れて、それを鯛味噌と混ぜ合はして、一匙づゝ自分の口に運んでくれた。余は雀の子か烏の子の樣な心持がした。醫師は病の遠ざかるに連れて、殆んど五日目毎に、余のために食事の獻立表を作つた。ある時は三通りも四通りも作つて、夫を比較して一番病人に好ささうなものを撰んで、あとは夫限反故にした。

醫師は職業である。看護婦も職業である。禮も取れば、報酬も受ける。たゞで世話をして居ない事は勿論である。彼等を以て、單に金錢を得るが故に、其義務に忠實なるのみと解釋すれば、まことに器械的で、實も蓋もない話である。けれども彼等の義務の中に、半分の好意を溶き込んで、それを病人の眼から透か

して見たら、彼等の所作がどれ程尊とくなるか分らない。病人は彼等のもたらす一點の好意によつて、急に生きて來るからである。余は當時さう解釋して獨りで嬉しかつた。さう解釋された醫師や看護婦も嬉しからうと思ふ。

子供と違つて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出來た樣に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣まゝに吸收する場合が極めて少ない。本當に嬉しかつた、本當に難有かつた、本當に尊かつたと、生涯に何度思へるか、勘定すれば幾何もない。たとひ純潔でなくても、自分に活力を添へた當時の此感情を、余は其儘長く余の心臟の眞中に保存したいと願つてゐる。さうして此感情が遠からず單に一片の記憶と變化して仕舞ひさうなのを切に恐れてゐる。――好意の干乾びた社會に存在する自分を甚だぎごちなく感ずるからである。

天下自多事。　被吹天下風。　高秋悲鬢白。　衰病夢顏紅。

送鳥天無盡。　看雲道不窮。　殘存吾骨貴。　愼勿妄磨礱。

二十四

小供のとき家に五六十幅の畫があつた。ある時は床の間の前で、ある時は藏の中で、又ある時は虫干の折に、余は交る〴〵それを見た。さうして懸物の前に獨り蹲踞まつて、默然と時を過すのを樂とした。今でも玩具箱を引繰り返した樣に色彩の亂調な芝居を見るよりも、自分の氣に入つた畫に對して居る方が遙かに心持が好い。

畫のうちでは彩色を使つた南畫が一番面白かつた。惜い事に余の家の藏幅には其南畫が少なかつた。子供の事だから畫の巧拙などは無論分らう筈はなかつた。好き嫌ひと云つた所で、構圖の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表はれてゐれば夫で嬉しかつたのである。

鑑識上の修養を積む機會を有たなかつた余の趣味は、其後別段に新らしい變化を受けないで生長した。從つて山水によつて畫を愛するの弊はあつたらうが、名前によつて畫を論ずるの譏りも犯さずに濟んだ。丁度畫と前後して余の嗜好に上つた詩と同じく、如何な大家の筆になつたものでも、如何に時代を食つたものでも、自分の氣に入らないものは一向顧みる義理を感じなかつた。（余は漢詩の內容を三分して、いたく其一分を愛すると共に、大いに他の一分をけなしてゐる。殘る三分の一に對しては、好むべきか惡むべきか何れとも意見を有してゐない。）

或時、靑くて丸い山を向ふに控えた、又的皪と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の眞前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て——無論畫絹の上に——何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の眞面目な顏をしけ／＼眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も氣の毒さうに云つた。此友人は岩手のものであつた。余は成程と始めて自分の迂濶を愧づると共に、余の風流心に泥を塗つた友人の實際的なのを惡んだ。

それは二十四五年も前の事であつた。其二十四五年の間に、余も已を得ず岩手出身の友人の樣に次第に實際的になつた。崖を降りて溪川へ水を汲みに行くよりも、臺所へ水道を引く方が好くなつた。けれども南畫に似た心持は時々夢を襲つた。ことに病氣になつて仰向に寐てからは、絕えず美くしい雲と空が胸に

描かれた。

すると小宮君が歌麿の錦繪を葉書に刷つたのを送つて呉れた。余は其色合の長い間に自と寂びたくすみ方に見惚れて、眼を放さずそれを眺めてゐたが、不圖裏を返すと、私はこの畫の中にある樣な人間に生れたいとか何とか、當時の自分の情調とは似ても似付かぬ事が書いてあつたので、斯んなやにつこい色男は大嫌だ、おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだと答へて呉れと傍のものに賴んだ。所が今度は小宮君が自身で枕元へ坐つて、自然も好いが人間の背景にある自然でなくつちやとか何とか病人に向つて古臭い說を吐き掛けるので、余は小宮君を捕へて御前は青二才だと罵つた。――其位病中の余は自然を懷かしく思つてゐた。

空が空の底に沈み切つた樣に澄んだ。高い日が蒼い所を目の屆くかぎり照らした。余は其射返しの大地に洽ねき內にしんとして獨り溫もつた。さうして眼の前に群がる無數の赤蜻蛉を見た。さうして日記に書いた。――「人より空、語より默。……肩に來て人懷かしや赤蜻蛉」

是は東京へ歸つた以後の景色である。東京へ歸つたあとも暫らくは、絕えず美くしい自然の畫が、子供の時と同じ樣に、余を支配してゐたのである。

秋露下南磵。　黃花粲照顏。　欲行沿澗遠。　却得與雲還。

二十五

子供が來たから見てやれと妻が耳の傍へ口を着けて云ふ。身體を動かす力がないので余は元の姿勢のま

ま唯視線丈を其方に移すと、子供は枕を去る六尺程の所に坐つてゐた。

余の寐てゐる八疊に付いた床の間は、余の足の方にあつた。余の枕元は隣の間を仕切る襖で半塞いであつた。余は左右に開かれた襖の間から敷居越しに余の子供を見たのである。

頭の上の方にゐるものを室を隔てゝ見る視力が、不自然な努力を要するためか、其處に坐つてゐる子供の姿は存外遠方に見えた。無理な一瞥の下に余の眸に映つた顔は、逢ふたと記すよりも寧ろ眺めたと書く方が適當な位離れてゐた。余は此一瞥より外に復子供の影を見なかつた。余の眸はすぐと自然の角度に復した。けれども余は此一瞥の短きうちに凡てを見た。

子供は三人ゐた。十二から十、十から八つと順に一列になつて隣座敷の眞中に竝ばされてゐた。さうして三人ともに女であつた。彼等は未來の健康のため、一夏を茅が崎に過すべく、父母から命ぜられて、兄弟五人で昨日迄海邊を驅け廻つてゐたのである。父が危篤の報知によつて、親戚のものに伴れられて、わざわざ砂深い小松原を引き上げて、修善寺迄見舞に來たのである。

けれども危篤の何を意味してゐるかを知るには彼等は餘り小さ過ぎた。彼等は死と云ふ名前を覺えてゐた。けれども死の恐ろしさと怖さとは、彼等の若い額の奥に、未だ嘗て影さへ宿さなかつた。死に捕へられた父の身體が是から何う變化するか彼等には想像が出來なかつた。父が死んだあとで自分等の運命に何んな結果が來るか、彼等には無論考へ得られなかつた。彼等はたゞ人に伴はれて父の病氣を見舞ふべく、父の旅先迄汽車に乘つて來たのである。

彼等の顔には此の會見が最後かも知れぬと云ふ愁の表情が丸でなかつた。彼等は親子の哀別以上に無邪

氣な顔を有つてゐた。さうして色々人のゐる中に、三人特別な席に竝んで坐らせられて、嚴肅な空氣に凝と行儀よく取り澄ます窮屈を、切なく感じてゐるらしく思はれた。

余はたゞ一瞥の努力に彼等を見た丈であつた。さうして病を解し得ぬ可憐な小さいものを、わざ／＼遠く迄引張り出して、殊勝に枕元に坐らせて置くのを却て殘酷に思つた。妻を呼んで、折角來たものだから、其處いら等を見物させて遣れと命じた。もし其時の余に、或は是が親子の見納めになるかも知れないと云ふ懸念があつたならば、余はもう少ししみ／″＼彼等の姿を見守つたかも知れなかつた。然し余は醫師や傍のものが余に對して抱いてゐた樣な危險を、余の病の上に自ら感じてゐなかつたのである。

子供はぢきに東京へ歸つた。一週間程してから、彼等は各々に見舞狀を書いて、それを一つ封に入れて、余の宿に向けた。十二になる筆子のは、四角な字を入れた覺束ない候文で、「御祖母様が雨がふつても風がふいても毎日々々一日もかゝさず御しやか様へ御詣を遊ばし御百度をなされ御父様の御病氣一日も早く御全快を祈り遊ばされ又高田の御伯母様何處かの御宮へ御詣り遊ばすとのことに御座候ふさ、きよみ、むめの三人の連中は毎日猫の墓へ水をとりかへ花を差し上て早く御父様の全快を御祈りに居り候」とあつた。十になる恒子のは尋常であつた。八つになるえい子のは全く片假名丈で書いてあつた。字を埋て讀み易くすると「御父様の御病氣は如何で御座いますか、私は無事に暮して居りますから御安心なさいませ。御父様も私の事を思はずに御病氣を早く直して早く御歸りなさいませ。私は毎日休まずに學校へ行つて居ります。又御母様によろしく」と云ふのである。

余は日記の一頁を寢ながら割いて、それに、留守の中は大人なしく御祖母様の云ふ事を聞かなくては不

可ない、今に序のあつた時修善寺の御土産を屆けてやるからと書いて、すぐ郵便で妻に出さした。子供は余が東京へ歸つてからも、平氣で遊んでゐる。修善寺の土産はもう壞して仕舞つたらう。彼等が大きくなつたとき父の此文を讀む機會が若しあつたなら、彼等は果して何んな感じがするだらう。

傷心秋已到。嘔血骨猶存。病起期何日。夕陽還一村。

二十六

五十グラムと云ふと日本の二勺半にしか當らない。たゞ夫丈の飲料で、此身體を終日持ち應へてゐたかと思へば、自分ながら氣の毒でもあるし、可愛らしくもある。又馬鹿らしくもある。

余は五十グラムの葛湯を恭やしく飲んだ。さうして左右の腕に朝夕二回宛の注射を受けた。腕は兩方とも針の痕で埋まつてゐた。醫師は余に今日は何方の腕にするかと聞いた。余は何方にもしたくなかつた。藥液を皿に溶いたり、夫を注射器に吸ひ込ましたり、針を丁寧に拭つたり、針の先に泡の樣に細かい藥を吹かして眺めたりする注射の準備は甚だ物奇麗で心持が好いけれども、其針を腕にぐさと刺して、其所へ無理に藥を注射するのは不愉快で堪らなかつた。余は醫師に全體其黄色の液は何だと聞いた。森成さんはブンベルンとかブンメルンとか答へて、遠慮なく余の腕を痛からせた。

やがて日に二回の注射が一回に減じた。其一回も亦しばらくすると廢めになつた。さうして葛湯の分量が少しづゝ增して來た。同時に口の中が執拗く粘り始めた。爽かな飲料で絕えず舌と顎と咽喉を洗つてゐなくては居たゝまれなかつた。余は醫師に氷を請求した。醫師は固い片らが滑つて胃の腑に落ち込む危險

を恐れた。余は天井を眺めながら、腹膜炎を患らつた廿歳の昔を思ひ出した。其時は病氣に障るとかで、凡ての飲物を禁ぜられてゐた。たゞ冷水で含嗽をする丈の自由を醫師から得たので、余は一時間のうちに、何度となく含嗽をさせて貰つた。さうして其つど人に知れない樣に、そつと含嗽の水を幾分かづゝ胃の中に飲み下して、やつと熱り付く樣な渇を紛らしてゐた。

昔の計を繰り返す勇氣のなかつた余に、口中を潤すための氷を歯で噛み砕いては、正直に殘らず吐き出した。其代り日に數回平野水を一口づゝ飲まして貰ふ事にした。平野水がくゝ／＼と音を立てる樣な勢で、食道から胃へ落ちて行く時の心持は痛快であつた。けれども咽喉を通り越すや否やすぐと又飲みたくなつた。余は夜半に屢ば看護婦から平野水を洋盃に注いで貰つて、それを難有さうに飲んだ當時を能く記憶してゐる。

渇は次第に歇んだ。さうして渇よりも恐ろしい餓じさが腹の中を荒して歩く樣になつた。余は寐ながら美くしい食膳を何通りとなく想像で拵らえて、それを眼の前に並べて樂んでゐた。夫許ではない、同じ獻立を何人前も調へて置いて、多數の朋友にそれを想像で食はして喜こんだ。今考へると普通のものゝ嬉しがる樣な食物はひとつもなかつた。斯う云ふ自分にすら餘り難有くはない御膳ばかりを眼の前に浮べてゐたのである。

森成さんがもう葛湯も厭きたらうと云つて、わざ／＼東京から米を取り寄せて重湯を作つて呉れた時は、重湯を生れて始めて啜る余には大いな期待があつた。けれども一口飲んで始めて其不味いのに驚ろいた余は、夫限り重湯といふものを近づけなかつた。其代りカジノビスケツトを一片貰つた折の嬉しさは未だに

忘れられない。わざ／＼看護婦を醫師の室まで遣つて、特に禮を述べた位である。

やがて、粥を許された。其旨さはたゞの記憶となつて冷やかに殘つてゐる丈だから實感としては今思ひ出せないが、斯んな旨いものが世にあるかと疑ひつゝ舌を鳴らしたのは確かである。夫からオートミールが來た。ソーダビスケットが來た。余は凡てを難有く食つた。さうして、より多く食ひたいと云ふ事を日課の樣に繰り返して森成さんに訴へた。森成さんは仕舞に余の病床に近づくのを恐れた。東君はわざ／＼妻の所へ行つて、先生はあんな尤もな顔をしてゐる癖に、子供の樣に始終食物の話ばかりしてゐて可笑しいと告げた。

腸に春滴るや粥の味

二十七

オイケンは精神生活と云ふ事を眞向に主張する學者である。學者の習慣として、自己の説を唱ふる前には、あらゆる他のイズムを打破する必要を感ずるものと見えて、彼は彼の所謂精神生活を新たならしむるため、其用意として、現代生活に影響を與ふる在來からの處生上の主義に一も二もなく非難を加へた。自然主義も遣られる、社會主義も叩かれる。凡ての主義が彼の眼から見て存在の權利を失つたかの如くに説き去られた時、彼は始めて精神生活の四字を拈出した。さうして精神生活の特色は自由である、自由であると連呼した。

試みに彼に向つて自由なる精神生活とは何んな生活かと問へば、端的に斯んなものだとは決して答へな

い。たゞ立派な言葉を秩序よく並べ立てる。六つかしさうな理窟を蜿蜒と幾重にも重ねて行く。そこに學者らしい手際はあるかも知れないが、とぐろの中に巻き込まれる素人は茫然して仕舞ふ丈である。

しばらく哲學者の言葉を平民に解る樣に翻譯して見ると、オイッケンの所謂自由なる精神生活とは、斯んなものではなからうか。――我々は普通衣食の爲に働らいてゐる。衣食のための仕事は消極的である。換言すると、自分の好惡撰擇を許さない強制的の苦しみを含んでゐる。さう云ふ風に外から壓し付けられた仕事では精神生活とは名づけられない。苟しくも精神的に生活しやうと思ふなら、義務なき所に向つて自ら進む積極のものでなければならない。束縛によらずして、己れ一個の意志で自由に營む生活でなければならない。

斯う解釋した時、誰も彼の精神生活を評して詰らないとは云ふまい。コムトは倦怠を以て社會の進歩を促がす原因と見た位である。倦怠の極已を得ずして仕事を見付け出すよりも、内に抑えがたき或るものが蟠まつて、凝と持ち應へられない活力を、自然の勢から生命の波動として描出し來る方が實際實の入つた生き法と云はなければなるまい。舞踏でも音樂でも詩歌でも、凡て藝術の價値は茲に存してゐると評しても差支ない。

けれども學者オイッケンの頭の中で纒め上げた精神生活が、現に事實となつて世の中に存在し得るや否やに至つては自から別問題である。彼オイッケン自身が純一無雜に自由なる精神生活を送り得るや否やを想像して見ても分明な話ではないか。間斷なき此種の生活に身を託せんとする前に、吾人は少なくとも早く既に職業なき閑人として存在しなければならない筈である。

豆腐屋が氣に向いた朝丈石臼を回して、心の機まないときは決して豆を挽かなかつたなら商賈にはならない。更に進んで、己れの好いた人丈に豆腐を賣つて、いけ好かない客を悉く謝絶したら猶の事商賈にはならない。凡ての職業が職業として成立するためには、店に公平の灯を點けなければならない。公平と云ふ美しさうな徳義上の言葉を裏から言ひ直すと、器械的と云ふ醜い本體を有してゐるに過ぎない。一分の遲速なく發着する汽車の生活と、所謂精神的生活とは、正に兩極に位する性質のものでなければならない。さうして普通の人は十が十迄此兩端を七分三分とか六分四分とかに交ぜ合はして自己に便宜な樣に又世間に都合の好い樣に（卽ち職業に忠實なる樣に）生活すべく天から余儀なくされてゐる。是が常態である。たま〳〵藝術の好きなものが、好きな藝術を職業とする樣な場合ですら、其藝術が職業となる瞬間に於て、眞の精神生活は既に汚されて仕舞ふのは當然である。藝術家としての彼は己れに篤き作品を自然の氣乘りで作り上げやうとするに反して、職業家としての彼は評判のよきもの、賣高の多いものを公けにしなくてはならぬからである。

既に個人の性格及び敎育次第で融通の利かなくなりさうなオイツケンの所謂自由なる精神生活は、現今の社會組織の上から見ても、是程應用の範圍の狹いものになる。それを一般に行き亘つて實行の出來る大主義の如くに說き去る彼は、學者の通弊として統一病に罹つたのだと酷評を加へても可いが、たま〳〵文藝を好んで文藝を職業としながら、同時に職業としての文藝を忌んでゐる余の如きものの注意を呼び起して、其批評心を刺戟する力は充分ある。大患に罹つた余は、親の厄介になつた子供の時以來久振で始めて此精神生活の光に浴した。けれどもそれは僅か一二ヶ月の中であつた。病が癒るに伴れ、自己が次第に實

世間に押し出されるに伴れ、斯う云ふ議論を公けにして得意なオイッケンを羨やまずには居られなくなつて來た。

二十八

學校を出た當時小石川のある寺に下宿をしてゐた事がある。其處の和尙は內職に身の上判斷をやるので、薄暗い玄關の次の間に、算木と筮竹を見るのが常であつた。固より看板を懸けての公表な商買でなかつた所爲か、占を頼みに來るものは多くて日に四五人、少ない時は丸で筮竹を揉む音さへ聞えない日もあつた。易斷に重きを置かない余は、固より斯の道に於て和尙と無緣の衆生であつたから、たゞ折々襖越しに、和尙の、夫や當人の望み通りにした方が好うがすな抔と云ふ緣談に關する助言を耳に挾さむ位なもので、面と向き合つては互に何も語らずに久しく過ぎた。

或時何かの序に、話がつい人相とか方位とか云ふ和尙の繩張り内に踏り込んだので、冗談半分私の未來は何うでせうと聞いて見たら、和尙は眼を据えて余の顏を凝と眺めた後で、大して惡い事もありませんなと答へた。大して惡い事もないと云ふのは、大して好い事もないと云つたも同然で、卽ち御前の運命は平凡だと宣告した樣なものである。余は仕方がないから默つてゐた。すると和尙が、貴方は親の死目には逢ひませんねと云つた。余はさうですかと答へた。すると今度は貴方は西へ西へと行く相があると云つた。余は又左樣ですかと答へた。最後に和尙は、早く顋の下へ髭を生やして、地面を買つて居宅を御建てなさいと勸めた。余は地面を買つて居宅を建て得る身分なら何も君の所に厄介になつちや居ないと答へたかつ

たゞけれども顋の下の髯と、地面居宅とは何んな關係があるか知りたかつたので、それ丈一寸聞き返して見た。すると和尚は眞面目な顔をして、貴方の顔を半分に割ると上の方が長くつて、下の方が短か過ぎる。從つて落ち付かない。だから早く顋髯を生やして上下の釣合を取る樣にすれば、顔の居坐りが可くなつて動かなくなりますと答へた。余は余の顔の雜作に向つて加へられた此物理的もしくは美學的の批判が、優に余の未來の運命を支配するかの如く容易に說き去つた和尚を少し可笑しく感じた。さうして成程と答へた。

一年ならずして余は松山に行つた。それから又熊本に移つた。熊本から又倫敦に向つた。和尚の云つた通り西へ西へと赴いたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。其時は同じ東京に居りながら、つい臨終の席には侍らなかつた。父の死んだ電報を東京から受け取つたのは、熊本に居る頃の事であつた。是で見ると、親の死目に逢へないと云つた和尚の言葉も何うか斯うか的中してゐる。たゞ顋の髯に至つては其時から今日に至る迄、寧日なく剃り續けに剃つてゐるから、地面と居宅が果して髯と共にわが手に入るか何うか未だに判然せずにゐた。

所が修善寺で病氣をして寐付くや否や、頰がざら／＼し始めた。それが五六日すると一本々々に撮める樣になつた。又しばらくすると、頰から顋が隙間なく隱れる樣になつた。和尚の助言は十七八年振で始めて役に立ちさうな氣色に髯は延びて來た。妻は一層御生やしなすつたら好いでせうと云つた。余も半分其氣になつて、頻りに其邊を撫で廻してゐた。所が幾日となく洗ひも櫛づりもしない髮が、膏と垢で余の頭を埋め盡さうとする汚苦しさに堪へられなくなつて、或日床屋を呼んで、不充分ながら寐たまゝ頭に手を

入れて顔に髪剃を當てた。其時地面と居宅の持主たるべき資格を又奇麗に失つて仕舞つた。傍のものは若くなつた／＼と云つて頻りに囃し立てた。獨り妻丈はおや悉皆剃つて御仕舞になつたんですかと云つて、少し殘り惜しさうな顏をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、猶地面と居宅が欲しかつたのである。余と雖も、髯を落さなければ地面と居宅が屹度手に入ると保證されるならば、あの頤は其儘に保存して置いた筈である。

其後髯は始終剃つた。朝早く床の上に起き直つて、向ふの二階の屋根と自分の室の障子の間に僅かばかり見える山の頂を眺めるたびに、わが頰の潔よく剃り落してある滑らかさを撫で廻しては嬉しがつた。地面と居宅は當分斷念したか、又は老後の樂しみにあと／＼迄取つて置く積だつたと見える。

客夢回時一鳥鳴。　夜來山雨曉來晴。　孤峯頂上孤松色。　早映紅暾欝々明。

二十九

修善寺が村の名で兼て寺の名であると云ふ事は、行かぬ前から疾に承知してゐた。然し其寺で鐘の代りに太鼓を叩かうとは嘗て想ひ至らなかつた。それを始めて聞いたのは何時の頃であつたか全く忘れて仕舞つた。たゞ今でも余が鼓膜の上に、想像の太鼓がどん――どんと時々響く事がある。すると余は必ず去年の病氣を憶ひ出す。

余は去年の病氣と共に、新らしい天井と、新らしい床の間に懸けた大島將軍の從軍の詩を憶ひ出す。さうして其詩を朝から晩迄に何遍となく讀み返した當時を明らさまに憶ひ出す。新らしい天井と、新らしい

床の間と、新らしい柱と、新らし過ぎて開閉の不自由な障子は、今でも眼の前にあり〳〵と浮べる事が出来るが、朝から晩迄に何遍となく讀み返した大島將軍の詩は、讀んでは忘れ、讀んでは忘れして、今では白壁の樣に白い絹の上を、何處迄も同じ幅で走つて、尾頭ともにふつりと折れて仕舞ふ黒い線を認める丈である。句に至つては、始めの劍戟といふ二字より外憶ひ出せない。

余は余の鼓膜の上に、想像の太鼓がどん――どんと響く度に、凡て是等のものを憶ひ出す。是等のものの中に、凝と仰向いて、尻の痛さを紛らしつゝ、のつそつ夜明を待ち侘びた其當時を回顧すると、修禪寺の太鼓の音は、一種云ふべからざる連想を以て、何時でも余の耳の底に卒然と鳴り渡る。

其太鼓は最も無風流な最も殺風景な音を出して、前後を切り捨てた上、中間丈を、自暴に夜陰に向つて擲き付ける樣に、ぶつきら棒な鳴り方をした。さうして、一つどんと素氣なく鳴ると共にぱたりと留つた。余は耳を峙だてた。一度靜まつた夜の空氣は容易に動かうとはしなかつた。良久らくして、今のは錯覺ではなからうかと思ひ直す頃に、又一つどんと鳴つた。さうして愛想のない音は、水に落ちた石の樣に、急に夜の中に消えたぎり、しんとした表に何の活動も傳へなかつた。寐られない余は、待ち伏せをする兵士の如く次の音の至るを思ひ詰めて待つた。其次の音は矢張り容易には來なかつた。漸くのこと第一第二と同じく極めて乾び切つた響が――響とは云ひ惡い。黒い空氣の中に、突然無遠慮な點をどつと打つて直筆を隱した樣な音が、余の耳朶を叩いて去る後で、余はつく〴〵と夜を長いものに觀じた。

尤も夜は長くなる頃であつた。暑さも次第に過ぎて、雨の降る日はセルに羽織を重ねるか、思ひ切つて朝から袷を着るかしなければ、肌寒を防ぐ便とならなかつた時節である。山の端に落ち込む日は、常の短

かい日よりも猶の事短かく晝を端折つて、灯は容易に點いた。さうして夜は中々明けなかつた。余はじり／＼と晝に食ひ入る夜長を夜毎に恐れた。眼が開くと幾度も夜であつた。是から何時間位斯うしてしんと夜の中に生きながら埋もつて居る事かと思ふと、我ながらわが辛氣に堪へられなかつた。新らしい天井と、新らしい柱と、新らしい障子を見詰めるに堪へなかつた。眞白な絹に書いた大きな字の懸物には最も堪へなかつた。あゝ早く夜が明けて呉れゝば可いのにと思つた。

修禪寺の太鼓は此時にどんと鳴るのである。さうして殊更に余を待ち遠しがらせる如く疎らな間隔を取つて、暗い夜をぽつりぽつりと縫ひ始める。それが五分と經ち七分と經つうちに、次第に調子付いて、遂に夕立の雨滴よりも繁く逼つて來る變化は、余から云ふともう日の出に間もないと云ふ報知であつた。太鼓を打ち切つてしばらくの後に、看護婦がやつと起きて室の廊下の所丈雨戸を開けて呉れるのは何よりも嬉しかつた。外は何時でも薄暗く見えた。

修善寺に行つて、寺の太鼓を余ほど精密に研究したものはあるまい。其結果として余は今でも時々どんと云ふ餘音のないぶつ切つた樣な響を余の鼓膜の上に錯覺の如く受ける。さうして一種云ふべからざる心持を繰り返してゐる。

夢繞星潢泫露幽。　夜分形影暗燈愁。　旗亭病近修禪寺。　一枕蕭鐘已九秋。

三十

山を分けて谷一面の百合を飽く迄眺めやうと心に極めた翌日から床の上に仆れた。想像は其時限りなく

咲き續く白い花を碁石の樣に點々と見た。それを小暗く包まうとする綠の奧には、重い香が沈んで、風に搖られる折々を待つ程に、葉は息苦しく重なり合つた。――此間宿の客が山から取つて來て瓶に插した一輪の白さと大きさと香から推して、余は有るまじき廣々とした畫を頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云ふ唐菖蒲の事だと、其唐菖蒲を床に活けて置いた時、始めて芥舟君から教はつて、夫では丸で野の百合の感じが違ふ樣だがと話し合つた一月前も思ひ出された。聖書と關係の薄い余にさへ、檜扇を熱帶的に派出に仕立てた樣な唐菖蒲は、深い沈んだ趣を表はすには餘り強過ぎるとしか思はれなかつた。唐菖蒲は何うでも可い。余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見る機會のないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた。

人は病むものゝ爲に裏の山に入つて、此所彼所から手の屆く幾莖の草花を折つて來た。裏の山は余の室から廊下傳ひにすぐ上る便のある位近かつた。障子さへ明けて置けば、寐ながら椽側と欄間の間を埋める一部分を鼻の先に眺める事も出來た。其一部分は岩と草と、岩の裾を縫ふて迂回して上る小徑とから成り立つてゐた。余は余の爲に山に上るものゝ姿が、椽の高さを離して欄間の高さに達する迄に、一遍影を隱して、又反對の位地から現はれて、遂に余の視線の外に沒して仕舞ふのを大いなる變化の如くに眺めた。さうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下つて來るのを疎い眼で眺めた。彼等は必ず粗い縞の貸浴衣を着て、日の照る時は手拭で頰冠りをしてゐた。嶮道を行くべきものとも思はれない其姿が、花を抱へて岩の傍にぬつと現はれると、一種芝居にでも有りさうな感じを病人に與へる位釣合が可笑しかつた。彼等の採つて來て呉れるものは色彩の極めて乏しい野生の秋草であつた。

或日しんとした眞晝に、長い薄が穗に伏さる樣に活けておつたら、何時何處から來たとも知れない蟋蟀がたつた一つ、大人しく中程に宿つてゐた。其時薄は虫の重みで撓ひさうに見えた。さうして袋戸に張つた新らしい銀の上に映る幾分かの緑が、暈した樣に淡くかつ不分明に、眸を誘ふので、猶更運動の感覺を刺戟した。

薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さへ眺めるには餘り色素が足りなかつた。漸く秋草の淋しさを物足らず思ひ出した時、始めて蜀紅葵とか云ふ燃える樣な赤い花瓣を見た。留守居の婆さんに錢を遣つて、あれを折らせろと云つたら、錢は要りません、花は預かり物だから上げられませんと斷はつたさうである。余は其話を聞いて、何んな所に花が咲いてゐて、何んな婆さんが何んな顏をして花の番をしてゐるか、見たくて堪らなかつた。蜀紅葵の花瓣は燃えながら、翌日散つて仕舞つた。

桂川の岸傳ひに行くといくらでも咲いてゐると云ふコスモスも時々病室を照らした。コスモスは凡ての中で最も單簡で且つ長く持つた。余は其薄くて規則正しい花片と、空に浮んだ樣に超然と取り合はぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子に似てゐると評した。何故ですかと聞いたものがあつた。範頼の墓守の作つたと云ふ菊を分けて貰つて來たのはそれから餘程後の事である。墓守は鉢に植ゑた菊を貸して上げやうかと云つたさうである。此墓守の顏も見たかつた。仕舞には畠山の城址からあけびと云ふものを取つて來て瓶に插んだ。それは色の褪めた茄子の色をしてゐた。さうして其一つを鳥が啄いて空洞にしてゐた。——瓶に插す草と花が次第に變るうちに氣節は漸く深い秋に入つた。

日似三春永。　心隨野水空。　牀頭花一片。　閑落小眠中。

若い時兄を二人失つた。二人とも長い間床に就いてゐたから、死んだ時は何れも苦しみ拔いた病の影を肉の上に刻んでゐた。けれども其長い間に延びた髮と髯は、死んだ後迄も生前の樣に黑くかつ濃かつた。髮は夫程でもないが、剃る事の出來ないで不本意らしく爺々汚さうに生えた髯に至つては、見るから憐れであつた。余は一人の兄の太く逞しい髯の色を未だに記憶してゐる。死ぬ頃の彼の顏が如何にも氣の毒な位瘠せ衰へて小さく見えるのに引き易へて、髯丈は健康な壯者を凌ぐ勢で延びて來た一種の對照を、氣味惡く又情なく感じた爲でもあらう。

大患に罹つて生か死かと騷がれる余に、幾日かの怪しき時間は、生とも死とも片付かぬ空裏に過ぎた。存亡の領域が稍明かになつた頃、まづ吾存在を確めたいと云ふ願から、取り敢へず鏡を取つてわが顏を照らし見た。すると何年か前に世を去つた兄の面影が、卒然として冷かな鏡の裏を掠めて去つた。骨許意地惡く高く殘つた頰、人間らしい曖昧を失つた蒼く黃色い皮、落ち込んで動く餘裕のない眼、それから無遠慮に延びた髮と髯、——どう見ても兄の記念であつた。

たゞ兄の髮と髯が死ぬ迄漆の樣に黑かつたのに拘はらず、余の夫等には何時の間にか銀の筋が疎らに交つてゐた。考へて見ると兄は白髮の生へる前に死んだのである。死ぬとすれば其方が屑よいかも知れない。白髮に鬢や頰をぽつ／＼冐され乍ら、まだ生き延びる工夫に餘念のない余は、今を盛りの年頃に容赦なく世を捨て、逝く壯者に比べると、何だか極りが惡い程未練らしかつた。鏡に映るわが表情のうちには、無

論果敢ないと云ふ心持もあつたが、死に損なつたと云ふ恥も少しは交つてゐた。又「ヴアージニバス・ピユエリスク」の中に、人はいくら年を取つても、少年の時と同じ樣な性情を失はないものだと書いてあつたのを、成程と首肯いて讀んだ當時を憶ひ出して、たゞ其當時に立ち戻りたい樣な氣もした。

「ヴアージニバス・ピユエリスク」の著者は、長い病苦に責められながらも、よく其快活の性情を終焉迄持ち續けたから、嘘は云はない男である。けれども惜しい事に髮の黑いうちに死んで仕舞つた。もし彼が生きて六十七十の高齡に達したら、或は斯うは云ひ切れなかつたらうと思へば、思はれない事もない。自分が二十の時、三十の人を見れば大變に懸隔がある樣に思ひながら、何時か三十が來ると、二十の昔と同じ氣分な事が分つたり、わが三十の時、四十の人に接すると、非常な差違を認めながら、四十に達して二十の過去を振り返れば、依然として同じ性情に活きつゝある自己を悟つたりするので、スチーヴンソンの言葉を尤もと受けて、今日迄世を經た樣なものゝ、外部から萌して來る老頽の徵候を、幾莖かの白髮に認めて、健康の常時とは心意の趣を異にする病裡の鏡に臨んだ刹那の感情には、若い影は更に射さなかつたからである。

白髮に強ひられて、思ひ切りよく老の敷居を跨いで仕舞はうか、白髮を隱して、猶若い街巷に徘徊しやうか、——其所迄は鏡を見た瞬間には考へなかつた。又考へる必要のない迄に、病める余は若い人々を遠くに見た。病氣に罹る前、ある友人と會食したら、其友人が短かく刈つた余の揉上を眺めて、其所から白髮に冒されるのを苦にして段々上の方へ剃り上げるのではないかと聞いた。其時の余には斯う聞かれる丈の色氣は充分あつた。けれども病に罹つた余は、白髮を看板にして事をしたい位迄に諦めよく落ち付いて

ゐた。

病の癒えた今日の余は、病中の余を引き延ばした心に活きてゐるのだらうか、又は友人と食卓に就いた病氣前の若さに立ち返つてゐるだらうか。果してスチーヴンソンの云つた通りを歩く氣だらうか、又は中年に死んだ彼の言葉を否定して漸く老境に進む積だらうか。――白髮と人生の間に迷ふものは若い人たちから見たら可笑しいに違ない。けれども彼等若い人達にもやがて墓と浮世の間に立つて去就を決しかねる時期が來るだらう。

桃花馬上少年時。　笑據銀鞍拂柳枝。　緑水至今迢遞去。　月明來照鬢如絲。

三十二

初めはたゞ漠然と空を見て寐てゐた。それから暫くして何時歸れるのだらうと思ひ出した。或時はすぐにも歸りたい樣な心持がした。けれども床の上に起き直る氣力すらないものが、何うして汽車に搖られて半日の遠きを行くに堪へ得やうかと考へると、歸りたいと念ずる自分が可成馬鹿氣て見えた。從つて傍のものに自分は何時歸れるかと問ひ糺した事もなかつた。同時に秋は幾度の晝夜を卷いて、わが心の前を過ぎた。空は次第に高く且蒼くわが上を掩ひ始めた。

もう動かしても大事なからうと云ふ頃になつて、東京から別に二人の醫者を迎へて其意見を確めたら、今二週間の後にと云ふ挨拶であつた。挨拶があつた翌日から余は自分の寐てゐる地と、寐てゐる室を見捨てるのが急に惜しくなつた。約束の二週間が成るべく緩くり廻轉する樣にと冀つた。曾て英國に居た頃、精

一杯英國を惡んだ事がある。それはハイネが英國を惡んだ如く因業に英國を惡んだのである。けれども立つ間際になつて、知らぬ人間の渦を卷いて流れてゐる倫敦の海を見渡したら、彼等を包む鳶色の空氣の奥に、余の呼吸に適する一種の瓦斯が含まれてゐる樣な氣がし出した。余は空を仰いで町の眞中に佇ずんだ。

二週間の後此地を去るべき今の余も、病む躯を横へて、床の上に獨り佇ずまざるを得なかつた。余は特に余のために造つて貰つた高さ一尺五寸程の偉大な藁蒲團に佇ずんだ。靜かな庭の寂寞を破る鯉の水を切る音に佇ずんだ。朝露に濡れた屋根瓦の上を遠近と尾を搖かし歩く鶺鴒に佇ずんだ。枕元の花瓶にも佇ずんだ。廊下のすぐ下をちよろ／＼と流れる水の音にも佇ずんだ。斯くわが身を繞る多くのものに低徊しつゝ、豫定の通り二週間の過ぎ去るのを待つた。

其二週間は待ち遠い歯痒さもなく、又あつけない不足もなく普通の二週間の如くに來て、尋常の二週間の如くに去つた。さうして雨の濛々と降る晩を最後の記念として與へた。暗い空を透かして、余は雨かと聞いたら、人は雨だと答へた。

人は余を運搬する目的を以て、一種妙なものを拵らえて、それを座敷の中に舁き入れた。長さは六尺もあつたらう、幅は僅か二尺に足らない位狹かつた。其一部は疊を離れて一尺程の高さ迄、上に反り返る樣に工夫してあつた。さうして全部を白い布で捲いた。余は抱かれて、此高く反た前方に脊を託して、平たい方に足を長く横たへた時、是は葬式だなと思つた。生きたものに葬式と云ふ言葉は穩當でないが、此白い布で包んだ寐台とも寐棺とも片の付かないものゝ上に横になつた人は、生きながら葬はれるとしか余には受け取れなかつた。余は口の中で、第二の葬式と云ふ言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ず遭つ

て貰ふ葬式を、余丈はどうしても二返執行しなければ濟まないと思つたからである。

舁かれて室を出るときは平であつたが、階子段を降りる際には、臺が傾いて、急に輿から落ちさうになつた。玄關に來ると同宿の浴客が大勢並んで、左右から白い輿を目送してゐた。何れも葬式の時の樣に靜かに控えてゐた。余の寐臺は其間を通り拔けて、雨の降る庇の外に擔ぎ出された。外にも見物人は澤山居た。やがて輿を竪に馬車の中に渡して、前後相對する席と席とで支へた。豫かじめ寸法を取つて拵らえたので、輿はきつしりと旨く馬車の中に納つた。馬は降る中を動き出した。余は寐ながら幌を打つ雨の音を聞いた。さうして、御者臺と幌の間に見える窮屈な空間から、大きな岩や、松や、水の斷片を難有く拜した。竹藪の色、柿紅葉、芋の葉、槿垣、熟した稻の香、凡てを見るたびに、成程今は斯んなものゝ有るべき季節であると、生れ返つた樣に憶ひ出しては嬉しかつた。更に進んでわが歸るべき所には、如何なる新らしい天地が、寐ほけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構へてゐるだらうかと想像して獨り樂しんだ。同時に昨日迄徘徊した藁蒲團も、鶺鴒も、秋草も、鯉も小河も悉く消えて仕舞つた。

萬事休時一息回。　餘生豈忍比殘灰。　風過古澗秋聲起。　日落幽篁瞑色來。
漫道山中三月滯。　誰知門外一天開。　歸期勿後黃花節。　恐有羇魂夢舊苔。

三十三

正月を病院で爲た經驗は生涯にたつた一返しかない。

松飾りの影が眼先に散らつく程暮が押し詰つた頃、余は始めて此の珍らしい經驗を目前に控へた自分を

異樣に考へ出した。同時に其の考へが單に頭丈に働いて、毫も心臟の鼓動に響を傳へなかつたのを不思議に思つた。

余は白い寢床の上に寢ては、自分と病院と來るべき春とを斯の如く一所に結び附ける運命の醉興さ加減を懇に商量した。けれども起き直つて机に向つたり、膳に着いたりする折は、もう此處が我家だと云ふ氣分に心を任して少しも怪しまなかつた。それで歲は暮れても春は逼つても別に感慨と云ふ程のものは浮ばなかつた。余は夫程長く病院に居て、夫程親しく患者の生活に根を卸したからである。

愈大晦日が來た時、余は小さい松を二本買つて、それを自分の病室の入口に立てやうかと思つた。然し松を支へる爲に釘を打ち込んで美しい柱に創を附けるのも惡いと思つて止めにした。看護婦が表へ出て梅でも買つて參りませうと云ふから買つて貰ふ事にした。

此の看護婦は修善寺以來余が病院を出る迄半年の間始終余の傍に附切りに附いてゐた女である。余は故らに彼の本名を呼んで町井石子孃々々と云つてゐた。時々は間違へて苗字と名前を顚倒して、石井町子孃とも呼んだ。すると看護婦は首を傾げながらさう改めた方が好い樣で御座いますねと云つた。仕舞には遠慮がなくなつて、とう／＼鼬と云ふ渾名を附けて遣つた。或時何かの序に、時に御前の顏は何かに似てゐるよと云つたら、何うせ碌なものに似てゐるのぢや御座いますまいと答へたので、凡そ人間として何かに似てゐる以上は、まづ動物に極つてゐる。外に似やうたつて容易に似られる譯のものぢやないと言つて聞かせると、夫や植物に似ちや大變ですと絕叫して以來、とう／＼鼬と極つて仕舞つたのである。

鼬の町井さんはやがて紅白の梅を二枝提げて歸つて來た。白い方を藏澤の竹の畫の前に插して、紅い方を

は太い竹筒の中に投げ込んだなり、袋戸の上に置いた。此間人から貰つた支那水仙もくる／＼と曲つて延びた葉の間から、白い香をしきりに放つた。町井さんは、もう大分病氣が可くおなりだから、明日は屹度御雜煮が祝へるに違ないと云つて余を慰めた。

除夜の夢は例年の通り枕の上に落ちた。斯う云ふ大患に罹つた揚句、病院の人となつて幾つの月を重ねた末、雜煮迄こゝで祝ふのかと考へると、頭の中にはアイロニーと云ふ羅馬字が明らかに綴られて見える。夫にも拘らず、感に堪へぬ趣は少しも胸を刺さずに、四十四年の春は自から南向の縁から明け放れた。さうして町井さんの豫言の通り形ばかりとは云ひながら小さい一切の餅が元日らしく病人の眸に映じた。余は此の一椀の雜煮に自家頭上を照すある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜずに、小さな餅の切を平凡にかつ一口に、ぐいと喰つて仕舞つた。

二月の末になつて、病室前の梅がちらほら咲き出す頃、余は醫師の許しを得て、再び廣い世界の人となつた。振り返つて見ると、入院中に、余と運命の一角を同じくしながら、遂に廣い世界を見る機會が來ないで亡くなつた人は少くない。ある北國の患者は入院以後病勢が次第に募るので、附添の息子が心配して、大晦日の夜になつて、無理に郷里に連れて歸つたら、汽車がまだ先へ着かないうちに途中で死んで仕舞つた。一間置いて隣りの人は自分で死期を自覺して、諦めて仕舞へば死ぬと云ふ事は何でもないものだと云つて、氣の毒な程大人しい往生を遂げた。向ふの外れにゐた潰瘍患者の高い咳嗽が日毎に薄らいで行くので、大方落ち附いたのだらうと思つて町井さんに尋ねて見ると、衰弱の結果何時の間にか死んでゐた。さうかと思ふと、癌で見込のない病人の癖に、から景氣をつけて、回診の時に醫師の顏を見るや否や、すぐ

起き直つて尻を捲るといふのがあつた。附添の女房を蹴つたり打つたりするので、女房が洗面所へ來て泣いてゐるのを、看護婦が見兼て慰めてゐましたと町井さんが話した事も覺えてゐる。ある食道狹窄の患者は病院には這入つてゐる樣なものゝ、迷ひに迷ひ抜いて、灸點師を連れて來て灸を据ゑたり、海草を採つて來て煎じて飲んだりして、ひたすら不治の病症を癒さうとしてゐた……。

余は是等の人と、一つ屋根の下に寢て、一つ賄の給仕を受けて、同じく一つ春を迎へたのである。退院後一箇月餘の今日になつて、過去を一攫みにして、眼の前に並べて見ると、アイロニーの一語は益鮮やかに頭の中に拈出される。さうして何時の間にか此のアイロニーに一種の實感が伴つて、兩つのものが互に纏綿して來た。鼬の町井さんも、梅の花も、支那水仙も、雜煮も、――あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、たゞ當時の自分と今の自分との對照丈がはつきりと殘る爲だらうか。

四三、一〇、二九――四四、二、二〇

子規の畫

余は子規の描いた畫をたつた一枚持つてゐる。亡友の記念だと思つて長い間それを袋の中に入れて仕舞つて置いた。年數の經つに伴れて、ある時は丸で袋の所在を忘れて打ち過ぎる事も多かつた。近頃不圖思ひ出して、あゝして置いては轉宅の際などに何處へ散逸するかも知れないから、今のうちに表具屋へ遣つて懸物にでも仕立てさせやうと云ふ氣が起つた。澁紙の袋を引き出して塵を拂いて中を檢べると、畫は元の儘濕つぽく四折に疊んであつた。畫の外に、無いと思つた子規の手紙も幾通か出て來た。余は其中から子規が余に宛てゝ寄こした最後のものと、夫から年月の分らない短いものとを選び出して、其中間に例の畫を挾んで、三つを一纏めに表裝させた。

畫は一輪花瓶に插した東菊で、圖柄としては極めて單簡な者である。傍に「是は萎み掛けた所と思ひ玉へ。下手いのは病氣の所爲だと思ひ玉へ。嘘だと思はゞ肱を突いて描いて見玉へ」といふ註釋が加へてある所を以て見ると、自分でもさう旨いとは考へて居なかつたのだらう。子規が此畫を描いた時は、余はもう東京には居なかつた。彼は此畫に、東菊活けて置きけり火の國に住みける君が歸り來るかなと云ふ一首の歌を添へて、熊本迄送つて來たのである。

壁に懸けて眺めて見ると如何にも淋しい感じがする。色は花と莖と葉と硝子の瓶とを合せて僅に三色しか使つてない。花は開いたのが一輪に蕾が二つだけである。葉の數を勘定して見たら、凡てゞやつと九枚

あつた。夫に周圍が白いのと表裝の絹地が寒い色なので、どう眺めても冷たい心持が襲つて來てならない。

子規は此簡單な草花を描くために、非常な努力を惜まなかつた樣に見える。僅か三莖の花に、少くとも五六時間の手間を掛けて、何處から何處迄丹念に塗り上げてゐる。是程の骨折は、たゞに病中の根氣仕事として餘程の決心を要するのみならず、如何にも無雜作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。思ふに畫と云ふ事に初心な彼は當時繪畫に於ける寫生の必要を不折などから聞いて、それを一草一花の上にも實行しやうと企てながら、彼が俳句の上で既に悟入した同一方法を、此方面に向つて適用する事を忘れたか、又は適用する腕がなかつたのであらう。

東菊によつて代表された子規の畫は、拙くて且つ眞面目である。才を呵して直ちに章をなす彼の文筆が、繪の具皿に浸ると同時に、忽ち堅くなつて、穗先の運行がねつとり竦んで仕舞つたのかと思ふと、余は微笑を禁じ得ないのである。虛子が來て此幅を見た時、正岡の繪は旨いぢやありませんかと云つたことがある。余は其時、だつてあれ丈の單純な平凡な特色を出すのに、あの位時間と勞力を費さなければならなかつたかと思ふと、何だか正岡の頭と手が、入らざる働きを餘儀なくされた觀がある所に、隱し切れない拙が溢れてゐると思ふと答へた。馬鹿律義なものに厭味も利いた風もあり樣はない。其處に重厚な好所があるとすれば、子規の畫は正に働きのない愚直ものゝ旨さである。けれども一線一畫の瞬間作用で、優に始末をつけられべき特長を、咄嗟に辨ずる手際がない爲めに、已を得ず省略の捷徑を棄てゝ、几帳面な塗抹主義を根氣に實行したとすれば、拙の一字は何うしても免れ難い。

子規は人間として、又文學者として、最も「拙」の缺乏した男であつた。永年彼と交際をした何の月に

も、何の日にも、余は未だ曾て彼の拙を笑ひ得るの機會を捉へ得た試がない。又彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さへ有たなかつた。彼の歿後殆ど十年にならうとする今日、彼のわざ〳〵余の爲に描いた一輪の東菊の中に、確に此一拙字を認める事の出來たのは、其結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余に取ては多大の興味がある。たゞ畫が如何にも淋しい。出來得るならば、子規に此拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償としたかつた。

——四四、七、四——

ケーベル先生

木の葉の間から高い窓が見えて、其窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。傍から濃い藍色の烟が立つた。先生は煙草を呑んでゐるなと余は安倍君に云つた。

此前此處を通つたのは何時だか忘れて仕舞つたが、今日見ると僅の間にもう大分樣子が違つてゐる。甲武線の崖上は角並新しい立派な家に建て易へられて、何れも現代的日本の產み出した富の威力と切り放す事の出來ない門構許である。其中に先生の住居だけが過去の記念の如くたつた一軒古ぼけたなりで殘つてゐる。先生は此燻ぶり返つた家の書齋に這入つたなり、滅多に外へ出た事がない。其書齋は取も直さず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。

余と安倍君とは先生に導かれて、敷物も何も足に觸れない素裸の儘の高い階子段を薄暗がりにがたくと云はせながら上つて、階上の右手にある書齋に入つた。さうして先生の今迄腰を卸して窓から頭丈を出してゐた一番光に近い椅子に余は坐つた。そこで外面から射す夕暮に近い明りを受けて始めて先生の顏を熟視した。先生の顏は昔と左迄違つて居なかつた。先生は自分で六十三だと云はれた。余が先生の美學の講義を聽きに出たのは、余が大學院に這入つた年で、慥か先生が日本へ來て始めての講義だと思つてゐるが、先生は其時から已に斯う云ふ顏であつた。先生に日本へ來てもう二十年になりますかと聞いたら、左樣はならない、たしか十八年目だと答へられた。先生の髮も鬚も英語で云ふとオーバーンとか形容すべき、こ

く薄い麻の様な色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細くつて柔かいから、少しの白髪が生えても丸で目立たないのだらう。夫にしても血色が元の通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が永久にみづ〳〵してゐる様に見えるのに引き易へて、先生の書斎は甚だ老け切つた色で包まれてゐた。洋書といふものは、唐本や和書よりも装飾的な背皮に、學問と藝術の派出やかさを偲ばせるのが常であるのに、此部屋は余の眼を射る何物をも蔵してゐなかつた。たゞ大きな机があつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。マツチと埃及煙草と灰皿があつた。余は埃及煙草を吹かしながら先生と話をした。けれども部屋を出て、下の食堂へ案内される迄、余は遂に先生の書斎にどんな書物がどんなに並んでゐたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や赤や青の背表紙が余の眼を刺激しなかつた許りではない。純潔な白色でさへ遂に余の眼には触れずに済んだ。先生の食卓には常の欧洲人が必要品とまで認めてゐる白布が懸つてゐなかつた。其代りにくすんだ更紗形を置いた布が一杯に被さつてゐた。さうして其布は此間迄余の家に預かつてゐた娘の子を嫁づける時に新調して遣つた布團の表と同じものであつた。此卓を前にして坐つた先生は、襟も襟飾も着けてはゐない。千筋の縮みの襯衣を着た上に、玉子色の薄い背廣を一枚無造作に引掛けた丈である。始めから儀式ばらぬ様にとの注意ではあつたが、あまり失禮に當つてはと思つて、余は白い襯衣と白い襟と紺の着物を着てゐた。君が正装をしてゐるのに私はこんな服でと先生が最前云はれた時、正装の二字に痛み入る計であつたが、成程洗ひ立ての白いものが手と首に着いてゐるのが正装なら、余の方が先生

よりも餘程正裝であつた。

余は先生に一人で淋しくはありませんかと聞いたら、先生は少しも淋しくはないと答へられた。西洋へ歸りたくはありませんかと尋ねたら、夫程西洋が好いとも思はない、然し日本には演奏會と芝居と圖書館がないのが困る、それ丈は不便だと云はれた。一年位暇を貰つて遊んで來ては何うですと促して見たら、そりや無論遣つて貰へる、けれども夫は好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ないと云はれた。

先生は斯ういふ風に、夫程故郷を慕ふ樣子もなく、あながちに日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れ難い粗野な日本の空虚にして安つぽい、所謂新時代の世相が、周圍の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を中心に旋轉せしめねば已まぬ勢を得つゝ進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落ち付いた十八年を吾邦で過ごされた。先生の生活はそつと煤煙の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した樣なものである。雜鬧の中に己れを動かして如何にも靜かである。先生の踏む靴の底には敷石を噛む鋲の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて音なしく電車の傍を步るいてゐる。

先生は昔し烏を飼つて居られた。何處から來たか分らないのを餌を遣つて放し飼にしたのである。先生と烏とは妙な因縁に聞える。此二つを頭の中で結び付けると一種の氣持が起る。先生が大學の圖書館で書架の中からホーの全集を引き卸したのを見たのは昔の事である。先生はホーもホフマンも好きなのだと云ふ。時々其烏の事を思ひ出して、あの烏は何うなりましたと聞いたら、あれは死にました。凍えて死にまし

た。寒い晩に庭の木の枝に留まつたまんま、翌日になると死んでゐましたと答へられた。

烏の序に蝙蝠の話が出た。安倍君が蝙蝠は懐疑な鳥だと云ふから、何故と反問したら、でも薄暗がりにはた／＼飛んでゐるからと謎の様な答をした。余は蝙蝠の翼が好だと云つた。先生はあれは悪魔の羽だと云つた。成程畫にある悪魔は何時でも蝙蝠の羽根を背負つてゐる。

其時夕暮の窓際に近く日暮しが來て朗らかに鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。あの鳴聲にも以太利の連想があるでせうと余は先生に尋ねた。是は先生が少し前に蜩が淋しいと云つたので、青く澄んだ以太利の空を思ひ出させやしませんかと聞いたら、左様だと答へられたからである。然し日暮しの時には、先生は少し首を傾けて、いや彼は以太利ぢやない、何うも以太利では聞いた事がない様に思ふと云はれた。

余等は熱い都の中心に誤つて迷込んでゐたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした。夫から椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其果物のうちでも尤も香りの高い遠い國から來たものの露を搾つて、水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。けれども、飲料のうちで珈琲が一番旨いといふ先生の嗜好も聞いた。夫から靜かな夜の中に安倍君と二人で出た。

先生の顔が花やかな演奏會に見えなくなつてから、もう余程になる。先生はピヤノに手を觸れる事すら日本に來ては口外しない積であつたと云ふ。先生は夫程好い事を嫌ふのである。凡ての演奏會を謝絶した先生は、たゞ自分の部屋で自分の氣に向いたとき丈樂器の前に坐る、さうして自分の音樂を自分丈で聞いてゐる。其外にはたゞ書物を讀んでゐた。

文科大學へ行つて、此處で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の學生が九十人迄は、數ある日本の教授の名を口にする前に、まづフォン・ケーベルと答へるだらう。斯程に多くの學生から尊敬される先生は、日本の學生に對して終始渝らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲學の講義を續けてゐる。先生が疾くに索寞たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、實に此愛すべき學生あるが爲である。

京都の深田教授が先生の家にゐる頃、何時でも先生に晩餐を食べに來いと云はれてから、行かずに經過した月日を數へると、もう四年以上になる。漸く其約を果して安倍君と一所に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先もう何年位日本に居る積だらうと考へた。さうして一度日本を離れゝばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した "no more, never more." といふポーの句を思ひ出した。

四四、七、一六―一七

變な音

うと／＼したと思ふうちに眼が覺めた。すると、隣の室で妙な音がする。始めは何の音とも又何處から來るとも判然した見當が付かなかつたが、聞いてゐるうちに、段々耳の中へ纏まつた觀念が出來てきた。何でも山葵卸しで大根かなにかをごそごそ擦つてゐるに違ない。自分は確に左樣だと思つた。夫にしても今頃何の必要があつて、隣りの室で大根卸を拵えてゐるのだか想像が付かない。

いひ忘れたが此處は病院である。賄は遙か半町も離れた二階下の臺所に行かなければ一人もゐない。病室では炊事割烹は無論菓子さへ禁じられてゐる。況して時ならぬ今時分何しに大根卸を拵えやう。是は屹度別の音が大根卸の樣に自分に聞えるのに極つてゐると、すぐ心の裡で覺つたやうなものゝ、偖それなら果して何處から何うして出るのだらうと考へると矢ッ張分らない。

自分は分らないなりにして、もう少し意味のある事に自分の頭を使はうと試みた。けれども一度耳に付いた此不可思議な音は、それが續いて自分の鼓膜に訴へる限り、妙に神經に祟つて、何うしても忘れる譯に行かなかつた。あたりは森として靜かである。此棟に不自由な身を託した患者は申し合せた樣に默つてゐる。寐てゐるのか、考へてゐるのか話をするものは一人もない。廊下を歩く看護婦の上草履の音さへ聞えない。その中に此ごし／＼と物を擦り減らす樣な異な響丈が氣になつた。

自分の室はもと特等として二間つゞきに作られたのを病院の都合で一つ宛に分けたものだから、火鉢な

どの置いてある別室の方は、普通の壁が隣の境になつてゐるが、寝床の敷いてある六疊の方になると、東側に六尺の袋戸棚があつて、其傍が西洋館の廊下で直ぐ隣へ往來が出來るやうになつてゐる。此一筋の仕切をすらりと開けさへすれば、隣室で何を爲てゐるかは容易く分るけれども、他人に對して夫程の無禮を敢てする程大事な音でないのは無論である。折から暑さに向ふ時節であつたから縁側は常に明け放した儘であつた。縁側は固より端一杯に長く續いてゐる。けれども患者が縁側へ出て互に見透す不都合を避ける爲め、わざと二部屋毎に開き戸を設けて互の關とした。夫は腰の上へ細い棧を十文字に渡した洒落たもので、小使が毎朝拭掃除をするときには、下から鍵を持つて來て、一々此戸を開けて行くのが例になつてゐた。自分は立つて敷居の上に立つた。かの音は此板戸の裏から出る様である。戸の下は二寸程空いてゐたが其所には何も見えなかつた。

此音は其後もよく繰返された。ある時は五六分續いて自分の聽神經を刺激する事もあつたし、又ある時は其半にも至らないではたりと已んで仕舞ふ折もあつた。けれども其何であるかは、ついに知る機會なく過ぎた。病人は靜かな男であつたが、折々夜半に看護婦を小さい聲で起してゐた。看護婦が又感心な女で小さい聲で一度か二度呼ばれると快よい優しい「はい」と云ふ受け答へをして、すぐ起きた。さうして患者の爲に何かしてゐる様子であつた。

ある日回診の番が隣へ廻つてきたとき、何時もよりは大分手間が掛ると思つてゐると、やがて低い話し聲が聞え出した。それが二三人で持ち合つて中々捗取らないやうな濕り氣を帶びてゐた。やがて醫者の聲で、どうせ、さう急には御癒りにはなりますまいからと云つた言葉丈が判然聞えた。夫から二三日して、あの

患者の室にこそ／＼出入りする人の氣色が少しだが、孰れも己れの活動する立居を病人に遠慮する樣に、ひそやかに振舞つてゐたと思つたら、病人自身も影の如く何時の間にか何處かへ行つて仕舞つた。さうして其後へはすぐ翌る日から新しい患者が入つて、入口の柱に白く名前を書いた黒塗の札が懸易へられた。例のごし／＼云ふ妙な音はとう／＼見極はめる事が出來ないうちに病人は退院して仕舞つたのである。其うち自分も退院した。さうして、彼の音に對する好奇の念は夫ぎり消えて仕舞つた。

三ヶ月許して自分は又同じ病院に入つた。室は前のと番號が一つ違ふ丈で、つまり其西隣であつた。壁一重隔てた昔の住居には誰が居るのだらうと思つて注意して見ると、終日かたりと云ふ音もしない。空いてゐたのである。もう一つ先が即ち例の異樣の音の出た所であるが、此處には今誰がゐるのだか分らなかつた。自分は其後受けた身體の變化のあまり劇しいのと、其劇しさが頭に映つて、此間からの過去の影に與へられた動搖が、絶えず現在に向つて波紋を傳へるのとで、山茶花の事などは頓と思ひ出す暇もなかつた。夫よりは寧ろ自分に近い運命を持つた在院の患者の經過が氣に掛つた。看護婦に一等の患者は何人ゐるのかと聞くと、三人丈だと答へた。重いのかと聞くと重さうですと云ふ。夫から一日二日して自分は其三人の病症を看護婦から確めた。一人は食道癌であつた。一人は胃癌であつた。殘る一人は胃潰瘍であつた。みんな長くは持たない人許ださうですと看護婦は彼等の運命を一纏めに豫言した。

自分は縁側に置いたベゴニアの小さな花を見暮らした。實は菊を買ふ筈の所を、植木屋が十六貫だと云ふので、五貫に負けろと値切つても相談にならなかつたので、歸りに、ぢや六貫やるから負けろと云つても矢つ張り負けなかつた、今年は水で菊が高いのだと説明した、ベゴニアを持つて來た人の話を思ひ出し

て、賑やかな通りの縁日の夜景を頭の中に描きなどして見た。

やがて食道癌の男が退院した。胃癌の人は死ぬのは諦めさへすれば何でもないと云つて美しく死んだ。其潰瘍の人は段々惡くなつた。夜半に眼を覺すと、時々東のはづれで、附添のものが氷を摧く音がした。其の音が已むと同時に病人は死んだ。自分は日記に書き込んだ。——「三人のうち二人死んで自分丈殘つたから、死んだ人に對して殘つてゐるのが氣の毒の様な氣がする。あの病人は嘔氣があつて、向ふの端から此方の果迄響くやうな聲を出して始終げえ〳〵吐いてゐたが、此二三日夫がぴたりと聞えなくなつたので、大分落ち付いて結構だと思つたら、實は疲勞の極聲を出す元氣を失つたのだと知れた。」

其後患者は入れ代り立ち代り出たり入つたりした。自分の病氣は日を積むに從つて次第に快方に向つた。仕舞には上草履を穿いて廣い廊下をあちこち散歩し始めた。其時不圖した事から、偶然ある附添の看護婦と口を利く様になつた。暖かい日の午過食後の運動がてら水仙の水を易へてやらうと思つて洗面所へ出て、水道の栓を捩つてゐると、其看護婦が受持の室の茶器を洗ひに來て、例の通り挨拶をしながら、しばらく自分の手にした朱泥の鉢と、其中に盛り上げられた様に膨れて見える珠根を眺めてゐたが、やがて其眼を自分の横顔に移して、此前御入院の時よりもうずつと御顔色が好くなりましたねと、三ヶ月前の自分と今の自分を比較した様な批評をした。

「此前つて、あの時分君も矢張り附添で此處に來てゐたのかい」

「えゝ、つい御隣でした。しばらく〇〇さんの所に居りましたが御存じはなかつたかも知れません」

〇〇さんと云ふと例の變な音をさせた方の東隣である。自分は看護婦を見て、これがあの時夜半に呼ば

れると、「はい」といふ優しい返事をして起き上つた女かと思ふと、少し驚かずにはゐられなかつた。けれども、其頃自分の神經をあい位刺激した音の原因に就ては別に聞く氣も起らなかつた。で、あゝ左樣かと云つたなり朱泥の鉢を拭いてゐた。すると女が突然少し改まつた調子で斯んな事を云つた。

「あの頃貴方の御室で時々變な音が致しましたが……」

自分は不意に逆襲を受けた人の樣に、看護婦を見た。看護婦は續けて云つた。

「毎朝六時頃になると屹度する樣に思ひましたが」

「うん、彼れか」と自分は思ひ出した樣につい大きな聲を出した。「あれはね、自働革砥の音だ。毎朝髭を剃るんでね、安全髪剃を革砥へ掛けて磨ぐのだよ。今でも遣つてる。嘘だと思ふなら來て御覧」

看護婦はたゞへえゝと云つた。段々聞いて見ると、○○さんと云ふ患者は、ひどく其革砥の音を氣にして、あれは何の音だ何の音だと看護婦に質問したのださうである。看護婦が何うも分らないと答へると、隣の人は大分快いので朝起きるすぐと、運動をする、其器械の音なんぢやないか羨ましいなと何遍も繰り返したと云ふ話である。

「夫や好いが御前の方の音は何だい」

「御前の方の音つて？」

「そら能く大根を卸す樣な妙な音がしたぢやないか」

「えゝ彼れですか。あれは胡瓜を擦たんです。患者さんが足が熱つて仕方がない、胡瓜の汁で冷して呉れと仰しやるもんですから私が始終擦つて上げました」

「ぢや矢張大根卸の音なんだね」

「えゝ」

「さうかい、それで漸く分つた。──一体あすこの人の病気は何だい」

「直腸癌です」

「おや到底六づかしいんだね」

「えゝもう疾うに。此所の病院を出ると直でした、御亡くなりになつたのは」

自分は黙然として心の中に、胡瓜の音で他を焦らして死んだ男と、革砥の音を羨ましがらせて快くなつた人との相違を思ひ比べた。

四三、七、一九──二一

手紙

一

モーパツサンの書いた「二十五日間」と題する小品には、ある温泉場の宿屋へ落ち付いて、着物や白襯衣を衣裳棚へ仕舞はうとするときに、其の抽出を開けて見たら、中から巻いた紙が出たので、何気なく引き延ばして讀むと「私の二十五日」といふ標題が眼に觸れたといふ冒頭が置いてあつて、其次に此無名氏の所謂二十五日間が一字も變へぬ元の姿で轉載された體になつてゐる。

プレヴオーの「不在」といふ端物の書出しには、巴里のある雜誌に寄稿の安受合をしたため、獨逸のある避暑地へ下りて、其處の宿屋の机か何かの上で、しきりに構想に惱みながら、何か種はないかといふ氣に、机の抽出を一々開けて見ると、最終の底から思ひがけなく手紙が出て來たとあつて、是にも其手紙がそつくり其儘出してある。

二つとも能く似た趣向なので、或は新しい方が古い人の遣つた迹を踏襲したのではなからうかといふ疑ひさへ挾さめる位だが、夫は自分には何うでも宜しい。たゞ自分もつい近頃、是と同樣の經驗をした事がある。その所爲か今迄は成程小説家であつて旨く拵へるなと許り感心してゐたのが、それ以後暫時の間は世の中には隨分似た事が澤山あるものだといふ氣になつて、寧ろ偶然の重複に咏嘆する樣な心持が幾分かあるの

で、つい二人の作をこゝに並べて書きたくなつたのである。
尤もモーパッサンのは標題の示す如く、逗留二十五日間の印象記とも云ふ種類に属すべきもので、プレボーのは滞在中の女客に宛てた艶めかしい男の文だから、双方とも無名氏の文字それ自身が興味の眼目である。自分の經驗も矢張不圖した場所で意外な手紙の發見をしたと云ふ事にはなるが、それが導火線になつて、思ひがけなく或實際上の效果を收め得たのであるから、手紙其物には夫程興味がない。少くとも、小説的な情調の下に、それを讀み得なかつた自分には左ういふ興味はなかつた。其處が前に擧げた佛蘭西の二作家と違ふ所で、其處が又彼等よりも散文的な自分をして、彼等の例にならつて、其手紙を此話の中心として、一字残らず寫さしめなかつた原因になる。
手紙は紛ひもなく宿屋で發見されたのである。場所も場合も殆んど佛蘭西の作家の筆にした所と殆んど變りはない。けれども何うしてとか何んな手紙をとか云ふ問に答へるためには、それを發見した當時から約一週間程前に遡はつて説明する必要がある。
愈K市へ立つといふ前の晩に成て、妻が丁度好い序だから、歸りに重吉さんの所へ寄つて入らつしやい、さうして重吉さんに會つて、あの事をもつと判然極めて入らつしやい。何だか紙鳶が木の枝へ引懸つてゐながら、途中で揚がつてる樣な氣がして不可ませんからといつた。重吉の事は自分も同感であつた。夫にしても妻によく斯んな氣の利いた言葉が使へると思つて、御前誰かに教はつたのかいと、何も答へない先に、まづ冗談半分に疑ひを仄めかして見た。すると妻は存外眞面目切つた顏付で、何をですと問ひ返した。開き直つたといふ程でもないが、此方の意味が通じなかつた事丈は慥な樣に見えたから、自分は紙

爲の話は夫切にして、直接重吉の事を談合した。

重吉といふのは自分の身内とも厄介者とも片の付かない一種の青年であつた。一時は自分の家に寐泊をして迄學校へ通つた位關係は深いのであるが、大學へ這入つて以來下宿をしたぎり、四年の課程を終るまで、とう／＼家へは歸らなかつた。尤も別に疎遠になつたと云ふ譯ではない、日曜や土曜もしくは平日でさへ氣に向いた時は遣つて來て長く遊んで行つた。元來が應揚な性質で、素直に男らしく打ち寛ろいでゐる樣に見えるのが、持つて生れた此人の得であつた。それで自分も妻も甚だ重吉を好いてゐた。重吉の方でも自分等を叔父さん叔母さんと呼んでゐた。

二

重吉は學校を出た許である。さうして出るや否やすぐ田舍へ行つて仕舞つた。何故そんな所へ行くのかと聞いたら別に大した意味もないが、唯口を頼んで置いた先輩が、行つたら何うだと勸めるから其氣になつたのだと答へた。それにしてもＨはあんまりぢやないか、責めて大阪とか名古屋とかなら地方でも仕方がないけれどもと、自分は當人が既に極めたといふにも拘らず一應彼のＨ行に反對して見た。其時重吉はたゞにや／＼笑つてゐた。さうして今急にあすこに缺員が出來て困てると云ふから、當分の約束で行くのです、直又歸つて來ますと、恰も未來が自分の勝手になる樣な物の云ひ方をした。自分は其場で重吉の「又歸つて來ます」を「歸つて來る積です」に訂正して遣りたかつたけれども左う思ひ込でゐるもの丶心を、無益にざわ付かせる必要もないから夫なりにして置いて、ぢやあの事は何うする積だと尋ねた。

「あの事」は今迄の行き掛りから、重吉の立つ前に是非片附けて置かなければならない問題だつたからである。すると重吉は別に氣に掛ける樣子もなく、萬事皆が勝手に計はされるなら宜敷願ひますと云ふ、それの、平氣であつた。自分に對して無闇な反感を示さないのは意外の事であつたが、たにしても此の年齢と、此問題の性質から一般的に見た處で、重吉の態度はあまり冷淡過ぎて、全然未練の興味しか有たないといふ風に思はれた。自分は少し不審を抱いた。

元來自分と妻と重吉の間にたゞ「あの事」として一種の符牒の樣に通用してゐるのは、實を云ふと、彼の縁談に關する件であつた。半年ばかり前から話が續いてゐるので、自分達夫婦には單なる「あの事」で一切の經過が明かに頭に浮ぶ所から、別段改まつて相手の名前などは口へ出さないで濟ます事が多かつたのである。

女は妻の遠縁に當るもので、次女であつた。其關係で時々自分の家に出入る所から自然重吉とも知合になつて、會へば互に挨拶する位の交際が成立した。けれども二人の關係は其以上に接近の機會も有たなく、常に同じ程度で進行するのみに見えた。さうして二人共に其以上に何物をも求むる氣色がなかつた。要するに二人の間は、年長者の監督の下に立つてゐるが爲と、また修業中の身分を自覺するある青年とが一種の社會的な事情から、互に顏を見合せて、禮儀に反らない丈の應對をするに過ぎなかつた。

だから自分は驚いたのである。重吉が臆らず、遁らず、常より少しも違はない平面な調子で、あの人を妻に貰ひたい、話して呉れませんかと云つた時には、自分は本當かと實際聞き返した位であつた。自分はすぐ重吉の擧止動作が不斷に大抵は眞面目である如く、此の問題に對しても亦眞面目であるのを發見した。さうして

過渡期の日本の社會道德に背いて、私の歩を相互に進める事なしに、意志の重みを初から監督者たる父母に寄せ掛けた彼の行ひ振りを快よく感じた。其處で彼の依頼を引き受けた。

早速妻を遣つて先方へ話をさせて見ると、妻は女の母の挨拶だといつて、妙な返事を齎した。金はなくつても構はないから道樂をしない保證の付いた人でなければ遣らないと云ふのである。さうして何故そんな注文を出すかの、理由が説明として其返事に伴つてゐた。

女には一人の姉があつて、其姉は二三年前に或る資産家の所へ嫁に行つた。今でも行つてゐる。世間並の夫婦として別に他の注意を惹く程の波瀾もなく、まつ平穏に納まつてゐるから、人目には夫で差支ない樣に見えるけれども、姉娘の父母は此二三年の間に、苦々しい思ひを斷えず陰で嘗めさせられたのである。其凡ては嫁に片付いた先の夫の不身持から起つたのだと云へば夫迄であるが、父母だつて、娘の亭主を、業務上必要の交際から追ひ出して迄、娘の權利と幸福を庇護しやうと試みる程聞譯けない人達ではなかつた。

三

實を云ふと、父母は始めから夫を承知の上で娘を嫁にやつたのである。それのみか、腕利の者を最も敏活に働かすといふ意味に解釋した酒と女は、仕事の上に缺くべからざる交際社會の必要條件と迄認めてゐた。夫だのに彼等はやがて眉を顰めなければならなくなつて來た。かねて丈夫であつた娘の健康が、嫁に入つて暫くすると、眼に付くやうに衰へ出したときに、彼等はもう悄然に胸を傷めた。娘に會ふたびに母は

親は何處か惡くはないかと聞いた。娘はたゞ赧然して、別段何ともないと許答へてゐた。けれども其血色は次第に惡くなる丈であつた。さうして仕舞にはとう／＼胃病だといふ事が分つた。しかも其病氣があまり質の好いものでないといふ事が分つた。精よく探究すると、父母にも云ひ難い夫の病が何時の間にか妻に感染したのだと云ふ事迄分つた。父母の觀念は道徳上の音色を帶びて、好惡の意味で、娘の夫に反射する樣になつたのは此時からである。彼等は氣の毒な長女を見るにつけて、是から嫁に遣る次女の夫として、姉のそれと同型の道樂ものを想像するに堪へなくなつた。それで金はなくても構はないから、何うしても道樂をしない保險付の堅い人に貰つてもらはうと、夫婦の間に相談が纏まつたのである。

自分の妻は先方から聞いて來た通りを斯ういふ風に詳しく繰返して自分に話した後、重吉さんなら間違ひはなからうと思ふんですが、何うでせうと云つた。自分は只左樣さと答へた儘、壁の上を見詰めてゐた。すると妻は稍疑ぐつたやうな調子で、重吉さんでも道樂をするんでせうかと聞いた。

「まあ大丈夫だらうよ」

「まあぢや困るわ。本當に大丈夫でなくつちや。だつて若しか、噓でも吐いたら、私濟まないんですもの。私許ぢやない、貴方だつて責任が御有りぢやありませんか」

斯う云はれて見ると成程先方へ好加減な返事をするのも如何なものである。と云つて、あの重吉が遊ぶとは、何うしても考へられない。無論彼の樣子には稍々汚いとか無骨過ぎるとか、凡て粹の裏へ廻るものは一つもなかつた。けれども全面が平たく尋常に出來上つてゐる所爲か、何處と指して、此處が道樂臭いといふ點も亦丸で見當らなかつた。自分は妻と色々話した末、斯う云つた。

「まあ大抵宜からうぢやないか。道樂の方は受け合ひますと云つといでよ」
「道樂の方つて――爲ない方をでせう」
「當り前さ。爲る方を受け合つちや大變だ」
妻は又先方へ行つて、決して道樂をする樣な男ぢや御座いませんと受合つた。話は夫から發展し始めたのである。重吉が地方へ行くと云ひ出した時には、夫がすつと進行して、もう十の九迄は纏まつてゐた。自分は重吉のHへ立つ前に、わざ〳〵先方へ出掛けて行つて、父母の同意を求めた上で重吉を立たせた。
重吉とお靜さんとの關係は其處迄行つて、ぴたりと停つたなり今日に至つてまだ動かずにゐる。尤も自分は夫程氣にも掛からない、今に何方からか動き出すだらう、萬事は其時の事と覺悟を極めてゐたが、妻は女丈に心配して、此間も長い手紙を重吉に遣つて、一體あの事は何うなさる積ですかと尋ねたら、重吉は萬事宜敷願ひますと例の通りの返事を寄こした。其前聞き合はせた時には、私はまだ道樂を始めませんから、大丈夫ですといふ端書が來た。妻は其端書を自分の所へ持つて來て、重吉さんも隨分呑氣ね、まだ始めませんつて、今に始められた日にや、大丈夫でも何でもないぢやありませんか、冗談ぢやあるまいし、と少し怒つた樣な語氣を洩らした。自分にも重吉の用ひた此まだと云ふ字が如何にも可笑しく思はれた。妻に、當人本氣なのかなと云つた位である。
妻が評した如く、斯う云ふ風に、いつ迄も、紙鳶が木の枝に引掛つて中途から揚がつてゐる樣な狀態で推して行かれては、間へ這入つた自分達の責任としても、仕舞には放つて置かれなくなるのは明らかだから、今度の旅行を幸ひ、歸りにHへ寄つて、所謂「あの事」をもつと判然片付けて來たら好からうと云ふ妻の

意見に從ふ事に極めて宅を出た。

四

汽車中では重吉の地方生活を色々に想像する暇もあつたが、目的地へ下りるや否や、すぐ當用の爲に忙殺されて、「あの事」抔は殆んど考へもしなかつた。やう／＼四五日掛つて、一段落が付いた時、自分は又汽車に搖られながら、まだ見ないHの町や、其町の中にある重吉の下宿してゐる旅舘などを、頭の奥に漂よふ畫の樣に眺めた。固より物數奇のさせる業だから、煙草の煙に紛て、取留る事の出來ないうちに、また煙草の烟に似た淡い愉快であつた。とかくする内に汽車はとう／＼Hへ着いた。

自分はすぐ俥を雇つて、重吉のゐる宿屋の玄關へ乘付けた。番頭に此處に佐野といふ人が下宿してゐる筈だがと聞くと番頭は御辭儀を二つばかりして、佐野さんは先達て迄御出になりましたが、つい此間御引移りになりましたと云ふ。怪しからん事だと思ひながらも、猶引越先の模樣を尋ねて見ると、到底自分などの行つて、一晩でも二晩でも厄介になれさうな所ではないらしい。一層此處へ泊る方が樂だらうと思つて、ぢや空いた部屋へ案内して呉れと云ふと、番頭は又御辭儀を一つして、誠に御氣の毒樣で御座いますが、招魂祭で何の室も塞がつて居りますのでと叮嚀に斷つた。自分は傘を突いた儘、しばらく玄關の前に立つてゐたが、正式に云ふと、あらかじめ重吉に通知をした上、猶H着の時間も電報で云つて遣べきであるが、可成御互の面倒を省いて簡略に事を濟すのが當世だと思つて、わざと前觸なしに重吉を襲つたのであるが、愈來て見ると、自分の遣口はたゞの不注意から、出る不都合な結果を、自分の上に投げ掛たと同

じ事になつて仕舞つた。

自分はHにどんな宿屋が何軒あるか丸で知らなかつたが、此旅館が其内で一番善いのだと云ふ事丈は、かねて受取つた重吉の手紙によつて心得てゐた。成程奥を覗いて見ると、廊下が折れ曲つたり、中庭の先に新しい棟が見えたりして、さも廣さうで且物綺麗であつた。自分は番頭に何處か都合が出來るだらうと云つた。番頭は當惑した樣な顏をして、暫く考へてゐたが、甚だ見苦しい所で、一夜泊りの御客樣には御氣の毒で御座いますが、佐野さんの入らしつた御座敷なら、何うか致しませうと答へた。其口振から察すると、何でも餘程きたない所らしいので、又少し躊躇し掛けたが、もとより此地へ來て體裁を顧みる必要もない身だから、一晩や二晩に何んな室で明かしたつて構はないと云ふ氣になつて、此間迄重吉のゐたと云ふ其部屋へ案内して貰つた。

室は第一の廊下を右へ折れて、其處の緣側から庭下駄を穿いて、一足二足飛石の上を渡らなければ這入れない代りに何處とも續いてゐない所が、丸で一軒立の觀を與へた。たゞ天井の低いのや柱の細いのが、さも茶がかつた空氣を作ると共に、如何にも濕ぽい陰氣な感じがした。さうして疊と云はず襖と云はず甚だしく古びてゐた。向の藤棚の陰に見える少し出張つた新築の中二階杯と較べると、丸で比較にならない程趣が違つてゐた。

「斯んな所に這入つてゐたのか」と思ひながら、自分は茶を呑んで暫く座敷を見廻して居たが、やがて硯を借りて、重吉の所へやる手紙を書いた。たゞ簡單にK市へ用があつて來た序に此處へ寄つたから、すぐ來いといふ丈に留めた。夫から湯に入つて出ると、もう食事の時間になつた。自分は成るべく重吉と一

所に陣取らうと思つて、煙草を何本も吹かしながら、彼の來るのを待つてゐるうちに、向ふの中二階に電氣燈が點いて、賑やかな人聲が聞え出した。自分はもう〳〵待ち切れず一人膳に向つた。給仕に出た女が、招魂社で何か催物が在るとか、町では色々な催しがあるとか、此所からも今晩は芝居座から御呼ばれなすつたんでせうとか云ふ樣な噂をきかせながら、茶碗を一つ二つ盛つた。下女が重吉君を大人しい好い方だと云つた。女に惚れられるかいと聞いたら、えゝ〳〵と笑つてゐた。道樂をするだらうと聞いたら、下を向いて小さな聲をしていゝえと答へた。

五

食事が濟んで下女が膳を下げたのは、もう九時近くであつた。其でも重吉はまだ顏を見せなかつた。自分はひとりで縁側へ座蒲團を運んで、手摺に凭れながら向座敷の明るい電氣燈や淡い田畑の黒い影を遙かに眺めて、空氣の中から遠く竄つて詰らない心持を詰らないなりに引摺る樣な態度で、煙草許り吹かしてゐた。そこへ先刻の下女が襖を開けて、漸と入らつしやいましたと案内をした。其後から重吉が赤い顏をして入つて來た。自分は重吉の赤い顏を此時始めて見た。けれども席に着いて挨拶をする彼の樣子と云ひ、言葉數と云ひ、挨拶の調子と云ひ、凡てが平生の重吉其儘であつた。自分は彼の言語動作のいづれの點にも、酒氣に煽られて動くのだと評して然るべき際立つた何物をも認めなかつたので、異常な彼の顏色に就いては、別に云ふ所もなく濟ましてた。少時して彼は茶器を代へに來た下女の名を呼んで、洋盃に水を一杯呉れと頼んだ。さうして自分の方を見ながら、何うも咽喉が渇いてと間接な辯解をした。

「大分飲んだんだね」
「えゝ御祭りで、少し飲まされました」
赤い顏の事は簡單に是で濟んで仕舞つた。夫れから何處を何う話が通つたか覺えてゐないが、三十分許經つうちに、自分も重吉も何時の間にか、所謂「あの事」の圏内で受け答へをする樣になつた。
「一體何うする氣なんだい」
「何うする氣だつて、――無論貰ひたいんですがね」
「眞劍の所を白狀しなくつちや不可ないよ。好加減な事を云つて引張る位なら、一層きつぱり今のうちに斷る方が得策だから」
「今更斷るなんて、僕は御免だなあ。實際叔父さん、僕はあの人が好きなんだから」
重吉の樣子に何處と云つて噓らしい所は見えなかつた。
「ぢや、もつと早くどし〳〵片付けるが好いぢやないか、何時迄立つても愚圖々々で、傍から見ると、如何にも煮え切らないよ」
重吉は小さな聲で左樣かなと云つて、しばらく休んでゐたが、やがて元の調子に戻つて、斯う聞いた。
「だつて貰つてこんな田舍へ連れてくるんですか」
自分は田舍でも何でも構はない筈だと答へた。重吉は先方が夫を承知なのかと聞き返した。自分は其時一寸困つた。實はそんな細かな事迄先方の意見を確めた上で、談判に來た譯ではなかつたからである。けれども行き掛り上已を得ないので、

「さう話したら、承知するだらうかおそくないか」と勢ひよく云つて退けた。

すると、重吉は當面の問題の方向を變へて、田中の經濟事情が、到底家族を物質的に救へる程の餘裕を有つてゐないから、しばらくの間獨りで辛抱する積でゐたのだといふ話をした上、最初の約束によれば此年の暮には月給が上がつて東京へ歸れる筈だから、其時彼處へ歸れたなら、どんな小さい家でも構へて、お靜さんを迎へる考へだと話した。もし事が約束通りに運ばない爲、月給も上らず、東京へも歸れなかつた曉には、其時こそ、先方さへ異存がなければ、自分の云つた樣にする氣だから、何分宜しく頼むといふ事も附け加へた。自分は一應尤もだと思つた。

「さうか。お前の腹が極まつてゐるなら、夫でいゝ。叔母さんも安心するだらう。御靜さんの方へも、よくさう話して置かう」

「え、何うぞ――。然し僕の腹は大抵貴方がたには分つてる筈ですがねえ」

「そんなら、あんな返事を寄こさないが好いよ。たゞ宜敷願ひます丈だから何だか一向分らないぢやないか。さうして、あの端書は何だい。私はまだ道樂を始めませんから、大丈夫ですつて。本氣だか冗談だか丸で見當が付かない」

「どうも濟みません。――然し全く本氣なんです」と云ひながら、重吉は苦笑して頭を搔いた。

「あの事」は夫で切り上げて、あとは纏まらない四方山の話に夜を更かした。折角だから二三日逗留して緩くりして入らつしやいと勸めて呉れるのを斷つて、矢張翌日立つ事にしたので、重吉はそんなら御疲れでせう、早く御休みなさいと挨拶して歸つて行つた。

六

翌朝顔を洗つて室へ歸ると、棚の上の鏡臺は麗々と障子の前に据ゑ直してある。自分は何氣なく其前に坐ると共に鏡の下の櫛を取り上げた。さうして其櫛を拭く積で何かで、鏡臺の抽出を力任せに開けて見た。すると淺い桐の底に、奥の方で、何か引掛る樣に手應がしたのが、急に輕くなつて、する〳〵と、拔けて來た途端に、捲き納めて捩れたやうな手紙の端が筋違に見えた。自分は引手繰るやうに其手紙を取つて、直五六寸破いて櫛を拭かうとして見ると、細かい女の字で白紙の闇を辿るといつたやうに、細長くひよろ〳〵と何か書いてあるのに氣が付いた。自分は一寸一二行讀んで見る氣になつた。然し此ひよろ〳〵した文字が言文一致で綴られてゐるのを發見した時、自分の好奇心は最初の一二行では滿足する事が出來ず、なつた。自分は知らず〳〵、先に裂き破つた五六寸を一息に讀み盡した。さうして裂き殘しの分へ迄もどんどん進んで行つた。斯う進んで行くうちにも、自分は絶えず微笑を禁じ得なかつた。實をいふと手紙はある女から男に宛た艶書なのである。

艶書だけに一方から云ふと甚だ陳腐には相違ないが、それが又形式の極らない言文一致で勝手に書き流してあるので、隨分奇拔だと思ふ文句がひよい〳〵と出て來た。ことに字違ひや假名違が眼に付いた。夫から感情の現はし方が如何にも露骨でありながら一種の型に入つてゐるといふ意味で誠が却て出てゐない樣にも見えた。最も恐るべく下手な戀の都々一なども遠慮なく引用してあつた。凡てを綜合して、書き手の黑人である事が、誰の眼にも何より先にまづ映る手紙であつた。どうせ無關係な第三者が他の艶書の偸

み讀をするときに滑稽の興味が加はらない筈はない譯であるが、書き手が節操上の徳義を負擔しないで濟む黒人の樣な場合には、此興味が他の嚴肅な社會的觀念に妨げられる憂がないだけ、讀み手は甚だ氣樂なものである。

さう云ふ譯で、自分は多大の興味を以て此長い手紙をくす／＼笑ひながら讀んだ。さうして讀みながら、こんなに女から惚れてゐる色男は、一體何者だらうかといふ好奇心と、最後の一行を讀み盡して、名宛の名が自分の眼の前に現れる迄引摺つて行かれた。所が此好奇心が遺憾なく滿足さるべき畫龍點睛の名前迄愈讀み進んだ時、自分は突然驚いた。名宛には重吉の姓と名が判然書いてあつた。

自分は少しの間ぼんやり膳の上を見てゐた。夫から手に持つた手紙をくる／＼と卷いて浴衣の懷へ入れた。さうして鏡の前で髮を分けた。時計を見ると、まだ七時である。然し自分は十時何分かの汽車で立つ筈になつてゐた。手を敲いて下女を呼んで、すぐ重吉を車で迎へに遣るやうに命じた。其間に飯を食ふ事にした。

何だか可笑しいといふ氣分も幾分か混つてゐた。けれども總體に「あの野郎」といふ心持の方が勝つてゐた。其あの野郎として重吉を眺めると、宿を易へて何時迄も知らせなかつたり、散々人を待たせて、氣の毒さうな顏もしなかつたり、漸と這入つて來たかと思ふと、一面アルコールに彩どられてゐたり、凡て不都合だらけである。が、平生何の角度に見ても尋常一式な彼男が、何時の間に女から手紙などを貰つて濟まし返つてゐるのだらうと考へると、當り前過ぎる不斷の重吉と、色男として別に通用する特製の重吉との矛盾が頗る滑稽に見えた。從つて自分は何方の感じで重吉に對して好いか分らなかつた。けれども何

方かに極めて、これを根本調として會見しなければならないと云ふ事に氣が付いた。自分は食後の茶を飲んで楊枝を使ひながら、此處へ重吉が來たらどう取扱つたものだらうと考へた

七

其處へ宿から迎へに遣つた車に乘つて、彼はすぐ駈け付けて來た。彼に對する態度をまだ能く定めてゐない自分には、彼の來かたが寧ろ早過ぎる位、現れやうが今度は迅速であつた。彼は簡單に、早いぢやありませんか、今朝起きたら直上る積でゐた所を御迎へで――と云つた儘、其處へ坐つて、自分の顏を正視した。此時傍から二人の樣子を虛心に觀察したら、重吉の方が自分より遙に無邪氣に見えたに違ない。自分は默つてゐた。彼は白足袋に角帶で單衣の下から鼠色の羽二重を掛けた襦袢の襟を出してゐた。

「今日は大分洒落てるぢやないか」

「昨夕も此服裝ですよ。夜だから分らなかつたんでせう」

自分は又默つた。それから又斯んな會話を二三度取り換はしたが、何時でも其間に妙な穴が出來た。自分は此穴を故意に拵へてゐる樣な感じがした。けれども重吉にはそんな蟠まりがないから、いくら口數を減らしても其態度が、自から天然であつた。仕舞に自分は眞面目になつて、斯う云つた。

「實は昨夕もあんなに話した、あの事だがね。何うだ、一層の事きつぱり斷つて仕舞つちや」

重吉はちよつと腑に落ちないといふ顏付をしたが、それでも何時もの樣なおつとりした調子で、何故ですかと聞き返した。

「何故つて、君の樣な道樂ものは向の夫になる資格がないからさ」

今度は重吉が默つた。自分は重ねて云つた。

「己はちやんと知つてるよ。お前の遣る事は天下に隱れもない事實だ」

斯う云つた自分は、急に自分の言葉が可笑しくなつた。けれども重吉が苦笑ひさへせずに控へてゐて呉れたので、此方も眞面目に進行する事が出來た。

「元來男らしくないぜ。人を胡麻化して自分の得ばかり考へてるなんて。丸で詐欺だ」

「だつて叔父さん、僕は病氣なんかに、まだ罹りやしませんよ」と重吉が割り込む樣に辯解したので、自分は又可笑しくなつた。

「そんな事が他に分るもんか」

「いゝえ、全くです」

「兎に角遊ぶのが既に條件違反だ。御前はとても御靜さんを貰ふ譯に行かないよ」

「困るなあ」

重吉は本當に困つた樣な顏をして、色々泣き付いた。自分は頑として破談を主張したが、最後に、それならば、彼が女を迎へる迄の間、謹愼と後悔を表する證據として、月々俸給のうちから十圓宛自分の手本へ送つて、それを結婚費用の一端とするなら、此事件は内濟にして勘辨してやらうと云ひ出した。重吉は十圓を五圓に負けてくれと云つたが、自分は聞き入れないで、とう〳〵此方の云ひ條通り十圓づゝ送らせる事に取り極めた。

間もなく時間が來たので、自分は早速起つて着物を着換た。さうして俥を命じて停車場へ急がした。重吉は無論付いて來た。けれども鞄膝掛其他一切の手荷物は旣に宿屋の番頭が始末をして、ちやんと列車内に運び込んであつたので、彼はたゞ手持無沙汰にプラットフォームの上に立つて居た。自分は窓から首を出して、重吉の羽二重の襟と角帯と白足袋を、得意氣に眺めてゐた。愈發車の時刻になつて、車の輪が廻り始めたと思ふ際どい瞬間をわざと見計つて、自分は隱袋の中から今朝讀んだ手紙を出して、おい御土産を遣らうと云ひながら、出來る丈長く手を重吉の方に伸した。重吉がそれを受取る時分には、汽車がもう動き出してゐた。自分は夫限首を列車内に引込めたまゝ、停車場を外れる迄決してプラットフォームを見返らなかつた。

宅へ歸つても、手紙の事は妻には話さなかつた。旅行後一ケ月目に重吉から十圓届いた時、妻はあら感心ねと云つた。二ケ月目に十圓届いた時には、全く感心だわと云つた。三ケ月目には七圓しか來なかつた。すると妻は重吉さんも苦しいんでせうと云つた。自分から見ると、重吉の御靜さんに對する敬意は、此過去三ケ月間に於て、旣に三圓がた缺乏してゐると云はなければならない。將來の敬意に至つては無論疑問である。

四四、七、二五——三一

三山居士

二月二十八日には生暖たかい風が朝から吹いた。其風が土の上を渡る時、地面は一度に濡れ盡くした。外を歩くと自分の踏む足の下から、熱に冒された病人の呼息の樣なものが、下駄の齒に蹴返される度に、行く人の眼鼻口を惱ますべく、風の爲に吹き上げられる氣色に見えた。家へ歸つて護謨合羽を脫ぐと、肩當の裏側が何時の間にか濡れて、電燈の光に露の樣な光を投げ返した。不思議だから又羽織を脫ぐと、同じ場所が大きく二ヶ所程汗で染め拔かれてゐた。余は其下に綿入を重ねた上、フラネルの襦袢と毛織の襯衣を着てゐたのだから、いくら不愉快な日でも、肌に煮染んだ汗が此所迄浸み出さうとは思へなかつた。試ろみに綿入の背中を撫で廻して見ると、果して何處も濕つてゐなかつた。余は何うして一番上に着た護謨合羽と、羽織丈が、是程烈しく濡れたのだらうかと考へて、私かに不審を抱いた。

池邊君の容體が突然變つたのは、其日の十時半頃からで、一時は注射の利目が見える位落ち付いたのださうである。夫が午過になつて又段々險惡に陷つた揚句、とう／＼絕望の狀態迄進んで來た時は、余が毎日の日課として筆を執りつゝある「彼岸過迄」を漸く書き上げたと同じ刻限である。池邊君が胸部に末期の苦痛を感じて膏汗を流しながら藻搔いてゐる間、余は池邊君に對して何等の顧慮も心配も拂ふ事が出來なかつたのは、君の朋友として、朋友にあるまじき無頓着な心持を抱いてゐたと云ふ點に於て、如何にも殘念な氣がする。余が修善寺で生死の間に迷ふ程の心細い病み方をして居た時、池邊君は例の通りの長

大な軀幹を東京から運んで來て、余の枕邊に坐つた。さうして苦い顔をしながら、醫者に騙されて來て見たと云つた。醫者に騙されたといふ彼は、固より余を騙す積で斯ういふ言葉を發したのである。彼の死ぬ時には、斯いふ言葉を考へる餘地すら余に與へられなかつた。枕邊に坐つて目禮をする一分時さへ許されなかつた。余はたゞ其晩の夜半に彼の死顔を一目見た丈である。

　其夜は吹荒さむ生温い風の中に、夜着の數を減して、常よりは早く床に就たが、容易に寢つかれない晩であつた。締りをなした門を搖り動かして、使ひのものが、余を驚かすべく池邊君の訃をもたらしたのは十一時過であつた。余はすぐに白い毛布の中から出て服を改めた。車に乘るとき曇よりした不愉快な空を仰いで、風の吹く中へ車夫を驅けさした。路は齒の廻らない程泥濘つてゐるので、車夫のはあ〳〵いふ息遣が、風に攫はれて行く途中で、折々余の耳を掠めた。不斷なら月の差すべき夜と見えて、空を蔽ふ氣味の惡い灰色の雲が、明らさまに東から西へ大きな幅の廣い帶を二筋許り渡してゐた。其間が白く曇つて左右の鼠を却て浮き出す樣に彩つた具合が殊更に凄かつた。余が池邊邸に着く迄空の雲は死んだ樣に凡て動かなかつた。

　二階へ上つて、姑く社のものと話した後、余は口の利けない池邊君に最後の挨拶をする爲に、階下の室へ下て行つた。其處には一人の僧が經を讀んでゐた。女が三四人次の間に默つて控へて居た。遺骸は白い布で包んで其上に池邊君の平生着たらしい黒紋付が掛けてあつた。顔も白い晒しで隱してあつた。余が枕邊近く寄つて、其晒しを取り除けた時、僧は讀經の聲をぴたりと止めた。夜半の灯に透かして見た池邊君の顔は、常と何の變る事もなかつた。刈り込んだ髭に交る白髪が、忘る可からざる彼の特徴の如くに余の

眼に射た。たゞ血の気のない顔頬の蒼ざめた色が、冷たさうな無常の感じを余の胸に刻んだ丈である。

余が最後に生きた池邊君を見たのは、其母堂の葬儀の日であつた。柩の門を出やうとする間際に駈け付けた余が、門側に佇んで、葬列の通過を待つべく余儀なくされた時、余と池邊君とは端なく目礼を取り換はしたのである。其時池邊君が帽を被らずに、草履の儘質素な服装をして柩の後に續いた姿を今見る様に覺えてゐる。余は生きた池邊君の最後の記憶として其姿を永久に深く頭の奥に仕舞つて置かなければならない、なつたかと思ふと、其時言葉を交はさなかつたのが、甚だ残惜しく思はれてならない。池邊君は其時から既に顔色が大変悪かつた。けれども其時なら口を利く事が出来たのである。

——四五、三、二——

初秋の一日

汽車の窓から怪しい空を覗いてゐると降り出して來た。それが細かい糠雨なので、雨としてよりは寧ろ草木を濡らす淋しい色として自分の眼に映つた。三人は此の頃の天氣を恐れてみんな護謨合羽を用意してゐた。けれども夫がいざ役に立つとなると決して嬉しい顏はしなかつた。彼等は其の日の佗びしさから推して、二日後に來る暗い夜の景色を想像したのである。

「十三日に降つたら大變だなあ」とＯが獨言のやうに云つた。

「天氣の時より病人が增えるだらう」と自分も氣のなさゝうに返事をした。

Ｙは停車場前で買つた新聞に讀み耽つた儘一口も物を云はなかつた。雨は何時の間にか強くなつて、窓硝子に、碎けた露の珠のやうなものが見え始めた。自分は閑靜な車輛のなかで、先年英國のエドワード帝を葬つた時、五千人の卒倒者を出した事などを思ひ出したりした。

汽車を下りて車に乘つた時から、秋の感じは猶強くなつた。幌の間から見ると車の前にある山が青く濡れ切つてゐる。其の青いなかの切通しへ三人の車が靜かに掛つて行く。車夫は草鞋も足袋も穿かずに素足を柔かさうな土の上に踏み附けて、腰の力で車を爪先上りに引き上げる。すると左右を鎖す一面の芒の根から爽かな蟲の音が聞え出した。それが幌を打つ雨の音に打ち勝つやうに高く自分の耳に響いた時、自分は此の果しもない蟲の音に伴れて、果しもない芒の簇りを眼も及ばない遠くに想像した。さうしてそれを

自分が今取り巻かれてゐる秋の代表者の如くに感じた。

此の青い秋のなかに、三人は又眞赤な鷄頭を見附けた。其の鮮やかな色の傍には掛茶屋めいた家があつて、縁臺の上に枝豆の殻を干した儘積んであつた、木槿かと思はれる眞白な花も此處彼處に見られた。

やがて車夫が梶棒を下した。暗い幌の中を出ると、高い石段の上に萱葺の山門が見えた。Oは石段を上る前に、門前の稻田の縁に立つて小便をした。自分も用心のため、すぐ彼の傍へ行つて[illegible]に倣つた。夫から三人前後して濡れた石を踏み乍ら典座寮と書いた懸札の眼に附く庫裡から案内を乞うて座敷へ上つた。

老師に會ふのは約二十年振である。東京からわざ／＼會ひに來た自分には、老師の顔を見るや否や、席に着かぬ前から、すぐ夫と解つたが先方では自分を全く忘れて居た。私はと云つて挨拶をした時老師はいやもう御見逸れ申しましたと、改めて久濶を敍したあとで、久しい事になりますな、もう彼是二十年になりますから抔と云つた。けれども其の二十年後の今、自分の眼の前に現れた小作りな老師は、二十年前と大して變つてはゐなかつた。たゞ心持色が白くなつたのと、年の所爲か顔にどこか愛嬌が附いたのが自分の豫期と少し異なる丈で、他は昔の儘のS禪師であつた。

「私ももう直五十二になります」

自分は老師の此の言葉を聞いた時、成程若く見える筈だと合點が行つた。實をいふと今迄腹の中では老師の年齒を六十位に勘定してゐた。然し今漸く五十一二とすると、昔自分が相見の禮を執つた頃はまだ三十を超えた許りの壯年だつたのである。夫でも老師は知識であつた。知識であつたから、自分の眼には比較的老けて見えたのだらう。

一所に連れて行つた二人を老師に引き合せて、巡錫の打ち合せ抔を濟ました後、しばらく雜談をしてゐるうちに、老師から緣切寺の由來やら、時頼夫人の開基の事やら、どうして其んな尼寺へ住むやうになつた譯やら、色々聞いた。歸る時には玄關迄送つてきて、「今日は二百二十日ださうで……」と云はれた。三人は其の二百二十日の雨の中を、また切通し越に町の方へ下つた。

翌朝は高い二階の上から降るでもなく晴れるでもなく、たゞ夢のやうに烟るKの町を眼の下に見た。三人が車を並べて停車場に着いた時、プラツトフォームの上には雨合羽を着た五六の西洋人と日本人が七時二十分の上り列車を待つべく無言の儘徘徊してゐた。

御大葬と乃木大將の記事で、都下で發行するあらゆる新聞の紙面が埋まつたのは、夫から一日置いて次の朝の出來事である。

――大正一、九、二二――

ケーベル先生の告別

ケーベル先生は今日（八月十二日）日本を去る筈になつてゐる。然し先生はもう二三日前から東京にはゐないだらう。先生は虚儀虚禮を嫌ふ念の強い人である。二十年前大學の招聘に應じて獨逸を立つときにも、先生の氣性を知つてゐる友人は一人も停車場へ送りに來なかつたといふ話である。先生は影の如く靜かに日本へ來て、又影の如くこつそり日本を去る氣らしい。

靜な先生は東京で三度居を移した。先生の知つてゐる所は恐らく此の三軒の家と、其處から學校へ通ふ道路位なものだらう。かつて先生に散歩をするかと聞いたら、先生は散歩をする處がないから、爲ないと答へた。先生の意見によると、町は散歩すべきものでないのである。

斯ういふ先生が日本といふ國について何も知らう筈がない。また知らうとする好奇心を有つてゐる道理もない。私が早稻田にゐると云てさへ、先生には早稻田の方角が分らない位である。深田君に大隈伯の宅へ呼ばれた昔を注意されても、先生は既に忘れてゐる。先生には大隈伯の名さへ初めてゞあつたかも知れない。

私が先月十五日の夜晩餐の招待を受けた時、先生に國へ歸つても朋友がありますかと尋ねたら、先生は南極と北極とは別だが、外の處なら何處へ行つても朋友はゐると答へた。是は固より笑談であるが、先生の頭の奧に、區々たる場所を超越した世界的の觀念が潛んでゐればこそ斯んな挨拶も出來るのだらう。又

斯んな挨拶が出來ればこそ、大した興味もない日本に二十年も永くゐて、不平らしい顔を見せる必要もなかつたのだらう。

　場所ばかりではない、時間の上でも先生の態度は全く普通の人と違つてゐる。郵船會社の汽船は半分荷物船だから船足が遲いのに何故それを擇んだのかと私が聞いたら、先生はいくら永く海の中に浮いてゐても苦にはならない、それよりも日本から伯林迄十五日で行けるとか十四日で着けるとか云つて、旅行が一日でも早く出來るのを、非常の便利らしく考へてゐる人の心持が解らないと云つた。

　先生の金錢上の考へも、全く西洋人とは思はれない位無頓着である。先生の宅に厄介になつてゐたものなどは、隨分經濟の點にかけて、普通の家には見るべからざる自由を與へられてゐるらしく思はれた。此前會つた時、ある蓄財家の話が出たら、一體あんなに金を溜めて何うする料簡だらうと云つて苦笑してゐた。先生はこれから先、日本政府から貰ふ恩給と、今迄の月給の餘りとで、暮らして行くのだが、其月給の餘りといふのは、天然自然に出來た本當の餘りで、用意の結果でも何でもないのである。

　總て斯んな風に出來上つてゐる先生に一番大事なものは、人と人を結びつける愛と情だけである。ことに先生は自分の教へて來た日本の學生が一番好きらしく見える。私が十五日の晩に、先生の家を辭して歸らうとした時、自分は今日本を去るに臨んで、たゞ簡單に自分の朋友、ことに自分の指導を受けた學生に、「左樣なら御機嫌よう」といふ一句を殘して行きたいから、それを朝日新聞に書いてくれないかと頼まれた。先生は其外の事を云ふのは厭だといふのである。又いふ必要がないと云ふのである。同時に廣告欄に其文句を出すのも好まないといふのである。私は已を得ないから、こゝに先生の許諾を得て、「さよなら御

機嫌よう」の外に、私自身の言葉を蛇足ながら付け加へて、先生の告別の辭が、先生の希望通り、先生の薫陶を受けた多くの人々の眼に留まるやうに取り計らふのである。さうして其多くの人々に代つて、先生に恙なき航海と、穩かな餘生とを、心から祈るのである。

——大正三、八、一二——

戰爭から來た行違ひ

十一日の夜床に着いてから間もなく電話口へ呼び出されて、ケーベル先生が出發を見合すやうになつたといふ報知を受けた。然し其時はもう「告別の辭」を社へ送つてしまつた後なので私は何うする譯にも行かなかつた。先生がまだ横濱の露西亞の總領事の許に泊つてゐて、日本を去る事の出來ないのは、全く今度の戰爭のためと思はれる。從つて私に此正誤を書かせるのも其戰爭である。つまり戰爭が正直な二人を噓吐にしたのだと云はなければならない。

然し先生の告別の辭は十二日に立つと立たないとで變る譯もなし、私のそれに付け加へた蛇足な文句も、先生の去留によつて其價値に狂ひが出て來る筈もないのだから、我々は書いた事や云つた事について取消しをだす必要は固より認めてゐないのである。たゞ「自分の指導を受けた學生によろしく」とあるべきのを、「自分の指導を受けた先生によろしく」と校正が誤つてゐるの丈は是非取り消して置きたい。斯んな間違の起るのも亦校正掛を忙殺する今度の戰爭の罪かも知れない。

――大正三、八、一三――

硝子戸の中

一

硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い實の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、其他に是と云つて數へ立てる程のものは殆ど視線に入つて來ない。書齋にゐる私の眼界は極めて單調でさうして又極めて狹いのである。

其上私は去年の暮から風邪を引いて殆ど表へ出ずに、毎日此硝子戸の中にばかり坐つてゐるので、世間の樣子はちつとも分らない。心持が惡いから讀書もあまりしない。私はたゞ坐つたり寐たりして其日其日を送つてゐる丈である。

然し私の頭は時々動く。氣分も多少は變る。いくら狹い世界の中でも狹いなりに事件が起つて來る。それから小さい私と廣い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つて來る。それが又私に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり爲たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫等の人を迎へたり送つたりした事さへある。

私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ。私はさうした種類の文字が、忙しい人の眼に、どれ程つまらなく映るだらうかと懸念してゐる。私は電車の中でポッケットから新聞を出して、大きな活字

丈に眼を注いでゐる購讀者の前に、私の書くやうな閑散な文字を列べて紙面をうづめて見せるのを恥づかしいもの丶一つに考へる。是等の人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべて其日〳〵の出來事のうちで、自分が重大と思ふ事件か、若しくは自分の神經を相當に刺戟し得る辛辣な記事の外には、新聞を手に取る必要を認めてゐない位、時間に餘裕を有たないのだから。――彼等は停留所で電車を待ち合はせる間に、新聞を買つて、電車に乘つてゐる間に、昨日起つた社會の變化を知つて、さうして役所か會社へ行き着くと同時に、ポッケットに收めた新聞紙の事は丸で忘れて仕舞はなければならない程忙しいのだから。

　私は今是程切り詰められた時間しか自由に出來ない人達の輕蔑を冒して書くのである。

　去年から歐洲では大きな戰爭が始まつてゐる。さうして其戰爭が何時濟むとも見當が付かない模樣である。日本でも其戰爭の一小部分を引受けた。それが濟むと今度は議會が解散になつた。來るべき總選擧は政治界の人々に取つての大切な問題になつてゐる。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、何處でも不景氣だ不景氣だと零してゐる。年中行事で云へば、春の相撲が近くに始まらうとしてゐる。要するに世の中は大變多事である。硝子戸の中に凝と坐つてゐる私なぞは一寸新聞に顏が出せないやうな氣がする。私が書けば政治家や軍人や實業家や相撲狂を押し退けて書く事になる。私丈ではとても夫程の膽力が出て來ない。たゞ春に何か書いて見ろと云はれたから、自分以外にあまり關係のない詰らぬ事を書くのである。それが何時迄つゞくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯の都合とできまるのだから、判然した見當は今付きかねる。

二

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがつて用事を訊いて見ると、ある雜誌社の男が、私の寫眞を貰ひたいのだが、何時撮りに行つて好いか都合を知らして呉れろといふのである。私は「寫眞は少し困ります」と答へた。

私は此雜誌と丸で關係を有つて居なかつた。それでも過去三四年の間に其一二冊を手にした記憶はあつた。人の笑つてゐる顏ばかりを澤山載せるのが其特色だと思つた外に、今は何にも頭に殘つてゐない。けれども其處にわざとらしく笑つてゐる顏の多くが私に與へた不快の印象はいまだに消えずにゐた。夫で私は斷らうとしたのである。

雜誌の男は、卯年の正月號だから卯年の人の顏を並べたいのだといふ希望を述べた。私は先方のいふ通り卯年の生れに相違なかつた。それで私は斯う云つた。――

「あなたの雜誌へ出すために撮る寫眞は笑はなくつては不可いのでせう」

「いへそんな事はありません」と相手はすぐ答へた。恰も私が今迄其雜誌の特色を誤解してゐた如くに。

「當り前の顏で構ひませんなら載せて頂だいても宜しう御座います」

「いえそれで結構で御座いますから、何うぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切つた。

中一日置いて打ち合せをした時間に、電話を掛けた男が、綺麗な洋服を着て寫眞機を携へて私の書齋に

這入つて來た。私はしばらく其人と彼の從事してゐる雜誌について話をした。それから寫眞を一枚撮つて貰つた。一枚は机の前に坐つてゐる平生の姿、一枚は寒い庭前の霜の上に立つてゐる普通の態度であつた。書齋は光線が能く透らないので、機械を据ゑ付けてからマグネシアを燃した。其火の燃えるすぐ前に、彼は顏を半分ばかり私の方へ出して「御約束では御座いますが、少し何うか笑つて頂けますまいか」と云つた。私は其時突然微かな滑稽を感じた。然し同時に馬鹿な事をいふ男だといふ氣もした。私は「是で好いでせう」と云つたなり先方の注文には取り合はなかつた。彼が私を庭の木立の前に立たして、レンズを私の方へ向けた時も亦前と同じ樣な鄭寧な調子で「御約束では御座いますが、少し何うか……」と同じ言葉を繰り返した。私は前よりも猶笑ふ氣になれなかつた。

　それから四日ばかり經つと、彼は郵便で私の寫眞を屆けて吳れた。然し其寫眞は正しく彼の注文通りに笑つてゐたのである。其時私は中が外れた人のやうに、しばらく自分の顏を見詰めてゐた。私にはそれが何うしても手を入れて笑つてゐるやうに拵へたものとしか見えなかつたからである。

　私は念のため家へ來る四五人のものに其寫眞を出して見せた。彼等はみんな私と同樣に、何うも作つて笑はせたものらしいといふ鑑定を下した。

　私は生れてから今日迄に、人の前で笑ひたくもないのに笑つて見せた經驗が何度となくある。その僞りが今此寫眞師のために復讐を受けたのかも知れない。

　彼は氣味のよくない苦笑を洩らしてゐる私の寫眞を送つて吳れたけれども、其寫眞を載せると云つた雜誌は遂に屆けなかつた。

三

私がHさんからヘクトーを貰つた時の事を考へると、もう何時の間にか三四年の昔になつてゐる。何だか夢のやうな心持もする。

其時彼はまだ乳離れのした許りの子供であつた。Hさんの御弟子は彼を風呂敷に包んで電車に載せて宅迄連れて來てくれた。私は其夜彼を裏の物置の隅に寢かした。寒くないやうに藁を敷いて、出來る丈居心地の好い寢床を拵へてやつたあと、私は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で搔き破つて外へ出ようとした。彼は暗い所にたつた獨り寢るのが淋しかつたのだらう。翌る朝迄まんじりともしない樣子であつた。

此不安は次の晩もつゞいた。其の次の晩もつゞいた。私は一週間餘りかゝつて、彼が與へられた藁の上に漸く安らかに眠るやうになる迄、彼の事が夜になると必ず氣に掛つた。

私の子供は彼を珍らしがつて、間がな隙がな玩弄物にした。けれども名がないのでつひに彼を呼ぶ事が出來なかつた。所が生きたものを相手にする彼等には、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼等は私に向つて犬に名を命けて呉れとせがみ出した。私はとう〳〵ヘクトーといふ偉い名を、此子供達の朋友に與へた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇將の名前であつた。トロイと希臘と戰爭をした時、ヘクトーは遂にアキリスの爲に打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐を取つたのである。アキ

リスが怒つて希臘方から躍り出した時に、城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であつた。ヘクトーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒先を避けた。アキリスも三たびトロイの城壁をめぐつて其後を追ひ懸けた。さうして仕舞にとう／＼ヘクトーを槍で突き殺した。それから彼の死骸を自分の軍車に縛り付けて又トロイの城壁を三度引き摺り廻した。……

私は此偉大な名を、風呂敷包にして持て來た小さい犬に與へたのである。何にも知らない筈の宅の子供も、始めは變な名だなあと云つてゐた。然しぢきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれる度に、嬉しさうに尾を振つた。仕舞には流石の名もジョンとかジョージとかいふ平凡な耶蘇教信者の名前と一樣に、毫も古典的な響を私に與へなくなつた。同時に彼は次第に宅のものから元程珍重されないやうになつた。

ヘクトーは多くの犬が大抵罹るヂステンパーといふ病氣の爲に一時入院した事がある。其時は子供がよく見舞に行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しさうに尾を振つて、懷かしい眼を私の上に向けた。私はしやがんで私の顏を彼の傍へ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫で、遣つた。彼は其返禮に私の顏を所嫌はず舐めやうとして已まなかつた。其時彼は私の見てゐる前で、初めて醫者の勸める小量の牛乳を呑んだ。夫迄首を傾けてゐた醫者も、此分なら或は癒るかも知れないと云つた。ヘクトーは果して癒つた。さうして宅へ歸つて來て、元氣に飛び廻つた。

四

日ならずして、彼は二三の友達を拵えた。其中で最も親しかつたのはすぐ前の醫者の宅に居る彼と同年

輩位の惡戲者であつた。是は基督教徒に相應しいジョンといふ名前を持つてゐたが、其性質は異端者のヘクトーよりも遙に劣つてゐたやうである。無暗に人に嚙み付く癖があるので、仕舞にはとう／＼打ち殺されてしまつた。

彼は此惡友を自分の庭へ引き入れて勝手な狼藉を働いて私を困らせた。彼等はしきりに樹の根を掘つて用もないのに大きな穴を開けて喜んだ。綺麗な草花の上にわざと寢轉んで、花も莖も容赦なく散らしたり、倒したりした。

ジョンが殺されてから、無聊な彼は夜遊びや晝遊びを覺えるやうになつた。散歩抔に出掛る時、私はよく交番の傍に日向ぼつこをしてゐる彼を見る事があつた。それでも宅にさへゐれば、能くうさん臭いものに吠付いて見せた。其内で最も猛烈に彼の攻擊を受けたのは、本所邊から來る十歲ばかりになる角兵衛獅子の子であつた。此子は何時でも「今日は御祝ひ」と云つて入つて來る。さうして宅の者から、麵麭の皮と一錢銅貨を貰はないうちは歸らない事に一人で極めてゐた。だからヘクトーが幾何吠えても逃げ出さなかつた。却てヘクトーの方が、吠えながら尻尾を股の間に挾んで物置の方へ退却するのが例になつてゐた。要するにヘクトーは弱蟲であつた。さうして操行からいふと、殆ど野良犬と擇ぶ所のない程に墮落してゐた。夫でも彼等に共通な人懷つこい愛情は何時迄も失はずにゐた。時々顏を見合せると、彼は必ず尾を掉つて私に飛び付いて來た。或は彼の脊を遠慮なく私の身體に擦り付た。私は彼の泥足の爲に、衣服や外套を汚した事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へ掛けて病氣をした私は、一箇月ばかりの間ついにヘクトーに會ふ機會を得ずに過ぎた。

病が漸く怠つて、床の外へ出られる樣になつてから、私は始めて茶の間の緣に立つて彼の姿を宵闇の裡に認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。然し生垣の根に凝とうづくまつてゐる彼は、いくら呼んでも少しも私の情けに應じなかつた。彼は首も動かさず、尾も振らず、たゞ白い塊のまゝ垣根にこびり付いてる丈であつた。私は一箇月ばかり會はないうちに、彼がもう主人の聲を忘れてしまつたものと思つて、微かな哀愁を感ぜずには居られなかつた。

まだ秋の始めなので、何處の間の雨戸も締められずに、星の光が明放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立つてゐた茶の間の緣には、家のものが二三人居た。けれども私がヘクトーの名前を呼んでも彼等は振り向きもしなかつた。私がヘクトーに忘れられた如くに、彼等も亦ヘクトーの事を丸で念頭に置いてゐないやうに思はれた。

私は默つて座敷へ歸つて、其處に敷いてある布團の上に橫になつた。病後の私は季節に不相當な黑八丈の襟のかゝつた銘仙のどてらを着てゐた。私はそれを脫ぐのが面倒だから、其儘仰向に寐て、手を胸の上で組み合せたなり默つて天井を見詰めてゐた。

五

翌朝書齋の緣に立つて、初秋の庭の面を見渡した時、私は偶然又彼の白い姿を苔の上に認めた。私は昨夕の失望を繰り返すのが厭さに、わざと彼の名を呼ばなかつた。けれども立つたなり凝と彼の樣子を見守らずにはゐられなかつた。彼は立木の根方に据ゑつけた石の手水鉢の中に首を突き込んで、其處に溜つて

ゐる雨水をぴちや／＼飲んでゐた。

此手水鉢は何時誰が持つて來たとも知れず、裏庭の隅に轉がつてゐたのを、引越した當時植木屋に命じて今の位置に移させた六角形のもので、其頃は苔が一面に生えて、側面に刻み付けた文字も全く讀めないやうになつてゐた。然し私には移す前一度判然とそれを讀んだ記憶があつた。さうして其記憶が文字として頭に殘らないで、變な感情としていまだに胸の中を往來してゐた。其處には寺と佛と無常の匂ひが漂つてゐた。

ヘクトーは元氣なささうに尻尾を垂れて、私の方へ脊中を向けてゐた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎を見た。

「何うかして遣らないと不可い。病氣だから」と云つて、私は看護婦を顧みた。私は其時まだ看護婦を使つてゐたのである。

私は次の日も木賊の中に寐てゐる彼を一目見た。さうして同じ言葉を看護婦に繰り返した。然しヘクトーは夫以來姿を隱したぎり再び宅へ歸つて來なかつた。

「醫者へ連れて行かうと思つて、探したけれども何處にも居りません」

家のものは斯う云つて私の顏を見た。私は默つてゐた。然し腹の中では彼を貰ひ受けた當時の事さへ思ひ起された。屆書を出す時、種類といふ下へ混血兒と書いたり、色といふ字の下へ赤斑と書いた滑稽も微かに胸に浮んだ。

彼が居なくなつて約一週間も經つたと思ふ頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。其人の庭

にある池の中に犬の死骸が浮いてゐるから引き上げて頸輪を改めて見ると、私の家の名前が彫り付けてあつたので、知らせに來たといふのである。下女は「此方で埋めて置きませうか」と尋ねた。私はすぐ車夫を遣つて彼を引き取らせた。

私は下女をわざ／＼寄こしてくれた宅が何處にあるか知らなかつた。たゞ私の子供の時分から覺えてゐる古い寺の傍だらうと許考へてゐた。それは山鹿素行の墓のある寺で、山門の手前に、舊幕時代の記念のやうに、古い榎が一本立つてゐるのが、私の書齋の北の縁から數多の屋根を越して能く見えた。

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで歸つて來た。私はわざとそれに近付かなかつた。白木の小さい墓標を買つて來さして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」といふ一句を書いた。私はそれを家のものに渡して、ヘクトーの眠つてゐる土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東北に當つて、ほゞ一間ばかり離れてゐるが、私の書齋の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子戸のうちから、霜に荒された裏庭を覗くと、二つとも能く見える。もう薄黒く朽ち掛けた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光つてゐる。然し間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼に付かなくなるだらう。

六

私は其女に前後四五回會つた。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介狀を持つて來るやうに注意したら、彼女は別にそんなものを貰ふ所がないといつて歸つて行つたさうである。

それから一日程經つて、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに來た。其手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでゐる事を知つた。私はすぐ返事を書いて面會日を指定して遣つた。

女は約束の時間を違へず來た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬の羽織を着てゐるのが、一番先に私の眼に映つた。女は私の書いたものを大抵讀んでゐるらしかつた。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行つた。然し自分の著作に就いて初見の人から讃辭ばかり受けてゐるのは、有難いやうで甚だこそばゆいものである。實をいふと私は辟易した。

一週間置いて女は再び來た。さうして私の作物をまた賞めて呉れた。けれども私の心は寧ろさういふ話題を避けたがつてゐた。三度目に來た時、女は何かに感激したものと見えて、袂から手巾を出して、しきりに涙を拭つた。さうして私に自分の是迄經過して來た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。然し其話を聽かない私には何といふ返事も與へられなかつた。私は女に向つて、よし書くにした所で迷惑を感ずる人が出て來はしないかと訊いて見た。女は存外判然した口調で、實名さへ出さなければ構はないと答へた。それで私はとにかく彼女の經歴を聽くために、とくに時間を拵へた。

すると其日になつて、女は私に會ひたいといふ別の人を連れて來て、例の話は此次に延ばして貰ひたいと云つた。私には固より彼女の違約を責める氣はなかつた。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書齋に坐つたのは其次の日の晩であつた。彼女は自分の前に置かれた桐の手焙の灰を眞鍮の火箸で突ッつきながら、悲しい身の上話を始める前、默つてゐる私に斯う云つた。

「此間は昂奮して私の事を書いて頂きたいやうに申し上げましたが、それは止めに致します。たゞ先生

に聞いて頂く丈にして置きますから、何うか其御積りで……」
私はそれに對して斯う答へた。
「あなたの許諾を得ない以上は、たとひどんなに書きたい事柄が出て來ても決して書く氣遣ひはありませんから御安心なさい」
私が十分な保證を女に與へたので、女はそれではと云つて、彼女の七八年前からの經歴を話し始めた。私は默然として女の顏を見守つてゐた。然し女は多く眼を伏せて火鉢の中ばかり眺めてゐた。さうして綺麗な指で、眞鍮の火箸を握つては、灰の中へ突き刺した。
時々腑に落ちない所が出てくると、私は女に向つて短かい質問を掛けた。女は單簡に又私の納得出來るやうに答をした。然し大抵は自分一人で口を利いてゐたので、私は寧ろ木像のやうに凝としてゐる丈であつた。
やがて女の頰は熱つて赤くなつた。白粉をつけてゐない所爲か、その熱つた頰の色が著しく私の眼に着いた。俯向きになつてゐるので、澤山ある黑い髮の毛も自然私の注意を惹く種になつた。

七

女の告白は聽いてゐる私を息苦しくした位に悲痛を極めたものであつた。彼女は私に向つて斯んな質問を掛けた。——
「もし先生が小說を御書きになる場合には、其女の始末を何うなさいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方が宜いと御思ひになりますか、それとも生きてゐるやうに御書きになりますか」

私は何方にでも書けると答へて、暗に女の氣色をうかゞつた。女はもつと判然した挨拶を私から要求するやうに見えた。私は仕方なしに斯う答へた。——

「生きるといふ事を人間の中心點として考へれば、其儘にして居て差支ないでせう。然し美しいものや氣高いものを一義に置いて人間を評價すれば、問題が違つて來るかも知れません」

「先生はどちらを御擇びになりますか」

私は又躊躇した。默つて女のいふ事を聞いてゐるより外に仕方がなかつた。

「私は今持つてゐる此美しい心持が、時間といふものゝ爲に段々薄れて行くのが怖くつて堪らないのです。此記憶が消えてしまつて、たゞ漫然と魂の拔殼のやうに生きてゐる未來を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつて堪らないのです」

私は女が今廣い世間の中にたつた一人立つて、一寸も身動きの出來ない位置にゐる事を知つてゐた。さうして夫が私の力で何うする譯にも行かない程に、せつぱ詰まつた境遇である事も知つてゐた。私は手の付けやうのない人の苦痛を傍觀する位置に立たせられて凝としてゐた。

私は服藥の時間を計るため、客の前も憚らず常に袂時計を座蒲團の傍に置く癖を有つてゐた。

「もう十一時だから御歸りなさい」と私は仕舞に女に云つた。女は厭な顏もせずに立上つた。私は又「夜が更けたから送つて行つて上げませう」と云つて、女と共に沓脱に下りた。

其時美しい月が靜かな夜を殘る隈なく照してゐた。往來へ出ると、ひつそりした土の上にひゞく下駄の音は丸で聞こえなかつた。私は懷手をした儘帽子も被らずに、女の後に跟いて行つた。曲り角の所で女は一寸會釋して、「先生に送つて頂いては勿體なう御座います」と云つた。「勿體ない譯がありません。同じ人間です」と私は答へた。

次の曲角へ來たとき女は、「先生に送つて頂くのは光榮で御座います」と又云つた。私は「本當に光榮と思ひますか」と眞面目に尋ねた。女は簡單に「思ひます」とはつきり答へた。私は「そんなら死なずに生きて居らつしやい」と云つた。私は女が此言葉を何う解釋したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、又宅の方へ引き返したのである。

むせつぽいやうな苦しい話を聞かされた私は、其夜却て人間らしい好い心持を久し振に經驗した。さうしてそれが尊い文藝上の作物を讀んだあとの氣分と同じものだといふ事に氣が付いた。有樂座や帝劇へ行つて得意になつてゐた自分の過去の影法師が何となく淺ましく感ぜられた。

八

不愉快に充ちた人生をとぼ／＼辿りつゝある私は、自分の何時か一度到着しなければならない死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは樂なものだとばかり信じてゐる。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の狀態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊とい」

斯ういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往來するやうになつた。

然し現在の私は今のあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次に遡ほつて、百年、二百年、乃至千年萬年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱する事が出來ないので、私は依然として此生に執着してゐるのである。

だから私の他に與へる助言は何うしても此生の許す範圍内に於てしなければ濟まない樣に思ふ。何ういふ風に生きて行くかといふ狹い區域の中でばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向はなければならないと思ふ。既に生の中に活動する自分を認め、又其の生の中に呼吸する他人を認めた以上は、互の根本義は如何に苦しくても如何に醜くても此生の上に置かれたものと解釋するのが當り前であるから。

「もし生きてゐるのが苦痛なら死んだら好いでせう」

斯うした言葉は、どんなに情なく世を觀じた人の口からも聞き得ないだらう。醫者などは安らかな眠に赴かうとする病人に、わざと注射の針を立てゝ患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝らしてゐる。こんな拷問に近い所作が、人間の德義として許されてゐるのを見ても、如何に根強く我々が生の一字に執着してゐるかゞ解る。私はつひに其人に死をすゝめる事が出來なかつた。

其人はとても回復の見込みのつかない程深く自分の胸を傷けられてゐた。同時に其傷が普通の人の經驗にないやうな美しい思ひ出の種となつて其人の面を輝かしてゐた。

彼女はその美しいものを寶石の如く大事に永久彼女の胸の奧に抱き締めてゐたがつた。不幸にして、その美しいものは取も直さず彼女を死以上に苦しめる手傷其物であつた。二つの物は紙の裏表の如く到底引

き離せないのである。

私は彼女に向つて、凡てを癒す「時」の流れに從つて下れと云つた。彼女は若しさうしたら此大切な記憶が次第に剝げて行くだらうと嘆いた。

公平な「時」は大事な寶物を彼女の手から奪ふ代りに、其傷口も次第に療治して呉れるのである。烈しい生の歡喜を夢のやうに暈してしまふと同時に、今の歡喜に伴ふ生々しい苦痛も取り除ける手段を忘らないのである。

私は深い戀愛に根ざしてゐる熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭はしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適當だつたからである。

斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出來なかつた。しかも私にはそれが實行上に於る自分を、凡庸な自然主義者として證據立てたやうに見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼で凝と自分の心を眺めてゐる。

九

私が高等學校にゐた頃、比較的親しく交際つた友達の中にＯといふ人がゐた。其時分から餘り多くの朋友を持たなかつた私には、自然Ｏと往來を繁くするやうな傾向があつた。私は大抵一週に一度位の割で彼を訪ねた。ある年の暑中休暇などには、毎日缺かさず眞砂町に下宿してゐる彼を誘つて、大川の水泳場へ行つた。

Oは東北の人だから、口の利き方に私などゝ違つた鈍でゆつたりした調子があつた。さうして其調子が如何にも能く彼の性質を代表してゐるやうに思はれた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、遂に彼の怒つたり激したりする顔を見る事が出來ずにしまつた。私はそれ丈でも充分彼を敬愛に價する長者として認めてゐた。

彼の性質が應揚である如く、彼の頭腦も私よりは遙に大きかつた。彼は常に當時の私には、考への及ばないやうな問題を一人で考へてゐた。彼は最初から理科へ入る目的を有てゐながら、好んで哲學の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの第一原理といふ本を借りた事を未だに忘れずにゐる。

空の澄み切つた秋日和などには、能く二人連れ立つて、足の向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。さうした場合には、往來へ塀越に差し出た樹の枝から、黄色に染まつた小さい葉が、風もないのに、はら／＼と散る景色を能く見た。それが偶然彼の眼に觸れた時、彼は「あッ悟つた」と低い聲で叫んだ事があつた。唯秋の色の空に動くのを美しいと觀ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴として怪しい響を耳に傳へるばかりであつた。「悟りといふものは妙なものだな」と彼は其後から平生のゆつたりした調子で獨言のやうに說明した時も、私には一口の挨拶も出來なかつた。

彼は貧生であつた。大觀音の傍に間借をして自炊してゐた頃には、よく干鮭を燒いて佗びしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子の代りに煮豆を買つて來て、竹の皮の儘雙方から突つ付き合つた。

大學を卒業すると間もなく彼は地方の中學に赴任した。私は彼のためにそれを殘念に思つた。然し彼を知らない大學の先生には、それが寧ろ當然と見えたかも知れない。彼自身は無論平氣であつた。それから

何年かの後に、たしか三年の契約で、支那のある學校の教師に雇はれて行つたが、任期が充ちて歸るとすぐ又内地の中學校長になつた。それも秋田から横手に遷されて、今では樺太の校長をしてゐるのである。
去年上京した序に久し振で私を訪ねてくれた時、取次のものから名刺を受取つた私は、すぐ其足で座敷へ行つて、いつもの通り客より先に席に着いてゐた。すると廊下傳ひに室の入口迄來た彼は、座蒲團の上にきちんと坐つてゐる私の姿を見るや否や「いやに澄ましてゐるな」と云つた。
其時向の言葉が終るか終らないうちに「うん」といふ返事が何時か私の口を滑つて出てしまつた。何うして私の惡口を自分で肯定するやうな此挨拶が、それ程自然に、それ程雜作なく、それ程拘泥はらずに、する〳〵と私の咽喉を滑り越したものだらうか。私は其時透明な好い心持がした。

十

向ひ合つて座を占めたOと私とは、何より先に互の顏を見返して、其所にまだ昔しの儘の面影が、懷かしい夢の記念のやうに殘つてゐるのを認めた。然しそれは恰も古い心が新しい氣分の中にぼんやり織り込まれてゐると同じ事で、薄暗く一面に霞んでゐた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再び故の姿に返る事は、二人に取つてもう不可能であつた。二人は別れてから今會ふ迄の間に挾まつてゐる過去といふ不思議なものを顧みない譯に行かなかつた。
　Oは昔し林檎のやうに赤い頰と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適した程ふつくりした輪廓に包まれた顏を有つてゐた。今見ても矢張り赤い頰と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、そ

れが昔とは何處か違つてゐる。

私は彼に私の口髭と揉み上げを見せた。彼は又私の爲めに自分の頭を撫でて見せた。私のは白くなつて、彼のは薄く禿げかゝつてゐるのである。

「人間も樺太迄行けば、もう行く先きはなからうな」と私が調戯つた、彼は「まあ其んなものだ」と答へて、私のまだ見た事のない樺太の話を色々して聞かせた。然し私は今それをみんな忘れて仕舞つた。夏は大變好い所だといふ事を覺えてゐる丈である。

私は幾年ぶりかで、彼と一所に表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのやうな外套をぶわ／＼に着てゐた。さうして電車の中で釣革にぶら下りながら、隱袋から手巾に包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊いた。彼は「栗饅頭だ」と答へた。栗饅頭は先刻彼が私の宅にゐた時に出した菓子であつた。彼が何時の間に、それを手帛に包んだらうかと考へた時、私は一寸驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて來たのかい」

「さうかも知れない」

彼は私の驚いた樣子を馬鹿にするやうな調子で斯う云つたなり、その手帛の包を又隱袋に收めてしまつた。

我々は其晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れといふ注意が書いてあつたのを、つい間違へて、南側へ廻らうとした時、彼は「其方ぢやないよ」と私に注意した。私は一寸立ち留まつて考へた上、「成程方角は樺太の方が確なやうだ」と云ひながら、又指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知つてゐると云つてゐた。然し晩餐を濟ました後で、自分の席へ歸らうとするとき、誰でも遣る通り、二階と一階の扉を間違へて、私から笑はれた。

折々隱袋から金縁の眼鏡を出して、手に持つた摺物を讀んで見る彼は、其眼鏡を除さずに遠い舞臺を平氣で眺めてゐた。

「それは老眼鏡ぢやないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私には此チャブドーといふ意味が全く解らなかつた。彼はそれを大差なしといふ支那語だと云つて說明して呉れた。

其夜の歸りに電車の中で私と別れたぎり、彼は又遠い寒い日本の領地の北の端れに行つてしまつた。

私は彼を想ひ出すたびに、達人といふ彼の名を考へる。すると其名がとくに彼のために天から與へられたやうな心持になる。さうして其達人が雪と氷に鎖された北の果に、まだ中學校長をしてゐるのだなと思ふ。

十二

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見て頂きたいのださうで御座います」

私は奥さんの此言葉から、頭の中で色々の事を考へさせられた。今迄私の所へ自分の書いたものを讀

んで呉れと云つて來た者は何人となくある。其中には原稿紙の厚さで一寸、又は二寸位の嵩になる大部のものも交つてゐた。それを私は時間の都合の許す限り成るべく讀んだ。さうして簡單な私はたゞ讀みさへすれば自分の頼まれた義務を果したものと心得て滿足してゐた。所が先方では後から新聞に出して呉れと云つたり、雜誌へ載せて貰ひたいと頼んだりするのが常であつた。中には他に讀ませるのは手段で、原稿を金に換へるのが本來の目的であるやうに思はれるのも少くはなかつた。私は知らない人の書いた讀みにくい原稿を好意的に讀むのが段々厭になつて來た。

尤も私の時間に教師をしてゐた頃から見ると、多少の彈力性が出來てきたには相違なかつた。夫でも自分の仕事にかゝれば腹の中は隨分多忙であつた。親切づくで見て遣らうと約束した原稿すら、中々埒のあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考へた通りの事を其儘奧さんに話した。奧さんはよく私のいふ意味を領解して歸つて行つた。約束の女が私の座敷へ來て、座蒲團の上に坐つたのは夫から間もなくであつた。侘びしい雨が今にも降り出しさうな暗い空を、硝子戸越に眺めながら、私は女に斯んな話をした。――

「是は社交ではありません。御互に體裁の好い事ばかり云ひ合つてゐては、何時迄經つたつて、啓發される筈も、利益を受ける譯もないのです。貴女は思ひ切つて正直にならなければ駄目ですよ。自分さへ十分に開放して見せれば、今貴女が何處に立つて何方を向いてゐるかといふ實際が、私に能く見えて來るのです。さうした時、私は始めて貴方を指導する資格を、貴方から與へられたものと自覺しても宜しいのです。だから私が何か云つたら、腹に答へべき或物を持つてゐる以上、決して默つてゐては不可せん。こん

な事を云つたら笑はれはしまいか、恥を掻きはしまいか、又は失禮だといつて怒られはしまいかなどと遠慮して、相手に自分といふ正體を黑く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくら貴方に利益を與へやうと焦慮ても、私の射る矢は悉く空矢になつて仕舞ふ丈です。

「是れは私の貴方に對する注文ですが、其代り私の方でも此私といふものを隱しは致しません。有の儘を曝け出すより外に、あなたを敎へる途はないのです。だから私の考への何處かに隙があつて、其隙をもし貴方から見破られたら、私は貴方に私の弱點を握られたといふ意味で敗北の結果に陷るのです。敎を受ける人丈が自分を開放する義務を有つてゐると思ふのは間違つてゐます。敎へる人も已れを貴方の前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘破し合ふのです

「さういふ譯で私は是から貴方の書いたものを拜見する時に、隨分手ひどい事を思ひ切つて云ふかも知れませんが、然し怒つては不可せん。貴方の感情を害する爲にいふのではないのですから。其代り貴方の方でも腑に落ちない所があつたら何處迄も切り込んで入らつしやい。貴方が私の主意を了解してゐる以上、私は決して怒る筈はありませんから。

「要するに是はたゞ現狀維持を目的として、上滑りな圓滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

十二

私に短冊を書けの、詩を書けのと云つて來る人がある。さうして其短冊やら絹やらをまだ承諾もしないうちに送つて來る。最初のうちは折角の希望を無にするのも氣の毒だといふ考へから、拙い字とは思ひながら、先方の云ふなりになつて書いてゐた。けれども斯うした好意は永續しにくいものと見えて、段々多くの人の依賴を無にするやうな傾向が強くなつて來た。

私は凡ての人間を、毎日々々恥を掻く爲に生れてきたものだとさへ考へる事もあるのだから、變な字を他に送つてやる位の所作は、敢てしやうと思へば、遣れないとも限らないのである。然し自分が病氣のとき、仕事の忙しい時、又はそんな眞似のしたくない時に、さういふ注文が引き續いて起つてくると、實際弱らせられる。彼等の多くは全く私の知らない人で、さうして自分達の送つた短冊を再び送り返す此方の手數さへ、丸で眼中に置いてゐないやうに見えるのだから。

其うちで一番私を不愉快にしたのは播州の坂越にゐる岩崎といふ人であつた。此人は數年前よく端書で私に俳句を書いてくれと賴んで來たから、其都度向ふのいふ通り書いて送つた記憶のある男である。其後の事であるが、彼は又四角な薄い小包を私に送つた。私はそれを開けるのさへ面倒だつたから、つい其儘にして書齋へ放り出して置いたら、下女が掃除をする時、つい書物と書物の間へ挾み込んで、まづ體よく仕舞失くしてしまつた。

此小包と前後して名古屋から茶の罐が私宛で屆いた。然し誰が何の爲に送つたものか其意味は全く解らなかつた。私は遠慮なく其茶を飲んでしまつた。すると程なく坂越の男から、富士登山の畫を返してくれと云つてきた。彼からそんなものを貰つた覺のない私は、打ち遣つて置いた。然し彼は富士登山の畫な

返せ〳〵と三度も四度も催促して已まない。私はついに此男の精神狀態を疑ひ出した。「大方氣違だらう。」私は心の中で斯う極めたなり向うの催促には一切取合はない事にした。

それから二三箇月經つた。たしか夏の初め頃と記憶してゐるが、私はあまり亂雜に取り散らされた書齋の中に坐つてゐるのが鬱陶敷くなつたので、一人でぼつ〳〵其處いらを片付け始めた。其時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や參考書を、一冊づゝ改めて行くと、思ひ掛けなく坂越の男が寄こした例の小包が出て來た。私は全く忘れてゐたものを、眼のあたり見て驚いた。早速封を解いて中を檢べたら、小さく疊んだ畫が一枚入つてゐた。それが富士登山の圖だつたので、私は又喫驚した。

包みのなかには此畫の外に手紙が一通添へてあつて、それに畫の贊をして吳れといふ依賴と、御禮に茶を送るといふ文句が書いてあつた。私は愈驚いた。

然し其時の私は到底富士登山の圖などに贊をする勇氣を有つてゐなかつた。私の氣分が、そんな事とは遙か懸け離れた所にあつたので、其畫に調和するやうな俳句を考へてゐる暇がなかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御禮を云つた。最後に富士登山の圖を小包にして返した。

十三

私は是れで一段落付いたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。すると其男が又短冊を封じて寄こした。さうして今度は義士に關係のある句を書いてくれといふのである。私は其

内書かうと云つて遣つた。然し中々書く機會が來なかつたので、つい其儘になつてしまつた。けれども執濃い此男の方では決して其儘に濟ます氣はなかつたものと見えて、無暗に催促を始め出した。其催促は一週に一遍か、二週に一遍の割で屹度來た。それが必ず端書に限つてゐて、其書き出しには、必ず「拜啓失敬申し候へども」とあるに極つてゐた。私は其人の端書を見るのが段々不愉快になつて來た。

同時に向うの催促も、今迄私の豫期してゐなかつた變な特色を帶びるやうになつた。最初には茶を遣つたではないかといふ言葉が見えた。私がそれに取り合はずにゐると、今度はあの茶を返してくれといふ文句に改まつた。私は返す事は容易いが、其手數が面倒だから、東京迄取りに來れば返して遣ると云つてやりたかつた。けれども坂越の男にさういふ手紙を出すのは、自分の品格に關はるやうな氣がして敢てし切れなかつた。返事を受け取らない先方は猶の事催促をした。茶を遣さないならそれでも好いから、金一圓を其代價として送つて寄せといふのである。私の感情は此男に對して次第に荒んで來た。仕舞にはとう〳〵自分を忘れるやうになつた。茶は飲んでしまつた、短冊は失くして仕舞つた、以來端書を寄こす事は一切無用であると書いて遣つた。さうして心のうちで、非常に苦々しい氣分を經驗した。こんな非紳士的な挨拶をしなければならない樣な穴の中へ、私を追ひ込んだのは、此坂越の男であると思つたからである。こんな男の爲めに、品格にもせよ人格にもせよ、幾分の墮落を忍ばなければならないのかと考へると情なかつたからである。

然し坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまひ、短冊は失くしてしまふとは、餘りと申せば……と又端書に書いて來た。さうして其冒頭には依然として拜啓失敬申し候へどもといふ文句が規則通り繰り返さ

れてゐた。

其時私はもう此男には取り合ふまいと決心した。けれども私の決心は彼の態度に對して何の效果のある筈はなかつた。彼は相變らず催促をやめなかつた。さうして今度は、もう一度書いて呉れゝば、また茶を送つてやるが何うだと云つて來た。それから事苟くも義士に關するのだから、何を作つても好いだらうと云つて來た。

しばらく端書が中絶したと思ふと、今度はそれが封書に變つた。尤も其封筒は區役所などで使ふ極めて安い鼠色のものであつたが、彼はわざとそれに切手を貼らないのである。其代り裏に自分の姓名も書かずに投函してゐた。私はそれが爲に、倍の郵税を二度程拂はせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名と住所とを教へて、封のまゝ先方へ逆送して貰つた。彼はそれで六錢取られた所爲か、漸く催促を斷念したらしい態度になつた。

所が二箇月ばかり經つて、年が改まると共に、彼は私に普通の年始狀を寄こした。それが私を一寸感心させたので、私はつひ短册へ句を書いて送る氣になつた。然し其贈物は彼を滿足させるに足りなかつた。彼は短册が折れたとか、汚れたとか云つて、しきりに書き直しを請求して已まない。現に今年の正月にも、「失敬申し候へども……」といふ依賴狀が七八日頃に屆いた。

私がこんな人に出會つたのは生れて始めてである。

十四

つい此間昔私の家へ泥棒の入つた時の話を比較的詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁づかずにゐた時分の事だといふから、年代にすると、多分私の生れる前後に當るのだらう、何しろ勤王とか佐幕とかいふ荒々しい言葉の流行つた八釜しい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中に小用に起きた後、手を洗ふために、潜戸を開けると、狭い中庭の隅に、壁へ押し付ける様な勢ひで立つてゐる梅の古木の根方が、赫と明るく見えた。姉は思慮をめぐらす暇もないうちに、すぐ潜戸を締めてしまつたが、締めたあとで、今目前に見た不思議な明るさを其處に立ちながら考へたのである。

私の胸に映つた此姉の顔は、いまだに思ひ起さうとすれば、何時でも眼の前に浮ぶ位鮮かである。然し其幻像は既に嫁に行つて歯を染めたあとの姿であるから、其時縁側に立つて考へてゐた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事は一寸困難である。

廣い額、淺黒い皮膚、小さいけれども明確した輪廓を具へてゐる鼻、人並より大きい二重瞼の眼、それからお澤といふ優しい名、――私はたゞ是等を綜合して、其場合に於る姉の姿を想像する丈である。

少時立つた儘考へてゐた彼女の頭に、此時もしかすると火事ぢやないかといふ懸念が起つた。それで彼女は思ひ切つて又切戸を開けて外を覗かうとする途端に、一本の光る拔身が、闇の中から、四角に切つた潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後へ退いた。其隙に、覆面をした、龕燈提灯を提げた男が、拔刀のまゝ、小さい潜戸から大勢家の中へ入つて來たのださうである。泥棒の人數はたしか八人とか聞いた。

彼等は、他を殺める爲に來たのではないから、大人しくして居て呉れさへすれば、家のものに危害は加

へない、其代り軍用金を借せと云つて、父に迫つた。父はないと斷つた。然し泥棒は却々承知しなかつた。今角の小倉屋といふ酒屋へ入つて、其處で教へられて來たのだから隱しても駄目だと云つて動かなかつた。父は不精無性に、とう／＼何枚かの小判を彼等の前に並べた。彼等は金額があまり少な過ぎると思つたものか、それでも却々歸らうとしないので、今迄床の中に寢てゐた母が「貴方の紙入に入つてゐるのも遣つて御仕舞なさい」と忠告した。其紙入の中には五十兩ばかりあつたとかいふ話である。泥棒が出て行つたあとで、「餘計な事をいふ女だ」と云つて、父は母を叱り付けたさうである。

その事があつて以來、私の家では柱を切り組にして、其中へあり金を隱す方法を講じたが、隱す程の財産も出來ず、又黑裝束を着けた泥棒も、それぎり來ないので、私の生長する時分には、どれが切組にしてある柱か丸で分らなくなつてゐた。

泥棒が出て行く時、「此家は大變締りの好い宅だ」と云つて賞めたさうだが、其締りの好い家を泥棒に教へた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷がいくつとなく出來た。是は金はありませんと斷る度に、泥棒がそんな筈があるものかと云つては、拔身の先でちよい／＼半兵衛さんの頭を突ッついたからだといふ。それでも半兵衛さんは、「どうしても宅にはありません、裏の夏目さんには澤山あるから、あすこへ入らつしやい」と強情を張り通して、とう／＼金は一文も奪られずにしまつた。

私は此話を妻から聞いた。妻は又それを私の兄から茶受話に聞いたのである。

十五

私が去年の十一月學習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から屆けてくれた。立派な水引が掛つてゐるので、それを除して中を改めると、五圓札が二枚入つてゐた。私は其金を平生から氣の毒に思つてゐた、或懇意な藝術家に贈らうかしらと思つて、暗に彼の來るのを待ち受けてゐた。所が其藝術家がまだ見えない先に、何か寄附の必要が出來てきたりして、つい二枚とも消費してしまつた。

一口でいふと、此金は私に取て決して無用なものではなかつたのである。世間の通り相場で、立派に私の爲に消費されたといふより外に仕方がないのである。けれどもそれを他に遣らうと迄思つた私の主觀から見れば、そんなに有難味の附着してゐない金には相違なかつたのである。打明けた私の心持をいふと、斯うした御禮を受けるより受けない時の方が餘程瀟爽してゐた。

畔柳芥舟君が樗牛會の講演の事で見えた時、私は話の序として一通り其理由を述べた。

「此場合私は勞力を賣りに行つたのではない。好意づくで依賴に應じたのだから、向うでも好意丈で私に酬いたらよからうと思ふ。もし報酬問題とする氣なら、最初から御禮はいくらするが、來て呉れるか何うかと相談すべき筈でせう」

其時K君は納得出來ないといつたやうな顏をした。さうして斯う答へた。

「然し何うでせう。其十圓は貴方の勞力を買つたといふ意味でなくつて、貴方に對する感謝の意を表する一つの手段と見たら。さう見る譯には行かないのですか」

「品物なら判然さう解釋も出來るのですが、不幸にも御禮が普通營業的の賣買に使用する金なのですから、何方とも取れるのです」

「何方とも取れるなら、此際善意の方に解釋した方が好くはないでせうか」
私は尤もだとも思つた。然し又斯う答へた。
「私は御存じの通り原稿料で衣食してゐる位ですから、無論富裕とは云へません。然し何うか斯うか、それ丈で今日を過ごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事に掛けては、成るべく好意的に人の爲に働いてやりたいといふ考へを持つてゐます。さうして其好意が先方に通じるのが、私に取つては、何よりも尊い報酬なのです。從つて金などを受けると、私が人の爲に働いてやるといふ餘地、――今の私には此餘地がまた極めて狹いのです――其貴重な餘地を腐蝕させられたやうな心持になります」
K君はまだ私の云ふ事を肯はない樣子であつた。私も強情であつた。
「もし岩崎とか三井とかいふ大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十圓の御禮を持つて行くでせうか、或は失禮だからと云つて、たゞ挨拶丈にとゞめて置くでせうか。私の考へでは恐らく金錢は持つて行くまいと思ふのですが」
「さあ」といつた丈でK君は判然した返事を與へなかつた。私にはまだ云ふ事が少し殘つてゐた。
「己惚かは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べる程富んでゐないにしても、一般學生よりはずつと金持に違ひないと信じてゐます」
「さうですとも」とK君は首肯いた。
「もし岩崎や三井に十圓の御禮を持つて行く事が失禮ならば、私の所へ十圓の御禮を持つて來るのも失禮でせう。それも其十圓が物質上私の生活に非常な潤澤を與へるなら、また外の意味から此問題を眺め

私の現下の經濟的生活は、る事も出來るでせうが、現に私はそれを他に遣らうと迄思つたのだから。――此十圓のために、殆ど目に立つ程の影響を蒙らないのだから」

「よく考へて見ませう」と云たK君はにや〳〵笑ひながら歸つて行つた。

十六

宅の前のだら〳〵坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、其橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたつた一度其處で髮を刈つて貰つた事がある。

平生は白い金巾の幕で、硝子戸の奧が、往來から見えないやうにしてあるので、私は其床屋の土間に立つて、鏡の前に座を占める迄、亭主の顏を丸で知らずにゐた。

亭主は私の入つてくるのを見ると、手に持つた新聞紙を放り出してすぐ挨拶をした。其時私は何うも何處かで會つた事のある男に違ひないといふ氣がしてならなかつた。それで彼が私の後へ廻つて、鋏をちよきちよき鳴らし出した頃を見計らつて、此方から話を持ち掛けて見た。すると私の推察通り、彼は昔し寺町の郵便局の傍に店を持て、今と同じやうに、散髮を渡世としてゐた事が解つた。

「高田の旦那などにも大分御世話になりました」

其高田といふのは私の從兄なのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知つてるのかい」

「知つてる所ぢや御座いません。始終德、德、つて贔屓にして下すつたもんです」

彼の言葉遣ひはかういふ職人にしては寧ろ丁寧な方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいふと、彼は吃驚した調子で「へツ」と聲を揚た。

「いゝ旦那でしたがね、惜しい事に。何時頃御亡くなりになりました」

「なに、つい此間さ。今日で二週間になるか、ならない位のものだらう」

彼はそれから此死んだ從兄に就いて色々覺えてゐる事を私に語つた末、「考へると早いもんですね旦那、つい昨日の事としつきや思はれないのに、もう三十年近くにもなるんですから」と云つた。

「あのそら求友亭の横町に居らしつてね……」と亭主は又言葉を繼ぎ足した。

「うん、あの二階のある家だらう」

「えゝ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになつた時なんか、方々樣から御祝物なんかあつて、大變御盛でしたがね。それから後でしたつけか、行願寺の寺内へ御引越なすつたのは」

此質問は私にも答へられなかつた。實は餘り古い事なので、私もつい忘れてしまつたのである。

「あの寺内も今ぢや大變變つた樣だね。用がないので、それからつい入つて見た事もないが」

「變つたの變らないのつて貴方、今ぢや丸で待合ばかりでさあ」

私は肴町を通るたびに、其寺内へ入る足袋屋の角の細い小路の入口に、ごた〳〵揭げられた四角な軒燈の多いのを知つてゐた。然し其數を勘定して見る程の道樂氣も起らなかつたので、つい亭主のいふ事には氣が付かずにゐた。

「成程さう云へば誰が袖なんて看板が通りから見えるやうだね」

「えゝ澤山出來ましたよ。尤も變る筈ですね、考へて見ると、もうやがて卅年にもならうと云ふんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は藝妓屋つたら、寺内にたつた一軒しきや無かつたもんでさあ。東家つてね。丁度そら高田の旦那の眞向でしたらう、東家の御神燈のぶら下つてゐたのは」

十七

私は其東家をよく覺えてゐた。從兄の宅のつい向なので、兩方のものが出入りの度に、顏を合はせさへすれば挨拶をし合ふ位の間柄であつたから。

其頃從兄の家には、私の二番目の兄がごろ〳〵してゐた。此兄は大の放蕩もので、よく宅の懸物や刀劍類を竊み出しては、それを二足三文に賣り飛ばすといふ惡い癖があつた。彼が何で從兄の家に轉がり込んでゐたのか、其時の私には解らなかつたけれども、今考へると、或はさうした亂暴を働いた結果、しばらく家を逐ひ出されてゐたかも知れないと思ふ。其兄の外に、まだ庄さんといふ、是も私の母方の從兄に當る男が、そこいらにぶら〳〵してゐた。

斯ういふ連中がいつでも一つ所に落ち合つては、寢そべつたり、縁側へ腰を掛けたりして、勝手な出放題を並べてゐると、時々向うの藝者屋の竹格子の窓から、「今日は」などと聲を掛けられたりする。それを又待ち受けてゞもゐる如くに、連中は「おい一寸御出で、好いものがあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。藝者の方でも晝間は暇だから、三度に一度は御愛嬌に遊びに來る。といつた風の調子であつた。

私は其頃まだ十七八だつたらう、其上大變な羞恥屋で通つてゐたので、そんな所に居合しても、何にも云はずに默つて隅の方に引込んでばかりゐた。それでも私は何かの拍子で、此等の人々と一所に、其藝者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならないので、私は人の買つた壽司や菓子を大分食つた。

一週間ほど經つてから、私は又此のいくらの兄に連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄さんも席に居合はせて話が大分はずんだ。其時咲松といふ若い藝者が私の顏を見て「またトランプをしませう」と云つた。私は小倉の袴を穿いて四角張つてゐたが、懷中には一錢の小遣ひさへ無かつた。

「僕は錢がないから厭だ」

「好いわ、私が持つてるから」

此女は其時眼を病んでゐたのだらう、斯ういひ〳〵、綺麗な襦袢の袖でしきりに薄赤くなつた二重瞼を擦つてゐた。

其後私は「お作が好い御客に引かされた」といふ噂を、從兄の家で聞いた。從兄の家では、此女の事を咲松と云はないで、常にお作お作と呼んでゐたのである。私はその話を聞いた時、心の內でもうお作に會ふ機會も來ないだらうと考へた。

所がそれから大分經つて、私が例の達人と一所に、芝の山內の勸工場へ行つたら、其處で又ばつたりお作に出會つた。此方の書生姿に引き易へて、彼女はもう品の好い奧樣に變つてゐた。旦那といふのも彼女の傍に付いてゐた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家といふ藝者屋の名前の奥に潜んでゐる是丈の古い事實を急に思ひ出したのである。

「あすこに居たお作といふ女を知つてるかね」と私は亭主に聞いた。

「知つてる所か、ありや私の姪でさあ」

「さうかい」

私は驚いた。

「それで、今何處にゐるのかね」

「お作は亡くなりましたよ、旦那」

私は又驚いた。

「何時」

「何時つて、もう昔の事になりますよ。慥あれが二十三の年でしたらう」

「へえ」

「然も浦鹽で亡くなつたんです。旦那が領事館に關係のある人だつたもんですから、彼地へ一所に行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は歸つて硝子戸の中に坐つて、まだ死なずに居るものは、自分とあの床屋の亭主丈のやうな氣がした。

十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周圍がきちんと片付かないで困りますが、何うしたら宜しいものでせう」と聞いた。

此女はある親戚の宅に寄寓してゐるので、其處が手狹な上に、子供などが若蠅いのだらうと思つた私の答は、頗る簡單であつた。

「何處か蔭張した家を探して下宿でもしたら好いでせう」

「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片付かないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでもう少し進んだ說明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入つて來ますが、それが心の中心と折合が付かないのです」

「貴方のいふ心の中心とは一體どんなものですか」

「どんなものと云つて、眞直な直線なのです」

私は此女の數學に熱心な事を知つてゐた。けれども心の中心が直線だと云ふ意味は無論私に通じなかつた。其上中心とは果して何を意味するのか、それも殆ど不可解であつた。女は斯う云つた。

「物には何でも中心が御座いませう」

「それは眼で見る事が出來、尺度で計る事の出來る物體に就いての話でせう。心にも形があるんですか。

そんなら其中心といふものを此處へ出して御覽なさい」

女は出せるとも出せないとも云はずに、庭の方を見たり、膝の上で兩手を擦つたりしてゐた。

「貴方の直線といふのは比喩ぢやありませんか。もし比喩なら、圓と云つても四角と云つても、詰り同じ事になるのでせう」

「さうかも知れませんが、形や色が始終變つてゐるうちに、少しも變らないものが、何うしてもあるのです」

「其變るものと變らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある譯になりますが、それで好いのですか。變るものは即ち變らないものでなければならない筈ぢやありませんか」

斯う云つた私はまた問題を元に返して女に向つた。

「凡て外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段落なりがはつきりするやうに納まる人は、恐らくないでせう。失禮ながら貴方の年齢や教育や學問で、さうきちんと片付けられる譯がありません。もし又そんな意味でなくつて、學問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりを付けたいなら、私の樣なものゝ所へ來ても駄目です。坊さんの所へでも入らつしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はさういふ點で、普通の人以上に整つてゐらつしやるやうに思ひました」

「そんな筈がありません」

「でも私にはさう見えました。内臟の位置までが調つてゐらつしやるとしか考へられませんでした」

「もし内臟がそれ程具合よく調節されてゐるなら、こんなに始終病氣などはしません」

女は蒲團を滑り下りた。さうして「何うぞ御身體を御大切に」と云つて歸つて行つた。

「それは貴方が私より偉い證據です」と私も答へた。

「私は病氣にはなりません」と其時女は突然自分の事を云つた。

十九

私の舊宅は今私の住んでゐる處から、四五町奥の馬場下といふ町にあつた。町とは云ひ條、其の實小さな宿場としか思はれない位、子供の時の私には、寂れ切つて且淋しく見えた。もと〳〵馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意味なのだから、江戸繪圖で見ても、朱引内か朱引外か分らない邊鄙な隅の方にあつたに違ひないのである。

それでも内藏造の家が狹い町内に三四軒はあつたらう。坂を上ると、右側に見える近江屋傳兵衞といふ藥種屋などは其一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の廣い小倉屋といふ酒屋もあつた。尤も此方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衞が高田の馬場で敵を討つ時に、此處へ立ち寄つて、桝酒を飮んで行つたといふ履歴のある家柄であつた。私はその話を子供の時分から覺えてゐたが、ついぞ其所に仕舞つてあるといふ噂の安兵衞が口を着けた桝を見たことがなかつた。其代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は子供だから上手だか下手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄關から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、御北さんの聲が其所から能く聞こえたのである。春の日の午過などに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚ひを聽くでもなく

聽かぬでもなく、ぼんやり私の家の土藏の白壁に身を靠たせて、佇立んでゐた事がある。其御蔭で私はとうとう「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覺えてしまつた。

此外には棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋も一軒あつた。少し八幡坂の方へ寄つた所には、廣い土間を屋根の下に圍ひ込んだやつちや場もあつた。私の家のものは、其處の主人を、問屋の仙太郎さんと呼んでゐた。仙太郎さんは何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふと、丸で疎濶であつた。往來で行き會ふ時だけ「好い御天氣で」などと聲を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。此仙太郎さんの一人娘が講釋師の貞水と好い仲になつて、死ぬの生きるのといふ騷ぎのあつた事も人聞に聞いて覺えてはゐるが、纒まつた記憶は今頭の何處にも殘つてゐない。子供の私には、それよりか仙太郎さんが高い臺の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つた儘、「いーやつちや若干」と威勢の好い聲で下にゐる大勢の顏を見渡す光景の方が餘程面白かつた。下からは又二十本も三十本もの手を一度に擧げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ゐんじだのがれんだのといふ符徴を、罵しるやうに呼び上げるうちに、蓴や茄子や唐茄子の籠が、夫等の節太の手で、どし／＼何處かへ運び去られるのを見てゐるのも勇ましかつた。

どんな田舍へ行つてもありがちな豆腐屋は無論あつた。其豆腐屋には油の臭の染み込んだ繩暖簾がかゝつてゐて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたやうに綺麗だつた。其豆腐屋について曲ると半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩はれてゐるので、中に何んなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、其奥でする朝晩の御勤の鉦の音は、今でも私の耳

に殘つてゐる。ことに霧の深い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、カン〳〵と鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲くて冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の氣分を寒くした。

二十

此豆腐屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覺えてゐる。こんな場末に人寄場のあらう筈がないといふのが、私の記憶に霞を掛ける所爲だらう、私はそれを思ひ出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議さうな眼を見張つて、遠い私の過去を振り返るのが常である。

其席亭の主人といふのは、町内の鳶頭で、時々日暗縞の腹掛に赤い筋の入つた印袢纏を着て、突つ掛け草履か何かでよく表を歩いてゐた。其處にまたお藤さんといふ娘があつて、其人の容色が能く家の者の口に上つた事も、まだ私の記憶を離れずにゐる。後には養子を貰つたが、それが口髭を生やした立派な男だつたので、私は一寸驚かされた。お藤さんの方でも自慢の養子だといふ評判が高かつたが、後から聞いて見ると、此人は何處かの區役所の書記だとかいふ話であつた。

此養子が來る時分には、もう寄席も已めて、仕舞ふた屋になつてゐたやうであるが、私は其處の宅の軒先にまだ薄暗い看板が淋しさうに懸つてゐた頃、よく母から小遣を貰つて其處へ講釋を聞きに出掛けたものである。講釋師の名前はたしか、南麟とかいつた。不思議な事に、此寄席へは南麟より外に誰も出なかつた樣である。此男の家は何處にあつたか知らないが、何の見當から歩いて來るにしても、道普請が出來て、家並の揃つた今から見れば大事業に相違なかつた。其上客の頭數は何時でも十五か二十位なのだから、

何んなに想像を逞しくしても、夢としか考へられないのである。「もうし〳〵花魁へ、と云はれて八ツ橋なんざますえと振り返る、途端に切り込む刃の光」といふ變な文句は、私が其時分南麟から教はつたのか、夫とも後になつて落語家の遣る講釋師の眞似から覺えたのか、今では混雜してよく分らない。

當時私の家からまづ町らしい町へ出やうとするには、何うしても人家のない茶畠とか、竹藪とか又は長い田圃路とかを通り拔けなければならなかつた。買物らしい買物は大抵神樂坂迄出る例になつてゐたので、さうした必要に馴らされた私に、左した苦痛のある筈もなかつたが、それでも矢來の坂を上つて酒井樣の火の見櫓を通り越して寺町へ出やうといふ、あの五六町の一筋道などになると、晝でも陰森として、大空が曇つたやうに始終薄暗かつた。

あの土手の上に二抱も三抱もあらうといふ大木が、何本となく並んで、其隙間々々をまた大きな竹藪で塞いでゐたのだから、日の目を拜む時間と云つたら、一日のうちに恐らくたゞの一刻もなかつたのだらう。下町へ行かうと思つて、日和下駄などを穿いて出やうものなら、屹度非道い目にあふに極つてゐた。あすこの霜融は雨よりも雪よりも恐ろしいもの丶やうに私の頭に染み込んでゐる。

其位不便な所でも火事の虞はあつたものと見えて、矢張町の曲り角に高い梯子が立つてゐた。さうして其上に古い半鐘も型の如く釣るしてあつた。私は斯うした有の儘の昔をよく思ひ出す。其半鐘のすぐ下にあつた小さな一膳飯屋もおのづと眼先に浮かんで來る。繩暖簾の隙間からあたたかさうな煮〆の香が煙と共に往來へ流れ出して、それが夕暮の靄に融け込んで行く趣なども忘れる事が出來ない。私が子規のまだ生きてゐるうちに、「半鐘と並んで高き冬木哉」といふ句を作つたのは、實は此半鐘の記念のためであつた。

二十一

私の家に關する私の記憶は、總じて斯ういふ風に鄙びてゐる。さうして何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる。だから今生き殘つてゐる兄から、つい此間、うちの姉達が芝居に行つた當時の樣子を聽いた時には驚いたのである。そんな派出な暮しをした昔もあつたのかと思ふと、私は、愈夢のやうな心持になるより外はない。

其頃の芝居小屋はみんな猿若町にあつた。電車も俥もない時分に、高田の馬場の下から淺草の觀音樣の先迄朝早く行き着かうと云ふのだから、大抵の事ではなかつたらしい。姉達はみんな夜半に起きて支度をした。途中が物騷だといふので、用心のため、下男が屹度供をして行つたさうである。

彼等は筑土を下りて、柿の木横町から揚場へ出て、豫て其處の船宿にあつらへて置いた屋根船に乘るのである。私は彼等が如何に豫期に充ちた心をもつて、そろ／＼砲兵工廠の前から御茶の水を通り越して柳橋迄漕がれつゝ行つただらうと想像する。しかも彼等の道中は決して其處で終りを告げる譯に行かないのだから、時間に制限を置かなかつた其の昔が猶ほ更回顧の種になる。

大川へ出た船は、流れを遡つて吾妻橋を通り拔けて、今戶の有明樓の傍に着けたものだといふ。姉達は其處から上つて芝居茶屋迄歩いて、それから漸く設けの席に着くべく、小屋へ送られて行く。設けの席といふのは必ず高土間に限られてゐた。是は彼等の扮裝なり顏なり、髮飾なりが、一般の眼によく着く便利のいゝ場所なので、派出を好む人達が、爭つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に隨いてゐる男が、何うぞ樂屋へお遊びに入らつしやいましと云つて案内に來る。すると姉達は此縮緬の模樣のある着物の上に袴を穿いた男の後に跟いて、田之助とか訥升とかいふ贔屓の役者の部屋へ行つて扇子に畫などを描いて貰つて歸つてくる。是が彼等の見榮だつたのだらう。さうして其見榮は金の力でなければ買へなかつたのである。

歸りには元來た路を同じ船で揚場迄漕ぎ戻す。無要心だからと云つて、下男が又提灯を點けて迎に行く。宅へ着くのは今の時計で十二時位にはなるのだらう。だから夜半から夜半迄掛つて彼等は漸く芝居を見る事が出來たのである。……

斯んな華麗な話を聞くと、私は果してそれが自分の宅に起つた事か知らんと疑ひたくなる。何處か下町の富裕な町家の昔を語られたやうな氣もする。

尤も私の家も侍分ではなかつた。派出な付合をしなければならない名主といふ町人であつた。私の知つてゐる父は、禿頭の爺さんであつたが、若い時分には、一中節を習つたり、馴染の女に縮緬の積夜具をして遣つたりしたのださうである。青山に田地があつて、其處から上つて來る米丈でも、家のものが食ふには不足がなかつたとか聞いた。現に今生き殘つてゐる三番目の兄などは、其米を舂く音を始終聞いたと云つてゐる。私の記憶によると、町内のものがみんなして私の家を呼んで、玄關々々と稱へてゐた。其時分の私には、何ういふ意味か解らなかつたが、今考へると、式臺のついた嚴めしい玄關付の家は、町内にたつた一軒しかなかつたからだらうと思ふ。其式臺を上つた所に、突棒や、袖搦や刺股や、又古ぼけた馬上提灯などが、並んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覺えてゐる。

二十二

此二三年來私は大抵年に一度位の割で病氣をする。さうして床に就いてから床を上げる迄に、略一月の日數を潰してしまふ。

私の病氣と云へば、何時も極つた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法より外に手の着けやうがなくなる。醫者の命令ばかりか、病氣の性質そのものが、私に此絶食を餘儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、餘計瘦こけてふら〳〵する。一箇月以上掛るのも重に此衰弱が祟るからのやうに思はれる。

私の立居が自由になると、黒枠のついた摺物が、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人の如く、絹帽などを被つて、葬式の供に立つ、俥を驅つて齋場へ駈けつける。死んだ人のうちには、御爺さんも御婆さんもあるが、時には私よりも年齒が若くつて、平生から其健康を誇つてゐた人も交つてゐる。

私は宅へ歸つて机の前に坐つて、人間の壽命は實に不思議なものだと考へる。多病な私は何故生き殘つてゐるのだらうかと疑つて見る。あの人は何ういふ譯で私より先に死んだのだらうかと思ふ。

私として斯ういふ默想に耽るのは寧ろ當然だといはなければならない。けれども自分の位地や、身體や、才能や――凡て己れといふものゝ居り所を忘れがちな人間の一人として、私は死なないのが當り前だと思ひながら暮らしてゐる場合が多い。讀經の間ですら、燒香の際ですら、死んだ佛のあとに生き殘つた、此私といふ形骸を、ちつとも不思議と心得ずに澄ましてゐる事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは當り前のやうに見えますが、自分が死ぬといふ事丈は到底考へられません」と云つた事がある。戰爭に出た經驗のある男に、「そんなに隊のものが續々斃れるのを見てゐながら、自分丈は死なないと思つてゐられますか」と聞いたら、其人は「居られますね。大方死ぬ迄は死なないと思つてるんでせう」と答へた。それから大學の理科に關係のある人に、飛行機の話を聽かされた時に、斯んな問答をした覺えもある。

「あゝして始終落ちたり死んだりしたら、後から乘るものは怖いだらうね。今度はおれの番だといふ氣になりさうなものだが、さうでないかしら」

「所がさうでないと見えます」

「何故」

「何故つて、丸で反對の心理狀態に支配されるやうになるらしいのです。矢ツ張り彼奴は墜落して死んだが、己は大丈夫だといふ氣になると見えますね」

私も恐らく斯ういふ人の氣分で、比較的平氣にしてゐられるのだらう。それも其筈である。死ぬ迄は誰しも生きてゐるのだから。

不思議な事に私の寐てゐる間には、黒枠の通知が殆ど來ない。去年の秋にも病氣が癒つた後で、三四人の葬儀に列したのである。其三四人の中に社の佐藤君も這入つてゐた。私は佐藤君がある宴會の席で、社から貰つた銀盃を持つて來て、私に酒を勸めてくれた事を思ひ出した。其時彼の踊つた變な踊もまだ覺えてゐる。この元氣な倔強な人の葬式に行つた私は、彼が死んで私が生き殘つてゐるのを、別段の不思議と

も思はずにゐる時の方が多い。然し折々考へると、自分の生きてゐる方が不自然のやうな心持にもなる。さうして運命がわざと私を愚弄するのではないかしらと疑ひたくなる。

二十三

今私の住んでゐる近所に喜久井町といふ町がある。是は私の生れた所だから、外の人よりもよく知つてゐる。けれども私が家を出て、方々漂浪して歸つて來た時には、其喜久井町が大分廣がつて、何時の間にか根來の方迄延びてゐた。

私に縁故の深い此町の名は、あまり聞き慣れて育つた所爲か、ちつとも私の過去を誘ひ出す懷かしい響を私に與へて呉れない。然し書齋に獨り坐つて、頬杖を突いた儘、流れを下る舟のやうに、心を自由に遊ばせて置くと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にぱたり出會つたなり、其處でしばらく彽徊し始める事がある。

此町は江戸と云つた昔には、多分存在してゐなかつたものらしい。江戸が東京に改まつた時か、それともずつと後になつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵へたものに相違ないのである。

私の家の定紋が井桁に菊なので、夫にちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたといふ話は、父自身の口から聽いたのか、又は他のものから教はつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に殘つてゐる。父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れないが、それを誇りにした彼の虚榮心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる

丈である。

父はまだ其上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなければならない長い坂に、自分の姓の夏目といふ名を付けた。不幸にして是は喜久井町程有名にならずに、只の坂として殘つてゐる。然し此間、或人が來て、地圖で此邊の名前を調べたら、夏目坂といふのがあつたと云つて話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立つてゐるのかも知れない。

私が早稻田に歸つて來たのは、東京を出てから何年振になるだらう。私は今の住居に移る前、家を探す目的であつたか、又遠足の歸り路であつたか、久し振で偶然私の舊家の横へ出た。其時表から二階の古瓦が少し見えたのでまだ生き殘つてゐるのかしらと思つたなり、私は其儘通り過ぎてしまつた。

早稻田に移つてから、私は又其門前を通つて見た。表から覗くと、何だか故と變らないやうな氣もしたが、門には思ひも寄らない下宿屋の看板が懸つてゐた。私は昔の早稻田田圃が見たかつた。然し其處はもう町になつてゐた。私は根來の茶畠と竹藪を一目眺めたかつた。然し其痕迹は何處にも發見する事が出來なかつた。多分此邊だらうと推測した私の見當は、當つてゐるのか、外れてゐるのか、それさへ不明であつた。

私は茫然として佇立した。何故私の家丈が過去の殘骸の如くに存在してゐるのだらう。私は心のうちで、早くそれが崩れて仕舞へば好いのにと思つた。

「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散歩した序に、何氣なく其處を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壞されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつゝあつた。其傍には質屋も出來てゐた。質屋の前

に疎らな圍をして、其中に庭木が少し植てあつた。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、殆ど畸形兒の樣になつてゐたが、何處か見覺のあるやうな心持を私に起させた。昔し「影參差松三本の月夜かな」と詠つたのは、或は此松の事ではなかつたらうかと考へつゝ、私はまた家に歸つた。

二十四

「そんな所に生ひ立つて、よく今日迄無事に濟んだものですね」
「まあ何うか斯うか無事に遣つて來ました」
私達の使つた無事といふ言葉は、男女の間に起る戀の波瀾がないといふ意味で、云はゞ情事の反對を指したやうなものであるが、私の追窮心は簡單な此一句の答で滿足出來なかつた。
「よく人が云ひますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いものゝ好な男でも、菓子が厭になるつて。お彼岸にお萩などを拵へてゐる所を宅で見てゐても分るぢやありませんか、拵へるものは、たゞお萩をお重に詰める丈で、もうげんなりした顏をしてゐる位だから。あなたの場合もそんな譯なんですか。」
「さういふ譯でもないやうです。兎に角廿歳少し過ぎ迄は平氣でゐたのですから」
其人はある意味に於て好男子であつた。
「たとひ貴方が平氣でゐても、相手が平氣でゐない場合がないとも限らないぢやありませんか。そんな時には、何うしたつて誘はれ勝になるのが當り前でせう」
「今から振り返つて見ると、成程斯ういふ意味であゝいふ事をしたのだとか、あんな事を云つたのだと

か。色々思ひ當る事がないでもありません」

「ぢや全く氣が付かずにゐたのですね」

「まあ左右です。それから此方で氣の付いたのも一つありました。然し私の心はどうしても、其相手に惹き付けられる事が出來なかつたのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳が揃ゑてあつた。客は少しも酒を飲まないし、私も殆ど盃に手を觸れなかつたから、獻酬といふものは全くなかつた。

「それ丈で今日迄經過して來られたのですか」と私は吸物をすゝりながら念の爲に訊いて見た。すると客は突然斯んな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり會つてゐた事があります。相手は無論素人ではないのでした。然し其女はもう居ないのです。首を縊つて死んでしまつたのです。年は十九でした。十日ばかり會はないでゐるうちに死んでしまつたのです。その女にはね、旦那が二人あつて、雙方が意地づくで、身受の金を競り上げに懸つたのです。それに雙方共老妓を味方にして、此方へ來い、彼方へ行くなと義理責にもしたらしいのです。……」

「貴方はそれを救つてやる譯に行かなかつたのですか」

「當時の私は丁稚の少し毛の生えた樣なもので、とても何うも出來ないのです」

「然し其藝妓は貴方の爲に死んだのぢやありませんか」

「さあ……。一度に雙方の旦那に義理を立てる譯に行かなかつたからかも知れませんが。……。然し私

等二人の間に、何處へも行かないといふ約束はあつたに違ないのです」
「すると貴方が間接に其女を殺した事になるのかも知れませんね」
「或はさうかも知れません」
「貴方は寐覺が惡かありませんか」
「何うも好くないのです」
元日に込み合つた私の座敷は、二日になつて淋しい位靜かであつた。私は其淋しい春の松の内に、斯ういふ憐れな物語りを、其年賀の客から聞いたのである。客は眞面目な正直な人だつたから、それを話すにも、殆ど艷つぽい言葉を使はなかつた。

二十五

私がまだ千駄木にゐた頃の話だから、年數にすると、もう大分古い事になる。
或日私は切通しの方へ散歩した歸りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲つた。其曲り角には其頃あつた牛屋の傍に、寄席の看板が何時でも懸つてゐた。
雨の降る日だつたので、私は無論傘をさしてゐた。それが鐵御納戸の八間の深張で、上から洩つてくる雫が、自然木の柄を傳はつて、私の手を濡し始めた。人通りの少い此小路は、凡ての泥を雨で洗ひ流したやうに、足駄の齒に引つ懸る汚ないものは殆んどなかつた。それでも上を見れば暗く、下を見れば佗びしかつた。始終通りつけてゐる所爲でも有らうが、私の周圍には何一つ私の眼を惹くものは見えなかつた。

さうして私の心は能く此天氣と此周圍に似てゐた。私には私の心を腐蝕するやうな不愉快な塊が常にあつた。私は陰鬱な顏をしながら、ぼんやり雨の降る中を歩いてゐた。

日蔭町の寄席の前まで來た私は、突然一臺の幌俥に出合つた。私と俥の間には何の隔たりもなかつたので、私は遠くから其中に乘つてゐる人の女だといふ事に氣がついた。まだセルロイドの窓などの出來ない時分だから、車上の人は遠くから其白い顏を私に見せてゐたのである。

私の眼には其白い顏が大變美しく映つた。私は雨の中を歩きながら凝と其人の姿に見惚れてゐた。同時に是は藝者だらうといふ推察が、殆ど事實のやうに、私の心に働きかけた。すると俥が私の一間ばかり前へ來た時、突然私の見てゐた美しい人が、鄭寧な會釋を私にして通り過ぎた。私は微笑に伴う其挨拶とともに、相手が、大塚楠緒さんであつた事に、始めて氣が付いた。

次に會つたのは夫から幾日目だつたらうか、楠緒さんが私に、「此間は失禮しました」と云つたので、私は私の有の儘を話す氣になつた。

「實は何處の美しい方かと思つて見てゐました。藝者ぢやないかしらとも考へたのです」

其時楠緒さんが何と答へたか、私はたしかに覺えてゐないけれども、楠緒さんは些とも顏を赧らめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をたゞ其儘に受け取つたらしく思はれた。

それからずつと經つて、ある日楠緒さんがわざ〳〵早稻田へ訪ねて來て呉れた事がある。然るに生憎私は妻と喧嘩をしてゐた。私は厭な顏をした儘、書齋に凝と坐つてゐた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして歸つて行つた。

其日は夫で濟んだが、程なく私は西片町へ詫まりに出掛けた。

「實は喧嘩をしてゐたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私は又苦々しい顏を見せるのも失敬だと思つて、わざと引込んでゐたのです」

是に對する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事の出來ない程、記憶の底に沈んでしまつた。

楠緒さんが死んだといふ報知の來たのは、たしか私が胃腸病院に居る頃であつた。死去の廣告中に、私の名前を使つて差支ないかと電話で問ひ合された事抔もまだ覺えてゐる。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」といふ手向の句を楠緒さんの爲めに咏んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがつて、わざ〳〵私に頼んで、短冊に書かせて持つて行つたのも、もう昔になつてしまつた。

二十六

益さんが何うしてそんなに零落たものか私には解らない。何しろ私の知つてゐる益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家を潰して私の所へ轉がり込んで食客になつてゐたが、是はまだ益さんよりは社會的地位が高かつた。子供の時分本町の鰯屋へ奉公に行つてゐた時、濱の西洋人が可愛がつて、外國へ連れて行くと云つたのを斷つたのが、今考へると殘念だなどゝ始終話してゐた。

二人とも私の母方の從兄に當る男だつたから、其縁故で、益さんは弟に會ふため、又私の父に敬意を表するため、月に一遍位は、牛込の奧迄煎餅の袋などを手土産に持つて、よく訪ねて來た。

益さんは其時何でも芝の外れか、又は品川近くに世帶を持つて、一人暮しの呑氣な生活を營んでゐたらしいので、宅へ來ると能く泊つて行つた。たまに歸らうとすると、兄達が寄つてたかつて「歸ると承知しないぞ」などゝ威嚇したものである。

當時二番目と三番目の兄は、まだ南校へ通つてゐた。南校といふのは今の高等商業學校の位置にあつて、そこを卒業すると、開成學校卽ち今日の大學へ這入る組織になつてゐたものらしかつた。彼等は夜になると、玄關に桐の机を竝べて、明日の下讀みをする。下讀みと云つた所で、今の書生の遣るのとは大分違つてゐた。グードリッチの英國史といつたやうな本を、一節位つゝ讀んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内で今讀んだ通りを暗誦するのである。

其下讀が濟むと、段々益さんが必要になつて來る。庄さんも何時の間にか其處へ顏を出す。一番目の兄も、機嫌の好い時は、わざ〳〵奥から玄關迄出張つて來る。さうしてみんな一所になつて、益さんに調戯ひ始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだらう」

「そりや商賣だから厭だつて仕方がありません、持つて行きますよ」

「益さんは英語が出來るのかね」

「英語が出來る位なら斯んな眞似をしちやゐません」

「然し郵便ッとか何とか大きな聲を出さなくつちやならないだらう」

「そりや日本語で間に合ひますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へえ〵、向でも何とか云ふのかね」

「云ひますとも。ペロリの奥さんなんか、貴方よろしい有難うと、ちやんと日本語で挨拶をする位でさ」

みんなは益さんを此處迄おびき出して置いて、どつと笑ふのである。それから又「益さん何て云ふんだつて、其奥さんは」と何遍も一つ事を訊いては、何時迄も笑ひの種にしようと巧らんでかゝる。益さんも仕舞には苦笑ひをして、とう〳〵「貴方よろしい」を已めにしてしまふ。すると今度は「ぢや益さん、野中の一本杉を遣つて御覽よ」と誰かが云ひ出す。

「やれつたつて、左右おいそれと遣れるもんぢやありません」

「まあ好いから、御遣りよ。愈野中の一本杉の所迄參りますと……」

益さんは夫でもにや〳〵して應じない。私はとう〳〵益さんの野中の一本杉といふものを聽かずにしまつた。今考へると、それは何でも講釋か人情噺の一節ぢやないかしらと思ふ。

私の成人する頃には益さんももう宅へ來なくなつた。大方死んだのだらう。生きてゐれば何か消息のある筈である。然し死んだにしても、何時死んだのか私は知らない。

二十七

私は芝居といふものに餘り親しみがない。ことに舊劇は解らない。是は古來から其方面で發達して來た演藝上の約束を知らないので、舞臺の上に開展される特別の世界に、同化する能力が私に缺けてゐる爲だとも思ふ。然しそれ許りではない。私が舊劇を見て、最も異樣に感ずるのは、役者が自然と不自然の間

を、どつち付かずにぶら〳〵歩いてゐる事である。それが私に、中腰と云つた樣な落ち付けない心持を引き起させるのも恐らく理の當然なのだらう。

然し舞臺の上に子供などが出て來て、甲の高い聲で、憐れつぽい事などを云ふ時には、いかな私でも知らず知らず眼に淚が滲み出る。さうしてすぐ、あゝ騙されたなと後悔する。何故あんなに安つぽい淚を零したのだらうと思ふ。

「何う考へても騙されて泣くのは厭だ」と私はある人に告げた。芝居好の其相手は「それが先生の常態なのでせう。平生淚を控え目にしてゐるのは、却て貴方の餘所行ぢやありませんか」と注意した。

私は其說に不服だつたので、色々の方面から向を納得させやうとしてゐるうちに、話題がいつか繪畫の方に滑つて行つた。其男は此間參考品として美術協會に出た若冲の御物を大變に嬉しがつて、其評論を何處かの雜誌に載せるとかいふ噂であつた。私はまた彼の鷄の圖が頗る氣に入らなかつたので、此處でも芝居と同じ樣な議論が二人の間に起つた。

「一體君に畫を論ずる資格はない筈だ」と私は遂に彼を罵倒した。すると此一言が本になつて、彼は藝術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云ふと、凡ての藝術は同じ源から湧いて出るのだから、その內の一つさへうんと腹に入れて置けば、他は自から解し得られる理窟だといふのである。座にゐる人のうちで、彼に同意するものも少くなかつた。

「ぢや小說を作れば、自然柔道も旨くなるかい」と私が笑談半分に云つた。

「柔道は藝術ぢやありませんよ」と相手も笑ひながら答へた。

藝術は平等觀から出立するのではない。よし其處から出立するにしても、差別觀に入つて始めて、花が咲くのだから、それを本來の昔へ返せば、繪も彫刻も文章も、すつかり無に歸してしまふ。其處に何で共通のものがあらう。たとひ有つたにした所で、實際の役には立たない。彼我共通の具體的のものなどの發見も出來る筈がない。

斯ういふのが其時の私の論旨であつた。さうして其論旨は決して十分なものではなかつた。もつと先方の主張を取り入れて、周到な解釋を下して遣る餘地はいくらでもあつたのである。

然し其時座にゐた一人が、突然私の議論を引き受けて相手に向ひ出したので、私も面倒だからつい其儘にして置いた。けれども私の代りになつた其男といふのは大分醉つてゐた。それで藝術がどうだの、文藝が何うだのと、しきりに辯ずるけれども、あまり要領を得た事は云はなかつた。言葉遣ひさへ少しへべれけであつた。初めのうちは面白がつて笑つてゐた人達も、遂には默つてしまつた。

「ぢや絶交しやう」などと醉つた男が仕舞に云ひ出した。私は「絶交するなら外で遣つてくれ、此處では迷惑だから」と注意した。

「ぢや外へ出て絶交しやうか」と醉つた男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとう夫限になつてしまつた。

是は今年の元日の出來事である。醉つた男はそれからちよい〳〵來るが、其時の喧嘩に就ては一口も云はない。

二十八

ある人が私の家の猫を見て、「是は何代目の猫ですか」と訊いた時、私は何氣なく「二代目です」と答へたが、あとで考へると、二代目はもう通り越して、其實三代目になつてゐた。

初代は宿なしであつたに拘らず、ある意味からして、大分有名になつたが、それに引きかへて、二代目の生涯は、主人にさへ忘れられる位、短命だつた。私には誰がそれを何處から貰つて來たか能く知らない。然し手の掌に載せれば載せられるやうな小さい恰好をして、彼が其處いら中這ひ廻つてゐた當時を、私はまだ記憶してゐる。此可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚げる時、誤つて上から踏み殺してしまつた。ぐうといふ聲がしたので、蒲團の下に潜り込んでゐる彼をすぐ引き出して、相當の手當をしたが、もう間に合はなかつた。彼はそれから一日二日して遂に死んでしまつた。其後へ來たのが即ち眞黑な今の猫である。

私は此黑猫を可愛がつても憎がつてもゐない。猫の方でも宅中のそ〳〵歩き廻るだけで、別に私の傍へ寄り付かうといふ好意を現した事がない。

或時彼は臺所の戸棚へ這入つて、鍋の中へ落ちた。其鍋の中には胡麻の油が一杯あつたので、彼の身體はコスメチックでも塗り付けたやうに光り始めた。彼はその光る身體で私の原稿紙の上に寐たものだから、油がずつと下迄滲み通つて、私を隨分な目に逢はせた。

去年私の病氣をする少し前に、彼は突然皮膚病に罹つた。顏から額へ掛けて、毛が段々拔けて來る。

それを頻に爪で掻くものだから、瘡蓋がほろ〱落ちて、痕が赤裸になる。私はある日食事中此見苦しい様子を眺めて厭な顔をした。

「あゝ瘡蓋を零して、もし子供にでも傳染すると不可ないから、病院へ連れて行て早く療治をして遣るがいゝ」

私は家のものに斯ういつたが、腹の中では、ことによると病氣が病氣だから全治しまいとも思つた。昔私の知つてゐる西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰つて可愛がつてゐた所、何時かこんな皮膚病に惱まされ出したので、氣の毒だからと云つて、醫者に頼んで殺して貰つた事を、私はよく覺えてゐたのである。

「クロロフォームか何かで殺して遣つた方が、却て苦痛がなくつて仕合せだらう」

私は三四度同じ言葉を繰返して見たが猫がまだ私の思ふ通りにならないうちに、自分の方が病氣でどつと寐てしまつた。其間私はつひに彼を見る機會を有たなかつた。自分の苦痛が直接自分を支配するせゐか、彼の病氣を考へる餘裕さへ出なかつた。

十月に入つて、私は漸く起きた。さうして例の如く黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚に故の樣な黒い毛が生えかゝつてゐた。

「おや癒るのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでゐた。すると私の衰弱が段々回復するにつれて、彼の毛も段々濃くなつて來た。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病氣の經過と彼の病氣の經過とを比較して見て、時々其處に何かの因緣があるやうな暗示を

受ける。さうしてすぐ其後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方では唯にや／＼鳴く許りだから、何んな心持でゐるのか私には丸で解らない。

二十九

私は兩親の晩年になつて出來た所謂末ッ子である。私を生んだ時、母はこんな年齢をして懷妊するのは面目ないと云つたといふ話が、今でも折々は繰り返されてゐる。

單に其爲ばかりでもあるまいが、私の兩親は、私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に殘つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の賣買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私は其道具屋の我樂多と一所に、小さい笊の中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其處を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだらう、懷へ入れて宅へ連れて來たが、私は其夜どうしても寢付かずに、とう／＼一晩中泣き續けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。

私は何時頃其里から取り戻されたか知らない。然しぢき又ある家へ養子に遣られた。それは慥か私の四つの歳であつたやうに思ふ。私は物心のつく八九歳迄其處で成長したが、やがて養家に妙なごた／＼が起つたため、再び實家へ戻る樣な仕儀となつた。

淺草から牛込へ遷された私は、生れた家へ歸つたとは氣が付かずに、自分の兩親をもと通り祖父母との

み思つてゐた。さうして相變らず彼等を御爺さん、お婆さんと呼んで毫も怪しまなかつた。向でも急に今迄の習慣を改めるのが變だと考へたものか、私にさう呼ばれながら澄ました顔をしてゐた。

私は普通の末ッ子のやうに決して兩親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた爲だの、久しく兩親に遠ざかつてゐた爲だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱はれたといふ記憶がまだ私の頭に殘つてゐる。それだのに淺草から牛込へ移された當時の私は、何故か非常に嬉しかつた。さうして其嬉しさが誰の目にも付く位に著るしく外へ現れた。

馬鹿な私は、本當の兩親を爺婆とのみ思ひ込んで、何の位の月日を空に暮らしたものだらう。それを訊かれると丸で分らないが、何でも或夜斯んな事があつた。

私がひとり座敷に寐てゐると、枕元の所で小さな聲を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚いて眼を覺ましたが、周圍が眞暗なので、誰が其處に蹲踞つてゐるのか、一寸判斷が付かなかつた。けれども私は子供だから唯凝として先方の云ふ事丈を聞いてゐた。すると聞いてゐるうちに、それが私の家の下女の聲である事に氣が付いた。下女は暗い中で私に耳語をするやうに斯ういふのである。――

「貴方が御爺さん御婆さんだと思つてゐらつしやる方は、本當は貴方の御父さんと御母さんなのですよ。先刻ね、大方その所爲であんなに此方の宅が好なんだらう、妙なものだな、と云つて二人で話してゐらしつたのを私が聞いたから、そつと貴方に敎へて上げるんですよ。誰にも話しちや不可せんよ。よござんすか」

私は其時たゞ「誰にも云はないよ」と云つたぎりだつたが、心の中では大變嬉しかつた。さうして其嬉

しかし事実を教へて呉れたからの嬉しさではなくつて、単に下女が私に親切だつたからの嬉しさであつた。不思議にも私はそれ程嬉しく思つた下女の名も顔もまるで忘れてしまつた。覚えてゐるのはたゞ其人の親切丈である。

三十

私が斯うして書斎に坐つてゐると、来る人の多くが「もう御病気はすつかり御癒りですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質問を受けながら、何度も返答に躊躇した。さうして其揚句何時でも同じ言葉を繰返す様になつた。それは「えゝまあ何うか斯うか生きてゐます」といふ変な挨拶に異ならなかつた。

何うか斯うか生きてゐる。――私は此一句を久しい間使用した。然し使用するごとに、何だか不穏当な心持がするので、自分でも実は已められるならばと思つて考へて見たが、私の健康状態を云ひ現はすべき適当な言葉は、外に何うしても見付からなかつた。

ある日T君が来たから、此話をして、癒つたとも云へず、癒らないとも云へず、何と答へて好いか分らないと云つたら、T君はすぐ私に斯んな返事をした。

「そりや癒つたとは云はれませんね。さう時々再発する様ぢや。まあ故の病気の継続なんでせう」

此継続といふ言葉を聞いた時、私は好い事を教へられたやうな気がした。それから以後は、「何うか斯うか生きてゐます」といふ挨拶を已めて、「病気はまだ継続中です」と改めた。さうして其継続の意味を説明する場合には、必ず欧洲の大乱を引合に出した。

「私は丁度獨逸が聯合軍と戰爭をしてゐるやうに、病氣と戰爭をしてゐるのです。今斯うやつて貴方と對坐して居られるのは、天下が太平になつたからではないので、塹壕の中に這入つて、病氣と睨めつくらをしてゐるからです。私の身體は亂世です。何時どんな變が起らないとも限りません」

或人は私の說明を聞いて、面白さうにはゝと笑つた。或人は默つてゐた。また或人は氣の毒らしい顏をした。

客の歸つたあとで私はまた考へた。――繼續中のものは恐らく私の病氣ばかりではないだらう。私の說明を聞いて、笑談だと思つて笑ふ人、解らないで默つてゐる人、同情の念に驅られて氣の毒らしい顏をする人、――凡て是等の人の心の奧には、私の知らない、自分達さへ氣の付かない、繼續中のものがいくらでも潛んでゐるのではなからうか。もし彼等の胸に響くやうな大きな音で、それが一度に破裂したら、彼等は果して何う思ふだらう。彼等の記憶は其時最早彼等に向つて何物をも語らないだらう。過去の自覺はとくに消えてしまつてゐるだらう。今と昔と又其昔の間に何等の因果を認める事の出來ない彼等は、さういふ結果に陷つた時、何と自分を解釋して見る氣だらう。所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂彈を、思ひ〳〵に抱きながら、一人殘らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないので、仕合せなんだらう。

私は私の病氣が繼續であるといふ事に氣が付いた時、歐洲の戰爭も恐らく何時の世からかの繼續だらうと考へた。けれども、それが何處から何う始まつて、何う曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、繼續といふ言葉を解しない一般の人を、私は却て羨ましく思つてゐる。

私がまだ小學校に行つてゐた時分に、喜いちやんといふ仲の好い友達があつた。喜いちやんは當時中町の叔父さんの宅にゐたので、さう道程の近くない私の所からは、毎日會ひに行く事が出來惡かつた。私は重に自分の方から出掛けないで、喜いちやんの來るのを宅で待つてゐた。喜いちやんはいくら私が行かないでも、屹度向うから來るに極つてゐた。さうして其來る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を賣る松さんの許であつた。

喜いちやんには父母がない樣だつたが、子供の頭には、それが一向不思議とも思はれなかつた。恐らく訊いて見た事もなかつたらう。從つて喜いちやんが何故松さんの所へ來るのか、其譯さへも知らずにゐた。是はずつと後で聞いた話であるが、此喜いちやんの御父さんといふのは、昔銀座の役人か何かをしてゐた時、贋金を作つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘死んでしまつたのだといふ。それで後に取り殘された細君が、喜いちやんを先夫の家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちやんが時々生の母に會ひに來るのは當り前の話であつた。

何にも知らない私は、此事情を聞いた時ですら、別段變な感じも起さなかつた位だから、喜いちやんと巫山戲廻つて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考へた事はたゞの一度もなかつた。

喜いちやんも私も漢學が好きだつたので、解りもしない癖に、能く文章の議論などをして面白がつた。彼は何處から聽いてくるのか、調べてくるのか、能く六づかしい漢籍の名前などを擧げて、私を驚かす事

が多かつた。
彼はある日私の部屋同樣になつてゐる玄關に上り込んで、懷から二冊つゞきの書物を出して見せた。それは確に寫本であつた。しかも漢文で綴つてあつた樣に思ふ。私は喜いちやんから、其書物を受け取つて、無意味に其處此處を引つ繰返して見てゐた。實は何が何だか私には薩張り解らなかつたのである。然し喜いちやんは、それを知つてるかなどゝ露骨な事をいふ性質ではなかつた。
「是は太田南畝の自筆なんだがね。僕の友達がそれを賣りたいといふので君に見せに來たんだが、買つて遣らないか」
私は太田南畝といふ人を知らなかつた。
「太田南畝つて一體何だい」
「蜀山人の事さ。有名な蜀山人さ」
無學な私は蜀山人といふ名前さへまだ知らなかつた。然し喜いちやんにさう云はれて見ると、何だか貴重の書物らしい氣がした。
「若干なら賣るのかい」と訊いて見た。
「五十錢に賣たいと云ふんだがね。何うだらう」
私は考へた。さうして何しろ値切つて見るのが上策だと思ひついた。
「二十五錢なら買つても好い」
「それぢや二十五錢でも構はないから、買つて遣り給へ」

喜いちやんは斯う云ひつゝ私から二十五錢を取つて置いて、又しきりに其本の效能を述べ立てた。私には無論其書物が解らないのだから、それ程嬉しくもなかつたけれども、何しろ損はしないのだらうといふ丈の滿足はあつた。私は其夜南畝莠言――たしかそんな名前だと記憶してゐるが、それを机の上に載せて寐た。

三十二

翌日になると、喜いちやんが又ぶらりと遣つて來た。

「君昨日買つて貰つた本の事だがね」

喜いちやんはそれ丈云つて、私の顏を見ながら愚圖々々してゐる。私は机の上に載せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本が何うかしたのかい」

「實はあすこの宅の阿爺に知れたもんだから、阿爺が大變怒つてね。どうか返して貰つて來てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭だつたけれども仕方がないから又來たのさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて譯でもないけれども、もし君の方で差支がないなら、返して遣つて呉れないか。何しろ二十五錢ぢや安過ぎるつていふんだから」

此最後の一言で、私は今迄安く買ひ得たといふ滿足の裏に、ぼんやり潛んでゐた不快、――不善の行爲

から起る不快――を判然自覺し始めた。さうして一方では狡猾い私を怒ると共に、一方では二十五錢で賣つた先方を怒つた。何うして此二つの怒りを同時に和らげたものだらう。私は苦い顏をしてしばらく默つてゐた。

私のこの心理狀態は、今の私が子供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるやうなもの丶、其場合の私には殆ど解らなかつた。私さへたゞ苦い顏をしたといふ結果だけしか自覺し得なかつたのだから、相手の喜いちやんには無論それ以上解る筈がなかつた。括弧の中でいふべき事かも知れないが、年齡を取つた今日でも、私には能く斯んな現象が起つてくる。それで能く他から誤解される。

喜いちやんは私の顏を見て「二十五錢では本當に安過ぎるんだとさ」と云つた。

私はいきなり机の上に載せて置いた書物を取つて、喜いちやんの前に突き出した。

「ぢや返さう」

「どうも失敬した。何しろ安公の持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺の宅に昔からあつたやつを、そつと賣つて小遣にしようつて云ふんだからね」

私はぷり〳〵して何とも答へなかつた。喜いちやんは袂から二十五錢出して私の前へ置き掛けたが、私はそれに手も觸れようともしなかつた。

「其錢なら取らないよ」

「何故」

「何故でも取らない」

「左右か、然し詰らないぢやないか、たゞ本丈返すのは。本を返す位なら二十五錢も取り給ひな」

私は堪らなくなつた。

「本は僕のものだよ。一旦買つた以上は僕のものに極つてるぢやないか」

「そりや左右に違ひない。違ひないが向ひの宅でも困つてるんだから」

「だから返すと云つてるぢやないか。だけど僕は金を取る譯がないんだ」

「そんな解らない事を云はずに、まあ取つて置き給ひな」

「僕は遣るんだよ。僕の本だけども、欲しければ遣らうといふんだよ。遣るんだから本だけ持つてつたら好いぢやないか」

「左右かそんなら、左樣しよう」

喜いちやんは、とう／＼本だけ持つて歸つた。さうして私は何の意味なしに二十五錢の小遣を取られてしまつたのである。

三十三

世の中に住む人間の一人として、私は全く孤立して生存する譯に行かない。自然他と交渉の必要が何處からか起つてくる。時候の挨拶、用談、それからもつと込み入つた懸合――是等から脱却する事は、如何に枯淡な生活を送つて居る私にも六かしいのである。

私は何でも他のいふ事を眞に受けて、凡て正面から彼等の言語動作を解釋すべきものだらうか。もし私が

持つて生れた此單純な性情に自己を託して顧みないとすると、時々飛んでもない人から騙される事があるだらう。其結果蔭で馬鹿にされたり、冷評かされたりする。極端な場合には、自分の面前でさへ忍ぶべからざる侮辱を受けないとも限らない。

それでは他はみな擦れ枯らしの嘘吐ばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借さず、心も傾けず、或時は其裏面に潜んでゐるらしい反對の意味丈を胸に收めて、それで賢い人だと自分を批評し、又其處に安住の地を見出し得るだらうか。さうすると私は人を誤解しないとも限らない。其上恐るべき過失を犯す覺悟を、初手から假定して、掛らなければならない。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱する位の厚顔を準備して置かなければ、事が困難になる。

もし私の態度を此兩面の何方かに片付けやうとすると、私の心にまた一種の苦悶が起る。私は惡い人を信じたくない。それから又善い人を少しでも傷けたくない。さうして私の前に顯れて來る人は、悉く惡人でもなければ、又みんな善人とも思へない。すると私の態度も相手次第で色々に變つて行かなければならないのである。

此變化は誰にでも必要で、また誰でも實行してゐる事だらうと思ふが、それが果して相手にぴたりと合つて寸分間違のない微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いてゐるだらうか。私の大いなる疑問は常に其處に蟠まつてゐる。

私の僻を別にして、私は過去に於て、多くの人から馬鹿にされたといふ苦い記憶を有つてゐる。同時に、先方の云ふ事や爲る事を、わざと平たく取らずに、暗に其人の品性に恥を搔かしたと同じ樣な解釋をした

經驗も澤山ありはしまいかと思ふ。

他に對する私の態度はまづ今迄の私の經驗から來る。それから前後の關係と四圍の状況から出る。最後に、曖昧な言葉ではあるが、私が天から授かつた直覺が何分か働らく。さうして、相手に馬鹿にされたり、又相手を馬鹿にしたり、稀には相手に彼相當な待遇を與へたりしてゐる。

然し今迄の經驗といふものは、廣いやうで、其實甚だ狹い。ある社會の一部分で、何度となく繰返された經驗を、他の一部分へ持つて行くと、丸で通用しない事が多い。前後の關係とか四圍の状況とか云つた所で、千差萬別なのだから、其應用の區域が限られてゐるばかりか、其實千差萬別に思慮を廻らさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も十分給與されてゐない場合が多い。

それで私はともすると事實あるのだか、又ないのだか解らない、極めてあやふやな自分の直覺といふものを主位に置いて、他を判斷したくなる。さうして私の直覺が果して當つたか當らないか、要するに客觀的事實によつて、それを確かめる機會を有たない事が多い。其處にまた私の疑ひが始終靄のやうにかゝつて、私の心を苦しめてゐる。

もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪づいて、私に毫髪の疑ひを挾む餘地もない程明らかな直覺を與へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、此不明な私の前に出て來る凡ての人を、玲瓏透徹な正直者に變化して、私と其人との魂がぴたりと合ふやうな幸福を授け給はん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出來ないか、此兩方だけしかない樣な氣がする。不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる。もしそれが生涯つゞくとするならば、人間と

はどんなに不幸なものだらう。

三十四

私が大學にゐる頃教へたある文學士が來て、「先生は此間高等工業で講演をなさつたさうですね」といふから、「あゝ遣つた」と答へると、其男が「何でも解らなかつたようですよ」と教へて呉れた。それ迄自分の云つた事に就いて、其方面の掛念を丸で有つてゐなかつた私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君は何うしてそんな事を知つてるい」

此疑問に對する彼の説明は簡單であつた。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に關係のある或る家の青年が、その學校に通つてゐて、當日私の講演を聽いた結果を、何だか解らないといふ言葉で彼に告げたのである。

「一體どんな事を講演なすつたのですか」

私は席上で、彼のために又其講演の梗概を繰り返した。

「別に六づかしいとも思へない事だらう君。何うしてそれが解らないかしら」

「解らないでせう。何うせ解りやしません」

私には斷乎たる此返事が如何にも不思議に聞こえた。然しそれよりも猶強く私の胸を打つたのは、止せば可かつたといふ後悔の念であつた。自白すると、私は此學校から何度となく講演を依頼されて、何度と

なく斷つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、何うかして其處に集まる聽衆に、相當の利益を與へたいといふ希望があつた。その希望が、「何うせ解りやしません」といふ簡單な彼の一言で、見事に粉碎されてしまつて見ると、私はわざ／＼淺草迄行く必要がなかつたのだと、自分を考へない譯に行かなかつた。

是はもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある學校で、何うしても講演を遣らなければ義理が惡い事になつて、つひに其處へ行つた時、私は不圖私を後悔させた前年を思ひ出した。それに私の話した其時の題目が、若い聽衆の誤解を招き易い内容を含んでゐたので、私は演壇を下りる間際に斯う云つた。――

「多分誤解はないつもりですが、若し私の今御話したうちに、判然しない所があるなら、何うぞ私宅へ遊びに來て下さい。出來る丈貴方がたに御納得の行くやうに説明して上る積ですから」

私の此言葉が、何んな風に反響をもたらすだらうかといふ豫期は、當時の私には殆ど無かつた樣に思ふ。然し夫から四五日經つて、三人の青年が私の書齋に這入つて來たのは事實である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧な手紙を書いて、面會の時間を拵へて異れと注文して來た。

私は快よくそれ等の青年に接した。さうして彼等の來意を確めた。一人の方は私の豫想通り、私の講演に就ての筋道の質問であつたが、殘る二人の方は、案外にも彼等の友人が其家庭に對して採るべき方針に就いての疑義を私に訊かうとした。從つて是は私の講演を、何う實社會に應用して好いかといふ彼等の目前に逼つた問題を持つて來たのである。

私は是等三人のために、私の云ふべき事を云ひ、説明すべき事を説明した積である。それが彼等に何れ程の利益を與へたか、結果からいふと此私にも分らない。然しそれ丈にした所で私には滿足なのである。「貴方の講演は解らなかつたさうです」と云はれた時よりも遙に滿足なのである。

（此稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の學生から四五通の手紙を受取つた。その人々はみんな私の講演を聽いたもの許かりで、いづれも私が此處で述べた失望を打ち消すやうな事實を、反證として書いて來て呉れたのである。だから其手紙はみな好意に充ちてゐた。何故一學生の云つた事を、聽衆全體の意見として速斷するかなぞといふ詰問的のものは一つもなかつた。それで私はこゝに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて私の誤解を正してくれた人々の親切を難有く思ふ旨を公にするのである。）

三十五

私は子供の時分能く日本橋の瀨戸物町にある伊勢本といふ寄席へ講釋を聽きに行つた。今の三越の向側に何時でも晝席の看板が掛かつてゐて、其角を曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

此席は夜になると、色物丈しか掛けないので、私は晝より外に足を踏み込んだ事がなかつたけれども、度數からいふと一番多く通つた所の樣に思はれる。當時私のゐた家は無論高田の馬場の下ではなかつた。然しいくら地理の便が好かつたからと云つて、何うしてあんなに講釋を聞きに行く時間が私にあつたもの

か、今考へると寧ろ不思議な位である。

是も今から振返つて遠い過去を眺める所爲でもあらうが、其處は寄席としては寧ろ上品な氣分を客に起させる樣に出來てゐた。高座の右側には帳場格子のやうな仕切を二方に立廻して、其中に定連の席が設けてあつた。それから高座の後が緣側で、その先がまた庭になつてゐた。庭には松の古木が斜めに手摺の上に突き出したりして、窮屈な感じのしない程の大空が、緣から仰がれる位に餘分の地面を取込んでゐた。其庭を東に受けて離れ座敷のやうな建物も見えた。

帳場格子のうちにゐる連中は、時間が餘つて使ひ切れない有福な人達なのだから、みんな相應な服裝をして、時々呑氣さうに袂から毛拔などを出して根氣よく鼻毛を拔いてゐた。そんな長閑な日には、庭の梅の樹に鶯が來て啼くやうな氣持もした。

中入になると、菓子を箱入の儘茶を賣る男が客の間へ配つて歩くのが此席の習慣になつてゐた。箱は淺い長方形のもので、まづ誰でも欲しいと思ふ人の手の屆く所に一つと云つた風に都合よく置かれるのである。菓子の數は一箱に十位の割だつたかと思ふが、それを食べたい丈食べて、後から其代價を箱の中に入れるのが無言の規約になつてゐた。私は其頃此習慣を珍らしいもの〻やうに眺めてゐたが、今となつて見ると、斯うした鷹揚で呑氣な氣分は、何處の人寄場へ行つても、もう味はふ事は出來まいと思ふと、それが又何となく懷しい。

私はそんなおつとりと物寂びた空氣の中で、古めかしい講釋といふものを色々の人から聽いたのである。其中には、すとこ、のん〳〵、ずい〳〵、などといふ妙な言葉を使ふ男もゐた。是は田邊南龍と云つて、

もとは何處かの下足番であつたとかいふ話である。其すとこ、のんく、ずいくは甚だ有名なもので
あつたが、其意味を理解するものは一人もなかつた。彼はたゞそれを冗談の形容詞として用ひて
ゐたらしいのである。

此南龍はとつくの昔に死んでしまつた。其外のものも大抵は死んでしまつた。其後の樣子を丸で知らな
い私には、其時分私を喜ばせて吳れた人のうちで生きてゐるものが果して何人あるのだか全く分らなか
つた。

所がいつか美音會の忘年會のあつた時、其番組を見たら、吉原の幇間の茶番だの何だのが列べて書いて
あるうちに、私はたつた一人の當時の舊友を見出した。私は新富座へ行つて、其人を見た。又其聲を聞い
た。さうして彼の顏も咽喉も昔とちつとも變つてゐないのに驚いた。彼の講釋も全く昔の通りであつた。
進歩もしない代りに、退歩もしてゐなかつた。二十世紀の此急劇な變化を、自分と自分の周圍に恐ろしく
意識しつゝあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の默想に耽つ
てゐた。

彼といふのは馬琴の事で、昔伊勢本で南龍の中入前をつとめてゐた頃には、琴凌と呼ばれた若手だつた
のである。

三十六

私の長兄はまだ大學とならない前の開成校にゐたのだが、肺を患つて中途で退學してしまつた。私とは

大分年齒が違ふので、兄弟としての親しみよりも、大人對子供としての關係の方が、深く私の頭に浸み込んでゐる。ことに怒られた時は左右した感じが強く私を刺戟したやうに思ふ。

兄は色の白い鼻筋の通つた美しい男であつた。然し顔だちから云つても、表情から見ても、何處かに險しい相を具へてゐて、無暗に近寄れないと云つた風の逼つた心持を他に與へた。

兄の在學中には、まだ地方から出て來た貢進生などの居る頃だつたので、今の青年には想像の出來ないやうな氣風が校内の其處此處に殘つてゐたらしい。現に兄は上級生に艶書を付けられたと云つて、私に話した事がある。其上級生といふのは、兄などよりもずつと年齒上の男であつたらしい。斯んな習慣の行はれない東京で育つた彼は、果して其艶書を何う始末したものだらう。兄はそれ以後學校の風呂で其男と顔を見合せるたびに、氣味の惡い思ひをして困つたと云つてゐた。

學校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終堅苦しく構へてゐたから、父や兄ですら少し彼に氣を置く樣子が見えた。其上病氣の所爲でもあらうが、常に陰氣臭い顔をして、宅にばかり引込んでゐた。

それが何時となく融けて來て、人柄が丸で柔らかになつたと思ふと、彼は能く古渡唐棧の着物に角帶などを締めて、夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色で龜甲型を一面に摺つた龜清の團扇などを茶の間に放り出される樣になつた。それ丈ならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つた儘、しきりに聲色を遣ひ出した。しかし宅のものは別段それに頓着する樣子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。聲色と同時に藤八拳も始まつた。然し此方は相手が要るので、さう毎晩は繰返されなかつたが、何しろ拳に不器用な手を上げたり下げたりして、熱心に遣つてゐた。相手は重に三番目の兄が勤めてゐた樣である。私は眞面目な

顔をして、たゞ傍観してゐるに過ぎなかつた。

此兄はとう／＼肺病で死んでしまつた。死んだのは慥か明治二十年だと覺えてゐる。すると葬式も濟み、逮夜も濟んで、まづ一片付といふ所へ一人の女が尋ねて來た。三番目の兄が出て應接して見ると、其女は彼に斯んな事を訊いた。

「兄さんは死ぬ迄、奥さんを御持ちになりやしますまいね」

兄は病氣のため、生涯妻帶しなかつた。

「いゝえ仕舞迄獨身で暮らしてゐました」

「それを聞いてやつと安心しました。妾のやうなものは、どうせ旦那がなくつちや生きて行かれないから、仕方がありませんけれども……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教はつて歸つて行つた此女は、わざ／＼甲州から出て來たのであるが、元柳橋の藝者をしてゐる頃、兄と關係があつたのだといふ話を、私は其時始めて聞いた。

私は時々此女に會つて兄の事などを物語つて見たい氣がしないでもない。然し會つたら定めしお婆さんになつて、昔とは丸で違つた顏をしてゐはしまいかと考へる。さうして其心も其顏同樣に皺が寄つて、からからに乾いてゐはしまいかとも考へる。もし左右だとすると、彼女が今になつて兄の弟（私）に會ふのは、彼女にとつて却つて辛い悲しい事かも知れない。

三十七

私は母の記念の爲に此處で何か書いて置きたいと思ふが、生憎私の知つてゐる母は、私の頭に大した材料を遺して行つて呉れなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此千枝といふ言葉を懷かしいもの〻一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母丈の名前で、決して外の女の名前であつてはならない樣な氣がする。幸ひに私はまだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼び起す彼女の幻像は、記憶の絲をいくら辿つて行つても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覺えてゐる特權が遂に與へられずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其眼鏡は鐵縁の古風なもので、球の大きさが直徑二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、すこし顋を襟元へ引き付けながら、私を凝と見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ彼女の癖とのみ考へられた。私は此眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた張交の中に、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども鮮やかに眼に浮んで來る。

夏になると母は始終紺無地の絽の帷子を着て、幅の狹い黒繻子の帶を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に殘つてゐる母の姿は、何時でも此眞夏の服裝で頭の中に現れる丈なので、それから紺無地の絽の着物と幅の狹い黒繻子の帶を取り除くと、後に殘るものはたゞ彼女の顏ばかりになる。母がかつて縁鼻へ出て、兄と碁を打つてゐた樣子などは、彼等二人を組み合はせた圖柄として、私の胸に收めてある唯一の記

念なのだが、其處でも彼女は矢張同じ帷子を着て、同じ帶を締めて坐つてゐるのである。

私はつひぞ母の里へ伴れて行かれた覺えがないので、長い間母が何處から嫁に來たのか知らずに暮らしてゐた。自分から求めて訊きたがるやうな好奇心は更になかつた。それで其點も矢張ぼんやり霞んで見えるより外に仕方がないのだが、母が四ツ谷大番町で生れたといふ話丈は確に聞いてゐた。宅は質屋であつたらしい。藏が幾戸前とかあつたのだと、かつて人から教へられたやうにも思ふが、何しろ其大番町といふ所を、此年になる迄今だに通つた事のない私のことだから、そんな細な點は丸で忘れてしまつた。たとひそれが事實であつたにせよ、私の今有つてゐる母の記念のなかに藏屋敷なぞは決して現れて來ないのである。大方其頃にはもう潰れて仕舞つたのだらう。

母が父の所へ嫁にくる迄御殿奉公をしてゐたといふ話も朧氣に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷へ上つて、何の位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質さへ能く辨へない今の私には、たゞ淡い薫を殘して消えた香のやうなもので、殆ど取り留めやうのない事實である。

然しさう云へば、私は錦繪に描いた御殿女中の羽織つてゐるやうな華美な總模樣の着物を宅の藏の中で見た事がある。紅絹裏を付けた其着物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、所々に金絲や銀絲の刺繡も交つてゐた。是は恐らく當時の裲襠とかいふものなのだらう。然し母がそれを打ち掛けた姿は、今想像しても丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けた御婆さんであつたから。それのみか私は此美しい裲襠が其後小搔卷に仕立直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せられたのを見た位だから。

三十八

私が大學で教はつたある西洋人が日本を去る時、私は何か餞別を贈らうと思つて、宅の藏から高蒔繪に緋の房の付いた美しい文箱を取り出して來た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰ひ受けた時、私は、全く何の氣も付かなかつたが、今斯うして筆を執つて見ると、その文箱も小搔卷に仕立直された紅絹裏の無雙に、若い時分の母の面影を濃かに宿してゐるやうに思はれてならない。母は生涯父から着物を拵へて貰つた事がないといふ話だが、果して拵へて貰はないでも濟む位な支度をして來たものだらうか。私の心に映るあの紺無地の絽の帷子も、幅の狹い黑繻子の帶も、矢張嫁に來た時から旣に簞笥の中にあつたものなのだらうか。私は再び母に會つて、萬事を悉く口づから訊いて見たい。

惡戲で強情な私は、決して世間の末ッ子のやうに母から甘く取扱はれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて吳れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。愛憎を別にして考へて見ても、母はたしかに品位のある床しい婦人に違なかつた。さうして父よりも賢こさうに誰の目にも見えた。氣六づかしい兄も母丈には畏敬の念を抱いてゐた。

「阿母さんは何にも云はないけれども、何處かに怖いところがある」

私は母を評した兄の此言葉を、暗い遠くの方から明かに引張出してくる事が今でも出來る。然しそれは水に融けて流れかゝつた字體が、屹となつて漸と元の形に返したやうな際どい私の記憶の斷片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。途切れ途切れに殘つてゐる彼女の面影をいくら

丹念に拾ひ集めても、母の全體はとても髣髴する譯に行かない。其途切れ〳〵に殘つてゐる昔さへ、半以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。

或時私は二階へ上つて、たつた一人で、晝寐をした事がある。其頃の私は晝寐をすると、よく變なものに襲はれがちであつた。私の親指が見る間に大きくなつて、何時迄經つても留らなかつたり、或は仰向に眺めてゐる天井が段々上から下りて來て、私の胸を抑へ付けたり、又は眼を開いて普段と變らない周圍を現に見てゐるのに、身體丈が睡魔の擒となつて、いくら藻搔いても、手足を動かす事が出來なかつたり、後で考へてさへ、夢だか正氣だか譯の分らない場合が多かつた。さうして其時も私は此變なものに襲はれたのである。

私は何時何處で犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金錢を多額に費消してしまつた。それを何の目的で何に遣つたのか、其邊も明瞭でないけれども、子供の私には到底償ふ譯に行かないので、氣の狹い私は寐ながら大變苦しみ出した。さうして仕舞に大きな聲を揚げて下にゐる母を呼んだのである。二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事の出來ない、生死事大無常迅速云々と書いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後に附いてゐるので、母は私の聲を聞き付けると、すぐ二階へ上つて來て呉れた。私は其處に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つて呉れた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすや〳〵寐てしまつた。

私は此出來事が、全部夢なのか、又は半分丈本當なのか、今でも疑つてゐる。然し何うしても私は實際

大きな聲を出して母に救ひを求め、母は又實際の姿を現はして私に慰藉の言葉を與へて呉れたとしか考へられない。さうして其時の母の服裝は、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地の絽の帷子に幅の狹い黒繻子の帶だつたのである。

三十九

今日は日曜なので、子供が學校へ行かないから、下女も氣を許したものと見えて、何時もより遲く起きたやうである。夫でも私の床を離れたのは七時十五分過であつた。顔を洗つてから、例の通り燒麺麭と牛乳と半熟の鷄卵を食べて、厠に上らうとすると、生憎肥取が來てゐるので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片付ものをしてゐた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周圍に、女の子が三人ばかり心持よささうに煖を取つてゐる樣子が私の注意を惹いた。

「そんなに焚火に當ると顔が眞黒になるよ」と云つたら、末の子が「いやあーだ」と答へた。私は石垣の上から遠くに見える屋根瓦の融けつくした霜に濡れて、朝日にきらつく色を眺めたあと、又家の中へ引き返した。

親類の子が來て掃除をしてゐる書齋の整頓するのを待つて、私は机を縁側に持ち出した。其處で日當りの好い欄干に身を靠たせたり、頬杖を突いて考へたり、又少時は凝と動かずにたゞ魂を自由に遊ばせて置いて見たりした。

輕い風が時々鉢植の九花蘭の長い葉を動かしにきた。庭木の中で鶯が折々下手な囀りを聴かせた。每日硝子戸の中に坐つてゐた私は、まだ冬だ冬だと思つてゐるうちに、春は何時しか私の心を蕩揺し始めたのである。

私の冥想は何時迄坐つてゐても結晶しなかつた。筆をとつて書かうとすれば、書く種は無盡藏にあるやうな心持もするし、彼にしようか、是にしようかと迷ひ出すと、もう何を書いても詰らないのだといふ呑氣な考へも起つてきた。しばらく其處で佇ずんでゐるうちに、今度は今迄書いた事が全く無意味のやうに思はれ出した。何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が私を嘲弄し始めた。有難い事に私の神經は靜まつてゐた。此嘲弄の上に乘つてふわ／＼と高い冥想の領分に上つて行くのが自分には大變な愉快になつた。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下して笑ひたくなつた私は、自分で自分を輕蔑する氣分に搖られながら、搖籃の中で眠る子供に過ぎなかつた。

私は今迄他の事と私の事をごちや／＼に書いた。他の事を書くときには、成るべく相手の迷惑にならないやうにとの掛念があつた。私の身の上を語る時分には、却つて比較的自由な空氣の中に呼吸する事が出來た。それでも私はまだ私に對して全く色氣を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の衒氣がないにしても、もつと卑しい所、もつと惡い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を、つい發表しずに仕舞つた。聖オーガスチンの懺悔、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それをいくら辿つて行つても、本當の事實は人間の力で叙述出來る筈がないと誰かゞ云つた事がある。況して私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云ひ得るならば、——頗る明るい處からば

かり寫されてゐただらう。其處に或人は一種の不快を感ずるかも知れない。然し私自身は今其不快の上に跨つて、一般の人類をひろく見渡しながら微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。

まだ鶯が庭で時々鳴く。春風が折々思ひ出したやうに九花蘭の葉を搖かしに來る。猫が何處かで痛く噛まれた米噛を日に曝して、あたゝかさうに眠つてゐる。先刻迄護謨風船を揚げて騒いでゐた子供達は、みんな連れ立つて活動寫眞へ行つてしまつた。家も心もひつそりとしたうちに、私は硝子戸を開け放つて、靜かな春の光に包まれながら、恍惚と此稿を書き終るのである。さうした後で、私は一寸肘を曲げて、此縁側に一眠り眠る積である。

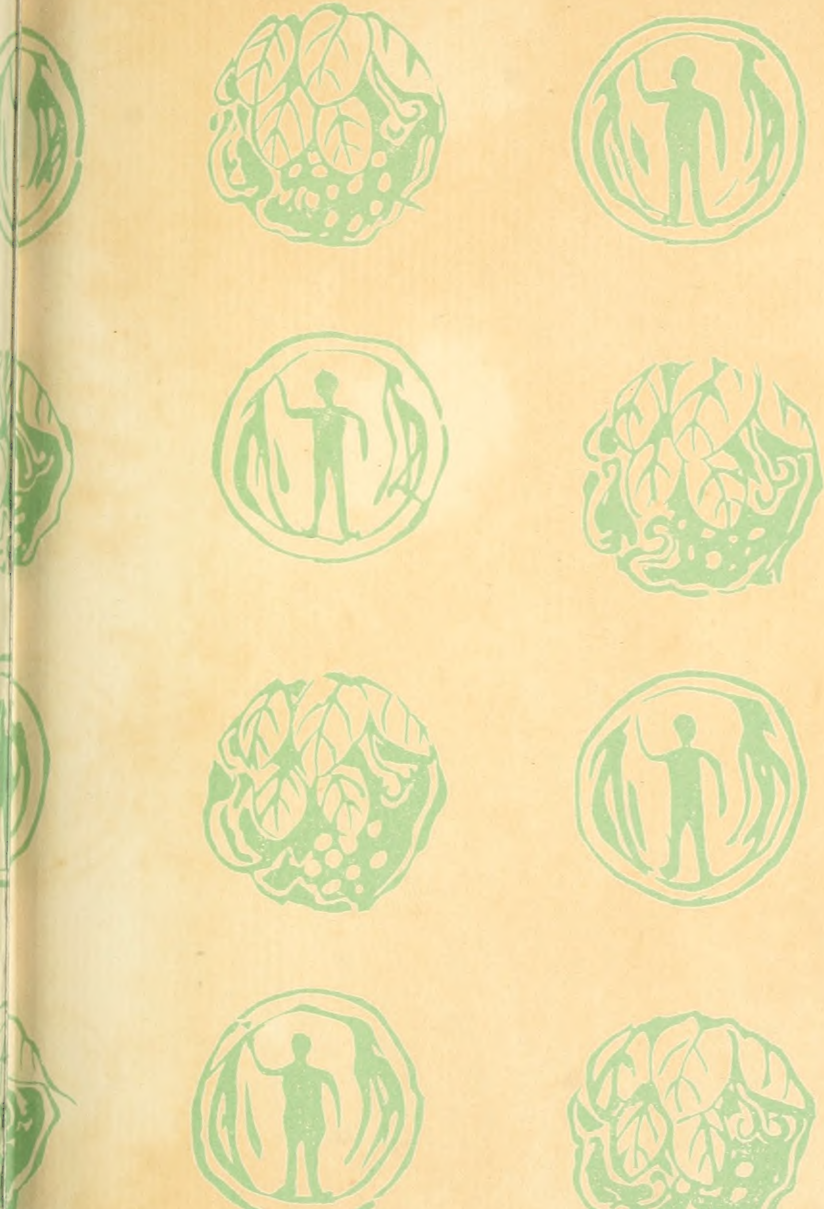
大正四、二、一三——二、一四

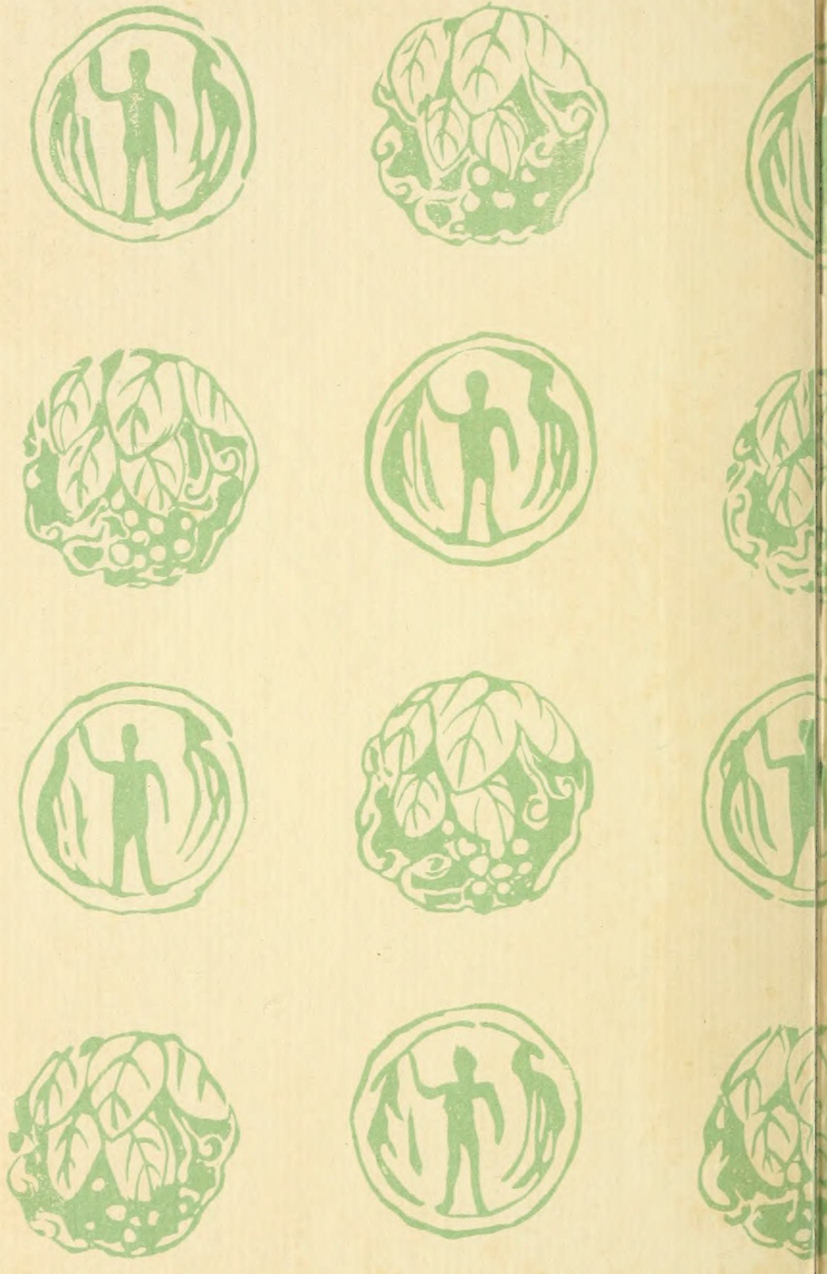
昭和三年五月五日印刷
昭和三年五月十日發行

漱石全集第十三卷

著作權者　夏目純一
編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地
右代表者　岩波茂雄
[illegible]
印刷者　井上源之丞
[illegible]
印刷所　共同印刷株式會社分工場

（非賣品）





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03172 1970